バカとテストと召喚獣　～常識人はつらいよ～

さすらいの旅人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカとテストと召喚獣　～常識人はつらいよ～

【Ｎコード】
Ｎ３７０４Ｘ

【作者名】
さすらいの旅人

【あらすじ】
文月学園に入学して2度目の春を迎えた天城修哉。常日頃から平穏に過ごしたいと思っている彼であったが、Ｆクラスに入ってしまった事によって平穏と言う単語は完全になくなってしまった。クラスメイトで友人である吉井明久、代表の坂本雄二等が色々とトラブルを起こしてしまうので、天城修哉は毎回巻き込まれてしまう。そんな常識人である彼が加わったドタバタ学園コメディ話です。

プロローグ（前書き）

さすらいの旅人です。試しとしてバカテスの原作沿いを書いてみました。

コレの更新は遅いですので、温かい目で見て下さい。

プロローグ

文月学園に入学して2度目の春。

道行く先には新入生を歓迎するかのように桜が咲き誇っている。見慣れている光景ではあるが、それでも目を奪われてしまう。そんな感じで歩いている俺、天城修哉（あまぎしゅうや）は学園の玄関前に着く。

「おはよう、天城」

「おはよう御座います、西村先生」

玄関前には黒い素肌にスーツを纏った、文月学園の生活指導担当の西村先生が立っており、声を掛けられた俺は挨拶をする。

この人はトライアスロンが趣味であり、生徒からは“鉄人”と呼ばれていた。因みに“鉄人”と呼ばれる事を嫌っている。

不届きな事をしている生徒にとっては恐ろしい人だが、そうでない生徒には気さくに話しかけて相談に乗ってくれる優しい先生だ。

「どうしたんだ？　いつもは余裕を持って登校する天城が、ギリギリで来るとは珍しいな」

俺は後者の類に入るので、心配そうに何か遭ったのかと思って西村先生は尋ねてくる。

「……何処かのバカが“もしかしたら遅刻しそうだから、明日の朝は起こしてくれないかな？”と頼まれたんですが、中々起きな

くて……」

「……アイツか」

ギリギリで来る事になった理由を言うと、西村先生は呆れた顔をする。それは俺に対してではなく、バカの方に対してだ。

「と言う訳ですので、アイツは遅刻して来ます」

「……はあっ…分かった。まあアイツの事は後にしよう。取り敢えず、コレを受け取れ。試験の結果だ」

「結果は見なくても分かるんですけどね」

西村先生は茶封筒を出すと、俺は渋々と言った感じで受け取る。

「しかしまあ、世界的に注目されている最先端システムを導入している学園なのに、何でこんな面倒な発表の仕方をするんですか？こう言ったクラス編成の結果は、掲示板で張り出すと思いますが」

「普通はそうなんだがな。まあ、天城の言ったとおり、此処は注目の的となっている試験校だからな。この変わったやり方もその一環だ」

「試験校故の行為ってやつですか……俺としては面倒ですけど」

俺は話を聞きながら茶封筒を破って中身を見ると、その中には紙一枚が入っており……。

「……言うまでも無く、Fクラスですね」

紙には“天城修哉……Fクラス”と書かれていた。

「俺としては、天城を次の日に試験を受けさせたかったが……学園の方針でな」

「仕方ありませんよ。俺は振り分け試験当日に欠席しちゃったんですから」

本来であったら試験に出席していた俺であったが、訳あって欠席してしまった。その事に西村先生は気遣ってくれたのか、俺の肩に手を置く。

「まあとにかく、今の教室で我慢してくれ……としか言えんな」

西村先生にそう言われた後、俺は校舎へと入ってFクラスへと向かった。

Fクラスに向かっている途中……。

「あら、天城君じゃない。おはよう」

「おはよう、木下さん」

去年のクラスメイトであった、優等生の木下優子が俺の前に立っていた。

「試験の結果はどうだったの？　もしかしてＡクラスかしら？」

「まさか。俺程度の頭じゃ到底Ａクラスは無理。良くてＤクラス辺りだ。それに俺は試験を受けてないから、Ｆクラスだよ」

「試験を受けてないって……何か遭ったの？　まさか……」

「違う違う、今回は俺がちょっとしたトラブルに巻き込まれたって話。アイツは関係無いよ……まあ今朝は面倒な事になったけど」

木下が試験を受けれなくなった原因が、俺の友人ではないかと思って顔を顰めていたが、俺はすぐに訂正する。

「はあっ……どの道、貴方に迷惑を掛けているのね。天城君、もう吉井君と関わらないほうがいいんじゃない？　何時もトラブルを起こしては、貴方にまで被害が及んでいるし」

「最初はそう考えたけど、今はもう慣れたよ。それにアイツを放っておくと、また何を仕出かすか分からないから」

木下の言う吉井とは、俺の友人である吉井明久の事だ。明久とは中学からの付き合いで、騒動を起こしては、俺が毎回巻き込まれると言った展開になるトラブルメーカーだ。そして明久が騒動を起こした後は、俺が即行で鎮圧し、明久と騒動を起こした奴も一緒に説教する。そんな流れが何回も続いていた為、西村先生や他の教師達にまで同情的な眼差しを送られているのだ。

まあ何度も明久を説教している俺だが、それでも交友関係は続いている。明久は騒動を起こさなければ良い奴であり、俺が“明久以外

”の悩みがある時は励ましてくれるのだ。

と、俺がそんな事を考えている際に……。

キーンコーンカーンコーン！

「あ、予鈴が鳴っちゃった。それじゃあ天城君、アタシはこれで」

「じゃあな」

予鈴のチャイムが鳴ってしまったので、木下はすぐに自分の教室に戻り始めた。

「ああそれと、Ｆクラスにはアタシの弟がいるから、何か変な事を仕出かしたら遠慮なく説教していいわよ」

「……俺は説教役じゃないんだがな」

「冗談よ。それじゃ」

俺に別れを告げた木下が教室に入った場所は、高級ホテルかと勘違いする位の立派な設備であるＡクラスだった。

「やはり木下はＡクラスか……まあ成績優秀なアイツなら当然だろうが。さて、俺はさっさとＦクラスへと行くか」

Ａクラスに入った木下を見て少々羨ましいと思った俺であったが、すぐにＦクラスへと向かったのであった。

オリキャラ紹介

名前　天城　修哉

身長　１７８ｃｍ　体重　６２ｋｇ

趣味　読書・ゲーム

特技　剣道

外見　黒髪の短髪で、穏やかそうな顔付き。

性格　温厚（但し、キレたら物凄く恐い）

得意科目　現国・英語

本作品の主人公。

文月学園２－Ｆの男子生徒であり、数少ない常識人。何処にでもいそうな、真面目な少年。

振り分け試験時には、学園へ向かっている最中にトラブルが発生し、欠席扱いされてＦクラス入りになってしまう。

クラスメイトである吉井明久とは中学からの友達で、明久がバカな事を起こしている際は、巻き添えに遭っている。明久を説教している事が多々あり、教師からは明久のストッパー役と認識して信頼さ

れている。

第一問　（第一巻開始）（前書き）

原作本を片手に書いていると大変ですね。オリジナルを書いているより、時間が掛かります。

第一問　（第一巻開始）

バカテスト　科学

問　以下の問いに答えなさい。

『調理の為に火にかける鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。このときの問題とマグネシウムの代わりに用いるべき合金の例を１つあげなさい』

姫路瑞希の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると、激しく酸素と反応する為危険であるという点
合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので鉄ではダメと言うひっかけ問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

天城修哉の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると、激しく酸素と反応するからである
合金の例……鉄
コメント……恐らく明久は妙ちきりんな回答をしていると思います』

教師のコメント

おしいです。問題点は合っていますが、合金の方は引っ掛かってし

まいましたね。次からは間違えないように。
それとコメントは書く必要はありませんよ、天城君。友達である吉井君に失礼だと思いますが？

土屋康太の答え
『問題点……ガス代を払ってなかった事』

教師のコメント
そこは問題じゃありません

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金（↑すごく強い）

教師のコメント
すごく強いと言われても……本当に天城君の言ったとおり、妙ちきりんな回答ですね。

「……本当にみすぼらしい教室で、Ａクラスとは大違いだ。月とすっぽんだよ」

Ｆクラス前に着いて早々、俺は余りの酷さに思わずＡクラスと比較

してしまった……比較する事態、Ａクラスに大変失礼であるが。

「まあ今更何を言った所で無駄だ。さっさと入ろう」

何時までも悲観する訳には行かないので、俺がドアを開けると……。

ガラッ！

「早く座れ、このウジ虫野郎」

いきなり長身のツンツン赤毛男に悪口を言われる事となった。

「ん？　げっ！　天城！　何でてめえが此処に！？」

「……おい坂本、お前は俺が入って早々に悪口を言っておいて、嫌そうな顔をするとは……喧嘩売ってるのか？」

教壇に上がっている男の名は、坂本雄二。コイツは明久と同様に、騒ぎを起こすトラブルメーカーだ。しかし坂本は明久より性質が悪く、騒ぎを起こしたにも拘らず、何食わぬ顔で明久の所為にしたり、捨て駒の如く平然と見捨てるのだ。言うまでもなく、コイツも明久と一緒に説教する対象の一人だ。坂本が責任転嫁したり、自分だけ助かって逃げようとしている時は、俺の方で体罰を与えている。普通はそんな事をしたら問題になるのだが、先生達からは許可を得ているので問題無い。

そんな訳で坂本は俺を苦手としているので、下手に逆らう事は無いのだが……。

「ち…違う！！　俺はてっきり明久が来たんだと思って……！」

「謝罪もしないで、すぐに言い訳か……どうやらまた説教をする必要がありそうだな、坂本」

「！！！　わ…悪かった！！　俺が悪かったから、説教は止めてくれ！！」

説教と言った途端に、坂本は俺に頭を下げながら謝った。

「全く、お前と言う奴は……今回はこれで勘弁してやる。次からは気を付けろ」

「……分かったよ。所で、何で天城が此処にいるんだ？　俺の知ってる限りじゃ、お前の成績はCかDクラス並だった筈だが……」

話題を変える坂本は、俺が此処にいる理由を聞いてくる。

「訳あって試験を受けてない。その所為で俺はFクラス行き確定になって、此処に来たってことだ」

「……珍しいな。何時も真面目なお前が試験をすっぽかすとは……」

「だから言っただろ。俺は訳があって受けてないと……」

「じゃあ一体何があったんだ？　お前が試験を受けないってのは余程大事な事があったのか？」

「……それは…」

坂本に言った所で絶対に信用はしないだろうと思いつつも、取り敢

えず言おうとしたが……。

「雄二よ。修哉が言いたくない事を無理に聞くのは良くないぞい」

横から爺言葉を喋りながら、話を中断させる男子生徒が割って入ってきた。

「何だよ秀吉。お前は聞きたくないのか？」

「お主の事じゃから、仕返しがてらに修哉の欠席理由をネタして、からかうつもりだったのじゃろう？」

「……」

「俺はからかわれた所で聞き流すがな……」

秀吉と呼ばれる男子生徒が俺を加勢するかのように、俺の前に立って坂本に指摘すると、坂本は図星を突かれたかのように無言となる。そんな事をした所で俺には無意味だが……しつこかったら黙らせるけど。

それと俺の目の前にいる男子生徒は木下秀吉と言う。苗字で分かると思うが、コイツは木下優子の双子の弟だ。容姿が木下姉にそっくりで、女の子みたいな可愛い顔立ちをしているが、正真正銘の男。最初に会った時は、木下姉と勘違いをしていたが、男子の制服を着ていたので、すぐに男だと分かった。その事を木下姉に言ってみたが、何故か妙に感心してた事に疑問を抱いた。

その翌日に、秀吉は何故か別クラスである俺に会いに来て、友達になって欲しいと言われたので、俺は快く了承したのであった。秀吉

が何故か俺と一緒にトイレで連れションをしたり、更衣室で一緒に着替えている事に嬉しそうな表情をしていたが。木下姉弟が揃って不可解な事をしている事に俺は全く分からなかった。

「ったく、相変わらず天城の味方をするんだな、秀吉」

「ワシは修哉の友達として、当然の事をしたまでじゃ。修哉よ、お主はもう座る席を決めておるかの？」

坂本に言うだけ言った秀吉は、俺の方を向いて話しかける。

「いいや。ってかその言い方だと、座る席は自由なのか？」

「うむ、此処は席順が自由なのじゃ。良かったらワシの隣に座らんかの？」

「別に構わないが」

「そうか。ではワシの席はあそこじゃから、お主はその隣じゃ」

秀吉が指をさした方には、誰も座っている形跡が無い古そうな卓袱台とボロボロの座布団であった。俺は秀吉に言われたまま、その席にあったボロボロの座布団の上に座る。

「これから一年間、宜しくのう」

「……随分と嬉しそうだな、秀吉。何か良い事でもあったのか？」

俺の隣に座りながら笑顔で言う秀吉に、俺は疑問に思いながら聞いてみたが……。

「お主と一緒じゃから嬉しいのじゃ。去年は別クラスじゃったからのう」

「……俺がいると嬉しい？　ってか秀吉、男のお前が男の俺に、そんな事を言われるのは妙に気味悪いんだが……」

「！！！　ち…違うのじゃ！！　ワシはただ、お主と一緒に勉強出来るから嬉しいと言ったのじゃ！」

「……なら良いが」

何故か顔を赤らめて否定する秀吉であったが、理由を聞いたので余り気にしないことにした。

「う…うむ。じゃからワシが勉強で分からん時があったら、教えてくれぬかのう？」

「俺が出来る範囲でならな。それじゃ一年間宜しく、秀吉」

「宜しくなのじゃ、修哉」

秀吉が女の子みたいな笑みで俺を見てくるが……。

「何だその顔は？　男ならもっとシャキッとしろ」

「……うむ。男らしくじゃな」

「？」

俺が指摘すると、妙に男を強調して言う秀吉に疑問を抱かざるを得なかった。

と、そんな時……。

ガラッ！

「すいません、ちょっと遅れちゃいました♪」

「早く座れ、このウジ虫野郎」

ドアの方からバカっぽい顔をした男子生徒……俺の友人である吉井明久が笑顔で言いながら入って来ると、坂本が先程俺に言った台詞を言ったのであった。

おい坂本、お前はそんなに明久を罵倒したいのか？

「……」

「聞こえないのか？　あぁ？」

「……雄二、何やってんの？」

「先生が遅れているらしいから、代わりに教壇に上がってみた」

「先生の代わりって、雄二が？　なんで？」

「一応このクラスの最高成績者だからな」

明久と雄二の会話に俺は少しばかりゲンナリした。最高成績者であ

る坂本がFクラスの代表となると、必ず何かやらかしそうだと思ったのだ。

俺や此処にいるFクラスの生徒は暫く坂本に振り回されそうだと思っていた時……。

「シュウ！！　君もFクラスだったの！？」

明久が漸く俺がいる事に気付いたみたいだ。

「何でシュウがFクラスに！？」

「明久、後で説明してやるから、さっさと席に付け。後ろにいる福原先生が通れなくて困っているぞ」

「え？」

「その通りです。ちょっと通してもらえますかね？」

俺の指摘に明久が後ろを向くと、福原先生がいたのであった……恐らく明久は冴えない風体のオジサンだと失礼な事を考えているだろうが。

「明久、さっさと適当な席につけ。それと坂本、お前は何時まで教壇に立っているんだ？」

「う…うん」

「お前に言われなくても分かってるよ」

「天城君、お心遣いありがとうございます」

明久と坂本が席につくと、福原先生は教壇に立ちながら俺に礼を言ってくる。

「えー、おはようございます。２年Ｆ組担任の福原慎（ふくはらしん）です。よろしくお願いします」

福原先生は挨拶をした後に、薄汚れた黒板に名前を書こうとしたのだが、チョークが無かったので止めた。おい、此処はチョークすらまともに支給されていないのか？

「皆さん、全員に卓袱台と座布団は支給されていますか？　不備があれば申し出て下さい」

「せんせー、俺の座布団に綿がほとんど入ってないです！」

「あー、はい。我慢してください」

「先生、俺の卓袱台の足が折れています」

「木工用ボンドが支給されていますので、後で自分で直してください」

「センセ、窓が割れていて風が寒いんですけど」

「わかりました。ビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきましょう」

福原先生の言葉にＦクラスの生徒達が申し出たが、俺は余りの対応

の酷さに言葉を失う。

これがFクラスの対応なのかと思っていると……

「必要なものがあれば、極力自分で調達するようにしてください」

極め付けは自分で調達と言われた事に、俺は頭を抱えるのであった。

「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね。廊下側の人からお願いします」

自己紹介が始まると、俺の隣に座っていた秀吉が立ち上がって自己紹介を始める。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる――――と、いうわけじゃ。今年一年よろしく頼むぞい」

秀吉の自己紹介を終えて笑みを浮かべると、Fクラスの男子大半が見惚れているかのような顔をしていた。男相手に惚れたのかと思って呆れている俺であったが、明久も男子達と同様に見惚れていたので更に呆れた。

「……土屋康太」

次の生徒は小柄の男子だった。俺の記憶が正しければ、確かアイツは盗撮をしている犯罪予備軍の一人だ。捕まえるのに一苦労する奴なのだが、それでも何とか捕まえては俺の方で説教をしている。土屋は信念を曲げないとか訳の分からん事を言って盗撮を止めないので、俺は放置する事にした。教師に突き出した所で、絶対に止めないだろうと思ったから。

「ーです。海外育ちで、日本語はできるけど読み書きが苦手です。あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味はー」

俺が考え事をしてる最中に他の生徒の自己紹介が続けられていた。今度は女子の自己紹介だったので、俺は女子の顔を見ようとしたが……。

「趣味は吉井明久を殴ることです☆」

ソイツは特定の人物にターゲットを絞る危険な趣味の持ち主である、ポニーテールをした島田美波であった。

「はろはろー」

「……あぅ。し、島田さん」

明久に笑顔で手を振る島田に、振られた本人は若干引き気味だ。

「おい島田。お前がそんな危険な趣味を持っているなら、俺はお前を明久に近寄らせないようにしなければいけないんだが」

「げっ！　あ…アンタ、このクラスにいたの！？」

「気付くのが遅いぞ」

次は俺の自己紹介だったので、立ち上がりながら島田に指摘すると、島田はやばい相手に見付かったかのように俺を見る。

島田は去年から明久に何かしら暴力を振るっており、俺が度々目撃

しては止めさせて説教している一人だ。殴っている理由は明久の自業自得であったのだが、それでもやり過ぎだから少しは自重しろと俺は何度も言ってる。俺に説教されている島田は“アキが悪いから”と言って聞かなくて、手に負えなかった。後になって分かったのだが、どうやら島田は明久に好意を抱いているみたいだ。何度も説教をしてる最中に一度ソレを指摘してみたが、当の本人は顔を真っ赤にして去って行った。その時に島田はツンデレ……ではなく、ボコデレな性格だと分かった俺は、取り敢えず応援だけはしてやろうと思った。

で、その当人は今でも明久を殴っており、坂本と同様に俺を苦手としている。

「はあっ……やれやれ、また説教する相手が増えたみたいだな」

「人を問題児扱いしないでよ！！」

「そう言われたくなかったら、少しは自重する事だな」

「天城君、話は後にして自己紹介をお願いします」

「あ…すいません」

島田と言い合っていると、福原先生が注意してきたので俺は謝って自己紹介をする事にした。

「天城修哉です。既に俺の事を知っていると思われますが、何時も騒ぎを起こして周囲に迷惑を掛けている吉井や坂本を説教しています。２人が何かやらかした時は連絡して下さい」

「ちょっと、シュウ！　自己紹介と一緒に僕の事を悪者みたいに言わないでよ！？　雄二はともかくとして！」

「何言ってやがる明久、お前は何時も迷惑を起こしているから、天城に目を付けられて……！」

「何だと雄二！　君だってシュウに何時も……！」

急に言い争いになる明久と坂本を見た俺は……

「……お前等、今すぐ俺に説教されたいか、謝るか、好きな方を選べ」

「「すいませんでした」」

声を低くして言ったら、２人は即座に謝ったのであった。

「全く……と言う訳で、今年一年よろしくお願いします」

自己紹介を終えた俺は座り、他の生徒の自己紹介がある程度進むと、明久の自己紹介の番となる。

「――コホン、えーっと、吉井明久です。気がるに『ダーリン』って呼んで下さいね♪」

『ダァァーリィーン！！』

明久がアホな自己紹介をすると、野太い声の大合唱が響いた。ダーリンと呼んでない俺は聞いてて、実に耳障りな単語だった。

「――失礼。忘れて下さい。とにかくよろしくお願いします」

呼ばれた明久は作り笑いをしながら席に着いているが、吐きそうな顔をしていた。最初から、あんな下らん事を言わなければ良い物を……。

俺が明久の行動に呆れている最中、自己紹介は続いて行くと……。

ガラリッ

「あの、遅れてすみま、せん・・・」

『えっ？』

ピンク色のロングヘアーである女子生徒が謝りながら教室に入ると、教室全体から驚いた声が出る。当然俺も驚いた声を出した一人だ。

「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さんもお願いします」

生徒全員が驚いている中、福原先生は特に驚かずに姫路と呼ばれた女子生徒に自己紹介をするように促す。

「は、はい！　あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします」

緊張しながら自己紹介をする姫路に……。

「はいっ！　質問です！」

既に自己紹介を終えた男子生徒の一人が右手を高々と挙げる。

「あ、は、はい。なんですか？」

「なんでここにいるんですか？」

その質問の仕方は苛めと捉えられるが、男子生徒がそう言うのは無理もない。それは俺も含め、他の生徒全員も思っている事なのだ。何故なら彼女は、容姿端麗で成績優秀。入学して最初のテストでは学年2位を記録しており、その後も一桁以内に常に名前を残している才色兼備な女子だ。

そんな彼女が最底辺とも呼べるFクラスにいるのがおかしい。学年中の誰もが、彼女はAクラス行き確実だと思っていたのだから。

「そ…その……振り分け試験の最中、高熱を出してしまいまして……」

『ああ、なるほど』

姫路の言葉を聞いた俺達は一斉に納得した。

試験途中の退席は0点扱いとなるのは学園の方針となっている。彼女は昨年度の振り分け試験を最後まで受ける事が出来ずに、Fクラス行きが確定したと言う訳だ。俺の場合は完全に欠席で0点だったが。

そして姫路の言い分を聞いたFクラスの男子生徒達が……。

『そう言えば俺も熱の問題が出たせいでFクラスに』

『ああ。科学だろ？アレは難しかったな』

『俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて』

『黙れ一人っ子』

『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』

『今年一番の大嘘をありがとう』

明久と同様なバカな言い訳をしていたのであった。

「……はあっ」

「しゅ…修哉。溜息なんか吐いてどうしたのじゃ？」

思わず俺は説教する相手が増えて溜息を吐くと、隣にいる秀吉が俺を気遣うように声を掛ける。

「で、では、一年間よろしくお願いしますっ！」

姫路はバカな連中の空気に耐えられなかったのか、逃げる様に明久と坂本の隣の席に着く。

席に着いた姫路が明久や坂本と話しており、坂本が明久をブサイク呼ばわりしたり、明久に興味がある男子がいる言われて、明久はさめざめと泣いていた。坂本、俺からして見れば、お前は聞き分けの無い野生のゴリラだぞ。それと明久に興味を抱いている久保は……アイツはちょっとな……。

と、俺が危ない道に走っている去年のクラスメイトだった久保の事を考えていると……。

パンパン！

「はいはい。そこの人たち、静かにして下さいね」

「あ、すみませ……」

バキィッ！　パラパラパラ……

福原先生が教卓を叩いて警告を発したので、明久が謝ろうとすると、教卓がすぐに壊れてゴミとなってしまった。いずれ崩れるのではないかと思っていたが、こんなに早く崩れたのは予想外だ。

「えー……替えを用意してきます。少し待っていてください。」

気まずそうに告げて、福原先生は教室から出て行く。

Fクラスの扱いが相当酷いという事を改めて知った俺は、この先大丈夫なのだろうかと不安になった。

第一問　（第一巻開始）（後書き）

修哉と同じく、この先ずっと書き続けられるかと不安になっています。

第二問（前書き）

今までに無い位の長めです。

第二問

バカテスト　国語

問　以下の意味を持つことわざを答えなさい
（1）得意な事でも失敗してしまう事
（2）悪い事があったうえに、更に悪い事が起きる喩え

姫路瑞希の答え
『（1）弘法も筆の誤り』
『（2）泣きっ面に蜂』

教師のコメント
正解です。他にも（1）なら“河童の川流れ”、“猿も木から落ちる”、（2）なら“踏んだり蹴ったり”や“弱り目に祟り目”などがありますね。

天城修哉の答え
『（1）上手の手から水が漏る』
『（2）痛い上の針』

教師のコメント
正解です。得意科目である天城君ならではの答えですね。私が例をあげたのにも拘らず、他の類義語を知っていたとは。先生も学ばされました。

土屋康太の答え

『（1）弘法の川流れ』

教師のコメント
シュールな光景ですね

吉井明久の答え
『（2）泣きっ面蹴ったり』

教師のコメント
君は鬼ですか

「やれやれ、ここまで設備の悪い教室だと先が思いやられるな」

「確かに修哉の言うとおりじゃ。チョークだけでなく、あのようなボロボロの教壇を見れば……」

福原先生が教室を出た後、俺が愚痴りながら言ってると、秀吉も賛同するかのように頷く。しかしそんな事を言った所で、教室が改善される訳でも無い。

「ふうっ……いつまでもネガティブになってないで、少しはポジティブに考えるか」

「んむ？　先程まで愚痴ってた修哉の言葉とは思えぬのう」

「ずっと愚痴った所で教室が改善されるわけじゃ無いからな。だったらいっその事、課せられた試練だと思って頑張るよ」

「ふむ、そう言う捉え方もあるのじゃ」

「では秀吉、試練を乗り越える為に、一緒にＡクラスを目指す為に今から猛勉強するか？」

「そ…それはちょっと……ワシは今、演劇の方が大事で……」

俺の提案に秀吉は冷や汗を掻きながら、さりげなく断っていた。

「秀吉は演劇ばかりに集中した所為で、Ｆクラスに来る羽目になったんだろ？　だったら今すぐ俺が秀吉に勉強を……」

「い…今は遠慮しておくのじゃ」

勉強が嫌なのか、秀吉が完全に手を振りながら断ると、俺はわざとらしく落胆する表情をする。

「何だよ。友達からの手伝いを断るのか？」

「そ…そう言う訳では無くてのう……」

「俺は秀吉を男と見込んで手伝おうとしたのに」

「！！！　お…男と見込んで……じゃと？」

秀吉が何か食い付いたかのように、俺の顔をジッと見ている事に予想通りだと思った。秀吉は何故か“男”と言う単語に食いついて来るのは知っていたので、俺にとっては面白い展開になっている。

「ほ…本当に……ワシを男として見込んでおるのかのう？」

これはまた俺の予想通り、秀吉は何かを確認するかのように聞いてくる。

「当然。何だったら男同士の誓いでもやるか？」

「……コホンッ……し、仕方ないのう。男同士の誓いと言われたら……」

と、秀吉が物の見事に引っ掛かってくれて、俺がすぐに冗談だと言おうとするが……。

「あれ？　明久と坂本は何処へ行った？」

「ん？　そう言えば、おらぬのう……」

明久と坂本が教室からいなくなっている事に今更気付いた。

「アイツ等、新学期早々に何かをやらかす気か？　だとしたら……」

「そ…それは総計ではないかのう、修哉。いくらあの2人とて、お主の目を盗んでそんな事はしないと思うのじゃ。ワシは多分トイレに行ったのではないか思うのじゃ」

「だがな……」

俺は2人を探そうと立ち上がるが、秀吉が考え過ぎだと言って宥めていると、明久と坂本と一緒に福原先生が戻ってきた。やはり秀吉の言ったとおり、考え過ぎかと思った俺は席に座る。

福原先生が新しい教壇……と言っても古い物だが、ソレを持って入ってくると、また自己紹介が再開された。

「えー、須川亮です。趣味は――」

淡々と自己紹介の時間が流れていると、漸く最後尾まで進んだ。

「坂本君、キミが自己紹介最後の一人ですよ」

「了解」

福原先生に呼ばれて坂本が席を立ち、ゆっくりと教壇に歩み寄っている。それと同時に、先程までのふざけた雰囲気が無くなっており、まるで何か重大発表をするかの様な感じであった。

「坂本君はFクラスの代表でしたよね？」

福原先生に問われて、頷く坂本。けれど代表と言った所で、あくまでこのFクラスの中での話だ。あくまで最低クラスの中での成績優秀者に過ぎなく、言っちゃ悪いが何の自慢にもならない。現段階で俺の成績は坂本より下だが、去年の成績を考えると、間違いなく俺の方が上だ。とは言え、俺もあまり成績は良くないのだが。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺の事は代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

教壇に立って言う坂本であるが、まだ他にも言う事があるんだろうなと思っていると俺は直感した。

「さて、皆にひとつ聞きたい」

「……はあっ」

やはりと言うべきか。坂本が、ゆっくりと、全員の目を見るように告げる。俺が溜息を吐いても坂本は無視して、クラス全員の視線が自分に集まる事を確認する。確認した坂本は教室内の各所に移りだす。

かび臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台。

移動している坂本を視線で追い、同時に備品を見ているFクラス生徒達。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいがー」

次の坂本の言葉に……。

「不満は無いか？」

『大ありじゃぁっ！！』

Fクラス生徒達は一斉に叫んだのであった。雄二は予想通りと言わんばかりに笑みを浮かべる。

「だろう？　俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

不満だったら、振り分け試験前に真面目に勉強してれば良かったんじゃないかと、俺は内心で突っ込む。

『そうだそうだ！』

『いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ！　改善を要求する！』

『そもそもAクラスだって同じ学費だろ？　あまりに差が大きすぎる！』

それはちゃんと普段から勉強している奴が言う台詞だと思うんだが。

「みんなの意見は尤もだ。そこで」

（俺を除く）Fクラス生徒達の反応に満足したのか、坂本は自信に溢れた顔に不敵な笑みを浮かべて……。

「これは代表としての提案だが――」

ここからが本番だと言わんばかりに……。

「――Fクラスは、Aクラスに“試験召喚戦争”を仕掛けようと思う」

戦争の引き金を引いたのであった。

「……“試験召喚戦争”ねえ」

坂本の提案に俺はポツリと呟く。確かに坂本の言うとおり“試験召喚戦争”をやれば、この教室の問題は解決出来る。

だが……。

『勝てるわけがない』

『これ以上設備が落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんが居たら何もいらない』

予想通り（最後の奴は除く）と言える不満な声が続々と出てきた。

それは当然だろう。はっきり言って雄二は、最低成績者であるFクラスが最高成績者のAクラスに勉強で挑むと言っているのだ。勝率は言うまでもないが、もしそれで負けたら設備を1ランク落とされて、ただでさえ最低な教室が更に酷くなるのだから。勝ち目の無い戦いを挑む事に、先程まで高揚していた生徒達が不満を言うのは無理も無い。

因みに“試験召喚戦争”と言うのは、科学とオカルトと偶然により完成された『試験召喚システム』を使って、テストの点数に応じた

強さを持つ『召喚獣』を呼び出して戦い、それを用いたクラス単位の戦争と言う物だ。

「そんなことはない、必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

けれど坂本が自信を持って答える。

『何を馬鹿な事を』

『できるわけないだろう』

『何の根拠があってそんなことを』

否定的な意見が教室中に響き渡った。

無論、俺も否定的な意見の方に入っている。一体坂本は何故あそこまで自信を持って答えているのかが不可解であった。いくらFクラスに成績優秀な姫路がいたとしても、それだけで勝てるとは言えない。坂本が姫路に頼った策を使った所で、逆に俺達が足手纏いになってしまう。そんな事は坂本も重々承知しているはずだが。

「根拠ならあるさ、このクラスには試召戦争で勝つ事のできる要素が揃っている」

何だと？　まさか本当に姫路だけを当てにしてるのか？　だったら俺としては、もうこれ以上、こんな茶番に付き合う気はない。

「そこまでだ、坂本。何を根拠に言ってるのかは知らんが、お前一人の勝手でクラス全員を巻き込まないでもらおうか」

「まあ最後まで話を聞けよ、天城。これはお前にとっても良い話だ」

俺が立ち上がって抗議すると、坂本は分かっていたみたいに、俺をあしらうかのように言ってくる。

「聞く気は無いな。第一、お前の言う良い話とは、何かしら必ず裏がありそうだ。だから俺は信用出来ない」

俺が話はここまでだと打ち切ろうとしたが……。

「修哉よ、取り敢えず話だけは聞いてみないかのう。雄二があそこまで言い切るのじゃから、少しは信用してみたらどうじゃ？」

「そ…そうだよシュウ。折角ここまで進んでいるから、雄二に最後まで話を続けさせようよ」

秀吉と明久が俺を宥めようとした……明久が妙に焦っていたかのように見えたが。

「……」

「まあ、天城が俺を普段から信用出来ないのは分かる。だが一応、話を最後まで聞いてくれないか？　聞いても信じられないなら、抗議でも何でもしてくれ。それなら文句は無いだろ？」

2人の掩護射撃によって、雄二は便乗して俺を説得するように言って来た。

「……では最後まで聞こう」

「助かる。さて、ちょっとばかり話の腰が折れてしまったが、これから説明する」

俺が席に着くと、坂本は不敵な笑みを浮かべ、壇上から見下ろす。

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「……！！（ブンブン）」

「は、はわっ」

必死になって顔と手を左右に振る否定のポーズを取る土屋。スカートを覗かれた姫路が裾を押さえて遠ざかると、土屋は顔に付いた畳の跡を隠しながら壇上へと歩き出す。

本当なら不届きな事をしている土屋に説教をする所だが、苦し紛れの言い訳ばかりしかしないので、やっても無駄だと理解しているから無視……度が過ぎる事をしてれば説教をするが。

「土屋康太。コイツがあの有名な、寡黙（ムッツリーニ）なる性識者だ」

「……！！（ブンブン）」

ムッツリーニ？　……そうか、土屋がムッツリーニだったのか。ムッツリーニは俺もよく知っている。その名は男子には畏怖と畏敬を、女子には軽蔑を以て挙げられる。思春期な男として尊敬されるだろうが、俺は全くその気が無かった。俺とて女の子に当然興味はあるが、軽蔑される行動はしたくない。

『ムッツリーニだと……？』

『馬鹿な、ヤツがそうだというのか……？』

『だが見ろ。ああまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとしているぞ……』

『ああ。ムッツリの名に恥じない姿だ……』

周りが納得していると、土屋は否定しながらも頬に付いた畳の跡を隠していた。もう分かっている事なのに、あそこまで必死に否定すると逆に感心してしまう。

「？？？」

姫路だけが頭に“？”ばかり浮かべながら、分からないと言う顔で首を傾げている。俺としては知らない方が良いと思う。

「姫路のことは説明する必要もないだろう。皆だってその力はよく知っているはずだ」

「えっ？わ、私ですかっ？」

「ああ、ウチの主戦力だ。期待している」

やはり坂本は姫路を一番の頼りにしているみたいだ。それだけじゃダメだろうと思いながらも、俺は黙って聞いている。

『ああ、そうだ。俺たちには姫路さんがいるじゃないか』

『たしかに彼女ならAクラスに引けをとらないな』

『ああ。彼女さえいれば何もいらない』

さっきから誰が姫路に熱烈なラブコールをしているんだ？　姫路の事が好きなら、思い切って告白をすれば良いと思うんだが……いや、そんな事をしたら明久が黙っていないか。アイツは以前から姫路の事が気になっていたからな。

「木下秀吉だっている」

『おお……！』

『確かアイツ、木下優子の……』

おいおい坂本、お前は何を考えている。友達である秀吉には悪いが、そんなに大した成績じゃないぞ。いくら成績優秀な双子の姉がいるからと言って、秀吉も成績優秀じゃ……

「そして天城修哉もいる」

……何だと？

「おい坂本、それはどう言う……」

「天城はお前達の知っての通り、俺や明久、そしてムッツリーニを簡単に捕まえる事が出来る実力の持ち主だ。それにコイツは振り分け試験を受けていないから現在Fクラスにいるが、成績は俺達より上だ。姫路の次にな」

俺の名が出された事に再び立ち上がるが、坂本が好機と言わんばかりに俺を持ち上げると……。

『確かに、天城は鉄人みたいだからなぁ』

『それと真面目で勉強熱心だ』

『俺達より成績が上なのは確かだ。姫路さんの次ってのが気に食わないけど……』

おい最初の奴、俺を西村先生と一緒にするな。あの人に失礼だろうが。それと坂本、お前は俺も当てにしていたのか。

「坂本、まさかお前、俺も参加させる為にあんな……」

「当然、この俺も全力を尽くす」

坂本は俺の言葉を無視し、代表として責任感を持った表情をしながら言うと……。

『確かに何だかやってくれそうな奴だ』

『坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれていなかったか？』

『それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良かなんかだったのか』

『実力がＡクラスレベルが二人もいるって事だよな！』

いけそうだ、やれそうだ、そんな雰囲気が教室内に満ちていた。

しかし……。

「それに、吉井明久だっている」

……シ～～ン――――

さっきまで上がっていた士気が、一気に落ちてしまった。士気云々はどうでもいいのだが、俺は坂本の発言に脱力してしまった。一体コイツは何がしたいんだ？

「ちょっと雄二！　どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！　全くそんな必要はないよね！」

それについては俺も同感だ。

『誰だよ、吉井明久って』

『いや、知らん』

『でもアイツ、以前から天城に説教されてた奴じゃないか？』

「ホラ！　せっかく上がりかけてた士気に翳りが見えてるし！　僕は雄二たちと違って普通の人間なんだから、普通の扱いを――ちょっとシュウ！　なんで僕に呆れた視線を送るの!?　士気が下がったのは僕のせいじゃないでしょう！」

「士気は関係無い。俺が呆れているのは、自称“普通の人間”であ

るお前が、どうして俺にいつも説教されているんだ？　そこを詳しく聞かせてくれないか？」

「うぐっ！」

俺の台詞に、明久は痛い所を突かれたかのように押し黙った。どうやら身に覚えがあるみたいで、俺に何も言い返せないみたいだ。例え言い返したとしても、過去にやらかした事を掘り出して切り返すが……あくまで人がいない所でだ。いくら俺でも、こんな公衆の面前で言うつもりは無い。

そんな俺と明久のやり取りを見ながらも、坂本は説明を続けようとする。

「そうか。皆は余り知らないようだから教えてやる。こいつの肩書きは《観察処分者》だ」

坂本、お前はそんなに人前で明久の恥を晒したいのか？　そんな不名誉な肩書きをここで出すなんて……本当にコイツは何がしたいんだ？

「……それって、馬鹿の代名詞じゃなかったっけ？」

言うまでもなく、その肩書きは他の生徒も知っていた。

「ち、違うよっ！ちょっとお茶目な十六歳につけられる愛称で」

「そうだ。バカの代名詞だ」

「肯定するな、バカ雄二！」

《観察処分者》。学園生活を営む上で問題のある生徒に課せられる処分で、明久がこの学園で唯一、その処分を受けている。

どうしてその処分を受けたのかと俺は過去に明久に聞いたのだが、当の本人は当然の報いだからと言って、はぐらかしている。アイツは俺に迷惑を掛けない様に気を遣っているんだろうが、何を今更と思った。けどアイツがそこまで頑なにしていると言う事は、誰かを守る為に敢えて自ら汚名を被ったのだろうと俺は考えた。あんなに決意に満ちた眼差しで俺を見ていたのだから。だが、あくまで俺の推測に過ぎないが。

と、俺がそんな事を考えていると……。

「あの、それってどういうものなんですか？」

姫路が首を傾げながら、何なのかと坂本に聞いてきた。まあ、成績優秀の姫路には、とても縁の無い物だから知らないのは当然だろう。

そんな姫路の質問に坂本は答えようとする。

「具体的には教師の雑用係だな。力仕事とかそう言った類の雑用を、特例として物に触れられるようになった召喚獣でこなすと言った具合だ」

坂本の答えに姫路はキラキラと目を輝かせながら、明久に若干の羨望と尊敬の篭った視線を送る。

そんな姫路の視線に……。

「あはは。そんな大したもんじゃないんだよ、姫路さん」

明久は姫路に向かって手を振りながら否定した。

けど実際、明久の言うとおりだ。

召喚獣を自分の思い通りに動かせると言うのは凄く便利で、腕力も普通の人間の何倍もある。その気になれば岩だって砕く事が出来るだろう。

確かにそれは一見、素晴らしい機能だと思われるだろう。だが、それとは裏腹にかなりのデメリットがある。

何故なら、召喚獣は教師の監視下で呼び出さないといけないからだ。つまり、明久が便利に使えたくても使えない。教師が召喚獣を使っての雑用作業を明久に任せ、明久は教師に頼まれた雑用作業をする。それだけの事だ。だから先ほど言ったメリットは教師の監視下でやっているに過ぎなく、明久には自由に召喚獣を活用する事が出来ない。

それに加えて、物理干渉が出来る召喚獣に負担が掛かると、何割かが召喚者の明久にフィードバックされる。簡単に言えば、召喚獣に重い物を持たせて移動している最中に疲労していると、召喚者にもその疲労の何割かが返ってくるのだ。更には、物にぶつかった時の痛みも、そのまま帰ってくる。聞くだけで、これはもう罰だろうと思うだろう。

だからこその《観察処分者》だ。凄い事でも便利でもない。学園にとって問題児とされる相手に課せられるペナルティ。坂本が頷いて行ったバカの代名詞と呼ばれる理由がそこにあるのだ。

『おいおい。《観察処分者》って事は、試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいって事だろ？』

『だよな、それならおいそれと召喚出来ないヤツが一人いるってことだよな』

当然、そんなペナルティを課せられた奴が、自分から戦闘に参加する気は無い。召喚獣が戦闘中によって受けた痛みが自分に帰ってくるのだから。

だからこそ俺は理解出来なかった。どうして坂本が、そんな事をバラすのかと。

まあ、他の連中とは違って、召喚獣の扱いに長けているからとでもフォローするのかと思っていたが……。

「気にするな。どうせ、いてもいなくても同じような雑魚だ」

「雄二、そこは僕をフォローする台詞を言うべきだよね？」

ただ単に明久の恥を暴露したかっただけみたいだった。

平然と人の恥をばらす坂本に、俺が目を細めながら睨んでいると……。

「！！！　……ゴホンッ！！　ま…まあ、他の召喚者達とは違って、召喚獣の扱いには慣れているから、それなりの役には立つぞ」

「……雄二、今更フォローしても遅いんだけどね」

睨みに気付いた坂本は調子に乗り過ぎたと思って、俺に取り繕うかのように明久に対するフォローをした……明久は呆れながら言ってたが。

坂本、今更そんな事を言っても無駄だ。もうお前に説教する事は確定なんだから。

「と…とにかくだ。俺達の力の証明として、まずはDクラスを征服してみようと思う」

俺に対して冷や汗を掻いている坂本が、自信を持って言い切った。

「皆、この境遇は大いに不満だろう？」

『当然だ！』

「ならば全員筆(ペン)を執れ！　出陣の準備だ！」

『おおーーーっ！！』

「俺たちに必要なのは、卓袱台ではない！　Aクラスのシステムデスクだ！」

『うおおーーーっ！！』

「お、おー……」

「……」

下準備が出来たと言わんばかりに坂本が号令を出すと、クラスの生徒達は一斉に雄叫びをあげる。姫路も小さく拳を作り掲げていた。

俺はもう、この状況を止める事が出来ないと察知し、無言で座った。坂本は俺が座って何も言わない俺を見て、予想通りだと言わんばかりに笑みを浮かべている。

坂本は恐らく、俺が今回の“試験召喚戦争”に反対だったのを予想していたと思う。

でなければクラス全員に鼓舞させるかの様な演説と、勝利の鍵を握っているであろう土屋、姫路、秀吉。そして俺を持ち上げたのだから。坂本も自分の過去の功績を利用して、見事にクラス全員の心を掴んだ……明久の方は余計だったが。そして最後には参加しようと号令をして、クラス全員は“試験召喚戦争”に参加しようと意気込んでいる。

そう考えていると、坂本は「これでも反対できるか？」と言う様なイヤらしい笑みで俺を見ている。

坂本に一杯喰わされたと思いながらも俺は黙っていた。もし此処で俺が反対だと言ったら、クラス中から後ろ指をさされるだろう。そう計算しての行動だったのだ。

全く、アイツは普段から碌でも無い事しかやらないくせに、こう言う悪知恵に関しては物凄く長けているな。

黙っている俺に、坂本は次の段階に進もうとしている。

「明久にはＤクラスへの宣戦布告の使者になってもらう。無事大役

を果たせ！」

「……下位勢力の宣戦布告の使者ってたいてい酷い目に遭うよね？」

坂本（あのバカ）はまた明久を捨て駒にしようと考えているみたいだ。

「大丈夫だ。やつらがお前に危害を加えることはない。騙されたと思って行ってみろ」

「本当に？」

「もちろんだ。俺を誰だと思っている」

明久に優しく諭す様に言う坂本であるが、俺は全く信じなかった。あれは完全に明久を騙している。

そんな坂本に明久は警戒を解き……。

「大丈夫、俺を信じろ。俺は友人を騙すような真似をしない」

更に追い討ちの一言を掛けられて、騙されたのであった。坂本、お前がそこまで明久を騙そうとするなら、俺にだって考えがあるぞ。

「わかったよ。それなら使者は僕がやるよ」

「ああ、頼んだぞ」

完全に騙されている明久は、Ｄクラスへ向かう為に教室から出ようとすると……。

「待て明久、どうせなら俺も一緒に行こう」

「え？」

「！！！」

俺が立ち上がって名乗り出ると、明久は素っ頓狂な顔をしながら俺を見ており、坂本は急に焦ったかのような顔になった。

「ちょっとシュウ、僕の事が信用出来ないの？」

「お前だけに使者を任せると、また何かしらの騒ぎを起こしそうな気がするからな。そう思わないか、坂本？」

「……」

俺の問いに坂本は、ひたすら汗を掻きまくって無言となっている。

「まあ、流石に宣戦布告をするだけで騒ぎは起こさないと思うが、それでも念の為に俺も行かせて貰う。明久、俺をバックアップだと思って、遠慮なく宣戦布告しろ」

「……だったら良いけど。じゃあ行こうか」

「ああ、行こう」

明久は俺を伴って教室から出ようとすると……。

「坂本、お前が明久に言った事が、もし嘘だったら……覚悟するんだな」

「……」

俺が坂本に向かって死刑宣告を下し、坂本は無言で膝を地面に付けると、クラス全員は坂本に同情的な眼差しを送ったのであった……

…姫路だけは坂本の行動に全く分からなかったが。

そして教室を出た明久と俺はDクラスへと向かったのであった。

第二問（後書き）

旅人『流石は修哉だな。雄二の嘘を見破って、あんな事をするとは』

修哉「アイツは普段から、明久に対してだけ平然と騙していますからね。それにアイツは明久を騙す時に、必ず目が笑っていますし」

旅人『……よく観察している事で』

修哉「そうでもしなければ、明久は散々な目に遭います。と言うか、俺は明久に、雄二に騙されているぞと何度も教えているんですが……いい加減に気付いて欲しいですよ」

旅人『……今の明久を見ると、修哉の助言を完璧に忘れているみたいだな』

それでは次回もお楽しみに！！！

第三問（前書き）

今回はちょっと原作から離れています。

それに加えて、無駄に長いです。

第三問

バカテスト　英語

問　以下の英文を訳しなさい

『Ｔｈｉｓ　ｉｓ　ｔｈｅ　ｂｏｏｋｓｈｅｌｆ　ｔｈａｔ　ｍｙ　ｇｒａｎｄｍｏｔｈｅｒ　ｈａｄ　ｕｓｅｄ　ｒｅｇｕｌａｒｙ.』

姫路瑞希の答え

『これは私の祖母が愛用していた本棚です』

天城修哉の答え

『これは私の祖母が愛用していた本棚です』

教師のコメント

正解です。姫路さんと天城君はきちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

『これは　　』

教師のコメント

訳せたのはＴｈｉｓだけですか

吉井明久の答え

『☆●◆▽」♪＊×　　』

教師のコメント
出来れば地球上の言語で。それと余り妙ちきりんな回答をしていると、天城君が説教すると言っていましたよ。だから真面目に答えて下さい。

若干ボロボロになっている明久と俺がDクラスに宣戦布告をした後、Fクラスに戻り……。

「酷いじゃないか雄二!!　僕を騙したんだね!?」

「何か言い訳はあるか、坂本?」

「……」

無言で正座している坂本を見下ろしていた。

「もしシュウがいなかったら、僕はDクラスの皆にボコボコにされていたよ!?」

「何も言い返さないと言う事は、やはり下位勢力の使者が暴行される事を予想していたみたいだな。それを分かってて、明久に行かせるとは……」

「シュウ!　この外道に体罰をやる必要があるよね!?」

「そうだな、人を騙しておいて何の罪悪感も抱いていない奴には、それ相応の報いを受けなきゃいけないな。だが……」

「だったら！！」

明久は雄二に襲い掛かろうとしたが……。

「待て明久、俺の話を最後まで聞け」

「何で止めるの！？」

俺が明久の襟首を掴んで阻止したのであった。

「雄二には罰を与えなきゃいけないのに！」

「確かにそうだが、それは後回しだ。Ｄクラスに宣戦布告をした以上、坂本に手を出す訳にはいかない」

「何で！？」

「今すぐ坂本に罰を下したら、試験召喚戦争に支障が出るかもしれないからな。だから手を出さない……“今”は」

「……分かったよ」

明久は渋々従って落ち着くと、俺は掴んでいた明久の襟首を離す。

そして……。

「坂本、今は何もしないでおこう。だが覚えておくんだな。Ａクラ

スとの試召戦争が終わった後は、即座に説教してやるから覚悟しとけ」

「……はい」

俺が威圧感を放って坂本に警告すると、坂本は頷くのであった。

「そうだよ雄二！　君のふざけた根性は僕が叩き直して……」

「何度も坂本に騙されている明久も、どうかと思うんだがな……」

「……」

明久は俺の突っ込みに何も言い返すことが出来ずに無言となる。

「まあまあ、修哉もその位にしておくのじゃ」

気まずい雰囲気を出している明久と坂本に秀吉が助け舟をだした。

「それにしても修哉、お主は明久と違って無傷じゃのう」

「明久に暴行する奴を止めただけだからな。その後は……」

俺がＤクラスに言った事を秀吉達に話し始める。

明久と俺がDクラスの前に辿り着くと……。

「それじゃあシュウ、君は此処で待ってて」

「はいはい」

一人でDクラスに入る明久を見送る俺は、入り口前に立っていた。

「どうも、2－Fの吉井明久です。僕達Fクラスは、Dクラスに試召戦争の宣戦布告に来ました」

『何だと!?』

明久が即座に試験召喚戦争（以降は試召戦争）の宣戦布告をすると、Dクラスの生徒達は驚愕する声を出した。

「Dクラスの皆さん、お手柔らかに♪」

と、明久の呑気な発言に……。

「Fクラス風情が俺達Dクラスにだと！　ふざけるな!?」

「立場を分からせる為に伸してやる!!」

「かかれ～～!!!!」

「え!?　ちょ!?　何で!?」

Dクラス生徒の大半が明久に襲い掛かったのであった。

「やはりな……坂本は説教確定だ」

予想通りの展開になっていると思った俺は即座にDクラスの教室に入る。

「お前等、そこまでにしてもらおうか」

『天城!?』

俺が入った途端にDクラス生徒達は俺の顔を見て驚愕した。

そんなDクラス生徒達に気にせず、俺は明久に暴行している奴等を見て……。

「取り敢えず、下らん理由で明久に手を出した奴等には報いを受けてもらおうか……」

バキッ！　ドゴッ！　ゴスッ！

『ガハッ!!』

一瞬で近づき、ソイツ等を一撃で伸して気絶させた。

「全く、一人相手に集団で襲い掛かるとは……大丈夫か、明久?」

「た…助かったよ、シュウ」

気絶しているDクラス生徒数名を尻目に、倒れている明久に手を差し出す。明久が俺の手を握ると、俺は引っ張って立ち上がらせる。

立ち上がった明久が制服に付いた埃を払っていると、俺は他のDクラス生徒達を睨み……。

「それで、此処の代表は誰だ？」

「……お…俺だ、天城」

Dクラス代表を呼ぶと、去年のクラスメイトであった平賀源二が前に出てきた。

「ほお？　お前がDクラス代表だったか」

「あ…ああ。けど天城、お前が何で此処にいるんだ？　俺はてっきり、天城がCクラスに行ったのかと……」

「訳あって振り分け試験を受けていないから、今の俺はFクラスの生徒だ。それと平賀、俺の成績はお前と同じ位なんだから、Cクラスに行ける訳が無いだろう」

「だ…だが、お前は特化している教科があるから……って、天城がFクラスだと!?」

平賀が俺を見て信じられない顔をしている。まあ今は、そんな事を言っている場合じゃないから、さっさと本題に入る。

「俺がFクラスにいる事はどうでもいい。平賀、お前は何で明久が暴行されるのを黙って見ていた？　本来なら代表である、お前が止める筈だが？」

「そ…それは……」

「いくら最低なFクラスだからと言って、お前達が暴行する権利は無いんだぞ」

「……」

「もう一度聞く、何故止めなかった？」

俺の質問に平賀は金縛りにあったかのように体が動かず黙っており、他のDクラス生徒達も同様に黙っていた。

『……』

「どうやら答える気は無いみたいだな。だったらコッチにも考えがある。平賀、お前は後で説教だ」

「！！！！」

俺が説教宣告をすると平賀はビクッと体が震える。

「あ…あ……あああああ……」

「何をそんなに怯えているんだ？　俺はただ説教をすると言っただけだぞ。無論、そこで気絶している奴と、その他もな」

『！！！！』

俺が追い討ちをかけるかの如く言うと、平賀とその他はガクガクと体が震えて、この世の終わりみたいな顔になっている。しかし解せ

なかった。何故平賀達がこんなに怯えているのかを……たかが説教をする程度で、あんな恐怖に満ちた顔をしなくても良いのに。

俺が内心そう思っていると……。

「吉井！！　代表として謝罪する！！　すまなかった！！」

『すいませんでした！！！』

「へ？」

平賀と明久に暴行をしようとしたDクラス生徒達は即座に土下座をした。その事に明久は素っ頓狂な声を出しているが。

「ね…ねえ、シュウ。僕はどうすればいいのかな？」

「……まあ十分反省しているみたいだし、明久に暴行をした奴等には俺の方で手を下したからな。今回はこれで勘弁してやろう」

「……はあっ、危なかったぁ」

いきなりの展開に明久は戸惑っていたが、俺は怒る気も失せて許す事にした……何故か平賀が命拾いしたかのように安堵していたが。

「確かにのう。修哉の怒った説教は恐ろしいから、即座に土下座したくなる気持ちは分かるのじゃ」

「それはどう言う意味だ、秀吉？」

俺がＤクラスとの出来事を話すと、秀吉は何故か納得している顔をしていた。

「そのままの意味じゃ。お主は怒ると恐いからのう。そんな状態で説教される事を考えると、プライドを捨ててまで土下座をするのは当然じゃ」

「……俺ってそんなに恐いのか？」

秀吉の何気ない言葉に俺が少々傷付いていると……。

「吉井君、大丈夫ですか？」

「あ、うん、大丈夫。ほとんどかすり傷」

姫路が心配そうな顔をして明久に駆け寄っていた。それを見た俺は羨ましそうに見ている。

「吉井、本当に大丈夫」

「平気だよ。心配してくれてありがとう」

今度は島田も明久に駆け寄っている。

ここで優しく気遣うと明久にちょっとしたアピールが出来るなと思って島田を見ていたが……。

「そう、良かった……。ウチが殴る余地はまだあるんだ……」

「ああっ！　もうダメ！　死にそう！」

わざとらしく慌てて腕を押さえて転げまわる明久に、俺は呆れていた……無論、島田に対してだ。もし殴ったらすぐに島田を止めなければいけないが。

「そんなことはどうでもいい。それより今からミーティングを行うぞ」

取り敢えず俺から解放された坂本は他の場所で話し合うのか、教室の戸を開けて出て行った。一瞬、俺から逃げたい為の行動かと思ったが、それはないかと考え直す。

「あの、痛かったら言って下さいね？」

姫路が明久にそう告げて、小走りに雄二の後を追い……。

「大変じゃったの」

秀吉が明久の肩を叩いて廊下に出て……。

「……（サスサス）」

自分の頬の辺りをさすりながら土屋が続いた。と言うか土屋、姫路

のスカートの中を覗いてた時に付いた跡をまだ隠してたのか？

「土屋、お前いつまで……」

と、俺が土屋に突っ込もうとしたが……。

ピンポンパンポーン！

“２年Ｆクラスの天城修哉君、２年Ｆクラスの天城修哉君、至急職員室へ来て下さい。繰り返します、２年Ｆクラスの天城修哉君、至急職員室へ来て下さい”

突然、校内放送で俺を指名してきた。

「あれ？　何でシュウが？」

「職員室に来いだなんて……アンタ何かやらかしたの？」

「……天城、悪い事は言わない。正直に白状した方が良いと思う」

校内放送に明久は心配そうに俺を見ており、島田と土屋が俺を問題児扱いする様な目で俺を見て来る。

「明久は良いんだが……暴力女（島田）と犯罪者（土屋）に、そんな事を言われる筋合いは無いな」

「……何か今、不快な呼び方をされた様な気がするんだけど」

「……失礼極まりない」

俺が悪口にルビを付けると、島田と土屋は不快そうな顔をして俺を睨んだ。

「気のせいだろ。ってかお前等、あたかも自分達には身に覚えが無い様な言い方をしているが、十分に問題を起こしているから」

明久に暴力を振いまくったり、盗撮した写真を勝手に売り捌いているとか……これで問題ないだろうと言う奴がいたら、是非お目にかかりたいが。

「失礼ね！　自己紹介の時にも言ったけど、ウチを問題児扱いしないでよ！」

「……俺は何の問題も起こしていない」

「……自覚が全く無いみたいだな……まあいい。明久、いつまでも倒れていないで、さっさと立て」

「う…うん」

これ以上言った所で平行線のままになるので、俺は倒れている明久を立ち上がらせた後、教室を出て職員室へと向かった。

俺が職員室に着いて数分後

「天城君！！　Ｄクラスの生徒に手を上げるなんて、どう言うつもりですか！？」

俺はＤクラス担任教師に詰問されていた。

「落ち着いて下さい。天城がそう言う事をするのには、必ず理由がある筈です。そうだろう、天城？」

「勿論です」

憤慨しているＤクラス担任教師を西村先生が宥めながら俺に尋ねて来たので、俺はすぐに答える。

「西村先生！！　Ｆクラスの天城君が、内の生徒に暴力を振るったんですよ！　これが落ち着いていられますか！？」

このＤクラス担任教師は俺が手を下した理由を知らないのだろうか、一方的に俺が悪いかのように決め付けている。

「ですから、先ずは天城の話を聞いてからにしましょう」

「Ｆクラス生徒の話を聞く気はありません！　それとも西村先生は、こんな落ちこぼれのＦクラス生徒を庇うつもりですか！？」

「……」

差別的な発言に俺は無言で顔を顰めるが、Dクラス担任教師は余り俺の事を知らないみたいだ。そうでなければ、ここまで騒ぎ立てる事は無い筈。恐らく今年付けに赴任された教師なのだろう。新学期早々に担任を持った先生が頑張ろうと思った矢先、最底辺のFクラス生徒である俺が問題を起こしたと知り、憤慨しているのだろう。

そんなDクラス担任教師に西村先生が……。

「言葉を謹んで下さい。教師である貴方が、その様な差別発言をするのは如何かと思いますが？」

「！！！　……す…すいません」

顔を顰めながら低い声で言うと、Dクラス担任教師は威嚇されたかのように、先程まで憤慨していたのが嘘みたいに無くなった。

流石は西村先生だ。少し威圧を込めただけなのに、相手を一瞬で静かにさせるとは。

「天城、お前がどうしてDクラス生徒に手を上げたのかを聞かせてもらいたい」

「はい。実は……」

俺が西村先生とDクラス担任教師に、明久と一緒にDクラスへ宣戦布告をした時の事を話すと……。

「ふむ……どうやら問題があったのはDクラスの方ですな」

「……」

「まるで弱者を甚振る様な感じでして。その時に俺は、とてもDクラスのやる事じゃないと思いましたよ」

西村先生が隣の方を見ながら言うと、Dクラス担任教師は無言となっていた。

「問題児とは言え、宣戦布告をした吉井を一方的に痛めつけようとするとは……俺が天城の立場であったら、同じ事をしているでしょう」

「し…しかし、私の聞いた話では、天城君が一方的に殴って来たと……」

「誰が言ったのかは知りませんが、恐らくソイツは俺に仕返しをしてやろうと思って、大げさに言ったんでしょう。まだ俺が信じられないのでしたら、代表の平賀や他のDクラス生徒に聞いて見て下さい。それで裏付けが取れますから」

「……」

俺の切り返しに、Dクラス担任教師は何も言い返すことが出来ないみたいだ。

「ではすぐに確認するとしよう。天城、もう行っても良いぞ」

「そうですか。では失礼します」

退室して良いと言われた俺は、職員室から出ようとドアを開けると

……。

「疑ってすまなかったな」

「いえいえ。俺は別に気にしてませんよ、西村先生」

西村先生が謝るが、俺は気にせずに出て行った。

「さて、確認の為に代表の平賀と、天城を陥れようとしたDクラス生徒を呼びましょう」

「え…ええ、そうですね」

完全に恥を掻かされたDクラス担任教師は、すぐに校内放送を使って平賀と、嘘の証言をした生徒を呼ぶのであった。

「ったく！　誰が言ったかは知らんが、反省していなかったみたいだな。ソイツは後で俺が説教を……」

俺が舌打ちをしながら、廊下を歩いていると……。

ピンポンパンポ～ン！

“２年Ｄクラスの平賀源二君、××××君、至急職員室へ来て下さい。繰り返します、２年Ｄクラスの平賀源二君、××××君、至急職員室へ来て下さい”

校内放送で、平賀とＤクラス担任教師に嘘の証言をした生徒が呼ばれた。

「……どうせ西村先生と担任が説教するだろうから、勘弁してやるか」

恐らく恥を掻かされたＤクラス担任教師が、物凄い勢いでソイツを問いただすだろうと思ったから。そう考えると、俺はさっきまで憤っていた怒りが一気に静まった。

「しかしまあ、西村先生がいてくれて助かったよ」

あの教師の鑑とも言える西村先生のお蔭で、事がスムーズに進む事が出来たのだから。あの担任だけだったら、Ｆクラスだからと言って人の話を全く聞かず、一方的に俺が悪いと決め付けていただろう。

「本当、あの人には頭が上がらないな。流石は俺の尊敬する先生だ」

明久や坂本が聞いたら嫌そうな顔をするだろうが、俺にとって西村先生はとても素晴らしい先生だと思う。

そんな俺が西村先生に感謝していると……。

「天城君」

「ん？」

後ろから声を掛けられた俺が振り向くと、そこには木下優子がいた。

「おや？　誰かと思ったら、木下さんじゃないか。数時間ぶりだね」

「そうね。で、貴方は新学期早々に何をやらかしたのかしら？　校内放送を聞いた時、内のクラスの数人が驚いてたわよ」

「ほほう。それって俺がついに悪さをしたかって意味で？」

「違うわよ。皆が、“あの真面目な天城君がどうして……！？”って驚いてたの……アタシもその一人だけど」

「おやおや？　Ａクラスの木下さんが、Ｆクラスの俺を心配してくれるとは光栄ですな」

俺が大げさな仕草をして驚いていると、木下は笑みを浮かべている。

「別に大して心配してないわよ。アタシはただ、去年のクラスメイトとしての誼みで聞いているだけに過ぎないわ」

「おおう！　これは手厳しい事で、もうちょっと優しい言葉を期待していたんだけど……」

「事実を言ったまでよ。それと、その面白そうな仕草は止めて。思わず笑いそうになるわ」

木下の切り返しに俺が更に大げさな仕草をすると、木下は止める様に言って来た。

もう気付いていると思うが、俺と木下は去年のクラスメイトだけの関係だけでなく、お互いに軽口をたたきあう仲だ。それと同時に学級委員も一緒にやっていた。俺に近い性格なのか、木下とは馬が合って仲が良いと言う訳だ……若干、相手を見下すキツイ所はあるが。

「……天城君、今何か失礼な事を考えなかったかしら？」

「別に何も」

一瞬、木下をエスパーかと思った俺であったが、何とか顔に出さず否定する。

「……まあいいわ。それより天城君、貴方はお弁当を持ってきている？」

「いいや、今日は食堂で食べようかと」

「ふうん……アタシも食堂で食べる予定だから、昼休みに御一緒していいかしら？」

「別に構わないけど、木下さんが俺を誘うって……もしかして俺に気があるとか？」

木下の予想外な誘いに、俺が冗談交じりで尋ねると……。

「そんな訳無いでしょ。それにアタシだけじゃなく、愛子や久保君もいるわよ」

「はぁ～……残念」

これは予想通りの返答だったので、俺はわざとらしく残念そうに呟く。

確か聞いた話では木下のタイプの男性って……。

「アタシは知的な男性が好きだって言ったでしょ？　勿論、見た目だけじゃなく中身もね」

「だよねぇ～」

当然、俺はそのカテゴリに入らず、成績の低い俺はタイプじゃ無いらしい。かと言って俺は別に、木下に対して恋愛感情は抱いていない。

確かに木下は美人で成績優秀で、周囲からは高嶺の花とも呼ばれている。一緒に学級委員の仕事をしていた時に、クラスメイトや他のクラスの男子生徒から嫉妬されていた。木下に恋愛感情を抱いていない俺には鬱陶しく、何度も説教しようかと思った日々があった。

とまあ話がちょっと脱線していたが、俺と木下は互いに異性として見ていないと言う事であり、ただの友達に過ぎない。

それに俺の好みのタイプの女の子は、木下より胸がある……。

「……ねえ天城君、アタシに対して物凄く失礼な事を考えなかったかしら？」

「滅相も御座いません」

何で木下は俺の考えている事が分かるんだと思いながらも、俺は必死にポーカーフェイスを保って否定した。

「本当かしらねぇ～？　てっきり人が一番気にしている事を考えたんじゃないかと思ったんだけど……」

「まさか。友達である木下さんに、そんな事は微塵も思って無いよ」

「……」

未だに疑っている視線を送る木下に、俺は早く退散した方が良いと考えて……。

「おっと。俺は今から屋上に行かなきゃいけないから、失礼するよ。じゃあ後でな」

「あっ……」

木下に適当な口実を言いながら、逃げる様に去ったのであった。

「……何よ、天城君ったら。アタシの前でハッキリと友達って言わなくても……」

「ふぅ～～～危ない危ない。もし気付かれたら、絶対に折檻されていただろうな」

木下から何とか屋上の出入り口まで逃げ切った俺は、安堵の息を吐いていた。

「それにしても木下の奴、何であそこまで俺の考えている事が読めたんだ？　ポーカーフェイスで考えていたんだが……ひょっとして本当にエスパーだったりしてな」

俺はそう考えながらも、明久達がいる屋上の扉を開けると……。

「誰が美少女だと！？」

「ええっ！？　雄二が美少女に反応するの！？」

「……（ポッ）」

「ムッツリーニまで！？　どうしよう、僕だけじゃツッコミ切れない！」

「まぁまぁ。落ち着くのじゃ、代表にムッツリーニ」

……アイツ等は一体何の会話をしているんだ？

可笑しな会話だと思いつつ近寄ると、明久達は俺が来た事に気付く。

「あれ？　シュウじゃない。いつの間に来てたの？」

「ついさっきだ。ってかお前等、さっきの会話は何なんだ？　突っ込み所が満載で可笑し過ぎる会話だったんだが」

「そんな事より、お前がどうして職員室に呼ばれたんだ？　放送を聞いた時は驚いたんだが」

俺が明久に尋ねると、坂本が遮るかのように話しかけて来た……まるで自身の失態を隠すかのように。

「……Ｄクラスでの宣戦布告の件でちょっとな」

「え？」

「何じゃと？　それはどう言う事なのじゃ？」

坂本の質問に答えると、明久と秀吉が俺を心配そうに見てくる。

……秀吉の顔を見て少しばかり優子が追いかけて来たかと錯覚したが、敢えて気にせずに職員室での出来事を話す。

そして俺が話し終えると……。

「何だよそれ。僕をボコボコにしておきながら、シュウに仕返しをするなんて……」

「自業自得じゃと言うのに、許せんのう」

明久と秀吉が見事に怒っており……。

「バカだなソイツ。普段から教師達に信頼されている天城相手に、そんな下らん事をするとは。そしたら更に手痛い反撃をされるのに」

「……愚かな奴」

坂本と土屋は俺に仕返しを考えたDクラス生徒を嘲笑っていて……。

「確かにそれは相手の自業自得だけど、天城にも問題があると思うわよ。元はと言えば、アンタが暴力を振るったりするんだから」

「そう言えば、先程また校内放送でDクラスの人達が呼ばれていましたね」

島田は呆れながら見ており、姫路はさっきあった校内放送の事を思い出した。

それと島田、いつも明久に暴力で黙らせているお前に、そんな事を言われる筋合いは無いって何度も言ってるだろうが。

「ソイツは今頃、西村先生と担任に、こってり搾られているだろうな。特に担任の方は、西村先生や他の教師の前で恥を掻いたから……」

更にヒートアップしてるかもしれんなと俺が付け加える。

「担任と一緒に鉄人の説教か……これで天城の説教が追加されたら地獄だな」

「そうだね、シュウの説教も恐ろしいから」

「……おい、そこの2人。人をあたかも鬼みたいな言い方をするな」

俺の説教を思い出したのか、坂本と明久は身震いしながら思った事を言うので、俺がすぐに突っ込むが……。

「まあ、その件は置いといてだ……天城、さっき明久達と話していたんだが、どうして俺が今回の試召戦争でAクラスじゃなく、Dクラスに挑んだのかは分かるか？」

坂本は無視して俺にDクラスを挑む理由を聞いてきた。

「いきなり質問かよ……まあ大方の察しは付いているが」

「ほう……じゃあもう一つ、Eクラスを攻めない理由は分かるか？」

「どうせお前の事だ。俺や姫路さんがいれば、正面からでもEクラスに勝てると判断した筈だ。それに加えて、Aクラスが目標である以上、Eクラス程度と戦っても意味は無い……とでも考えているんだろう？」

「正解だ。良く分かってるじゃねえか」

俺の返答に満足した坂本は笑みを浮かべた。

「でもシュウ、その言い方だとDクラスとは正面からぶつかると厳しいの？」

「ああ、確実には勝てないだろうな」

「そうなんだ……。ねえ雄二、だったら最初から目標のAクラスに挑もうよ」

「？」

俺の答えを聞いた明久は、雄二にDクラスからAクラスに変更しようと言う……その事に俺は疑問を抱き始める。

何故かAクラスに拘っている感じがするなと思いながらも俺は……。

「明久、今の俺達がAクラスに挑んだ所で瞬殺されるぞ」

「え？　どうして？」

無駄だと言うが、明久はまだ理解していないみたいだ。

「お前な……だったらRPGゲームで言えば、レベル1の主人公がラスボスに挑むみたいな物だ。それで勝てると思うか？　無論、裏技やチートなんか一切使わないで真正面からだぞ」

言うまでもなく、レベル1の主人公がFクラスで、ラスボスはAクラスだ。

「う……確かにそれは無理だね」

「明久でも分かりやすい説明の仕方だな。流石、付き合いが長いだけあって、明久の保護者みたいな奴だ」

明久に対する説明に、坂本は感心した様な顔をして俺を茶化す。

「茶化すな、坂本。でだ明久、Ｄクラスに挑むのは、Ａクラスに挑む前の経験地稼ぎと下準備みたいなもの。決戦に挑む前には必要な行動だという事くらい、お前も分かっている筈だ」

「そう言う事だ、明久。お前が天城に言った、打倒Ａクラスの前には作戦に必要なプロセスがあるからな」

俺と坂本の追加した説明で明久は完全に理解し、秀吉や土屋に島田、そして姫路も理解したのであった。

と、そんな時……。

「あ、あの！」

いきなり姫路が珍しい大きな声を出した。

「ん？　どうした姫路？」

「えっと、その。天城君に言った、って……吉井君と坂本君は、前から試召戦争について話し合っていたんですか？」

姫路の質問に俺も同様に思った。確かに、坂本がいきなりＡクラスに試召戦争をやると言い出した事に、明久は何の疑問も抱かずに参加しようとしていた。

ただでさえ観察処分者の肩書きを持ってしまった明久は、召喚獣によって受けた痛みがフィードバックされる。ハッキリ言って自殺行為に等しい。そんな事は当然、明久も分かっている筈なのだが……？

「ああ、それか。それはついさっき、姫路の為にって明久に相談されて……」

「それはそうと！」

雄二が言っている最中に明久が、いきなり遮るかのように大声を出した。

だが少しばかり遅かったな、明久。もう俺は読めたぞ。お前が姫路の為に試召戦争を起こし、勝利して良い設備を与えようとしている事を。

聞いた話だが、姫路は病弱気味で運動神経も余り無い。そんな彼女がFクラスと言う劣悪な環境に居続けてしまったら、更に体調が悪くなるだろうと明久は考えた筈だ。

明久の事だから、姫路に良い環境で勉強させる為に、試召戦争で勝とうと考えて坂本と結託したのだろう。

恐らく坂本も理由がある筈だ。でなければ、新学期早々いきなり試召戦争をやるだなんて言い出す訳が無い。まあ聞いた所で、坂本は俺に話す気は無いと思う。

坂本は俺に対して余り本当の事は言わないし、もし言った所で俺が絶対に反対すると思っているから、俺が説教中に問い質しても沈黙を貫こうと考えているに違いない。

まあそれは友達の明久にも言える事だが……アイツの場合は誰かを守る為や庇う為に沈黙を貫いているけど。

明久と坂本は似てないようで、似ていると思っている俺であったが……。

「それじゃ、作戦を説明しよう。おい天城、何を考えているのかは知らんが、お前もちゃんと聞けよ」

考え事をしている最中に会話が進んでいたので、俺はすぐに頭の中を切り替えて、坂本の言う作戦内容を聞き始めるのであった。

第四問

バカテスト　数学

問　以下の問いに答えなさい

（１）４ｓｉｎＸ＋３ｃｏｓ３Ｘ＝２の方程式を満たし、かつ第一象限に存在するＸの値を１つ答えなさい。

（２）ｓｉｎ（Ａ＋Ｂ）と等しい式を示すのは次のどれか、？～？の中から選びなさい

？ｓｉｎＡ＋ｃｏｓＢ　　？ｓｉｎＡ－ｃｏｓＢ

？ｓｉｎＡｃｏｓＢ　　？ｓｉｎＡｃｏｓＢ＋ｃｏｓＡｓｉｎＢ

姫路瑞希の答え

（１）Ｘ＝π／６

（２）？

教師のコメント

そうですね。角度を『。』ではなく『π』で書いてありますし、完璧です。

天城修哉の答え

（１）大変恥ずかしいのですが、解りません。後ほど解説をお願いします。

（２）？

教師のコメント
（1）は出来なかったみたいですが、（2）は正解です。
それに出来なかったからと言って恥じる事はありませんよ。
西村先生が天城君に解説をすると言ってましたので、少し待ってて下さい。

土屋康太の答え
（1）X＝およそ3

教師のコメント
およそをつけてごまかしたい気持ちもわかりますが、これでは回答に近くても点数はあげられません。

吉井明久の答え
（2）およそ？

教師のコメント
先生は今までたくさんの生徒を見てきましたが、選択問題でおよそを着ける生徒は君が初めてです。

Dクラスと試召戦争前の昼休みにて……。

「FクラスがDクラスに試召戦争ねぇ～。勝てる見込みはあるのかしら、天城君？」

「さあ、どうだろうな？」

俺は食堂で、約束した木下と一緒に飯を食っており……。

「けど天城君は災難だねぇ～。Fクラスの代表は一体何を考えているのかな？」

「全くだよ。新学期早々に試召戦争をやるだなんて」

他にも俺と木下の向かいに座っているAクラス生徒である工藤愛子と久保利光もいた。

「坂本は俺の前で本当の事は喋らないから、理由は分からんな」

「天城君でも分からないの？　何時も説教してるのに？」

「あのな、工藤さん。説教しているからと言って、相手の事が分かるって訳じゃ無いんだぞ」

俺は工藤の質問に顔を顰めながら答える。

工藤は1年の終わり頃に転入して来た、俺と木下の去年のクラスメイトだった。性格は木下とは対照的でフレンドリーな女子だ。そん

な工藤の性格が幸いしてか、すぐに友達が何人か出来て、いち早くクラスのムードメーカーになった。ついでに得意科目は保健体育であり、性に関しての知識がやたらと豊富だ。本人曰く、実技で身に付けたと言ってる。それが本当か嘘かは知らないけど、確かに保健体育の成績は凄く高い。何故そんなに知っているのかって？　それは工藤が自慢げに語っていたからだ。まあ保健体育だけじゃなく、他の科目の成績も高いからＡクラスにいるんだろうが。

「まあ坂本君の事はいいとして、天城君は何で試召戦争をやる事に反対しなかったんだい？　平穏を好む君にして見れば、止めると思ったんだが」

「無論、反対して止めるつもりだったんだが……坂本に一杯食わされてな。試召戦争に参加せざるを得なかったんだ」

次に久保は、俺と木下が学級委員の集まりで知り合った男子だ。久保は眼鏡を掛けた理知的なイケメンで、真面目で頭も良さそうに見えるが、実際その通りだ。女子生徒には優しく接し、テストでは常に上位の記録を持つ成績優秀で勤勉なイケメン学生だ。これでときめかない女子はいないだろう……優子のタイプの男性に入ると思うが、本人は何故か久保はタイプでは無いみたいと言っている。まあ、そんな事はどうでもいいとして、久保の事を聞いただけで羨ましいだろうと思っているだろうが……実は久保にはちょっとした秘密があった。

「それに今回の試召戦争は、明久も積極的に参加するみたいでな」

「吉井君が！？」

俺が明久と言った途端に久保は敏感に反応して、テーブルに身を乗

り出して俺に顔を近づける。

「どうして吉井君も参加するんだ!?　彼は確か観察処分者で、召喚獣によって受けたダメージがフィードバックされるのに!」

「……久保、取り敢えず離れてくれ。そんなに近づかれると飯が食えん」

「あ……す…すまない。取り乱してしまった」

「「……」」

俺の突っ込みに久保は咳払いをしながら、俺から離れて椅子に座る……その様子に木下と工藤は生暖かい目で見ながら無言となっているが。

「し…しかし、吉井君はどうして参加しようと?」

「悪いが明久の友人として、黙秘させて貰う」

「!!!　ど…どうして!?」

久保はショックを受けたかのような顔になる。だって教えたら、お前は絶対に凄まじいほどのショックを受けると思うから。

「天城君、いくら君が吉井君の友人だからと言って、教えないとは酷いじゃないか!　僕は純粋に吉井君を心配して……」

「まあまあ、落ち着いて」

「そうよ久保君。Ａクラスの貴方が取り乱してたら、周りに示しがつかないわ。それに無理矢理聞き出そうとするのは、余り良くないと思うし」

「け…けど僕は……」

工藤と木下が宥めようとするが、久保はまだ落ち着かないので……。

「久保、お前は俺が明久の友人である事に気に食わないのは分かる。だがな、もしソレを無理矢理聞いて明久が知ったら……嫌われると思うぞ？」

「！！！　……わ…分かった……もう聞かないよ」

俺がちょっとした警告をすると、すぐに身を引いた。本当にコイツは明久の事となると、面白い位に変わる。

もう気付いたと思うだろうが、久保は明久の事が好きなのだ……恋愛対象として。それは俺だけでなく、此処にいる木下や工藤も知っている。

どうして久保が明久の事を好きになったのかは知らないが、俺にはとても考えられなかった。別に同性愛自体を否定している訳ではないが、まさかこんな身近にいたなんて思いもしなかったのだ。もし明久や久保が友人でなければ密かに応援していただろうが、２人とも俺の友人なので無理だった。だから俺は明久を余り久保には近寄らせず一定の距離を取らせており、久保が明久に近づこうとするのを阻止する為に俺が話し掛ける。

とまあ、そんな久保を生殺し状態にさせ続けた結果、久保の明久に

対する恋心が更に強まって今に至るのだ。その時の俺は、多少は明久と会話させれば良かったと後悔していたが。だからと言って今の久保に明久を近づけさせたら何を仕出かすか分からないので、今でもそれを続けている。

俺がそんな事を考えながら飯を食っていると……。

「所で天城君。聞き忘れたんだけど、どうして貴方が職員室に呼ばれたのかを聞いてもいいかしら？」

木下は話題を変えたいのか、俺が職員室に呼ばれた理由を聞くのであった。

「ああ、それね。実は……いや、此処で話す話題じゃないから止めておく。だから別の話を……」

「何でよ？　別に良いじゃない。アタシ達に話せない事なの？」

「あ、それボクも聞きたい。校内放送を聞いた時は驚いたよ。一体何があったの？」

「僕も気になっていたよ。どうして呼び出されたんだい？」

俺が他の話題にしようとしたのだが、木下や工藤、復活した久保がすぐに問い質す。

この3人は俺の事を心配して聞いたのだろうが、俺としては今此処で言いたくないのだ。いや、別に話しても良いんだけど、久保がな……。

「……分かった。じゃあ話そう。ってかこの話をするのは、もう3回目だよ」

そして俺が職員室に呼ばれた理由と、Dクラスでの宣戦布告での出来事を話すと……。

「何を考えていたのかしら？　そのDクラス生徒は」

「自業自得なのに、天城君に仕返しをしようだなんて……」

「確かに大変許し難い行為だが……吉井君に暴行をしていた事が更に許せない！！」

「「あ……」」

木下と工藤は呆れた顔をしており、久保は俺に嘘の証言をしたDクラス生徒に憤っていた……主に明久に対してだが。久保の反応を見た木下と工藤は、俺が話したくない理由がすぐに分かった。

「だから話したくなかったんだよ」

「「……ゴメン」」

俺の突っ込みに2人が揃って謝ると、久保が……。

「僕としては今すぐDクラスに試召戦争を……！」

メラメラと燃え始めて、今すぐDクラスに行って天誅を下そうみたいな感じになっていた。

「……悪いけど2人とも、俺もう教室に戻るから」

これ以上、久保といると他にも何か聞かれそうだと思った俺は既に食べ終えた空の食器を持って、席を立とうとする。

「それじゃあ御三方、俺は試召戦争があるから失礼するよ」

「え…ええ。一応、応援だけはしておくわ。頑張って」

「頑張ってねぇ～天城君、ボクも応援してるから」

木下と工藤は俺にエールを送り……。

「吉井君に暴行をする奴には、僕が天誅を……！」

「久保、試召戦争中に勝手な事はしないでくれよ」

久保の独り言に突っ込みを入れた俺は颯爽と食器を片付けて、食堂から出て行ったのであった。

試召戦争は開始されたのだが……。

「やれやれ、開始早々に回復試験を受けなきゃいけないとは……」

「仕方ないですよ。私達の持ち点は今０点ですから」

俺は姫路と一緒に回復試験を受けていた。

既に知っているだろうが、振り分け試験で俺は欠席、姫路が途中退席なので、全科目が０点扱いとなっているのだ。試召戦争は点数が無ければ参加する事は出来ないので、０点の俺と姫路は回復試験を受けていると言う事だ。

「出来れば一科目だけに絞って、すぐに前線に立ちたいんだがな」

「そう言う訳には行かないだろうが」

「だよな」

俺の呟きに坂本がすぐに突っ込み、俺は頷きながらも回復試験を続けている。因みに今は俺の得意科目である現国だ。えっと、今度は四字熟語と意味か……これは。

「……」

「何だ？」

「お前、得意科目に関しては姫路並だな」

「そりゃどうも」

坂本の台詞に適当に返事をしながらも俺は問題を解いており、姫路

も同様に問題をスラスラと解いていた。

俺と姫路が回復試験をやっている最中……。

「さて、そろそろ明久が逃げようと考えている頃だな。おい横田、ちょっといいか？」

「何ですか？」

坂本が横田を呼んで、メモ用紙に何かを書いた後に渡した。

「これは？」

「俺からの伝言だ。それを明久に渡せ」

「了解しました。では」

横田はメモ用紙を持ちながら、すぐに教室を出て行く。

「戦意喪失気味だと思われる明久に渇を入れるのか？」

「アイツの事だから、戦死した奴が鉄人に連行されるのを見て、自分達は良くやったと言いながら此処に戻ろうと考えている筈だ。だからそうした」

「……確かにアイツは自分がされるのを考えただけで、すぐに逃げ出そうとするな」

坂本の言葉に俺は頷く。
そして横田が出て少し経った後に、秀吉率いる前線部隊が戻って来た。

「秀吉、状況は？」

「うむ。守りを明久達に任せておいたから、ワシ等はその間に点数を補充しに来たじゃ」

「分かった。なら早く始めろ」

坂本が秀吉達に回復試験を受けさせようと指示すると、秀吉と前線部隊はすぐに回復試験を始めた。

「天城君、吉井君は大丈夫でしょうか？」

「さあな。アイツは一応根性だけはあるから、それなりには持ち応えると思うけど」

「だと良いんですが……」

俺の言葉に明久を心配する姫路であったが、俺は引き続き回復試験を受けるのであった。

また少し時間が経ち、俺が回復試験の大半を終わらせていると……。

「吉井の奴！！　絶対に後で殺してやるんだから！！」

いきなり物騒な台詞を言った島田が、須川に羽交い絞めされながら教室に入ってきた。島田の台詞により教室にいる一同が引き気味になっている。

「おい島田、明久にそんな事をしたら、俺はお前の動きを封じた後に警察に連絡して引き渡さなきゃいけないんだが……」

「あのバカはウチを見捨てたのよ！！」

島田が憤慨しながら言っているのを察するに、明久は島田を見捨てる行動を取ったのだろう。

「後で吉井はウチがグロテスクに……」

「……取り敢えず後の事を考えて、お前には少し大人しくしててもらおう」

俺は殺気を振りまいている島田にそっと近づき……。

ドンッ！

「うっ！」

バタンッ！

島田の首筋に手刀を打ち込むと、島田は気絶したのであった。

「これでよしっと」

「……おい天城、味方を気絶させてどうする」

俺が島田を気絶させた事に、雄二は顔を顰める。秀吉や前線部隊、回復試験中の姫路も見てて呆然としていた……その中で須川だけは安堵しながら教室から出て行ったが。

「島田が味方殺しだけじゃなく、本物の殺人犯になる前に手を打っただけだ」

「だからと言って、此処で島田を気絶させたら支障が出るだろうが」

「それは俺が責任を持って対応するから安心しろ。と言う訳で坂本、俺は前線に行かせてもらうぞ」

「お…おい、待て！　お前はまだ完全に補充しきっていないだろうが」

「必要最低限の科目は受けたから、取り敢えず大丈夫だ」

教室から出ようとする俺に坂本が引き止めようとするが、俺は無視する。

「それに俺が行けば、姫路が完全に回復試験が終える為の時間稼ぎにもなる。他にもDクラスの連中は俺を恐れている節が見受けられるから、多少のハッタリもかけれる。これでもまだ俺を行かせないつもりか？」

「……」

俺が行く理由を並べると、坂本は少し考えている顔をしているが……。

「分かった、なるべく時間を稼いでくれ。それと出来れば、姫路が代表の所へすんなりと進める位に敵を倒して欲しい」

「出来ればの話だがな、なるべくやってみよう。姫路、早く終わらせておけよ」

「は、はい！　分かりました！」

俺の言葉に姫路が返事をした後に物凄い集中力で回復試験を続行し、俺は教室から出て行ったのであった。

「さて、戦況は……持ち堪えているとは言え、やはり苦戦しているな」

状況を見る限りでは、明久と中堅部隊が何とか持ち堪えているみたいだ。それと同時にDクラスが此方の時間稼ぎ目的に気付いており、早めに決着を付けたがっている。恐らく平賀が俺が回復試験を完全に終える前に早く終わらそうとしているのだろう。

明久が須川と話しているみたいで聞き取れないが、何か作戦を練っ

ていそうな感じだった。一応、明久は隊長としての役割は果たしているみたいだな……それでも後方から指揮をして、自分から戦わずに安全な所にいるけど。

俺がそう思っていると、須川が前線から引いて再び教室に戻ろうとしている。その間に須川が俺の顔を見て……。

「天城、悪いがすぐに吉井の援護を頼む」

そう言いながら、すぐに教室へと入った……何故か奴の顔が妙に活き活きとしていた顔になっていたが、敢えて気にしない事にする。

「どうやら須川は明久が言った作戦について、坂本に知恵を借りに行ったって所か。どんな作戦かは知らんが、取り敢えずは……おい明久」

「え？　……シュウ！？」

安全地帯にいる明久に声を掛けると、明久はキョトンとして後ろを見た途端に俺の顔を見て驚く。

「どうしてシュウが？　もう回復試験は終わったの？」

「必要最低限はな……で、お前は一体、須川に何の作戦の指示をしたんだ？」

「う…うん。須川君にDクラス側にいる先生たちが、他の場所に言ってくれるように偽情報を流して欲しいって頼んだんだ」

「偽情報ねぇ……」

明久の作戦を聞いて何か嫌な予感がした。妙に活き活きとした須川の顔を思い出して、俺は碌でもない情報を流しそうだと思う。

まあ作戦は作戦だから、取り敢えずは須川の作戦に期待はしておくが。

「では俺も行くとしよう、いつまでも見物している訳には行かないからな」

「ま…待ってシュウ！　どうせなら指揮官の僕を護衛してくれない？　僕がやられたら不味い事になると思うし」

尤もな事を言っている明久であったが……。

「……で、本音は？」

「僕を危険から遠ざけて欲しい」

「……」

俺が本当の事を言わせると、やはり保身の為であった。

「……自分の身は自分で守る事だな」

「ああっ！　シュウ！　僕を見捨てないでぇ～！」

離すまいと俺の腕を引っ張ろうとする明久だったが、俺は即座に前線へと向かった。

「ではDクラスの皆さん、今度は俺も参戦させてもらうよ」

『天城！？』

俺が参戦するとDクラスの連中は驚いたかの様な顔になっている。

『た…大変だ塚本！　天城が来たぞ！！』

『何だと！？　もうアイツは回復試験を終えたのか！？』

「驚いている所を悪いが……試獣召喚（サモン）　！」

Dクラスが戸惑いながら後方にいる塚本に大きな声を出して報告している最中、俺は召喚獣を呼び出す為のキーワードを言う。

そして俺の足元からは魔方陣みたいな図形が現れ、その中心からは召喚獣が出て来た。

その召喚獣は黒のロングコートを纏っている中に防刃ベストを着て、黒のスラックスにロングブーツを穿いており、左手には鞘に納まってる刀を持ったデフォルメの俺だった。

「では行こう。俺の相手をするのは誰だ？」

『うっ！！』

俺と召喚獣が進むと、Ｄクラスは何故か引き気味になる。

「何をそんなに恐がっているんだ？　これは試召戦争だぞ、さっさと掛かって来い」

『ひいっ！』

目を細めながら睨む俺にＤクラスの連中は召喚獣と共に恐がっており、向かって来る気配が無い。

「来ないなら……此方から攻めさせてもらう！」

掛け声と同時に俺の召喚獣が、消耗していて動いていないＤクラスの召喚獣に襲いかかり……。

『Ｆクラス　天城修哉　化学　１２８点
ＶＳ
Ｄクラス　鈴木一郎　化学　９２点
Ｄクラス　笹島圭吾　化学　９８点』

「先ずは２人」

シャキンッ！　ザシュッ！　ザシュッ！

「「ああっ！！」」

俺の召喚獣は居合を使ってDクラスの召喚獣2体の首を刎ねると、すぐに倒した。

『Dクラス　鈴木一郎　化学　0点

Dクラス　笹島圭吾　化学　0点』

「0点になった戦死者は補習～～！！！！」

2人が戦死した途端、すぐに西村先生が物凄いスピードを出しながら現れて、戦死したDクラス生徒2名を担ぐ。

「「た…助けてくれぇ～～！！！　鬼の補習は嫌だ～～！！！」」

「これは立派な教育だ！！　趣味は勉強、尊敬する人は二宮金次郎と言う、理想的な生徒に仕立ててやるから覚悟しろ！」

「「いやだぁ～～！！！！」」

Dクラス生徒2名の叫びは虚しくも、西村先生によって補習室へと連行されてしまった。

「ふむ……戦死云々は兎も角として、西村先生の補習授業なら受けても構わないな。あの人の教え方は丁寧で大変分かり易いから」

『なにぃっ！！』

俺の台詞にＤクラス生徒達だけでなく、味方のＦクラス生徒達も驚きの声を発していた。

「ちょ…ちょっとシュウ！！　それ本気で言ってるの！？　自分から鉄人の補習を受けても構わないって！？」

「お前は頭が可笑しいんじゃないのか！？」

「あの地獄の拷問を自ら受けたいと言うのか！？」

「天城はどこまで規格外なんだ！？」

「……おい貴様等、それはどう言う意味だ？」

明久を含めた中堅部隊が失礼な事を言ってるので、俺が振り向いて睨むが……。

『塚本ぉ～～！！！！　やっぱり天城は恐ろしい奴だ！！』

『負けても自分から補習室に行くと言ってるぞ～～！！』

『しかも天城は鉄人を神聖視している～～！！！』

『マジか！？　じゃあアイツの強さは鉄人を崇拝した為に強くなっ

たと言うのか！？　天城修哉は何処まで恐ろしい奴なんだ！！』

「……待てコラ」

Ｄクラスの方も俺に大変失礼な事をほざいていた。

『だが天城は数学が苦手だと平賀が言ってた！　もう少しで数学の船越先生が来る！！　それまで何とか耐えてくれ！！』

「……船越先生だと？」

後方の塚本の大声を聞いて、俺は少し顔を歪めた。

数学の船越先生……４５歳独身。婚期を逃し、単位を盾にし生徒に交際を申し込んでいると言う、噂の女性教師。当然それは噂ではなく真実である。

俺は以前、職員室に行って西村先生に数学で分からない所を聞きに行った際に船越先生が現れて、いきなり俺を自分の席に連れて、教えて欲しかったら交際しろと迫られたのだ。言うまでもなく俺は断ったのだが船越先生はしつこく、更には単位を落とされたくなかったら付き合えと脅された。もう絶体絶命だと思いきや、西村先生が助けてくれて、俺は九死に一生を得たのだ。

そんな事があった所為で、俺は少しばかり得意であった数学が嫌になって成績も落ちたのだ。数学のテストで赤点を取った時に他の数学教師の先生が、特例中の特例として謝罪しながら追試を免除してくれたのだ。その代わり西村先生の補習授業を受ける事になったが……その時の西村先生は懇切丁寧に教えてくれた。

と言う訳があった故に、数学の成績が落ちた元凶となった船越先生には近寄らないようにしていたが、まさかDクラスが此処で呼ぶとは思わなかった。

「船越先生が来る前に、さっさと目の前の連中を倒すとしよう」

俺はDクラス生徒の召喚獣を倒そうと思っていたが……。

ピンポンパンポーン！

《連絡致します》

「ん？　この声……須川か？」

突然、校内放送から須川の声が聞こえた。

まさかアイツ、校内放送を使って偽情報を流すつもりなのか？

《船越先生、船越先生》

しかも呼び出す相手が船越先生か。俺にとっては物凄く好都合だ。

《吉井明久君が体育館裏で待っています》

何……だと？

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

……明久、お前の犠牲を無駄にはしないぞ。恐らく須川か坂本のどちらかが考えた作戦だろうが。

と、俺がそんな事を考えていると……。

「吉井隊長……アンタぁ男だよ！」

「ああ。感動したよ。まさかクラスの為にそこまでやってくれるなんて！」

他のＦクラス生徒達は明久が自分から自己犠牲をしていると勘違いしているのか、明久を物凄く感心しているかのような目で見ていた。

「違う！　違うんだよ！　僕はそんな指示を出してはいないよ！！　シュウ！　君は分かる筈だよね！？　僕がそんな指示を出していないって事に！？」

「……そうは言うがな、明久。Ｄクラスの方を見てみろ」

「え？」

『おい、聞いたか今の放送』

『ああ。Fクラスの連中、本気で勝ちに来てるぞ』

『ただでさえ鉄人に洗脳された天城だけじゃなく、あんなに確固たる意思を持ってる奴等に勝てるのか……？』

Dクラスも校内放送を聞いて戦慄をするかのように呟いていた……

…ってか最後の奴は余計だったが。

「向こうは完全に勘違いしているぞ」

「うわぁ～～！！！　これじゃドンドン否定しにくくなっちゃうよお～～！！！！」

俺の一言を言った後に明久は頭に手を置いて、顔を上の方に向けながら叫びを上げる。

「皆、吉井隊長の死を無駄にするな！」

「絶対に勝つぞー！」

「俺達も天城に続けーー！！」

Fクラスは士気が上がってDクラスに突進し始める。

「……」

「さて、俺は引き続きDクラスの部隊を倒すとするか」

俺が再び、Ｄクラスの召喚獣の方に意識を向けると……。

「須川ぁぁあああああああ！！！！！」

明久は怨念めいた叫びを上げていたのであった。

第四問（後書き）

旅人『今回は怒らないんだな』

修哉「苦手な船越先生の事を考えると、あんまりそんな気になれないんですよ」

旅人『まあ交際を迫られてトラウマになり、成績を下げた元凶の船越先生が相手じゃあ……そうなる気持ちも分かるね』

修哉「船越先生の事があるから見逃しておくが、それ以外の事だったら説教しますよ」

旅人『そうかい……ではそうしてくれ』

第五問（前書き）

いつもより若干短いです。

第五問

バカテスト　物理

問　以下の文章の（　）に正しい言葉を入れなさい
『光は波であって、（　）である』

姫路瑞希の答え
『粒子』

教師のコメント
よく出来ました

天城修哉の答え
『量子』

教師のコメント
間違ってはいないのですが、残念ながらこの問題での答えは粒子です。
私個人としては丸を付けますが。

土屋康太の答え
『寄せては返すの』

教師のコメント
君の回答には、先生はいつも度肝を抜かれます。

吉井明久の答え
『勇者の武器』

教師のコメント
先生もＲＰＧは好きです。
それと天城君が言ってましたよ。次の問題でふざけた回答をしたら容赦なく説教をすると。

俺は確実にＤクラスの召喚獣を薙ぎ倒していたが……。

「工藤信也、戦死！」

「西村雄一郎、総合残り４０点です！」

「森川が戻ってこない！　やられたか！？」

俺以外のＦクラス生徒が盛り上がってた士気のまま一緒に戦っている最中、段々と戦力差の影響が現れ始め、次々と景気の悪い方向へと進んでいた。工藤と森川が補習室送りになり、俺を含めた明久と

中堅部隊は残り６名。

ふむ……やはり士気が高くなったとは言え、Ｄクラス相手じゃ点数差が違うか。出来ればそろそろ援軍を差し向けて欲しいが。

「隙ありぃ～！」

俺の召喚獣が動きが止まった瞬間に、Ｄクラス生徒の召喚獣は攻撃を仕掛けようとしたが……。

「甘い」

シャキンッ！　ザシュッ！

「なっ！？」

言葉を発すると同時に、俺の召喚獣が背後から襲いかかってきた召喚獣を居合で薙ぎ倒す。

「背後からの攻撃に、声を出したら折角のチャンスが台無しだろうが」

『Ｆクラス　天城修哉　化学　１２８点』

俺の召喚獣は未だにダメージを受けずに、一人一人倒していた。

「くっ！　さっきから攻撃をしているのに、何故当たらない！？」

「召喚獣の扱いは俺達と同じく大して慣れていない筈なのに！？」

「何であそこまで正確な操作が出来るんだ！？」

それはＤクラスだけでなく味方の中堅部隊も疑問に思っている……明久は少々苦い顔をしているが。

俺には明久があんな顔をしている理由は分かる。それは……。

「天城、明久、あと少し持ちこたえろ！」

と、いきなり後ろから俺と明久に檄が飛んできた。俺が後ろを見ると遥か後方には坂本達の姿が見える。

坂本達がいると言う事は……援軍か。此方としては助かる。中堅部隊が殆ど補習室送りにされていたからな。

「援軍だ！　合流される前に早く吉井達をすぐに全滅させろ！　そうしたら天城に集中攻撃をするんだ！！」

ふむ……そうされたら俺としてはかなり不味い状況になるな。だったらそうなる前に、何とか持ちこたえるか。

と、俺が中堅部隊に気を取られているＤクラスの召喚獣に攻撃を仕掛けようとしたが……。

「「させるかぁ！」」

「おっと！」

俺の召喚獣の横からDクラスの召喚獣2体が攻撃を仕掛けたので、即座にかわして距離を取った。

「Fクラスの部隊が全滅するまで、俺達の相手をしてもらうぞ！」

「覚悟しろ天城！」

「やれやれ、お前達に構っている暇は無いんだが」

Dクラスの召喚獣2体が一斉攻撃を仕掛けてきたので、俺の召喚獣はかわしながら居合をやる。

シャキンッ！　ザシュ！　ザシュ！

「邪魔だ」

「くそっ！　何でだ！？」

「お前イカサマしてるんじゃないのか！？」

俺の召喚獣がDクラス召喚獣を倒すと、相手が俺に文句を言ってきた。

「そんな訳あるか。俺は明久が雑用をしている際に監視を……」

「戦死者は補習～～！！！」

「「うわあぁぁあ～～！！！！」」

俺が理由を言っている際に西村先生が現れて、戦死したDクラス生

徒2人を担いで連れて行った。

凄いな西村先生は……すぐに逃げようとしたDクラス2人を一瞬で捕まえるとは。

で、残りは俺と明久、そして中堅部隊の3人だけになってしまったか。

「シュウ……雄二達が来るまで、どうする？」

明久が自身の召喚獣と一緒にDクラスの攻撃を掻い潜りながら俺の所まで来た。

コイツは回避や逃走に関しては矢鱈とずば抜けているから、俺の所にいれば安心だと思いながら近づいたのだろう。

「どうすると言っても……坂本達が来る前に持ち堪えるしかないだろ」

「……だよね」

「とは言え、多少は倒しても……これだけの人数相手に持ち堪えるのはキツイな」

俺と明久は前を見ながらDクラス生徒達を見て話している。そんな会話をしているのにも拘らずDクラス生徒達は、すぐには攻撃を仕掛けようとはしない。

「どうやらDクラスの皆はシュウを警戒しているみたいだね」

「下手に俺を攻撃をしたら反撃を喰らうと思っているんだろ」

「シュウは無傷で8体ほど倒しているからね……にしても凄いよ、そんなに倒すなんて。そこまで召喚獣を上手く操れるのは、僕と一緒に雑用をやったお蔭かな？」

「違う。お前が召喚獣を使用している際に下らん事を仕出かさないかの監視だ」

「うぐ……それを言わないでよ」

明久は苦々しそうな顔をする。

「まあその監視があった事で俺も明久並に召喚獣の操作が可能になったけど……」

知っての通り、明久は観察処分者なので召喚獣を使用して教師の雑用を押し付けられている。それによって明久は召喚獣の扱いに関して誰よりも長けていた。明久が2学年の中で召喚獣を扱うのに使い慣れているのは分かるが、どうして俺も召喚獣を使い慣れている事に疑問を抱くだろう。

理由は俺が召喚獣を使って雑用をしている明久を監視していたからだ。それだけで召喚獣の扱いは関係無いだろうと思われるだろうが、俺は明久の監視と一緒に召喚獣も出していたのだ。

明久は以前に西村先生以外の先生に雑用を任されていた時に、人使いが荒い先生に散々扱き使われた所為で少しばかり暴走し、召喚獣を使って先生が目を逸らした隙に気絶させて逃走した事があった。

それを偶々現場に居合わせた俺が逃げようとしていた明久を捕まえようとしたのだが、物理干渉が出来る明久の召喚獣が邪魔した所為によって、思うように簡単に捕まえる事が出来ずに苦戦していた。けれど召喚フィールドが未だに展開されていた事に気付いた俺は、自身の召喚獣を使って鎮圧させた後、フィードバックによる痛みで悶えている明久を捕まえて説教した。その事を知った西村先生が自分以外の雑用の時は、明久がまた暴走しない様に監視して欲しいと言われたので、俺は召喚獣を出しながら明久を監視していた。

もう気付いたと思われるが、俺は明久の監視も含めて自身の召喚獣の操作練習をした事によって、明久程では無いがそれなりの操作が出来ると言う訳だ。

「とまあ解説はこんな所で良いだろう」

「解説って……何を言ってるの？」

「コッチの話だから気にするな……それより、向こうもそろそろ攻撃を仕掛けそうだな」

Dクラスがタイミングを見計らっているように、Dクラスの召喚獣達が攻撃を仕掛けそうな雰囲気だった。

「だったらこれで……ああっ！　霧島さんのスカートが捲れている！」

「おい明久、そんな稚拙な引っ掛けにDクラスが……」

明久がいきなりDクラスの背後を指差して叫ぶ事に、俺は呆れながら言おうとしたが……

『なにぃっ!?』

「……引っ掛かったな」

Dクラス生徒達が一斉に後ろを向いた……男子だけでなく女子も。

おいおいDクラスの諸君、散々バカ扱いしていた明久の幼稚な引っ掛けに騙されているって事は、自分達もバカだって言ってるようなもんだぞ?

俺が内心でDクラスに突っ込みを入れていると……。

ガシャァァン!!

「は?」

『な、なんだ!?　何事だ!?』

明久が何を考えているのか、上靴を窓に向けて投げつけ、窓ガラスを割った。その事に俺やDクラス生徒達は一斉に窓を見る。

「うわっ!　島田さん!　そんな物をどうする気だよ!」

窓の方に気を取られている隙に明久が何時の間にか消火器を持って……。

プシャアアアア！！！

Dクラスに向けて消火薬を噴射させた。

「う、うわっ！　何だ！？」

「ぺっぺっ！　こりゃ消火器の粉じゃねぇか！」

「前が見えない！」

「お…おい明久！　お前何を……」

俺は明久の行動を不可解に思いながらも止めようとしたが……。

「島田さん！　キミはなんてことを！　……シュウ、逃げるよ」

「あ…明久、お前まさか」

やったのが島田だと思い込ませるようなデカイ声を上げた明久は、後から小声で俺に逃げるように言ってきた。

おい明久……逃走する為に窓をぶち破っただけでなく、消火器を噴射させたのを島田の仕業にするのかよ。

「Fクラスの島田め！　なんて卑怯な奴なんだ！」

「許せねぇ！　彼女にしたくない女子ランキングに載せてやるからな！」

「そうだ！　在学中には彼氏の出来ない状況にしてやる！」

「……でも、男らしくてステキ……。お姉さま……」

そして勘違いしたDクラスは島田に対して恨み言をぶつけている…
…最後の女子は若干危険な雰囲気を漂わせていたが。

「……それで明久、島田にどんな言い訳をするんだ？」

「あ…アハハハハ……すまない、島田さん。君の犠牲は無駄にはしないよ」

俺の問いに明久は島田に黙祷を捧げていた……当の本人は教室で俺によって気絶しているが。

明久、お前が島田に殴られても俺は知らんからな。今回の出来事については島田が明久を殴っても見過ごす事にしよう……度が過ぎる行為に発展すれば止めはするが。

そう思っていると坂本達の姿が近くなったのを見た俺は、取り敢えず劣勢から脱する事が出来たと安堵する。

しかし……。

「だぁぁぁっ！」

ガンッ！　シュワァァ――――

明久は消火薬を出し切った消火器を天井に投げて、ぶつけた拍子にスプリンクラーが作動した。

それによって水滴が辺りに舞う粉を落とし始めている。

「おい明久、お前はどうして……」

学校の器物を何の躊躇いも無く壊せるのかと問い質そうとしたが……。

「待たせたな、吉井、天城！　Ｆクラス、近藤吉宗（こんどうよしむね）が行きます！」

坂本率いるＦクラス本隊の一人、近藤が遮ってしまった。

「試獣召喚（サモン）　！」

『Ｆクラス　近藤吉宗　化学　９１点
ＶＳ
Ｄクラス　中野健太（なかのけんた）　化学　４３点』

「くっ！　ここは退くぞ！　全員遅れるな！」

Ｄクラスの塚本の撤退命令により中野や他のＤクラス生徒達は退いて行ったのであった。

「深追いはするな。俺達も明久の部隊と天城を回収したら一旦戻るぞ」

Fクラス代表、坂本の命令により追撃をしようとした本隊が足を止めた。恐らく坂本は相手の本隊が出てくるのを嫌ったから、こんな消極的な命令を下したに違いない。

俺もその判断は正しいと思う。

「さて、無事なようだな。明久、天城」

「うん、まぁね」

「坂本の要望に応える事が出来なかったがな」

明久は安堵しながら答え、俺は少しばかり苦い顔をしている。

「気にするな、天城。得意科目じゃない化学であそこまで善戦したんだ。にしても驚いたぞ。まさか天城があそこまで召喚獣の操作に慣れていたとはな……」

「今はそんな事どうでもいいだろう。戻るんじゃなかったのか？」

「おっと、そうだったな。お前等！　一度教室に戻るぞ！」

坂本の指示により俺と明久、坂本率いる本隊が教室に戻るのであった。

教室に戻って、消耗した化学の点数を補充し終えた俺や明久達であったが……。

「明久、よくやった」

いきなり坂本が明久にらしくなり台詞を言い放った。

アイツが褒めると言う事は……何か仕出かしたな。おまけに晴れやかな笑顔になってるし。

「校内放送、聞いてた？」

「ああ。バッチリな」

坂本は笑顔で答える。アイツが明久に向かってあんな笑顔をするのは、明久の不幸を喜んでいるからだ。

「雄二、須川君がどこにいるか知らない？」

明久は明久で取り敢えず坂本を放っておいて、校内放送を流した須川に恨みを晴らそうと躍起になっている。

「もうすぐ戻ってくるんじゃないか？」

明久の燃え滾っている決意に対し、坂本は拍子抜けするような返事をする。

この反応からして、あの放送を指示した奴はやはり坂本だったか。

「やれる、僕なら殺れる……！」

「殺るなっての」

明久が須川を殺しそうな雰囲気だったので……。

「明久、確かに須川が放送したが、指示を下したのは坂本だ。そうだろう、坂本？」

「よく分かったな」

「シャァァァアッ！！」

俺が坂本だと教えて、当の本人は正解だと言った。聞いた明久は何処からか持ち出したのかは知らない包丁を突き出して雄二に襲い掛かる。

「落ち着け、明久」

「離してシュウ！　この外道を刺した後は、頭の形を変えるほど殴らないといけないんだから！！」

「気持ちは分かるが、此処でソイツを殺したら試召戦争がFクラスの敗北になってしまうぞ」

坂本を殺そうとする明久に俺は羽交い絞めをして止めると、ジタバタと暴れている明久。

「あ、船越先生」

「！！！」

明久は忍者の如く俺の羽交い絞めから脱出して、即座に掃除用具入れの中に入ってドアを閉めた。

「……逃げる事に関しては素早いな」

「さて、馬鹿は放っておいて、そろそろ決着を付けるか」

「そうじゃな。ちらほらと下校しておる生徒の姿も見え始めたし、頃合じゃのう」

「……（コクコク）」

「おっしゃ！　Ｄクラス代表の首級（くび）を獲りに行くぞ！」

『おうっ！』

俺の台詞を他所に、雄二達は教室から出て行く。

「……はあっ……明久、坂本が言った事は嘘だ。もし船越先生がいたら、俺は即座に逃げているぞ」

「……」

明久が恐る恐る掃除用具入れの扉をそっと開けて覗き……。

「逃がすか。雄二ぃっ！」

教室には俺と姫路だけしかいなくなったと分かった途端に、明久は掃除用具入れの扉を蹴り開けて、廊下に飛び出したのであった。

「……全く……明久を平然と陥れる坂本に呆れるが、すぐに騙される明久も呆れるな」

「あの、天城君。私達も早く坂本君達に合流しないと」

明久と坂本の行動に物凄く呆れる俺は深い溜息を付くと、姫路が早く行こうと言う。

「いや、姫路は急ぐ必要は無い。平賀にさりげなく近づいて挑めばいい」

「さりげなく…ですか？　でも私はＦクラスですから……」

「アイツは姫路がＦクラスの生徒だと言う事をまだ知らない。だから今は姫路がＤクラスに接近しても、警戒されずに素通りされるからな」

「そうなんですか……」

「取り敢えず教室を出よう。それにＤクラスの試召戦争が終わったら、明久には後で説教しないといけないからな……」

「え？　どうして吉井君を説教するんですか？」

俺と一緒に教室を出る姫路は、明久が説教をされる事に疑問を抱く。

「アイツは試召戦争中に、窓ガラス破損に消火器の無断使用、スプ

リンクラーを勝手に作動させたんだ」

「そ…そんな事をやったんですか」

明久の罪状を言うと、姫路は汗を掻きながら苦笑する。

「まあ今は平賀に近づいて、さっさと終わらせるとしよう。行くぞ、姫路」

「は…はいっ！」

俺と姫路は下校している生徒に紛れて平賀のいる所へと向かった。

「さてと、俺はここまでだ。後は姫路だけで平賀に近づいてくれ」

「わ…分かりました」

「それじゃあ後で」

下校中の生徒に紛れてギリギリまでDクラス本隊の近づいた俺は、姫路に後を任せて平賀率いる本隊へと向かう。

「ちくしょう！　あと一歩でDクラスを僕の手で落とせるのに！」

「何を言うかと思えば、彼氏クン。いくら防御が薄く見えても、流石にFクラスの人間が近づいたら近衛部隊が来るに決まっているだろう？　ま、近衛部隊がいなくてもお前じゃ無理だろうけど……頼みの天城がいたら話は別だが」

「くっ！　まるで僕がシュウの腰巾着みたいな言い方だね！」

「事実だろ？　彼氏クンは天城がいなければザコ同然だ」

明久をザコ扱いねぇ～。

「天城が何処にいるのかは知らないが、取り敢えずお前を早く潰させてもらうぞ」

と、平賀が本隊に明久を襲うように指示をしようとするが……。

「果たして出来るのかな？」

「え？　……なっ！？」

「シュウッ！？」

俺のいきなりの登場に驚いていた。

「試獣召喚（サモン）」

『Ｆクラス　天城修哉　現代国語　３１０点
ＶＳ
Ｄクラス　本隊　現代国語　１２１点
Ｄクラス　本隊　現代国語　１２３点
Ｄクラス　本隊　現代国語　１１８点
Ｄクラス　本隊　現代国語　１１２点
Ｄクラス　本隊　現代国語　１１６点』

「し…しまった！　天城の得意科目だ！」

「今更気付いても遅いよ」

シャキンッ！　ザシュッ！　ザシュッ！　ザシュッ！　ザシュッ！　ザシュッ！

俺の召喚獣がＤクラス本隊の召喚獣に神速の居合を使って一瞬で蹴散らした。

『Ｄクラス　本隊５名　現代国語　０点』

「助かったよ、シュウ！」

「残りはお前だけだぞ、平賀」

「くっ！　吉井の近くに天城がいなかった事に油断した！」

予想外な展開になったと思っているであろう平賀は、非常に苦い顔をしている。

「それと平賀、お前に一つ言っておく。明久をザコ扱いしているが、もしお前が1対1で明久とやったら負けていると思うぞ」

「な…何だと！？」

俺の意外な台詞に平賀は驚愕した。

「しゅ…シュウ、それって……」

「明久、それについては後回しだ。取り敢えずDクラス代表の止めは切り札に任せるとしよう」

「そ…そうだね。姫路さん、よろしくね」

「は？」

『何を言ってるんだ、この馬鹿は？』と言った顔になっている平賀。

「あ、あの……」

そんな平賀の後ろから、申し訳無さそうに姫路が平賀の肩を叩く。

「え？　あ、姫路さん。どうしたの？　Ａクラスはこの廊下を通らなかったと思うけど」

未だに現状を把握出来ていない平賀に俺は内心苦笑いをしていた。平賀の戸惑いは無理もない。まさか姫路がＦクラスの生徒だなんて誰もが思わないだろう。俺が平賀の立場だったら、間違いなく平賀と同様に戸惑っているだろう。

「いえ、そうじゃなくて……」

「おい姫路、早く決着を付けてくれ」

もじもじと言い辛そうに体を小さくする姫路に、俺が早く終わらせるように催促する。

「は…はい！　Ｆクラスの姫路瑞希です。えっと、よろしくお願いします」

「あ、こちらこそ」

「その……Ｄクラス平賀君に現代国語を申し込みます」

「……はぁ、どうも」

「あの、えっと……さ、試獣召喚（サモン）です」

『Ｆクラス　姫路瑞希　現代国語　３３９点
ＶＳ

Dクラス　平賀源二　現代国語　１２９点』

「え？　あ、あれ？」

平賀は未だに戸惑いながらも召喚獣を出して、姫路の召喚獣と相対する。おい平賀、いつまでも惚けていないで戦闘体勢を取った方が良いと思うが？

と言うか姫路の召喚獣は凄く強そうだな。騎士の鎧を着て、背丈以上に大きな両手剣を持っているんだから。

「ご、ごめんなさいっ」

そして姫路の召喚獣がアッサリと剣を振り抜くと、平賀の召喚獣が一瞬で倒されてしまった。

これによってDクラスの敗北が決まり、Fクラスが勝利したのであった。

第六問（前書き）

色々あって遅れました。
普段書いているやつの3倍近く書いているんで、時間が掛かります。

第六問

バカテスト　社会

問　以下の問いに答えなさい
『三権分立と呼ばれる国の権力を3つ答えよ』

姫路瑞希の答え
『立法権・司法権・行政権』

天城修哉の答え
『立法・司法・行政』

教師のコメント
2人とも正解です。
立法権は法律を作る権限。司法権は法律に基づいて裁判を行う権限。
行政権は法律に基づいて政治を行う権限。
以上3つの権限があります。

吉井明久の答え
『立法・司法……憲法か漢方のどっちか』

教師のコメント
最初の2つは合っていますが、最後は両方とも間違えています。

土屋康太の答え
『覗き権・盗撮権・女子のパンチラ権』

教師のコメント
もうそれは国として成り立たず、無法地帯となってしまいますね。

Dクラス代表　平賀源二（ひらがげんじ）　討死（うちじに）

『うぉぉーー！！』

その知らせを聞いたFクラスの勝鬨（かちどき）とDクラスの悲鳴が混ざり、耳が響く様な大音響が校舎内に駆け巡る。

本当なら少し静かにしろと言いたい俺であるが、折角の勝利に水を差す真似はしない。

「凄ぇよ！　本当にDクラスに勝てるなんて！」

「これで畳や卓袱台ともおさらばだな！」

「ああ。アレはDクラスの物になるからな」

「坂本雄二サマサマだな！」

「やっぱりアイツは凄い奴だったんだな！」

「坂本万歳！」

「姫路さん愛してます！」

代表である坂本を褒める声がいたる所から聞こえる……と言うか最後の奴、お前はドサクサに紛れて姫路に告白をしているが、当の本人は全く聞いていないぞ。

それとは逆にDクラスはガックリとうな垂れて悲壮感を漂わせている。あの様子から見てFクラスに負けた事が相当悔しいんだろうな。

「あー、まぁ。なんだ。そう手放しで褒められると、なんつーか」

坂本にとってまだ通過点に過ぎないだろうが、それでも周りから褒められている雄二は満更でもない表情なりながらも明後日の方向を見る。

「坂本！　握手してくれ！」

「俺も！」

もう坂本は英雄扱いだ。Fクラス生徒達が坂本と握手するのを見て、相当あの教室に不満を抱いているのだろう。

「雄二！」

「ん？　明久か」

今度は明久が坂本に近づいて……。

「僕も雄二と握手を！」

手を突き出した……握っている包丁を坂本に向けながら。

「ぬぉぉっ！」

ガシイッ

言うまでも無く坂本は明久の手首を抑えて阻止する。

「雄二……！　どうして握手なのに手首を押さえるのかな……！」

「押さえるに……決まっているだろうが……！　フンッ！」

「ぐあっ！」

坂本が明久の手首を捻ると、明久は悲鳴を上げて握りこんでいた包丁を取り落とす。

良かったよ明久、お前が坂本を殺していたら警察に連絡しなきゃいけない所だったから。

「……」

「……」

明久と坂本は無言になっていたが……。

「雄二、皆で何かをやり遂げるって、素晴らしいね」

「……」

「明久、その台詞は無理があるぞ」

急に明久が笑顔で取り繕うように言ってても坂本は無言だ。

「僕、仲間との達成感がこんなにもいいものだなんて、今まで知らな間接が折れるように痛いぃっ！」

「今、何をしようとした」

「も、もちろん。喜びを分かち合うための握手を手首がもげるほどに痛いぃっ！」

「……はあっ」

更に明久の手首を捻る坂本に俺は溜息を吐く。

「おーい。誰かペンチを持ってきてくれ！」

「す、ストップ！　僕が悪かった！」

「……チッ！」

ペンチを使うのは何かを曲げる気なのか？

「おい坂本、ペンチを何に使うつもりなんだ？」

「……ブツブツ……」

「聞いてるのか？」

「……生爪……」

……明久もやる事が非道だが、坂本も充分に非道だった。

「ってか明久、お前の考えで坂本を殺すのは到底無理だぞ」

「ううう……」

俺の突っ込みに明久はしな垂れる。

「おい天城、このバカには後で説教しとけよ。俺を殺そうとしたんだからな」

「元はと言えば、お前があんな下らん校内放送を流す指示を出したからだろうが」

「さて、何の事やら？」

「お前な……」

「けど天城にとっては好都合じゃねえのか？　もう船越女史に狙われる心配はないだろうが。寧ろ俺に感謝して欲しい位だな」

「……」

どうやらこの外道は明久を陥れただけでなく、俺に貸しを作っておいた方が良いかもしれないと思ってやったのだろう。

ってか大きなお世話だ。坂本にそんな事されなくても、俺は船越先生を迎撃出来る許可を貰っていると言うのに。

とは言え、坂本に貸しを作られたのは事実だ。ここは大人しくしておこう。

「取り敢えず明久、お前は後で説教だからな」

「ええ！？　何で！？」

「お前な……窓ガラス破損に消火器の無断使用、そしてスプリンクラーの作動。これだけの事をやっておいて、ただで済むと思っているのか？」

「え……あ……で…でも、それは作戦中の出来事だから……先生達も許してくれる筈……」

「西村先生が許すと思うか？　俺だったら許さないぞ」

「……」

俺の言葉に明久はうな垂れるしかなかった。

と、俺と明久がこんなやり取りをしていると……。

「まさか天城だけでなく姫路さんまでＦクラスだなんて……信じら

れん」

背後から平賀の声が聞こえた。

俺が振り向くと、そこにはよたよたと歩み寄る平賀。余りに予想外な事が起き過ぎてショックを受けているんだろう。

「あ、その、さっきはすいません……」

そんな平賀に姫路は駆け寄りながら謝っている。

「いや、謝る事はない。全てはFクラスを甘く見ていた俺達が悪いんだ。天城だけしか警戒していなかったからな」

姫路の謝罪に平賀は必要無いと言う。まあ確かに騙し討ちみたいだったが、姫路が謝罪する必要は全く無い。

戦争にはイレギュラーが付き物だと付け加える平賀に、俺は代表としての責任感がちゃんとあるなと思った。

平賀は以前から負けた時には潔く認めて、それをバネに強くなるタイプだ。またDクラスと試召戦争をやる事になったら、何重の策を考えて挑むだろう。

「ルールに則(のっと)ってクラスを明け渡そう。ただ、今日はこんな時間だから、作業は明日でいいか？」

坂本に問う平賀に俺は少々気の毒だと思った。

平賀は再び試召戦争を挑む権利が回復するまでの3ヶ月間を、俺達

が使っていたFクラスの教室で過ごさなければいけない。それと同時にクラスメイトからも恨まれるのだ。

この試召戦争は勝てば代表は英雄扱いされて褒め称えられるが、負ければ戦犯扱いされて蔑まれて後ろ指をさされる。

「もちろん明日で良いよね、雄二？」

「まさか、いくらお前でも今日中に済ませろだなんて酷な事は言わないよな？」

明久も俺と同じく平賀を気の毒に思っており、明日で良いかと雄二に聞く。

もし坂本がすぐにやれと言ったら……。

「いや、その必要は無い」

すぐに撤回させ……何だと？

「え？　なんで？」

「坂本、それはどう言う意味だ？」

「Dクラスを奪う気はないからだ」

坂本の予想外な返答に明久と俺は更に疑問を抱く。

「雄二、それはどういうこと？　折角普通の設備を手に入れる事が出来たのに」

「忘れたのか？　俺達の目標はあくまでもＡクラスの筈だろう？」

「……成程な」

坂本の言葉に俺は納得が行った。

あくまでＤクラスは通過点に過ぎないから、設備交換の変わりに何か別の要求をするだろうと俺は予想する。

「でもそれなら、何で標的をＡクラスにしないのさ。おかしいじゃないか」

明久は全然理解していないみたいだ。ってか明久、お前は俺が昼休みで言った時の事を忘れたのか？

「お前な……天城が言った事を完全に忘れているみたいだな。と言うか少しは自分で考えろ。そんなんだから、お前は近所の中学生に『馬鹿なお兄ちゃん』なんて愛称を付けられるんだ」

「なっ！　そんなに半端にリアルな嘘を吐かないでよ！」

「おっとすまない。近所の小学生だったか」

「おい坂本、いくらなんでもそれは無いだろうが」

俺が坂本に突っ込みを入れていたが……。

「……人違いです」

「ちょっと待て、明久……お前……」

「まさか……本当に言われた事があるのか……？」

明久の返答に俺と坂本は信じられないような目で見ると、明久は視線に耐えられなかったのか明後日の方向を向いた。

おいおい……お前は本当に小学生から『馬鹿なお兄ちゃん』って呼ばれてるのかよ。年下にそんな事を言われるって……哀れな。

そして坂本は悲壮感を漂わせる空気から脱したかったのか、平賀に話しかける。

「と、とにかくだな。Dクラスの設備には一切手を出すつもりはない」

「それは俺達にはありがたいが……。それでいいのか？」

「もちろん、条件がある」

やはりな。坂本がこのまま解散なんて言う訳が無い。

平賀も俺と同様に気付いている。

「一応聞かせてもらおうか」

「なに。そんなに大した事じゃない。俺が指示を出したら、窓の外にあるアレを動かなくしてもらいたい。それだけだ」

坂本が指したのはDクラスの窓の外にあるエアコンの室外機だ。

だがアレは本来Dクラスの物ではない。Dクラスの設備は普通の高校レベルの設備だから、あんな高価なエアコンは無い。

それが置いてあるのは、スペースの関係で此処を間借りしている隣のクラス。

「Bクラスの室外機か」

「設備を壊すんだから、当然教師にある程度睨まれる可能性もあると思うが、そう悪い取引じゃないだろう？」

待て坂本。お前はBクラスに勝つ為の手段として室外機を壊すつもりか？

「あ……ま…まあ確かに……悪い取引じゃ無いんだが……その……」

「何か不満か？」

「いや……それはこちらとしては願っても無い提案だが……ってか坂本、それは天城に前もって説明したのか？」

「……あ」

坂本が思い出したかのように恐る恐る俺を見ると……。

ガシッ！！

「さ～か～も～とぉ～？　お前は何ふざけた事を考えてんだ～？」

「イダダダダ！！！！！　ま、待て天城！！　これにはちゃんと理由があるから落ち着いて聞け！！」

俺が笑みを浮かべながら坂本の頭を思いっきり掴むと、痛そうな顔をしながらも俺に弁明を申し立てる坂本であった。

「理由ねぇ～。いくら必要な準備とは言え、壊すのはやり過ぎじゃあないのかなぁ～？」

「イデデデデデ！！！　つ…次のＢクラス戦の作戦に必要なんだよ！　だから離してくれぇ～～！！！！！」

「そんな短い理由が通ると思っているのか？」

「グアアアアアア～～！！！！！　握力が更に上がってねぇか～～！？」

握力を上げる俺に坂本は更に痛そうな顔になっている。

俺が坂本の頭にアイアンクローをやっている事に平賀だけでなく、他のＤクラス生徒達やＦクラスの面々も呆然としていた。

「ちょ…ちょっとシュウ！　そこまでにしようよ！　試召戦争が終わるまでは手を出さないってシュウが言い出したんでしょ！？」

「……明久、何でそっちは覚えてて、屋上で話した事を忘れているんだ？」

明久の微妙な記憶力に俺は微妙な顔をしながらも、アイアンクロー

は続行中。

「と…取り敢えず手を離そうよ。シュウが雄二にアイアンクローをしているのを見ていると、僕も頭が痛くなりそうだから」

坂本を擁護しているような感じであるが、以前に俺のアイアンクローを喰らった明久としては見ていたくないのだろう。

取り敢えず明久に言われたとおり掴んでいた坂本の頭を離すと、坂本はズキズキと痛みが襲っているのか頭を抱えている。

「それにさ、雄二だって何の意味もなく機材を壊す訳じゃないんだから」

「試召戦争だからと言って学校の物を壊すのはどうかと思うんだが……」

「それ位は大目に見ようよ。それにさ……」

明久が俺に近づいて小言で話しかける。

「確かにシュウの言うとおり許される行為じゃないけど、そうするだけで平賀君はクラスメイトから恨まれずに済むんだからさ」

「……」

確かに明久の言う事には一理ある。設備交換はせず室外機を壊すだけで平賀は周りから攻められる事は無い。

「だからさ、ここは平賀君を助けると思って……」

「……はあっ」

明久の言葉に俺は溜息を吐きながら……。

「……坂本、今回だけだぞ」

「アタタタ……た…助かる」

「あくまで一度きりだからな。それは覚えて置けよ」

未だに頭を抱えている坂本に釘を刺しながら承諾する事にした。

「と…と言う訳で平賀、タイミングについては後日詳しく話す。今日はもう行ってもいいぞ」

「わ…分かった。お前等がAクラスに勝てるよう願っているよ」

何かしどろもどろな会話だが敢えて気にしない事にする。

「無理するなよ。勝てっこないと思っているだろ?」

「それはそうだ。AクラスにFクラスが勝てるわけがない。ま、社交辞令だ」

じゃあ、と手を上げて去ろうとする平賀に……。

「待て平賀、ちょっと聞きたい事があるんだが」

「何だ?」

俺はある事を聞こうと引き止めた。

「午前中に放送で呼ばれた件だが……」

「放送……ああ、アレか」

平賀が午前中に担任から放送で呼びされた事を思い出す。

「お前と一緒に呼ばれた奴はどうしたんだ？　今回の試召戦争で見かけなかったが」

「アイツは担任の先生から叱られた後、西村先生が罰として今回の試召戦争は参加しないようにって言われて、戦争が始まって早々に補習をされているよ」

「そうか……通りでいなかったわけだ」

ソイツはさぞかし後悔していただろうな。

「あの時はすまなかった。俺がちゃんと言ってれば、あんな事にはならずに……」

「気にするな。全く反省していない奴には丁度良いお仕置きだと思ってるから」

「そう言ってくれると助かる。じゃあ俺はこれで」

「ああ。引き止めて悪かったな」

平賀は今度こそ去って行った。

「さて、皆！　今日はご苦労だった！　明日は消費した点数の補給を行うから、今日のところは帰ってゆっくり休んでくれ！　解散！」

坂本の号令により、雑談を交えながら自分のクラスへと向かうＦクラス生徒達。

「雄二、僕らも帰ろうか」

「そうだな」

明久が坂本を連れて教室に戻ろうとしているが……。

「待て明久、何か忘れている事は無いか？」

「え？」

俺が笑みを浮かべながら立ち塞がった。

「忘れているなら教えてやる。お前はこの後、俺と一緒に職員室に行って先生達に器物破損の事を謝り、俺の説教が待っているんだぞ♪」

「……」

俺の台詞に明久は大量の汗を掻きながら無言となっている。

「さあ行こうか」

「……ね…ねえシュウ、それって明日にしてくれないかな？　僕は今、物凄く疲れてて……」

「そんな言い訳が通じると思うか？　それに明日にした所で、お前はすぐに逃げるからな。そうはさせないぞ」

「……」

「さてと、俺は帰らせてもらうぞ」

「ちょ…ちょっと雄二！　僕を置いていかないでよ！！」

帰ろうとする坂本に明久は引き止めようとするが……。

「ま、自業自得だと思って天城に説教される事だな。それにお前は俺を殺そうとしてたし……天城、遠慮なくやってくれ」

「お前に言われなくてもそのつもりだ。と言うか坂本の事について説教をする気はない。明久が坂本を殺す原因を作ったのはお前自身だからな。だから俺はお前を擁護する気は一切無い」

「……そうかよ」

納得が行かない顔をしている坂本であったが、下手に突っつくと巻き添えに遭いそうだと思って引き下がった。

と、そんな時……。

「あ、あの、坂本君っ」

「ん？」

坂本が教室に向かおうとすると姫路が呼び止めた。

「お、姫路。どうした？」

「実は、坂本君に聞きたいことがあるんです」

「おう、わかった」

坂本と姫路は俺と明久から離れて話を始める。

「では職員室に行くとするか、明久」

「……」

「会話が気になるんだろうが、お前は俺と一緒に職員室へ行くぞ」

2人が会話している所を見ている明久に、俺は有無を言わさず明久の腕を引っ張って職員室へ向かったのであった。

その途中で……。

「……悪魔に負けるか……！　僕の正義の心は……」

変な事を言っている明久であったが、取り敢えず無視する事にした。

「やれやれ、俺が説教をする必要が無くなったな」

「うう……酷い目に遭ったよ」

「まあソレは明久の自業自得なんだが」

俺は明久を連れて職員室に行き、西村先生に明久が壊した物について説明しながら頭を下げて謝ったまでは良かった。けど西村先生がいきなり『吉井っ！　天城が謝っているのに、事の発端である貴様が謝らんとは何事かぁ！　生徒指導室に来い！』と言って明久を指導室に連行されてしまったのだ。

抵抗していた明久は『助けてシュウ！』と懇願していたのだが、西村先生が有無を言わせず連れて行ってしまったので、どうする事も出来なかった。

そんな訳で取り残された俺は指導室前にいて、西村先生の説教が終わるまで明久を待って１５分程経つと、明久が指導室から出て、今は一緒に帰っている途中だ。

「取り敢えず俺からも言っておこう。明久、作戦だからと言って勝手に物を壊すんじゃないぞ」

「わ…分かったよ」

明久は反省しながら頷いているが、また同じ事をするだろうと思った。何しろ明久は俺に説教をされて数日経った後に、また同じ事をしては俺に怒られると言う事が何度もあったからだ……とは言え同じ事をするのは何か理由があるんだろうが。

ソレを問い質した所で明久は、いつもはぐらかしながら自分が悪いと言っている。誰かの為に自ら汚名を被っているのは分かるんだが、俺としては正直に言って欲しい。まあ明久は俺に迷惑を掛けない為に黙秘しているんだろう。俺からして見れば何を今更と言いたいが。

「あのさあシュウ、ちょっと聞きたい事があるんだけど」

「何だ？」

考え事を止めた俺は明久の方に耳を向ける。

「試召戦争中にシュウが、平賀君に“僕が平賀君と1対1でやったら僕が勝ってる”って言ったよね」

「ああ、言ったな」

「それって過大評価してないかな？　僕みたいな点数の低いバカがDクラスの代表に勝てるとは思えないんだけど……」

「……相変わらずお前は自分を卑下しているな。少しは自信を持ったらどうだ？」

「え？」

「まあ明久が言ったとおり点数では平賀に勝てないだろう。だがな明久、試召戦争で点数が低いからと言って相手には絶対に勝てない訳では無いんだぞ」

「？」

明久は俺の言ってる事が分かっていないみたいだ。

「つまり点数が低くても勝てる方法があると言ってるんだ」

「勝てるって……」

「……少し言い換えるか。格ゲーとかで攻撃力が高くても操作が扱いづらいキャラ、逆に攻撃力が低くても扱いやすいキャラがいるとする。お前だったらどっちを選ぶ？」

「そりゃあ、僕としては操作が扱いやすいキャラを使って地道に減らして……ってシュウ、それって……」

「漸く気付いたか」

やはりゲームに例えるとすぐに気付くみたいだ。

「召喚獣の扱いに慣れている僕でも充分に勝機があるってこと？」

「そう言う事だ。だから少しは自信を持て。２年の中でお前が一番のアドバンデージを持っているんだから」

とは言っても、点数差が余りにもあり過ぎたら勝てないが。

「そっか……僕が一番かぁ……何か自信が出てきたなぁ。ありがとう、シュウ」

「一番だからと言って勉強は怠るなよ？」

「……も…勿論だよ」

水を差されたかのような感じになっている明久であった。

「あ、それともう一つ」

「ん？」

明久はいきなり元気になって更に質問をしてくる。

「雄二の考えなんだけどさ。Ｄクラスとの勝負って本当に必要だったのかな？　別にエアコンくらいなら他の方法でも壊せたと思うのに」

「ああ、それか。大抵の予想は付いてる」

「どう言う事？　シュウの言った事は思い出したけど、召喚獣の操作に慣れる為なのは分かったけど……他にもあるの？」

「あくまで俺の予想に過ぎないが……アイツは多分、他のクラスにプレッシャーを与えようとか、Ｆクラス全員に自信をつけて士気を上げさせようとでも考えたんだろう」

「ふーん。それじゃ、Ｄクラスの設備を手に入れなかったのは？」

「お前や坂本の目的はＡクラスなんだろ？　Ｄクラスの設備を手に入れる事で、一部の生徒が満足して試召戦争を反対するかもしれないと思ったんだろう。だからそうさせない為に、不満によるモチベーションを維持しようと交換しなかったんじゃないかと思う」

「成程。確かに雄二が考えそうだね」

予想に過ぎない俺の回答に、明久は納得するのであった。

「でもさ、僕達はホントにＡクラスに勝てるのかな？」

「さあな。坂本の事だから勝つ為の策を考えているんだろう。でなきゃＡクラスに勝てるとは言わないし」

「……そうだね」

坂本は普段から明久を陥れる外道な奴だが、今回の試召戦争で人を纏める統率力と指揮能力、そして軍師としての才がある事が分かったから期待は出来るだろう……今の所は。

「お前も頑張る事だな、明久。Ａクラスに勝ちたいと思うなら、明日の補給テストでしっかりと点数を稼ぐ事だな」

「……ぐぅ」

俺の台詞に明久は苦い顔をしているが敢えて気にしないようにする。

「前にも言ったが、ゲームばかりしてないで、少しは勉強しておけ」

「教科書くらいは読んで……ん？」

「どうかしたか？」

明久がいきなり鞄を見る事に俺は聞き……。

「あ！　教科書、卓袱台の下に置いたままだった！」

「……はあっ……勉強しろと言った矢先にこれか。先が思いやられる」

溜息を吐きながら呟くのであった。

「と言うか明久、こんなに歩いてて鞄が軽かった事に何の違和感も感じなかったのか？」

「うぅ……。んじゃ、先に帰っててていいよ」

「先に帰っててと言っても、俺の家はもう目の前なんだがな」

俺が指を差すと、そこには2階建ての洋風一軒家がある。

「……そうだね。じゃあシュウ、僕はまた学校に戻るから。また明日ね」

「ああ、また明日な」

明久は走りながら学校へと戻ると、俺は家に入るのであった。

第七問（前書き）

今回は時間があったので早めに出しました。

第七問

翌朝、俺は学校に着いて早々、補給テストをやる前の確認で数学の教科書を見ている。

「えっと、この計算式の因数分解は……」

「何だ天城、随分と梃子摺っているな」

「……俺は数学が苦手なんだ」

俺が計算問題を解いている際に、坂本が俺の様子を窺いながら話しかけてきた。

「苦手だと？　意外だな。お前にも苦手科目があったとは」

「俺だって苦手科目くらいはある」

「ってかそんな計算問題で躓(つまづ)くか？　その式は一見難しそうに見えるが、コツさえ掴めば簡単に解けるぞ」

「……数学の問題を解いていると……思い出すんだ」

「何をだ？」

坂本は俺の発言に不可解そうな顔をして聞くと……。

「恐ろしい顔をした船越先生に交際を迫られるのを……」

「……スマン、俺が悪かった」

すぐに後悔して俺に謝罪するのであった。

「あの時ほどトラウマになりかけた事は無かったな」

「……大丈夫なのか？　今日の一時間目にある数学テストは船越先生が試験監督だぞ」

「問題ない。船越先生が、もし再び俺に交際を迫ろうとしたら迎撃する。他の先生達からは許可を貰っているし」

「……まあそうだな。充分正当防衛になるだろう」

坂本は普段から教師に信頼されている俺だからこそ貰えた許可なのだろうと考えていそうだ。

と、そんな時……。

ガラッ

「おはよー」

明久が教室に入ってきた。

「おう明久。時間ギリギリだな」

「テストぐらいは早めに来い」

「ん、おはよう雄二、シュウ」

席に座っている俺と隣にいる坂本を見た明久は挨拶をする。

「ねえ雄二、皆には何も言われなかったの？」

「ん？　何がだ？」

「Dクラスの設備の事」

明久は早々に雄二に設備交換の事を聞くと、坂本は問題無さそうな顔をする。

「ああ。皆にもキチンと説明しておいたからな。問題無い」

「昨日は坂本を英雄扱いしてたからな。素直に聞いてたぞ」

「ふーん」

感心していそうな顔をしている明久を見て、昨日に俺と一緒に帰った時の話を思い出しているんだろう。

「それよりお前はいいのか？」

「何が？」

「昨日の後始末だ」

後始末？　……ああ、アレか。そう言えば島田の姿が見当たらな

いな。まだ来てないのか？

俺が教室の周りを見ているがまだ島田の姿がいない事に気付く。

「うん。いくら僕でも、生爪を剥がされると分かっていながら行動するなんてあり得ないよ」

明久は見当違いな事を言ってた。

と言うか明久、本当に昨日の事を忘れているのか？

「いや、俺の始末じゃなくて」

「一体何が言いたい……」

と、明久が言っている最中に……。

「吉井っ！」

「ごぶぁっ！」

島田が現れると同時に拳が明久の顔にヒットした。顔を殴られた明久は、その拍子に倒れる。

「し、島田さん、おはよう……」

「おはようじゃないわよっ！」

挨拶をする明久を見て、俺は昨日の事は完全に忘れていると分かった。

それと島田、お前が殴った所為で明久の鼻から鼻血が出ているぞ。どれだけお前の攻撃力が高いんだ？

「アンタ、昨日はウチを見捨てただけじゃ飽き足らず、消火器の悪戯と窓を割った件の犯人に仕立て上げたわね……！」

そう言えば明久は確かに島田の所為にしていたな。明久が西村先生に説教されてたからすっかり忘れてた。

「お蔭で彼女にしたくない女子ランキングが上がっちゃったじゃない！」

まだ上がる余地があったんだな。

島田は元から彼女にしたくないランキング上位者だから、昨日の件を差し引いた所で大して変わらないが。と言うか島田、そんな不名誉なランキングが上がっているのは、お前のすぐ手が出る悪い癖があるからだぞ。下げたかったら、そこを直す事だな。

「――と、本来は掴みかかっているんだけど」

おいおい、掴み掛かっている前から既に殴っているぞ。

「アンタにはもう充分罰が与えられているようだし、許してあげる」

「うん。さっきから鼻血が止まらないんだ」

「いや、そうじゃなくてね」

「ん？　それじゃ何？」

「一時間目の数学のテストだけど」

島田が心から楽しそうな顔をして告げる。

「監督の先生、船越先生だって」

明久は聞いた瞬間に、扉を開けて廊下を疾駆したのであった。

「さてと、吉井のお仕置きは済んだから……」

島田が俺の方に顔を向けると……。

「次はアンタよ！！」

「おっと」

即座に俺の顔を殴ろうとするが、俺は問題無く避けて距離を取った。

ついでに坂本は島田が俺の顔を見た時に、巻き添えに遭いそうだと思って避難している。

「何の真似だ、島田」

「アンタ！　よくもウチを殴ったわね！！　絶対に許さないんだから！！」

島田は昨日の試召戦争で俺が気絶させた事を言っているのだろう。

「何が許さないだ。島田が明久を殺そうと危険な事を考えていたから、俺は止めただけだ。と言うかそんな事をしたら俺はお前を警察に引き渡しているがな」

「そんな言い訳が通じると思ってるの!?　アンタは女の子であるウチを殴ったのよ!!」

俺が正論を言っても島田は聞く耳を持たなかった。寧ろ自分を被害者扱いしているから厚かましいにも程がある。

「お前な……以前から散々明久を殴っておきながら、一回やられたからって被害者扱いするなよ」

「うるさい!　取り敢えずアンタはウチに殴られなさい!!　それだけで勘弁してやるから!!」

「無茶苦茶な暴論だな」

島田は再び殴ろうとするが……。

ガシッ!!

俺はすぐに島田の両手首を掴んで殴るのを阻止する。

「このっ!　離しなさいよ!!」

「殴られるのが分かってて、放すバカが何処にいる」

俺に両手首を握られている島田は逃れようと抵抗するが、俺は今の状態を維持するために力を込めて握っている。

「島田、お前がこれ以上続けるつもりなら、俺は実力行使で黙らせるぞ。それが嫌なら拳を引っ込めろ」

「なっ！　アンタ、またウチを殴る気なの！？」

「……人を殴ろうとしておいて、勝手な事をほざくな」

「！！！！」

俺が目を細めながら低い声で言うと、島田は急に怯えるかのような顔になる。

「もう一度言う、さっさと拳を引っ込めろ。俺は明久と違って、向かって来る相手には容赦しない。たとえ相手が女だとしてもな」

「……」

「それとも俺に説教されたいか？」

「……わ…分かったわよ！　止めればいいんでしょ！！」

本気でやると分かった島田は拳を解いて力を抜くと、俺は掴んでいた島田の両手首を離す。

「けど天城、女の子相手でも容赦しないって正気？　どうかしてるわよ」

「女が男を平気で殴っておいて許されるとでも思ってるのか？　俺からして見れば、お前の行動がどうかしてる。そんな事をしているから明久に……」

「天城、そこまでにしとけ」

俺が言っている最中に坂本が割って入り……。

「そうじゃぞ修哉。ここは落ち着くのじゃ」

何時の間にか教室に来ていた秀吉も参加した……何故か秀吉の髪型がポニーテールだったが敢えて気にしなかった。

「2人とも邪魔しないでくれ。この際だから島田にハッキリと……」

「悪いがそれは後回しにして欲しい。俺達Fクラスは補給テストが終わり次第、Bクラスと試召戦争をするんだ。もし此処でいざこざが起こったのをBクラスの連中に知られたら面倒な事になる」

「……」

坂本の言葉に俺は黙った。

確かに此処で島田と言い争えばFクラスの士気は下がるだろうし、Bクラスに知られたら付け入る隙を与えてしまうので……。

「……分かった」

俺は仕方なく止めるにした。

「助かる。島田、お前も穏便に頼むぞ」

「ふん！　ソイツがウチを殴るからいけないのよ！」

島田は颯爽と自分の席に座り数学の教科書を出して内容を確認する。

「やれやれ……天城にしては意外だったな。まさかお前があんな事を言い出すとは……女相手でも容赦しないって」

「島田以外の女子が聞いたら怒ると思うのじゃ」

「じゃあ2人は俺に“島田に大人しく殴られろ”とでも言うのか？」

俺の質問に坂本と秀吉は何とも言えなさそうな顔をする。

「いや、そこまでは言わないが」

「いくらお主が教師達に信頼されておるとは言え、女子を殴ったら問題になるのじゃ」

「ちゃんと理由を話せば先生達だって理解してくれる。それに女だからって理不尽な事をしても許されると言う、下らん考えを持っている奴がどうかしてる」

「「……」」

「って、今はそんな事を言ってる場合じゃないな。苦手な数学の確認をするか」

俺はそう言うと、すぐに席に座って再び数学の教科書を見るのであ

った。

「ふうっ……少し疲れたな」

午前中の補給テストは取り敢えず四教科を終えて昼休みに入った。

「うむ。疲れたのう」

俺の隣にいる秀吉も俺と同調みたいで疲れたと言う。

ってか秀吉、朝も思ったんだが何でお前は髪型をポニーテールにしてるんだ？　男のお前がそんな髪型をすると凄く違和感を感じるぞ。

と、俺がそう思いながら明久の方に近寄ると……。

「うあー……づがれだー」

明久は全て出し切ったのような声を出しながら机に突っ伏していた。

「大変だったな、明久。一時間目が特に……」

俺がそう言うと一時間目の光景を思い出す。

あの時はテストが始まる前に船越先生が明久に迫って交際云々の話に突入したのだ。明久は船越先生に必死の説得（？）をして、明久の家の近所のお兄さん（３９歳／独身……お兄さんじゃない気がするが）を紹介した。昨日の呼び出しはその人を紹介する為だったと言う事にして。

明久に迫っている最中に船越先生が、時折俺を見ていたので迎撃出来る準備を構えていた。そんな俺を見た船越先生は諦めたかのように明久の方をじっと見るようになっていたが、それでも俺は一時間目のテストが終わるまで終始気を抜かずに構えていた。隣にいた秀吉は苦笑していたが。

そんな事があって、今の明久は体力と精神の両方がかなり磨り減っているので、物凄く疲れているのだ。

「まあこれでもう船越先生に狙われずに済むから安心だな、明久」

「そ…そうだね」

「災難じゃったのう」

明久が頷くと、秀吉は気の毒そうな顔をして言う……秀吉の顔を見た明久は何故か見惚れているような顔をしていたが。

おい明久、お前は秀吉の髪型を珍しそうに見ているんだよな？　自分の好みのタイプだと思って見てはいないよな？

俺が危険そうな感じで明久を見ていると……。

「……（コクコク）」

何時の間にか土屋が俺達の近くにいた。

コイツは相変わらず気配を消しながら近づいているな……まあ知っていたが。

「よし！　昼飯食いに行くぞ！　今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすっかな」

「坂本、過食は体に悪いと思うが」

勢い良く立ち上がって疲れを感じないかのように食べようとしている昼飯を言うと、俺はすぐに突っ込む。

「ん？　吉井達は食堂に行くの？　だったら一緒していい？」

「ああ、島田か。別に構わないぞ」

「それじゃ、混ぜてもらうね」

「……（コクコク）」

土屋が下心丸出しで頷いていると……。

「って、天城も一緒なの？」

「人の顔を見てすぐに嫌そうな顔をしないで貰いたいんだが」

島田は俺を見て不機嫌そうな顔をしてきた。

どうやら島田は朝の出来事について、まだ根に持っているらしいな。

「言っておくけど、ウチはまだ許していないんだからね」

「許してもらう為に殴られるのは嫌だぞ」

「何よ。随分と器の小さい男ね」

「そう言う問題じゃないんだがな……」

島田の発言に俺は呆れながら呟く。ってかコイツは仕返しと言う名の暴力を振るわないと気が収まらない性質なのか？　もしそうだとすれば幼稚な奴だ。

そんな俺と島田が不穏当な会話をしていると……。

「じゃ…じゃあ、僕も今日は贅沢にソルトウォーターあたりを……」

「明久、塩水を英語にした所で意味は無いからな」

明久がいきなり仕様も無い事を言い出したので、俺がすぐに島田から視線を外して突っ込みを入れた。

「と言うかお前、相変わらず貧しい食生活を送っているんだな。俺は何度も言った筈だぞ。家族からの仕送りをゲームや漫画に全て費やすなとな」

「う……でも、面白い作品が一杯あるからつい……」

「これも何度も言ってるがな、そんな事をし続けると仕送りが来なくなるって。その内、家族の誰かが来て明久の一人暮らしを止めさせようとすると思うぞ。あくまで俺の予想だがな」

「……」

俺の発言に明久は何も言い返さなかった。と言うより何か思い当たる節がありそうな感じだが。

「やっぱり天城も知ってたか。明久の食生活を」

「一応な」

坂本の言葉に俺は頷く。

以前に明久の家へ遊びに言った時、大量のゲームや漫画がある代わりに食事が貧相だった事に疑問を抱いたので聞いて見ると、殆どの仕送りを趣味に使っているとアッサリと言ったのだ。

そう言った明久に俺は物凄く呆れ顔になりながらも、何度も忠告をしていたのだが、当の本人は現在に至るまで同じ事を繰り返している。

明久、もう仕送りが来なくなったら俺は知らんからな。

と、俺がそう考えていると……。

「あ、あの。皆さん……」

姫路が俺達に声を掛けてきた。

「うん？　あ、姫路さん。一緒に学食に行く？」

「あ、いえ。え、えっと……、お、お昼なんですけど、その、昨日の約束の……」

昨日の約束？　何だソレは？

「おお、もしや弁当かの？」

「何だ？　弁当を食べる約束でもしてたのか？」

「うむ。昨日、修哉が職員室に行ってる最中に姫路が全員分の弁当を作ると言ったのじゃ」

「ほう。だから姫路は弁当の入った大きいバッグを持っていると言う訳か」

「は、はいっ。迷惑じゃなかったらどうぞ」

姫路は体の後ろに隠していたバッグを出してくる。

「迷惑なもんか！　ね、雄二！」

「ああ、そうだな。ありがたい」

「そうですか？　良かったぁ～」

顔を綻ばせながら安堵する姫路。

「むー……っ。瑞希って、意外と積極的なのね」

姫路とは逆に不機嫌そうな顔をして明久を親の敵のように睨む島田。

そう言えば島田は明久に好意を抱いていたんだったな。だったら弁当を作れば良かっただろうに。

「それでは、折角のご馳走じゃし、こんな教室ではなくて屋上に行こうかのう」

「そうだね」

秀吉の提案に明久が賛成する。

まあこんな腐った畳のある所で姫路の作った弁当を食べるのは良くないと思ったんだろう。此処より屋上の気持ち良い空間で感謝を込めながら食べた方が良いと俺は思う。

「そうか。それならお前等は先に行っててくれ」

「ん？　雄二はどこか行くの？」

「飲み物でも買ってくる。昨日頑張ってくれた礼も兼ねてな」

「あ、それならウチも行く！　一人じゃ持ちきれないでしょ？」

島田が坂本と一緒に飲み物を買いに行こうとする。

大方、明久達の中に俺も混ざって屋上に行くのが嫌だと思って坂本

に付いて行こうと思ったんだろう。自業自得だと言うのに何時まで根に持っているんだか。俺は島田の方が器が小さいと思う。

「悪いな。それじゃ頼む」

「おっけー」

坂本は島田の同行に感謝しながら受け入れている。恐らく坂本も俺と同じ事を考えている筈だ。朝の出来事や先程の俺と島田の会話を見て、連れて言った方が良いと思ったに違いない。

「きちんと俺達の分をとっておけよ。特に明久」

「大丈夫だってば。あまり遅いと分からないけどね」

「そう遅くはならない筈だ。じゃ、行ってくる」

坂本と島田は財布を持って教室を出て行った。飲み物を買う為に一階の売店に向かったんだろう。

「僕等も行こうか」

「そうですね」

明久はそう言いながら姫路が抱えていたバッグを持って教室を出ようとしたが……。

「スマンが俺はちょっとトイレに行って来る」

「そう。屋上で待ってるよ」

「ああ」

俺は一足先に教室から出てトイレに向かった。

その時の俺や明久達はまだ気づかなかった。これから屋上で悲劇が起こるという事を。

「さてと、さっさと屋上に行くとするか」

トイレで用を足した俺はすぐに屋上へと向かう。

と、その時……。

「そんなに急いでどうしたの、天城君？」

「ん？」

秀吉の姉である木下優子が俺に話し掛けてきたので足を止めた。

「木下さんじゃないか。何か用か？」

「貴方が走ってたのを見て声を掛けただけよ。それに元学級委員の貴方が廊下を走るのはどうかと思うけど」

「悪い悪い。ちょっと急いでいたからな」

「もしかして職員室に来いって呼ばれたの？」

「違う。ってか木下さん、俺がまた問題を起こしたみたいな言い方をしないでくれるかな？」

「冗談よ。気を悪くしたなら謝るわ」

俺がヒクヒクと笑みを浮かべて言うと、木下は誠意の篭っていない謝罪をする。

「そう言えば聞いたわよ。試召戦争で貴方達Ｆクラスがクラスに勝ったみたいね」

「意外か？」

「それなりにね。天城君だけじゃなく、姫路さんもいたから勝てたんでしょ？」

「……その情報からして、もう姫路がＦクラスにいるって事は他のクラスにも知れ渡っているみたいだな」

木下の質問に俺は特に焦る事も無く言い返す。

「ええ。姫路さんがFクラスにいたって事を聞いて、みんな驚いていたわよ」

「そうか」

「でもアタシとしては姫路さんの事より、他の事に疑問を抱いているわ。どうしてFクラスは設備交換をしなかったのかしら？」

「さあ？　何でだろうね」

「質問を質問で聞き返さないで欲しいんだけど」

疑問を問う木下に俺は聞き流すと、木下は目を細めながら言った。

「悪いけど、その問いに関してはノーコメントだ」

「何でよ。それくらいは教えてくれたって良いじゃない」

「いくら元クラスメイトだからと言って、試召戦争に関しての情報は教えられないよ。もし木下さんが俺の立場だったら教えてくれるのかな？」

「……確かにそうね。ごめんなさい、さっきの質問は無かった事にして」

「助かるよ」

流石に友達とは言え、他のクラスの試召戦争に対しての情報を聞き出すのはいけないと思った木下はすぐに謝罪した。

「所で、天城君は何処に行こうとしてたのかしら？」

「屋上に行って昼飯を食べる約束をしているんだ」

「……そう。急いでいるんなら早く行った方が良いわよ」

「おう、そうする。じゃあな」

何やら木下が少々残念そうな顔をしていたが、俺は気にせず屋上に向かうのであった。

「木下と話して少々遅れてしまったな。明久が全部食ってなければ良いけど」

屋上の入り口前に着いた俺はドアを開けると……。

「……は？」

そこには姫路と倒れている土屋に、ジュースをぶち撒けて倒れている坂本、そして何やら怯えながら相談している明久と秀吉がいた。

島田が何故かいなかったが。

何か妙な雰囲気だったので俺は思わず隠れた。

「あっ！　姫路さん、アレはなんだ!?」

「えっ？　なんですか？」

明久が指した明後日の方向を姫路が見ている最中……。

「何で明久は倒れている坂本に弁当を無理矢理……っておい」

その隙に明久は姫路が作ったと思われる弁当を坂本に食わせると、坂本は痙攣しているかのように体を震わせて死んだみたいな顔になっていた。

……明久が楽しみにしていた姫路の作った弁当を食べないって事は相当不味いのか？　ってか坂本は死ぬ寸前になっているんだが。

「あ…あれぇ～、シュウじゃない。随分と遅かったねぇ～」

「お…遅かったではないか、修哉よ」

「あ…ああ」

隠れている俺を見つけた明久と秀吉は声を掛けると、俺は近づいて明久達の所に近寄って胡坐を掻く。

「どうしたんですか、天城君。来るのが遅かったみたいですけど」

「……ちょっと友達に会ってな」

「そうですか。もう少し早く来てたらお弁当を食べれたんですけど」

「そ…それはすまなかったな」

何故だろう。姫路がお弁当と言った瞬間に危険なオーラが感じるのだが。

（おい二人とも、大体の予想は付いているんだが、一体何があった？）

（う…うん。ムッツリーニが姫路さんのお弁当を食べてすぐ倒れちゃって）

（その後は雄二も食べた瞬間に倒れてしまったのじゃ）

（姫路さんの作ったお弁当が凄く危険だと判断した僕等は、弁当を全て雄二に食べさせたんだ。それで雄二はあんな状態になっているわけ）

（……）

俺が小声で明久と秀吉に事情を聞くと、俺は無言になった。

坂本と土屋が一瞬で倒れるって……ハッキリ言って姫路の料理は毒物と言っても過言じゃないな。

「なあ姫路、ちょっと聞きたいんだが」

「はい、何ですか？」

「お前の作った弁当に何か隠し味になる物でも入れたのか？」

でなければ二人がすぐに倒れる訳がないからな。

「えっと、それぞれのおかずには硫酸や硝酸、クロロ酢酸を入れました」

「「「……」」」

……今何て言った？　硫酸？　硝酸？　クロロ酢酸？　何でそんな物を入れるんだ？　可笑し過ぎるにも程があるぞ。

隠し味の中身を聞いた明久と秀吉は更に体を震わせている。

「……姫路、何で化学薬品を入れるんだ？」

「そうした方が味が更に美味しくなると思いまして」

……コイツ、料理を冒涜していないか？

「……ならハッキリ言おう。姫路、君は――」

「ちょっとシュウ～？　君は何を言おうとしてるのかなぁ～？」

俺が姫路にもう弁当は作らなくていいと言おうとしたが、明久が即座に俺の口を塞いだ。

「むぐむぐ！！」

「シュウ～、ちょっと向こうへ行こうねぇ～」

明久は俺の口を塞ぎながら姫路から距離を取ると……。

（どう言うつもりだ、明久。何故止める？　お前は聞いてなかったのか？　姫路がどれだけ料理を冒涜しているのかを）

（何考えているんだよ！　もしシュウが弁当はもう作るなって言ったら姫路さんが凄く傷つくじゃないか！！）

（あのなぁ、この場合は気遣うんじゃなくてハッキリ言った方が良いぞ。俺は化学薬品の入った料理なんて食いたくもない。増してや死にたくも無い）

（だからと言って、一生懸命に弁当を作った姫路さんに、そんな事を言ったら失礼じゃないか！）

（バカかお前は。姫路に気を遣うのと俺達の命、どっちが大事なのか分からないのか？）

（そ…それを言われると……）

俺を説得するが、すぐに意思が弱まった。

（とにかく、俺はハッキリと言うからな。邪魔するなよ）

「ちょ…ちょっと！？」

明久から離れた俺はすぐに姫路のいる所に行く。

「スマンな姫路。で、さっきの続きだが……」

「えっと、その前にデザートを食べてからにしませんか？」

何……だと？　まだ他にもあったのか？

姫路が鞄から容器を取り出すと……。

「ああっ！　姫路さんアレはなんだ！？」

「明久！　次は俺でもきっと死ぬ！」

明久がさっき使った手をもう一回使おうとしたが、さっきまで倒れていた坂本が起き上がって必死に止めた。その途中から秀吉も一緒になって相談し始めている。

「……もう付き合いきれん」

俺は明久達が相談をしている間に屋上から去ろうとする。此処で俺が姫路に本当の事を言おうとしても明久達が阻止するだろうと思ったからだ。

「あの、天城君。何処へ行くんですか？　デザートは……」

「悪いが遠慮しておくよ。それに俺はまだ飯を食ってないからな。デザートはあの3人にでも食わせてやってくれ」

「で…でも、一口くらいは……」

「俺は今デザートより飯を食いたいからな。それじゃあ」

引き止めようとする姫路であったが、俺はすぐに屋上から去って行った。俺が屋上から出る事に気付いた明久達は阻止しようとしたのだが、姫路にデザートを勧められたので出来なかった。

そして屋上から去った俺はすぐに食堂へ行って、昼飯を食べて事無きを得たのであった。

第七問（後書き）

旅人『ハッハッハッハ！　見事に姫路の弁当から回避したねぇ～、修哉』

修哉「明久には呆れますよ。何でハッキリと不味いって言わないのか」

旅人『アイツは女の子を傷つかせない為にああ言ってるからな～』

修哉「だからと言って、命を散らしてまで気遣う必要は無いでしょうに。ってか坂本や秀吉にも言える事ですけど」

旅人『基本的にフェミニストだからね』

修哉「命に係わるなら、そんな物はドブに捨ててでも本当の事を言えば良いのに……はあっ」

第八問

俺は食堂で昼食を終えて教室に戻ると、屋上にいた明久達が既に戻っていた。特に土屋、坂本、秀吉がお茶をがぶ飲みしている。

教室に戻った俺を明久達は恨みがましい目で見ていたが、敢えて気にしないでいた。と言うか、最初から素直に死にたくないから食わないと言えば万事解決なんだが。

「で、結局デザートは秀吉が食ったんだな」

そして俺は隣の席でお茶を飲んでいる秀吉に聞く。

「う…うむ。……しかし、胃袋の強度を誇るワシでさえやられるとは……恐るべし」

「あのなぁ。いくら胃袋に自信があるからと言って、危険な化学薬品の前では無意味だぞ。ってか化学薬品を聞いたのにも拘らず、それでも食べる秀吉もどうかと思うんだが」

普通聞いた後は食べる気は無い筈だが、食べた秀吉はある意味で勇者だと思う。

「で、何でお茶を大量に飲んでいるんだ？」

「お茶には殺菌作用があるからのう。だから飲んでおるのじゃ」

「……確かにそうだが、お茶程度で殺菌されるのか？」

ゴクゴクの飲み続ける秀吉に突っ込む。

硫酸や硝酸やクロロ酢酸がお茶なんかで殺菌されるとはとても思えない。お茶を飲んでいる秀吉達を見ると多少は回復しているみたいだが。坂本や土屋を見ると、お茶のお蔭で何とか復活している。

それにしても、まさか姫路があそこまでに酷い欠点があるとは知らなかった。料理に化学薬品を入れるなんて常軌を逸している。と言うか姫路は化学薬品を何処から調達しているんだ？　一般には簡単に買えない物なんだが。

まあ姫路に何処で調達したかなんて聞く気はないし、知りたくも無い。取り敢えず姫路が再び明久達に弁当を作って出したとしても俺は絶対に食べない。たとえ姫路が食べて下さいと言っても化学薬品の入った料理はいらないと言って、それでもしつこかったら不味い毒物料理なんか食いたくないと言う……俺がそう言おうとしても明久達が阻止するだろうが。

と、俺が考えている最中に……。

「そう言えば坂本、次の目標だけど」

「ん？　試召戦争のか？」

「うん」

島田が坂本に試召戦争について聞こうとしていた。

あれ？　そう言えば島田は何で屋上にいなかったんだ？　既に坂本は屋上に着いていたのに島田がいないなんて……まあいいか。別

に俺が気にする必要は無い事だし。

「朝に坂本がＢクラスと相手をするって言ってたけど、どうしてＢクラスなの？　目標はＡクラスなんでしょう？」

島田の質問には誰もがそう思っているだろう。Ａクラスを目標としているＦクラスとしては、態々Ｂクラスを相手にする必要は無いと考えているから。

「正直に言おう」

坂本が神妙な顔をして……。

「どんな作戦でも、うちの戦力じゃＡクラスには勝てやしない」

勝てないと断言した。

明久達は意外そうな顔をしていたが、俺は当然だと内心で頷く。

確かに坂本の言うとおり、今のＦクラスでＡクラスに勝てる要素は一つも無い。点数の低いＦクラスが奇襲や不意打ち、先制攻撃がどんなに上手く行った所で、Ａクラスはそれを簡単に押し退ける実力があるので返り討ちに遭うのがオチだ。

坂本はＤクラスとの試召戦争に勝利したＦクラスの士気は上がっているから、このままＡクラスにも勝てると思っている奴がいるだろうと考えて正直に言ったのだろう。

「それじゃ、ウチ等の最終目標はＢクラスに変更ってこと？」

「いいや、そんな事は無い。Ａクラスをやる」

「雄二、さっきと言ってる事が違うじゃないか」

島田の台詞を引き継ぐように明久が間に入ってきた。

「クラス単位では勝てないと思う。だから一騎討ちに持ち込むつもりだ」

「一騎討ちに？　どうやって？」

「まさかＡクラスと戦う為の準備として、Ｂクラスを利用する気か？」

「その通りだ。よく俺の考えが分かったな、天城」

「何となくだが」

「ちょっとシュウに雄二、僕達にも分かるように説明してよ」

俺と坂本の会話に明久は付いて行けないみたいに言ってくる。

「じゃあ明久、確認だが試召戦争で下位クラスが負けた場合の設備はどうなるか知っているな？」

「え？　も、もちろん！」

坂本の質問に明久は分かるように言ってるが、俺は絶対に知らないだろうと思った。

明久、見栄を張らず素直に知らないと言えよ。そしたら俺が答えてやるのに。

因みに坂本の質問の答えは、下位クラスが負けたら設備のランクを一つ落とされるだ。

「設備のランクを落とされるんだよ」

「……まあいい。つまり、Bクラスなら Cクラスの設備に落とされる訳だ」

近くにいた姫路から答えをこっそり教えてもらった明久が答えると、坂本は少々呆れながらも話を続ける。

「そうだね。常識だね」

だったら常識と言える答えを姫路に聞いて今理解したと言った顔をしていたんだ?

「では、上位クラスが負けた場合は?」

「悔しい」

阿呆。そんな訳無いだろうが。

「ムッツリーニ、ペンチ」

「ややっ。僕を爪切り要らずの体にする動きがっ」

明久のバカな回答に坂本が土屋にペンチを用意するように指示をす

るので……。

「明久、分からないなら分からないって素直に言え。上位クラスが負けたら相手クラスと設備が入れ替えられるんだよ」

「そ…そうなんだ」

今度は俺がフォローを入れると、明久は助かったみたいな顔をした。

「つまり、うちに負けたクラスは最低の設備と入れ替えられる訳だね」

「ああ。そのシステムを利用して、交渉をする」

「交渉、ですか？」

坂本の言葉に姫路が聞き返す。

「Bクラスをやったら、設備を入れ替えない代わりにAクラスへと攻め込むよう交渉する。設備を入れ替えたらFクラスだが、Aクラスに負けるだけならCクラス設備で済むからな。先ず上手く行くだろう」

Bクラスに勝てればの話だけどな。

「ふんふん。それで？」

「それをネタにAクラスと交渉する。『Bクラスとの勝負直後に攻め込むぞ』と言った具合にな」

「なるほどね！」

明久は理解して分かった顔をする。

流石のＡクラスと言えども、休みも無しに連戦するのはキツイ筈だ。

逆にＦクラスは連戦になっても、設備に対する不満と言う原動力があるから続けられる。おまけに体力があり余ってる男子生徒ばかりいるから連戦しても問題は無い。

「じゃが、それでも問題はあるじゃろう。体力としては辛いし面倒じゃが、Ａクラスとしては一騎討ちよりも試召戦争の方が確実であるのは確かじゃからな。それに……」

「それに？」

「そもそも一騎討ちで勝てるのじゃろうか？　こちらに姫路がいると言う事は知れ渡っている事じゃろう？」

確かに秀吉の言う通りだ。一騎討ちに持ち込んだ所で必ず勝てる訳でもないし、姫路がＦクラスにいる事はもう他のクラスに知れ渡っている。現にＡクラスの木下優子が知っているのだから。当然、何処のクラスでも姫路についての対策を練っている筈だ。

「その辺に関しては考えがある。心配するな」

「……坂本、それは本当に勝算があるから言ってるんだよな？」

「勿論だ」

「……ならいいが」

自信満々に答える坂本に俺は取り敢えずと言った感じで言うが、内心余り信じる事が出来なかった。

いくら坂本がああ言っても不安だ……だが俺にはAクラスに勝てる策が浮かばないから、ここは坂本の言葉を信じるしかない。

「とにかくBクラスをやるぞ。細かい事はその後に教えてやる」

「ふーん。ま、考えがあるならいいけど」

明久もここは坂本を信じるしかないと思った感じだ。

「で、明久」

「ん？」

「今日のテストが終わったら、Bクラスに行って宣戦布告を……」

坂本は明久にBクラスに行けと言ってる最中に……。

「どうやら坂本は説教するより体罰を与えた方がいいかもな」

俺がポキポキと指を鳴らしながら、いつでも坂本を殴る準備をする。

「……ゴホンッ！　明久、冗談だ」

「冗談？　僕にはとてもそうは思えなかったけど？」

坂本は俺を見て冷や汗を掻きながら咳払いをしてやり過ごすが、明久はジト目で見ている。

「あまり調子に乗るなよ、坂本。いくらお前が代表だからと言って、やっていい事と悪い事があるぞ。これ以上、明久を陥れるなら今から此処で説教してやろうか？」

「……すいませんでした」

俺の低い声に坂本は土下座して謝罪した。

「よろしい。ならば俺がBクラスに言って宣戦布告しても構わないだろう？」

「……どうぞ」

「あ、シュウが行くんだったら僕も一緒に行くよ」

俺が土下座している坂本に確認を取ると、明久も一緒に行くと言い出す。

「明久、今回は俺だけで充分だ」

「でも一人だけで大丈夫なの？　もし宣戦布告してBクラスにリンチでもされたら……」

「問題無い。そうなったとしても一人だけ伸せば向こうから勝手に退いてくれる」

「じゃが修哉よ、そんな事をしたらまた教師に呼び出されるのでは

ないのかの？」

「その時は俺を陥れようとしたDクラスの奴と同じ運命を辿ってもらう」

明久と秀吉の質問に淡々と答えながら、俺は教室から出ようとする。

「それじゃあ、ちょっくら行って来る」

俺はそう言って教室から出たのであった。

「大丈夫かな？　シュウだけに行かせて……」

「明久と違って、天城はそれなりの対応は出来るからな」

「雄二、僕を行かせようとしておいて、よくそんな事が言えるね」

「まあ修哉は他のクラスでもよく知っておるから、心配は無いと思うのじゃ」

「……それに天城は荒事には慣れている」

「天城君に何かが起こらなければいいですけど」

「ふんっ！　ウチに言わせれば、女の子を殴る天城にはお仕置きされて欲しいわ」

「……島田、まだ根に持ってるのかよ」

「さて、さっさと宣戦布告をするか」

Bクラス前に着いた俺はドアを開ける。

「すいませ～ん。Bクラスの代表はいますか～？」

「ん？　修哉か」

「やあ和人。久しぶり……ってそんなに経っていないか」

俺が代表を呼ぶと、目の前にいる赤味が帯びた茶髪の男子生徒が俺の方に向かってきた。

「もしかして和人がBクラスの代表か？」

「いやいや、俺じゃないよ。ってか聞いたぞ修哉、お前Fクラスにいるんだって？　しかも訳ありで振り分け試験を受け損ねたみたいだな」

「まあな」

親しげに話す男子生徒の名は佐伯和人（さえきかずと）。俺の幼馴染だ。

「俺としては残念だよ修哉。もし試験を受けてBクラスに来てくれたら、一緒に試召戦争をやって名コンビになろうと思ってたんだが」

「それは嫌味か？　俺程度がBクラスに来れる訳がないだろうが……ってか和人、ちょっと離れてくれないか？」

「気にすんなよ。俺とお前の仲じゃないか」

「……その台詞を女子が聞いたら完全に誤解されるだろうな」

寄り添うかのように腕を俺の肩に置いて、甘いマスクを浮かべながら俺に話しかける。俺と和人の近くにいる女子生徒は和人の笑みを見てウットリしている。

もう気付いていると思うが、和人はかなりのイケメンで女の子からは物凄くモテている。おまけに女子に対する接し方も巧く柔らかな笑みを浮かべて、見事に落とすプレイボーイだ。女子に告白された回数は２０～３０を軽く超えている。正に男の敵と言えるだろう。

「で、お前が代表じゃ無いなら、一体誰なんだ？」

「ああ。代表はあそこにいる……」

「おい佐伯、男相手に気色悪い事してんじゃねえよ」

和人が指した方向を見ると、若干キノコ頭みたいな男子生徒がいた。

確かコイツは……。

「気にすんなよ根本。これは幼馴染のスキンシップだ」

「そうかよ。で、天城って言ったか？　俺に何の用だ？」

根本……あ、もしかして根本恭二か。確か噂ではカンニングの常連で目的の為ならば手段を選ばない奴だと聞いたな。

余り噂とかは信じない俺だが、何度も耳にしているので恐らく真実なのだろう。見た目で判断してはいけないんだが、いかにもあくどい顔をしているので余計に真実味が増した。

まあそんな事はどうでもいいから、さっさと用件を済ませよう。

「えっと……俺達Ｆクラスは試召戦争の宣戦布告をしに来た」

『何だと!?』

「ほ～う」

俺の宣戦布告にＢクラス全員が驚いている中、和人だけは大して驚かず面白そうな顔をしている。

「正気か？　Ｆクラス風情が俺達Ｂクラスに勝てると思ってるのか？」

「だから宣戦布告しに来たんだよ。それと和人、いい加減に離れてくれ」

「はいはい」

和人、お前は俺が言わなきゃ離れないのかよ。

「そう言う訳で明日の午後に挑むから、どうぞお手柔らかに」

「……どうやらDクラス程度を倒した位でいい気になっているみたいだな。だったら教えてやる。お前等クズ揃いのFクラス風情が誰に向かって物を言っているのかをな」

「では承諾と言う事でいいんだな？　だったら俺はこれで失礼する」

挑発には乗らずに俺は教室から出ようとするが……。

「まあ待てよ。その前に俺達からの挨拶を受け取ってくれ」

根本は俺に何かを渡すように引き止めた。

「何をだ？」

「はっ。分かってんだろ？　……お前等！！　ソイツに挨拶をしてやれ！！」

『うおおお～～～！！！！』

根本の指示により、Bクラス生徒達が一斉に俺へと襲い掛かってきた。

「やはりこうなるか。仕方ない」

俺は大して慌てずに襲い掛かってくる一人を伸そうとしたが……。

バキッ！！

「ぐあっ！！」

「なっ！？　お…おい佐伯！　何の真似だ！？」

「ん？」

俺に攻撃を仕掛けた奴が、突然横から和人のパンチを喰らって伸された。その事に根本は和人に激昂して怒鳴ると、他のＢクラス生徒達は和人の行動によって足を止めている。

「悪い悪い。ちょっと手が滑ってな」

「ふざけるな！　手が滑ったじゃないだろうが！　味方に攻撃するなんて何考えていやがる！？」

「と言うか和人、お前はそっち側だろ？」

根本の怒鳴り声を聞き流す和人に、俺は突っ込みを入れるが無視されている。

「おい根本。使者にリンチするのがお前の挨拶なのか？　とてもＢクラスのやる事とは思えないぞ」

「何言ってやがる！　下位クラスには上位クラスに挑む事を後悔させる為の見せしめをするって相場が決まってるだろうが！」

「やはりそう言う認識なんだな。本当に明久を行かせなくて良かったよ」

問題発言とも言える根本の台詞に俺は明久を行かせなかった事に安堵する。

「おい和人、別に助けなくても俺一人で充分に対処出来たんだが」

「つれない事を言うなよ、修哉。幼馴染として放って置ける訳がないだろ」

「……そうかい」

まあ和人のお節介は今に始まった事じゃないが。

「さ、修哉。根本には俺が言っておくから、お前は教室に戻るといい」

「おい佐伯！　お前何勝手な事を！」

「なら俺はこれで失礼する」

「ま…待て！　って何やってるお前等！　アイツを捕まえろ！」

俺がＢクラスの教室から出ようとすると、根本はＢクラス生徒達に俺を捕まえるように指示するが……。

「悪いが根本。修哉には手を出させないぞ」

「なっ！」

佐伯が立ち塞がるように出入り口に立ったので捕まえる事が出来なくなってしまった。

「それじゃあ和人、明日の試召戦争で」

「ああ。修哉と戦えるのを楽しみに待っているよ」

修哉は戻ったか。後は……。

「佐伯！　お前どう言うつもりだ！？」

さっきから怒鳴っている根本をどうにかするか。

「何がだ？」

「惚けるな！　何で俺の邪魔をするのかと聞いているんだ！？」

「言っただろ？　修哉は俺の幼馴染だから助けたんだ。幼馴染がリンチされるのを黙って見ている訳が無いだろう」

「今回は試召戦争だぞ！　下位クラスの士気を下げさせる為に見せしめをするのは当然だろうが！」

「だから一人相手にリンチするのか？　とてもBクラスのやる事とは思えないな」

と言うか、リンチするのが当たり前の様に言うお前がどうかしてる。ま、こんな小物にそんな事を言っても無駄だろうが。

「根本、お前は俺のやった事に対して憤っているみたいだがな。もし俺があそこで間に入っていなかったら、お前等の内の誰かが返り討ちにされていたかもしれないんだぞ。寧ろこの程度で済んだ事に礼を言ってもらいたい物だ」

「なっ！？」

俺の言葉に根本は信じられない顔をする。他の連中も同様に。

「修哉はああ見えて、俺と同様に腕が立つぞ。アイツは以前から観察処分者の吉井や、騒ぎを起こす問題児達を簡単に鎮圧している。だからお前達が集団で襲いかかった所で返り討ちされるだけだ。もうついでに言っておくが、修哉は向かって来る相手には容赦しないぞ。たとえ相手が女でもな」

『……』

俄かに信じられないような顔をしている連中だが事実だ。

「まあ信じる信じないは勝手だが、これだけは言っておく。根本、

今回は試召戦争前だから見逃してやるが、また俺の前で不快な行動を取ったら……どうなるか分かってるな？」

「！！！！　……わ…分かった……」

俺がほんの少しだけ殺気を出すと、根本は怯えた顔をしている。この程度の殺気で怯えるとは……やはり小物だな。修哉だったら簡単に受け流すぞ。

おっと、どうやら女子も怯えさせてしまったみたいだ。すぐに殺気を引っ込めなければ。

「女子の皆、怖がらせてすまない。君達まで巻き込んでしまって大変申し訳ない」

「あ…き…気にしないで佐伯君」

「私達はそんな……」

俺が笑みを浮かべながら謝罪すると、女子達は気にしてないように言っている。

だけど俺としては本当に申し訳なかった。

「そうは行かないよ。お詫びとして、放課後にクレープを奢るよ。どうかそれで許してくれるかい？」

『……は…はい……』

女子達は顔が物凄く赤くなりながらも許してくれた。

男子全員は揃いも揃って修哉に襲い掛かってきたから何もする気は無い。無論、俺によって気絶している奴にもだ。

午後の補給テストが終わった放課後。

「坂本、Ｂクラスには明日の午後に試召戦争をやるって言っておいた」

「よし、後は明日の午前中のテストが終われば開戦だ」

「もうついでに言っておくが。やはりＢクラスはＤクラスと同様、使者にリンチをやろうとしていたぞ？」

「……」

「もし明久を行かせてたら、酷い目に遭っていただろうな」

「……」

「やはりお前は今の内に体罰を与えた方が良さそうだ」

「ま…待て！　明久の代わりに天城が行ったんだから問題は……」

「問答無用だ。歯を食い縛れ」

「ギャアアアア～～～～！！！！！」

俺が折檻すると坂本は断末魔の悲鳴を上げるのであった。

第八問（後書き）

早くもオリキャラの登場です。

佐伯和人については後ほど紹介します。

第九問

バカテスト　化学

問　以下の問いに答えなさい。

『ベンゼンの化学式を答えなさい』

姫路瑞希の答え
『Ｃ６Ｈ６』

教師のコメント
簡単でしたかね。

天城修哉の答え
『Ｃ６Ｈ６』
コメント……明久と土屋がバカな回答をしたら職員室に連れて行かせます。

教師のコメント
言うまでも無く正解です。
それとコメントについてですが、その時はお願いします。

土屋康太の答え
『ベン＋ゼン＝ベンゼン』

教師のコメント

君は化学を舐めていませんか。

吉井明久の答え
『Ｂ－Ｅ－Ｎ－Ｚ－Ｅ－Ｎ』

教師のコメント
後で土屋君と一緒に職員室に来るように。
いえ、天城君に頼んで二人纏めて連れて来させた方がよろしいですね。それでは天城君、お願いします。

「さて皆、総合科目テストご苦労だった」

教壇に立った坂本が手を置いて俺達の方を向いている……昨日、俺が体罰を下した所為か未だに痛そうな顔をしているが誰もそれに突っ込まなかった。

つい先程の午前中に全科目の補給テストが終わって昼食を取ったところだ。今回のテストで俺の全科目は点数があるので万全な状態で

試召戦争に充分挑める。とは言え苦手科目は余り万全な点数ではないのだが。

まあそこは置いといて、とにかく補給テストが多くてかなり大変だった。

「午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺る気は充分か？」

『おおーっ！』

坂本の言葉にFクラス達は大声を上げる。やはりモチベーションを維持する為には設備交換をしない方が良かったみたいだな。

俺としては設備交換して、満足している奴と結託して試召戦争を終わらせたかったが。恐らく坂本はそれも考えて設備交換をしなかったと思う。

そう考えている最中、坂本は作戦を説明し始める。

「今回の戦闘は敵を教室に押し込む事が重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下は絶対に負ける訳にはいかない」

『おおーっ！』

「そこで、前線部隊は姫路瑞希に指揮を執ってもらう。野郎共、キッチリ死んで来い！」

「が、頑張ります」

若干引き気味になっている姫路は一歩前に出てペコッと頭を下げると……。

『うおおーっ！』

前線部隊が姫路と一緒に戦えると分かって、士気が最高潮に達していた。

流石に姫路をすぐ前線に出さなければいけないと坂本は考えたのだろう。Ｆクラスの点数ではＢクラス相手に負けるのは一目瞭然だから、最大の奥の手である成績優秀者の姫路を出さなければいけない。

主戦力の姫路が敵を倒している最中、他の前線部隊は姫路を守る為の盾だ。坂本が死んで来いなんて言うから、姫路以外の前線部隊はただの時間稼ぎ部隊だ。まあ犠牲覚悟で挑まなければＢクラスに勝てないのだから仕方ない。

キーンコーンカーンコーン！

昼休み終了のチャイムが鳴り響いた事によって、Ｂクラスとの試召戦争が始まった。

「よし、行って来い！　目指すはシステムデスクだ！」

『サー、イエッサー！』

坂本の掛け声により、Ｆクラス前線部隊は一斉に教室を出るが……。

「み…皆さ～ん、待って下さ～い」

「少しは姫路の事を考えればいいんだがな」

姫路は出遅れてしまった。

「それじゃあ姫路、前線は任せたぞ」

「は…はい。それでは行ってきます」

「それと天城はここに残れ。今回は数学がメインだからな」

教室を出た姫路に俺も後を追おうとしたが、坂本が残れと言われたので仕方なく残る事にした。

「確かに数学は苦手だが、一応それなりには戦えるぞ？」

「だとしてもＢクラス相手にはキツイ。それに向こうは比較的文系が多いからな。万が一の事を考えて、ここに攻め込まれて文系で挑まれたら天城が対処して欲しい」

「……ここは従おう」

坂本の言葉に従って教室に残る事にした。

「それと他に聞きたい事があるんだが……Ｂクラスの代表は誰か知っているか？」

「ああ、そう言えば昨日言い忘れていたな。代表は根本恭二だ」

「根本……アイツか」

俺が根本と言ったら坂本は顔を顰める。どうやら坂本も根本の事について知っているみたいだな……特に悪い噂について。

「その顔を見る限りでは知っているみたいだな」

「根本は勝つ為なら、どんな汚い手段でもやる男だって誰もが知ってるぞ。例えば“球技大会で相手チームに一服盛った”とか、“喧嘩に刃物は当然装備（デフォルト）”ってな」

「……ソイツには正々堂々と言う単語が全く無いみたいだな。そんな汚い手を使ってまで勝利を得たいのか？」

「お前からして見れば卑怯だと思うが、俺にはそんな大した事は無いが」

「……卑怯に関する点については、お前も根本と同様だな」

少しばかり坂本に軽蔑の眼差しを送る俺。

「やれやれ。俺や和人がこんな卑怯者の代表の命令を従う事になるとは……」

「和人？　……おい、ソイツは佐伯和人か？」

「ああ、俺の幼馴染だ。と言うか坂本は和人の事も知ってるのか？」

「アイツは有名だろうが……特に女の話題に関して。学園の男子の誰もが佐伯を“男の敵”と呼んでいるだろうが」

「……まあそこは否定出来ないな」

確かに和人は容姿端麗で成績優秀、運動神経抜群の3拍子揃った奴だ……おまけに女子から物凄くモテている。

「俺が知ってるのはそれだけなんだが。まあそれはいいとして、幼馴染のお前から見て佐伯をどう見る？」

「知っての通り和人は女性相手に優しく接する奴だ。かと言って男相手にもちゃんと普通に接するし、中々面倒見の良い奴だ」

「……意外だな。ああ言うのはてっきり男相手には冷たく接すると思ってたが」

「もしそうだとしたら、今頃俺とは仲の良い幼馴染じゃないからな」

「そうか……って違う！　俺が聞きたいのはそんな事じゃなくて、試召戦争でどう戦うかについてだ！」

「ああ、そっちか」

坂本の突っ込みに俺は答える内容を間違えたと気付く。

「和人は真っ向勝負を好むから前衛に挑むだろうし、後衛で策を練るかもしれないな」

「……つまり佐伯はオールラウンダーって事か。厄介な奴が

Bクラスにいたもんだな」

「けど和人の事だから、今頃は前衛で戦っていると思う」

「何故そう言い切れる？」

「俺がBクラスで宣戦布告をした後に和人と根本の会話を見て、どうも馬が合わなさそうな感じがしてな」

「だから前衛で戦っていると？」

「ああ。もし和人が後衛で策を練るとしても、根本と違って余り卑怯な手は好まない。互いの戦力や状況を見てどうやって攻めようかと考えるタイプだからな」

「……成程な」

俺の回答に坂本は少々考える仕草をする。恐らく今の前線部隊の戦況を考えているんだろう。

「天城の言うとおり佐伯が前衛にいるなら、俺達にとっては好都合かもしれないな」

「それって姫路が前線にいるからか？」

「まあな。いくら佐伯が強くても、姫路がいたら真っ向では勝負にならないだろうし、策を使っても簡単には倒せないからな」

姫路を信頼している故の台詞だろう。

だが……。

「とは言え余り軽視は出来ない。天城、お前も前線に行ってくれ」

「そう言うと思ったよ」

坂本は後々の事を考えて俺を前線に行かせようとしていた。俺もその判断は間違っていないと思う。

「もし和人が誰かと戦っていたら、真っ先に助太刀して倒す事にする。幼馴染の俺から見ても、和人は前から掴み所が無い奴だからな」

「そう言う奴ほど厄介な相手だな。是非そうしてくれ」

「ああ、それじゃ行って来る」

俺は頷いて教室を出ようとしたが……。

「ちょっとよろしいですか？」

いきなり担任の福原先生が教室に入ってきた。

「福原先生、どうかしたんですか？　今は試召戦争中ですよ」

「坂本君に用がありまして」

「俺に？」

「ええ。Ｂクラス代表の根本君が話があるそうです」

福原先生の台詞に俺と坂本は疑問を抱いた。俺が坂本の顔を見ると、坂本は分からないと言った感じで首を横に振る。

根本が坂本に話しだと？　一体何を考えている？

「話って何なんだ？」

「協定について話をしたいと言ってましたよ。屋上で待っているそうです。では私はこれで失礼します」

言うだけ言った福原先生はすぐに教室から去って行った。

「……どうする、坂本？」

「取り敢えず行って聞く事にする。一応は協定についての話だからな」

「そうか。俺はこのまま前線に行くが、どうする？」

「いや、変更だ。本隊と一緒にお前も付いて来い。相手は根本だから用心しないといけないからな」

「分かった。ではそうしよう」

協定と言って実は罠だったなんてオチと言う可能性が考えられる。坂本は当然それを想定して俺も一緒に行かせようとしているのだろう。

俺は一応、姫路の次に点数が高いから……と言ってもかなり点数差がある。それでも状況次第によってはＢクラスとまともに戦える…

…相手が文系の科目で挑めばの話だが。

「それじゃ屋上に行くぞ」

「了解」

『おうっ！』

坂本と一緒に俺や本隊は屋上へと向かう。

しかしこれは根本の罠だったと俺達は後から気付くのであった。

「ようこそ、Ｆクラスの代表さん。待ってたぞ」

俺達が屋上に着くと、そこにはＢクラス代表の根本や近衛部隊、そして和人がいた。

ん？　何で和人がいるんだ？　アイツが根本の傍にいるとは……
どうやら俺の読み間違いみたいだな。

「和人、俺はてっきり前線で戦ってると思ってたが」

「いや～最初はそうしようと考えていたんだけど、根本の指示で行くなと言われてね」

頭をポリポリと掻く和人を見て、俺の読みは間違っていなかったみたいだが、待機させられていたのは予想外だった。

「俺としてはすぐに修哉と戦いたかったんだが、根本がこの後の……」

「おい佐伯、余計な事は言うな。いくら幼馴染だからと言っても今は敵同士だ」

「はいはい」

根本の注意に和人は頷いて喋るのを止めた。

「で、協定の内容について聞かせてもらおうか？」

和人から情報を聞き出す事が出来ないと分かった坂本は本題に入る事にした。

「ああ。今回の試召戦争で、四時までに決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日午前九時からに持ち越し、その間は試召戦争に関する一切の行為を禁止するって話だ。どうだ？　お互いに悪い話じゃ無い筈だ」

「……」

根本の協定内容を聞いた坂本は無言で考えていると……。

「……分かった。協定を結ばせて貰う」

少し経って承諾するのであった。

まあ確かに根本の言うとおり悪くない話だ。Bクラスを倒すにしても、かなりの時間を労するだろうし、何より一番の頼みである姫路がずっと戦い続ければ疲弊して倒れる恐れがある。そんな事になったらBクラスは一斉に姫路に襲い掛かるだろう。

かと言ってBクラスの方も長期戦に持ち込まれて次回に持ち越しとなったら、かなりのダメージを負った状態で戦うのはキツイ筈だ。

当然、坂本はそれを考えた上で協定を結んだと思う。何しろ互いにとってメリットのある話なのだから。

承諾した坂本に根本は笑みを浮かべているが、和人は根本を見ながら不快そうな顔をしていた。まるで気に食わないと言わんばかりに。

和人の不快な顔をしていた理由は俺達が教室に戻ってすぐに気付くのであった。

「……成程、和人があんな顔をしていた訳だ」

「やってくれたな、根本の奴」

協定を結んだ俺達は教室に戻ると、穴だらけになった卓袱台とへし折られたシャープペンや消しゴムが大量に転がっていた。

そして戻っていた明久と秀吉や前線部隊数名も、その光景に顔を顰めている。

「酷いね。これじゃ補給がままならない」

「うむ。地味じゃが、点数に影響の出る嫌がらせじゃな」

「いくら試召戦争だからと言って人の持ち物を勝手に壊すのはどうかと思うが」

明久と秀吉の台詞に俺も頷く。

と言うか嫌がらせ以前に器物破損で訴える事が出来るんじゃないか？　うわ、俺の筆入れの中のペンや消しゴムも無残な状態になってるし。

和人はコレを知ってて不快な顔をしていたのか。アイツはこう言った手段は嫌いだからな。恐らく根本に対する評価はかなり下落しているに違いない。

「あまり気にするな。修復に時間は掛かるが、作戦に大きな支障は無い」

「雄二がそう言うなら良いけど」

「いや、修復や作戦以前に、この事を先生に言った方が良くないか？　これは明らかに問題だろ」

人の持ち物を勝手に壊したんだから。

「根本の事だ、どうせ白を切るに決まってる。Bクラスの犯行だと分かった所で、部隊の誰かが勝手にやった事だからと言って責任逃れするだろう」

「だとしても実行した奴等には壊した筆記用具を請求してやる。それと一緒に説教もな」

まあ実行した奴等がダンマリした所で和人に聞くが。

「それはそうと、どうして雄二やシュウは教室がこんなになっているのに気付かなかったの？」

「協定を結びたいと言う申し出があってな。調印の為に教室を空にしていた」

「それに根本が本当に協定を結ぶかどうかの確信が無かったから、俺や本隊も一緒に付いて行ったんだ。もしかしたら騙し討ちをするんじゃないかと思ってな」

明久の質問に俺と坂本は答えると、秀吉が意外そうな顔をする。

「協定じゃと？」

「ああ。四時までに決着がつかなかったら、戦況をそのままにして続きは明日午前九時に持ち越し。その間、試召戦争に関わる一切の行為を禁止する。ってな」

「それ、承諾したの？」

「そうだ」

「でも、体力勝負に持ち込んだ方がこっちとしては有利なんじゃないの？」

「姫路以外は、な」

「戦力の要（かなめ）である姫路がやられたら、いくら俺がいても不利だからな」

明久と秀吉は調停を結んだ理由が分かると納得する顔をした。

「アイツ等を教室に押し込んだら今日の戦闘は終了になるだろう。そうすると、作戦の本番は明日と言う事になる」

「そうだね。この調子だと本丸は落とせそうに無いね」

「その時はクラス全体の戦闘力よりも姫路個人の戦闘力の方が重要になる。まあ天城も重要な戦力の一人だが、数学以外はな」

ほっとけ、俺だってそれなりの努力はしているんだ。確かに数学は苦手だが、それでも坂本達より点数は高いっての。

「だから受けたの？　姫路さんが万全の態勢で勝負できるように」

「そう言う事だ。この協定は俺達にとってかなり都合が良い」

果たして本当にそうなんだろうか。坂本はそう言うが俺は何か釈然としなかった。

屋上で話を聞いた時には俺も坂本と同様に悪くない話だと思っていたが、教室に戻って悲惨な状態となった事に疑問を抱いた。

今思えば裏で嫌がらせを指示していた根本が、互いにメリットのある協定を提案をする。あの卑怯者と称される根本が嫌がらせだけで済ませる程の甘い奴なんだろうか？

それに和人もだ。アイツが前線へ出ずに根本と一緒にいた事が気になる。『この後』って和人が言ってたな。根本は後から何かをやる為に和人を傍に置かせたのか？

まあ今はこんな事を考えても埒があかないか。

「明久、取り敢えずワシ等は前線に戻るぞい。向こうでも何かされているかもしれん」

秀吉が明久にそう言うと教室を駆け足で出て行き……。

「ん。雄二、あとよろしく」

「おう。シャープや消しゴムの手配をしておこう」

明久が手を挙げて坂本に背を向けて教室を出て……。

「坂本、俺も前線に行くが構わないか？　明日に持ち越しとなるなら、出来るだけ倒しておきたい」

「そうだな、なるべく倒しておいた方がこっちとしても多少は有利になる。行ってくれ」

坂本から許可を得た俺も教室から出て明久達と一緒に前線へ向かった。

「明久、秀吉、今度は俺も参加させてもらう」

「シュウも出るの？　それなら心強いね」

「数学だったら明久達と大して変わらんがな」

「そうは言っても、修哉はワシ等より点数は高いからのう。おまけに明久と同様に召喚獣の操作も慣れておるから、こっちとしても頼もしいのじゃ」

「嬉しい事を言ってくれてありがとう」

明久と秀吉の言葉に俺は礼を言いながら前線に向かっている。

「だからと言って油断は出来ないぞ。相手は根本だからな」

「うん。なんか、まだまだ色々やってきそうだね」

「そうじゃな。この程度で終わるとは思えん。気を引き締めた方が良さそうじゃ」

果たして今度はどんな狡猾な手を使うんだろうか。にしても根本の奴、宣戦布告してきた時にはFクラスを見下してたのに、いざ戦うとなればアレか。戦力は向こうの方が上だと言うのに、何であんな手段を使ってまで勝とうとするのかが俺には理解出来ん。和人もさぞかし嫌だろうな。

と、俺がそう思っている最中に前線部隊の姿が見えてきた。

「修哉よ、お主はどこの部隊で戦うのじゃ？」

「取り敢えずは明久の部隊と一緒に戦わせてもらう。明久とはお互いに操作が慣れてて連携攻撃が出来るからな」

「そうだね。ボクとしてもシュウが一緒だと戦いやすくなるから」

「そうか……ワシとしては修哉と一緒に戦いたかったのじゃが、それなら仕方あるまい。では、くれぐれも用心するのじゃぞ！」

「ああ」

「秀吉もね！」

残念そうな顔をしていた秀吉は部隊に戻り、俺は明久の部隊へと向かう。

「吉井！　戻ってきたか！　ん？　天城もいるのか、こっちとしては助かる」

出迎えた須川が俺を見て心強い味方が来てくれたと言わんばかりに安堵している。

「待たせたね！　戦況は？」

「かなり不味い事になっている」

「え！？　どうして！？」

須川の台詞に明久は驚愕した。不味いと言ってもBクラスの方から本隊は出ている様子がなくて劣勢なのに、こちらとしても戦力がまだ結構残っているからかなり優勢だ。なのに何で不味いのだろうか。

「島田が人質に捕られた」

「なっ！？」

「おやおや」

今度は人質の手段を取ったか。劣勢な状況では確かに有効な手だろう。と言うか島田がどうして人質にされたのかは知らんが。

「おかげで相手は残り二人なのに攻めあぐんでいる。どうする？」

成程。明久の部隊はそのせいでＢクラスと睨み合いになっているのか。さあ明久、お前はどうするつもりだ？

「……そうだね。取り敢えず状況を見たい」

「それなら前に行こう。そこで敵は道を塞いでいる」

須川が前を歩き、明久と俺は後に続く。

明久の部隊の人垣を抜けると、そこには須川の言うとおり二人のＢクラス生徒と捕らえられた島田と召喚獣の姿があった。その近くには補習担当行使もいる。

おいおい島田、どうしてそんな状態になっているんだよ。いつも明久を殴っているお前がその気になれば、直接ソイツ等をブチのめせる筈だが？

「島田さん！」

「よ、吉井！」

「……」

何だかドラマみたいな流れに俺は少々呆れ顔をする。

そして……。

「そこで止まれ！　それ以上近寄るなら、召喚獣に止めを刺して、この女を補習室送りにしてやるぞ！」

「……」

相手も相手で悪役らしからぬ台詞を言った事に俺は更に呆れた。

恐らく相手は数少ない女子である島田を戦死させるだけじゃなく、人質にして補習室送りをチラつかせて、此方の士気を下げようとしているんだろう。

内の男子達は女子に飢えている傾向がありそうな連中ばかりだからな。あまり褒める物じゃないが、こっちとしてはかなり有効な手だ。

それにこの作戦は根本が指示したと思う。和人は根本と違いこんな手は考えない。相手が女子なら尚更だ。普段から女子に優しく接している和人はそんな事をしない筈だ。

まあそんな事より、さてどうするか。こんな状況がいつまでも続いていたら島田が補習室送りにされるのは時間の問題だ。俺としてはこれ以上こんな事に付き合う気はない。島田には悪いが、さっさと片付けさせてもらう。

と、俺がそんな事を考えていると……。

「総員突撃用意ぃーっ！」

「隊長それでいいのか！？」

明久が須川達に突撃の指示を下した。

どうせ明久の事だから、戦争に犠牲は付き物とか言って、日頃痛めつけられている仕返しをしようとでも考えているんだろう。

俺から言わせれば何も言い返さずに黙って島田にやられている明久もどうかと思うんだがな。

取り敢えず島田には悪いがＢクラスの連中と一緒に退場してもらおう。アイツは試召戦争中にも拘らず、明久にだけは容赦しないからな。

「ま、待て、吉井！」

Ｂクラス生徒から待てと言いながら片手を開いた状態で前に出す。

「コイツがどうして俺達に捕まったと思っている？」

「バカだから」

「殺すわよ」

明久はＢクラス生徒の質問にあっさり答えると、島田が恐ろしい殺気を出してきた。

おい明久、思った事を素直に言うのは良い事だが少しは相手を見て考えような。

「コイツ、お前が怪我をしたって偽情報を流したら、部隊を離れて一人で保健室に向かったんだよ」

島田、明久を気遣うのは悪くないんだが敵の情報に踊らされるなよ。しかも護衛も付けずに一人だけ行くなんて……もう少し後先考えて行動しろ。

「島田さん……」

「な、なによ」

島田は顔が少々赤くなっているが……。

「怪我をした僕に止めを刺しに行くなんて、アンタは鬼か！」

「違うわよ！」

明久の見当違いな発言によって台無しになってしまった。

けれど明久は島田に散々な目に遭わされているから、あんあ突拍子も無い事を言うのは無理もなかった……島田が普段から明久に暴力を振るっていなければ変わっていたかもしれないが。

「ウチがアンタの様子を見に行っちゃ悪いっての！？　これでも心配したんだからね！」

おい島田、そんな事を言っても対する日頃の行いが悪い故に明久は

ああ言ったんだぞ。お前が一番の原因なんだからな。

「島田さん。それ、本当？」

「そ、そうよ。悪い？」

ぷいっと顔を背ける島田。なんかまたドラマみたいな展開になっているな。

「へっ。やっとわかったか。それじゃ、おとなしく……」

Ｂクラス生徒がやっと立場が分かったと思って要求を突きつけようとしたが……。

「総員突撃ぃーっ！」

「どうしてよっ！？」

明久はまた突撃の指示を下した。

「あの島田さんは偽者だ！　変装している敵だぞ！」

「待て明久、どうしてそんな答えになるんだ？　あれはどう見ても正真正銘の島田だと思うが」

「天城の言うとおりよ！　何でそんな考えになるわけ！？」

「ふっ……それは簡単だよ、シュウ。何故なら……」

明久は少々もったいぶった様な感じになると……。

「あの島田さんにそんな優しさがある訳がない！　嬉々として僕を殺りにくるに決まっているじゃないか！」

「何でよ！？」

……島田には気の毒だと思うが、俺は納得してしまった。島田の自業自得、もしくは身から出た錆とも言えるだろう。

「否定は出来ないな」

「でしょう？」

「天城まで何言ってるのよ！？」

ではさっさと倒すとするか。運が良い事に科目が英語だし。

「試獣召喚（サモン）！」

「おい待てって！　コイツ本当に本物の島田だって！」

俺が召喚獣を出している最中、狼狽しているＢクラス生徒。

「黙れ！　見破られた作戦にいつまでも固執するなんて見苦しいぞ！　さあシュウ！　早く倒しちゃって！」

「はいはい」

とは言ってもＢクラスの言うとおり、あそこにいるのは本物の島田なんだがな。

「では覚悟」

「だから本当に……！」

『Ｆクラス　天城修哉　英語Ｗ　１６０点
ＶＳ
Ｂクラス　鈴木次郎（すずきじろう）　英語Ｗ　３３点
Ｂクラス　吉田卓夫（よしだたくお）　英語Ｗ　１８点』

シャキンッ！　ザシュッ！　ザシュッ！

俺の召喚獣は瀕死のＢクラス召喚獣に居合をやって即行で倒した。

そして……。

「ぎゃあああー……！」

「たすけてぇー……！」

近くにいた補習講師によって連行されたＢクラス生徒の二人であった。

さて、後は島田をどうやって宥めるかだな。

「皆、気をつけろ！　変装を解いて襲い掛かってくるぞ！」

……明久、お前はまだ島田を偽者扱いしているのか。

「よ、吉井、酷い……。ウチ、本当に心配したのに」

「まだ白々しい演技を続けるか！　この大根役者め！」

「そこまでにしろ、明久」

未だにバカな事を言っている明久に俺は割って入る。

「コイツは本物の島田だぞ」

「何言ってるんだよシュウ！　そんな訳無いじゃないか！」

明久、これ以上バカな事を言い続けていると流石に俺もフォロー出来なくなるぞ。

「そうよ！　本当に心配したんだから！」

「取り囲むんだ。いくらＢクラスでも、この人数なら勝てるから」

「本当に、『吉井が瑞希のパンツ見て鼻血が止まらなくなった』って聞いて心配したんだから！」

「包囲中止！　コレ本物の島田さんだ！」

そんな嘘に騙される島田もどうかと思うが、明久は漸く本物だと信じたみたいだ。

「島田さん、大丈夫だった？」

「……」

掌を反したかのように優しく接して、床に座っている島田に手を差し伸べる明久に俺は無言になりながら物凄く呆れた。

「……」

島田も俺と同様に無言になりながらも明久の手に掴まって立ち上がる。あの様子だと明久がおかしな事を言ったら即座に殴りそうだな。

「無事で良かったよ。心配したんだからね」

「……」

「教室に戻って休憩するといいよ。疲れているでしょう？」

「……」

「それにしても卑怯な連中だね。人として恥ずかしくないのかな？」

「……」

島田のノーリアクションに明久はやりにくそうな顔をしている。次に変な事を言ったら確実に明久を殴るな。

「あー、島田さん。実はね」

「……なによ」

明久が最高の笑顔を作ると……。

「僕、本物の島田さんだって最初から気付いていたんだよ」

その台詞を言った後に物凄い勢いの乗ったパンチが明久の顔に炸裂したのであった。

明久、ハッキリ言って今回はお前が悪い。

流石に今回ばかりは明久に味方する事は出来ないので、俺はさっさと秀吉のいる部隊を掩護しに行くのであった。

第九問（後書き）

明日か明後日に更新しますので、次回をお楽しみに！！

それと感想もお待ちしております！！

第十問（前書き）

今回は今まで長く書きました、

それではどうぞ！！

第十問

Bクラスとの試召戦争の最中、俺は秀吉の部隊に加わって敵をあらかた倒し、明久を制裁している島田の方に向かい……。

「島田、いくら明久が許せないとは言え、これはやり過ぎだ」

「何言ってるの。これは当然の報いよ」

島田を説教していた。その隣には明久が倒れて気絶しており、散々殴られただけでなく頭から血が出ている……まるで何かに叩きつけたかのように。

「だからと言って意識を失っている明久を殴り続けるだけでなく、頭を掴んで廊下に叩き付けるのはダメだろうが」

「ふん！　元はと言えば吉井が悪いのよ！　ウチを偽者呼ばわりしただけでなく、気遣いまで無下にしたんだから！」

「前者は気の毒に思うが、後者はお前が普段から明久に暴力を振るっている故だ」

すぐに手が出る悪い癖が無ければ、明久も対応が変わっていたんだがな。

「何よソレ！　まるでウチが悪いみたいな言い方じゃない！」

「事実を言ったまでだ。と言うかお前は全く自覚が無いみたいだな。少しは自分の行動を反省したらどうだ？　そんな事ばかりしている

から、お前の明久に対する想いが伝わらないんだぞ」

「！！！！」

島田は俺の最後の台詞に顔が真っ赤になった。

「な…何言ってるのよ！？　う…ウチは吉井の事なんて……！」

「そうか、ならコレだけは言っておく。何時までもそんな状態が続いていても、明久はお前に恋愛感情は抱かずに友達関係のままで終わる」

「！！！！」

「それが嫌なら、すぐに手が出る悪い癖を直して……」

俺が言っている最中……。

「ウチは吉井に恋愛感情なんて抱いていないわ！！　それに今までの事は全部吉井が悪いのよ！！」

島田はいきなり大声で怒鳴りながら何処かへと去っていった。

「……はあっ……人が説教している最中に逃げ出すとは……。島田には困ったもんだ」

俺は島田の行動に溜息を吐きながら呆れ、倒れている明久を担ぎ……。

「……どうせ捕まえて説教を再会した所でまた逃げ出すだろうな。

全く、我侭な子供を相手にしているみたいだ……」

愚痴りながら教室へと戻って行った。

「明久、お前にも問題があるんだからな」

気絶している明久にも突っ込みを入れて。

時刻は午後四時過ぎ。

「……ここはどこ？」

「やっと起きたか」

教室にて気絶していた明久が漸く起きた。

「あ、気が付きましたか？」

俺の隣にいた姫路が目を開けた明久に声を掛けると、明久は癒されているような顔をしている。

「心配しましたよ？　天城君に連れてこられた吉井君ってば、まるで誰かに散々殴られた後に頭から廊下に叩きつけられたような怪我をしていたんですから」

まるで見たような姫路の推測に俺は内心で正解と言う。

「いくら試召『戦争』じゃからと言って、本当に怪我する必要は無いんじゃぞ」

違うぞ秀吉。明久が怪我をしたのは味方である島田がやったんだよ……いや、戦争と言うより虐殺同然だったが。

「ちょっと色々あってね。それで試召戦争はどうなったの？」

明久は何でもないように言いながら畳に横たわっている体を起こして、試召戦争の事を聞き出す……痛そうな顔をしながら。

と言うか明久、お前はあれだけの事をちょっとで済ませるのか？俺だったら即行で島田に詰め寄っているぞ。

「今は協定どおり休戦中じゃ。続きは明日になる」

「戦況は？」

「一応計画通り教室前に攻め込んで、天城が出来るだけＢクラスの数人を補習室送りにさせた。もっとも、こちらの被害も少なくは無いがな」

坂本がＦクラスの被害を書いたメモを読み上げる。予想してたとは

言え、被害がかなり多い。俺は後半から廊下戦に加わって多少の戦果は上げたが、全体としてはあまり良くない。

「ハプニングはあったけど、今のところは順調って訳だね」

「まぁな」

「だが相手は根本だから油断は出来ない。奴の事だから他にも何か企んでいる筈だ」

「そうだな。あの根本が教室の嫌がらせ程度で終わらせるような奴じゃない」

俺の言葉に坂本は頷く。次はどんな狡猾な手を使うのやら。

と言うか和人、いくら根本が代表だからと言って少しは反抗してくれ。これ以上、根本を調子に乗らせていたら度が過ぎる行動を取りそうな予感がする。

俺がここにいない和人に愚痴っていると……。

「……（トントン）」

「お、ムッツリーニか。何か変わったことはあったか？」

土屋が背後から坂本の肩に指を突っついていた。

そう言えば土屋は戦いには参加せずに情報係として、周囲の警戒をしていたな。隠密行動が得意な土屋にとっては打って付けの任務だ……そのスキルは盗撮にも使っているが。

まあ土屋に盗撮関係の説教をした所で無駄なのは分かっているから、俺は敢えて何も言わない。ああ言う奴は一度警察に捕まらなければ分からない奴なのだから。だからと言って俺は警察に連絡する気は無いがな。

「ん？　Ｃクラスの様子が怪しいだと？」

「……（コクリ）」

情報を聞いた坂本は聞き返すと、土屋は首を縦に振る。

「おい土屋、坂本だけじゃなく俺達にも教えてくれ」

「……説明する」

俺の言葉に土屋は周りに聞こえるように話を始める。

土屋が入手した情報を端的に言うと、Ｃクラスが試召戦争の用意を始めているとの事だ。

「漁夫の利を狙うつもりか。いやらしい連中だな」

「確かにそうだが、実際の戦争ではよくある事だ。確実に勝つ為には有効な手段の一つでもある」

「……」

「どうした？」

俺の台詞を聞いた坂本は無言になりながらこっちを見てくる。

「いや、意外だと思ってな。正々堂々と戦う天城が何かしらの不満を言うかと思ってたが」

「個人戦なら不満を言ってるが、集団戦は別だ」

「……そうか」

「と言うか坂本、今はそんな事どうでもいいだろう。Cクラスの方はどうするんだ？」

「んー、そうだなー」

坂本は考える顔をしながらちらりと時計を見る。現在の時刻は午後四時半。時計を見た坂本は何かを決断したかのように俺達の方に顔を向ける。

「Cクラスと協定を結ぶか。『Dクラス使って攻め込ませるぞ』ってとか言って脅してやれば、俺達に攻め込む気も無くなるだろ」

「それに、僕らが勝つなんて思ってもいないだろうしね」

明久は坂本に賛成しながら頷く。

確かに坂本の言うとおりの事をすれば、Cクラスもすぐには試召戦争を開始しないだろう……けど妙だな。どうしてCクラスがこんなタイミングで試召戦争をやろうとしているのか。漁夫の利を狙うにしても何か都合が良すぎる気がする。

「よし、それじゃ今から行って来るか」

「そうだね」

俺が考えている最中に坂本たちはCクラスに向かおうとしている。

「坂本、行く前にちょっといいか？」

「何だ？　質問ならCクラスに行った後にして欲しいんだが」

「まあちょっと聞いてくれ。Bクラスとの協定は無視していいのか？　一応奴等とは今から明日の午前九時までは“試召戦争に関する一切の行為を禁止”するって結んでいる筈だが。俺達がCクラスと協定を結んだって事を、もしBクラスに知られたらどうするんだ？」

「……それは俺も考えてはいたが、Cクラスの行動を無視する事は出来ないからな。あくまで俺達FクラスとBクラスの中での話しだ。Cクラスはそんな事をしているのは知らないだろう。たとえBクラスに何か言われたとしても黙ってればいいだけだしな」

「……」

坂本の返答に俺は未だに納得出来なかった。けど坂本の言ったとおりCクラスは無視出来ないし、Bクラスとの協定と言っても口約束に過ぎない。白を切ればそれで終わるだろう。

だが……本当にそれで大丈夫なのだろうか。

「まだ納得してないみたいだが、取り敢えず天城もCクラスに行くぞ」

「……ああ」

俺は渋々と坂本達と一緒にCクラスに行こうとするが……。

「秀吉は念の為ここに残ってくれ」

「ん？　何じゃ？　ワシは行かなくて良いのか？」

坂本は秀吉に待機の指示を出した。やはり坂本も後々の事を考えているみたいだな。

「お前の顔を見せると、万が一の場合にやろうとしている作戦に支障があるんでな。俺も天城と同様に多少の不安があるからな」

「よく分からんが、雄二がそう言うのであれば従おう」

素直に引き下がる秀吉。万が一と言う事はCクラスに何かをやるって事か。まあ考えがあるなら俺は何も言わんが。

「じゃ、行こうか。ちょっと人数少なくて不安だけど」

秀吉を残して、明久、坂本、姫路、土屋、そして俺がCクラスへと向かう。

と、その時……。

「吉井、アンタの返り血こびり付いて洗うの大変だったんだけど。どうしてくれんのよ」

「それって吉井が悪いのか？」

廊下に出ると、ハンカチで手を拭っている島田と鞄を肩に担いでいる須川に会った。

ってか島田、返り血が付いたのをあたかも明久の所為にしているが、そうなったのはお前だろうが。

「あ、島田さんに須川君。丁度良かった。Cクラスまで付き合ってよ」

明久も明久でさっきの出来事を忘れているかのように島田に話しかけている。お前は島田にやられた事に対して何とも思わないのか？

普通はあんな事されて話しかけないと思うんだが。

「んー、別に良いけど？」

「ああ。俺も大丈夫だ」

須川はともかく、島田もさっきの事を忘れているかのように明久の誘いを承諾する。

……何でこの明久と島田はこんな仲良さげに話せるんだ？　おかしくないか？　本当にさっきまでの虐殺を忘れているのか？

「……」

「どうかしたか、天城？」

明久と島田の会話を見ている俺に坂本が声を掛けてくる。

「……坂本、明久と島田は去年からああなのか？」

「そうだな。あの二人は事が済んだら、何も無かったかの様な感じで普通に話しているぞ」

「……理解出来ん」

「ま、明久はバカだから、何でも自分が悪いと決めて甘んじているからな」

「……そのバカである明久を利用して陥れている奴は俺に何度も説教されているがな。懲りずに何度も、ね」

「……」

俺の突っ込みに坂本は何も言い返す事が出来ずに目を逸らすのであった。

島田と須川を加えた俺達七人はCクラスへと着いた。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。このクラスの代表は？」

教室の扉を開いて早々に坂本は大きな声を出して告げる。

Cクラスの教室には帰っている生徒が余りおらず、かなりの人数が残っていた。やはり土屋の情報通り、漁夫の利を狙って試召戦争の準備をしているな。

しかし分からんな。何故Cクラスはこんなに早く試召戦争をやろうとしている？　俺達Fクラス側は設備が酷い理由で入学早々に試召戦争をやっているのだが、Cクラスにそんな理由は無い筈だ。もしやるとしても召喚獣の操作が慣れるまで時間を置いて挑もうとするのだが。

「私だけど、何か用かしら？」

俺達の前に出てきたのは黒髪のベリーショートにした気が強そうな女子だ。確か小山友香だったか？　バレー部のホープとか呼ばれているみたいだが。

「Fクラス代表としてクラス間交渉に来た。時間はあるか？」

「クラス間交渉？　ふぅん……」

坂本の問いに小山はいやらしい笑みを浮かべている。俺の勝手な予想だが、コイツはあまり性格が良く無さそうだ。

あの笑みなんか根本に似ていそうで……ん？　ちょっと待て、去年の俺のクラスメイトの女子が小山は彼氏がいるって聞いた事があったな。確かその彼氏は……ハッ！　不味い！

「ああ。不可侵条約を……」

「待て坂本！！　それ以上は言うな！！」

「ん？　どうした天城？」

俺が坂本が言っている最中に大声を出して遮ったが……。

「不可侵条約ねぇ……。どうしようかしらね、根本クン？」

チッ！　やはり聞こえていたか！！

「当然却下。だって、必要ないだろ？」

「なっ！？　根本君！　Ｂクラスの君がどうしてこんな所に！」

Ｂクラス代表の根本がいきなり出てきた事によって、明久は驚愕の声を出す。

やはり根本が潜んでいたか……小山の彼氏である根本が俺達Ｆクラスに協定を結んだ理由はこの為だったか。

「酷いじゃないかＦクラスの皆さん。協定を破るなんて。師匠戦争に関する行為を一切禁止したよな？」

「何を言って……」

「先に協定を破ったのはソッチだからな？　これはお互い様、だよな！」

明久の言葉を無視した根本が告げると同時に、他のＢクラス生徒達が動き出した。その中には和人もいる。アイツが言った『この後』とはこう言う事だったみたいだな。

和人は俺を見て申し訳無さそうな顔をしているが、今はそんな事を気にしている場合じゃない……げっ！　数学の長谷川先生を連れて来ているのかよ！　よりにもよって俺の苦手科目で……。

「長谷川先生！　Ｂクラス芳野（よしの）が召喚を……」

「させるか！　Ｆクラス須川が受けて立つ！　試獣召喚（サモン）！」

Ｂクラス芳野が坂本に対して攻撃を仕掛けようとした所を、間一髪で須川が身代わりになった。良い判断だ。もし代表の坂本がやられたらＦクラスの敗北が決定するからな。

「僕等は協定違反なんてしていない！　これはＣクラスとＦクラスの……」

「無駄だ明久！　コイツ相手にそんな言い訳は通用しない！」

「天城の言うとおりだ！　根本は条文の『試召戦争に関する一切の行為』を盾に白を切るに決まっている！」

「ま、そゆこと♪」

あのヤロウ、こうなる事が分かっていたくせに抜け抜けと……！

「屁理屈だ！」

「屁理屈も立派な理屈の内ってな」

「明久！　天城！　ここは逃げるぞ！」

「ちっ！」

「くそっ！」

坂本の台詞に俺と明久は戦闘中の須川に背を向けて、Ｃクラスから離脱しようと駆け出す。

『Ｆクラス　須川亮　数学　４１点
ＶＳ
Ｂクラス　芳野孝之　数学　１６１点』

「逃がすな！　坂本を討ち取れ！　佐伯！　お前は天城を討ち取るんだ！」

背後から聞こえてくる根本の指示と複数の足音。おまけに和人を使って俺を倒そうとしてやがる。アイツの事だ、倒されるなら幼馴染の方が良いだろうと思って指示したに違いない。

ハッキリ言ってこれは本当に不味い。今のFクラスでBクラスを相手をするのは無理で、一番の戦力である姫路も数学の点数は消費している。恐らく根本は廊下戦で姫路が数学を消費していると知ったから長谷川先生を呼んだんだろう。卑劣な手で癪に障るが効果的な事には間違いない。

「はぁ、ふぅ……」

「姫路、大丈夫か？」

俺達が廊下を走っている最中に姫路が遅れ始めた。大して運動神経が無い上に体が弱いのだから、全力疾走は厳しい筈だ。

「あ、あの、さ、先に……行って、ください……」

息が物凄く上がっている姫路が言う。このまま姫路を連れていたら確実に追いつかれてしまう。だからと言って、ここで姫路を戦死させる訳にはいかない。姫路がいなかったら明日の試召戦争での勝率が大幅に下がるし、明久の事だから女の子を見捨てる事は出来ないと考えている筈だ。アイツは前からそう言う奴だからな。

「雄二！　シュウ！」

「なんだ明久！」

「いきなりどうした？」

明久の大声に坂本と俺が言い返すと、明久は立ち止まって……。

「ここは僕が引き受ける！　雄二とシュウは姫路さんを連れて逃げてくれ！」

自ら殿（しんがり）の役を立候補した。

やはりそう来たか。お前って本当に誰かの為に自分を犠牲にする奴だな。

「よ、吉井君、私の事は、気に、しないで……」

「……分かった。ここはお前に任せる」

姫路の言葉を遮って、坂本がそう応える。坂本も今のままだと姫路がやられると思ったから明久の提案を承諾したのだろう。

「……（ピタッ）」

「いや、ムッツリーニも逃げて欲しい。多分明日はムッツリーニが戦争の鍵を握るから」

一緒に立ち止まる土屋であったが、逃げるように言う明久。

「んじゃ、ウチは残っていいのかしら、隊長どの？」

「……頼めるかな？」

「はーいはい。お任せあれっと」

明久の隣に立って一緒に殿をやろうとする島田に、明久が頼む。

「……（グッ）」

土屋は明久に親指を立てながら走り去っていった。

「で、明久。お前が殿を務めるなら、当然何か策があるからなんだろう？」

「うん。僕に考えがある……ってシュウ！　何で君は逃げないの！？」

「お前だけに任せると何か失敗しそうな気がしてな。折角だから俺も付き合わせてもらうよ」

残っている俺に明久は驚いているが、俺はあまり気にしないように言い返す。

「……僕ってそんなに信用無い？」

「いつもここぞと言う時に失敗しては、俺にいつもフォローされているのは誰かな？　必要ないんだったら俺はこのまま逃げるが？」

「……お願いします。どうか僕と一緒に残って下さい」

俺の言葉が聞いたのか、明久は俺に残ってくれと言ってきた。

「素直でよろしい。と言う訳で島田、俺も残らせてもらうからな」

「……あっそう。勝手にすれば」

島田は面白く無さそうな顔をしながら背ける。大方、俺がいる事に

明久と二人だけで戦うのが出来ない事に不満なんだろう。それに試召戦争中に俺が説教した件もあってか、俺の顔をまともに見ようとしない。

まあ俺としては今はそんな事どうでもいいので、取り敢えず向かって来るBクラスの方に意識を集中する。

と、その時……。

「漸く追いついたよ、修哉」

俺達の目の前にいきなり和人が現れた。

「和人……」

「うわっ！　いつの間に!?」

「アンタいつからそこにいたのよ!?」

和人のいきなりの登場に俺は大して驚いていないが、明久と島田は物凄く驚いた顔をしながら和人を見ている。

相変わらず神出鬼没な奴だな。他のBクラスより先に行って一番に着いたんだろう。以前から和人はいきなり現れては姿を消したりしているから、俺はもういつもの事だと思ってもう慣れている。

「さて修哉、根本に指示通り俺と相手をしてもらうよ」

「何よソレ！　まるでウチと吉井は眼中に無い言い方ね!!」

「おっと失礼。そう言う風に言ったつもりは無いんだが、そう捉えてしまったなら謝罪するよ。申し訳無い」

「なっ……」

島田の憤りに和人は訂正しながら手を胸に当てて頭を下げる。その事に島田は和人の突然の謝罪に大きく戸惑って顔を赤らめた。

コイツは試召戦争中で女子が敵であっても優しく接するんだな。感心するか呆れるべきか……そんなのはどっちでも良いか。

けど……。

「……やっぱり佐伯君は僕の敵だ」

明久は小声で言いながら和人を目の敵にしている。女子にモテる和人に、その逆である明久にとっては男の敵と認識している。

「ねえシュウ、佐伯君は僕が相手していいかな？　今だったら佐伯君を倒せるかもしれない」

「バカ。今のお前じゃ和人の相手にならん」

「修哉の言うとおりだぞ、吉井。そんな怒り狂った状態で俺に襲い掛かっても無駄だ。お前は以前から俺に突進して来ては、勝手に自滅しているんだからな」

「……佐伯君はともかく……酷いよ、シュウ」

明久が黒いオーラを出して笑みを浮かべながら俺に和人の相手をさ

せろと言うが、俺だけでなく和人にも無理だと言い返されていじけてしまった。

和人とそんなやり取りをしている時……。

『いたぞっ！　Ｆクラスの吉井と島田と天城だ！』

『ぶち殺せ！』

『佐伯く～ん！　私達が掩護するわ～！！』

和人以外の追っ手が追いついて来た。長谷川先生も一緒だ。

やっぱり数学で相手をしなければいけないか。和人は俺と違って数学が得意だから、こっちはかなり不利だ。おまけに他の追ってもいるからな。まあそんな事を言ってる場合じゃないから、やるだけやるしかない。

「Ｂクラス！　そこで止まるんだ！」

と、俺が召喚獣を出そうと思った矢先に明久が突然大きな声を出して、Ｂクラスを呼び止めた。

「良い度胸だ。たった三人で食い止めようってのか？」

「いや、その前に長谷川先生に話がある」

長谷川先生だと？　一体何を話すつもりだ？

「何ですか、吉井君」

明久に呼ばれた事で長谷川先生が前に出てきた。

「Ｂクラスが協定違反をしている事はご存知ですか？」

どうやら明久は審判である長谷川先生に違反の事について訴えるつもりみたいだな。

「話を聞く限り、休戦協定を破ったのはＦクラスのようですね。そこで反撃を受けて協定違反を訴えるのは、戦争云々以前に人としてどうかと思いますよ」

やはり長谷川先生は根本に前もって言い包められたみたいだな。根本自身が仕組んだ事は伏せて、全てＦクラスが悪いように説明したに違いない。

さて、ここまでは予想通りの返答だ。果たして明久はどんな風に言い返すのやら。

島田も島田で明久に期待するかのように片目を瞑っている。

そして……。

「……万策、尽きたか……」

『コイツ馬鹿だぁーっ！』

明久の台詞に此処にいる全員が明久を罵倒するのであった。

コイツは本当にもう……バカだ。和人も完全に呆れ顔だよ。

とは言え、俺は明久のバカな行動は既に予想していた。此処は俺が出て何とかしよう。

まだ戦闘前だから此処でＢクラスと戦わずに済むかもしれないからな。

「あー、明久のバカは放って置いて下さい。長谷川先生、俺から話があります」

「何でしょうか、天城君」

俺が前に出ると長谷川先生はこっちを向いて来る。俺を見て今度はちゃんとした回答を持って言うのだろうと思って真面目な顔をしていた。

「長谷川先生は根本から話しを聞いたんですよね？」

「ええ。根本君がＦクラスは自分達Ｂクラスが提案した協定を破ったと言われて私が来ました」

「それは根本本人がちゃんと言ったんですか？」

「勿論です」

「ふむ……」

俺の質問にＢクラスは『何言ってるんだコイツ？』みたいな顔をしている……和人は何か期待していそうな顔をしているが。

「質問はそれだけですか？」

「いえ、まだ他にもあります。長谷川先生は根本に言われて、一緒にＣクラスに潜んでいましたね？」

「そうです」

「根本が俺達Ｆクラスが Ｃクラスに協定を結ぼうとしていたのを見て、違反だと判明して戦争の承認をしたんですよね？」

「ええ……と言うか天城君。どうしてそう言う質問をするのですか？　私には全く理解出来ないのですが」

長谷川先生は俺の質問の意図が分からず、一体何を聞いているのだと不可思議な顔をしている。他のＢクラス生徒達も同様だ。

だが……。

「……ふふふ、成程ねぇ～。流石は修哉だ」

和人が小声で呟いていた。どうやら和人は感づいているみたいだな。

だがまだ続けさせてもらうぞ。

「おかしいとは思いませんか？　俺達がやろうとしていたのはＦクラスとＣクラス内での協定です。ではどうしてＢクラス代表である根本は俺達ＦクラスがＣクラスに協定を結ぼうとしている事を何処で知ったんですか？」

『！！！！』

俺の質問に長谷川先生と明久や島田、そしてＢクラス生徒達は俺の質問の意図が分かった途端に驚愕した……和人だけは笑みを浮かべていたが。

「それは……確かに妙ですね。どうして根本君は知っていたんでしょうか」

「何処からか情報が漏れない限り知る事は出来ません。当然ＦクラスはＢクラスにそんな事教えてはいません。何しろＣクラスとの協定は試召戦争を中断してすぐに代表の坂本が急遽考えた物ですから」

「ふむ……」

「もしかしたら……Ｃクラスは根本から情報を得て、俺達Ｆクラスが協定を結ぼうと前もって知っていたんじゃないんでしょうか？　そうでなければ、Ｂクラス達がＣクラスの教室に潜んではいませんからね」

「そうですね。考えてみれば天城君の言うとおり、Ｂクラスがどうして知っているのかが引っ掛かります」

長谷川先生が俺の言葉に頷くと、Bクラス達は不味いと言うような顔をしている。和人は未だに笑みを浮かべているが。

と、その時……。

「長谷川先生!!　ソイツの言っている事は出鱈目です!!」

根本が急に現れては長谷川先生に出鱈目とデカイ声で言って来た。

態々自分から来てくれるとはな……手間が省けたよ、根本。

「しかし根本君、天城君の話しを聞く限り、君はどうやってFクラスがCクラスに協定を結ぼうと知っていたのですか?」

「そ…それは……」

「私が君から聞いた話では、Fクラスが先に協定を破ったと言われて来たんです。これはどう言う事ですか?」

「あ……いや……その……」

根本は長谷川先生の質問に返答する事が出来ないみたいだ。だが根本、まだ追い詰めさせてもらうぞ。

「そう言えば根本、お前は付き合っている女子がいたよな?」

「そ…それがどうした!?」

「確か俺の記憶によれば、根本が付き合っている彼女って……Cクラス代表の小山友香じゃなかったか?」

「なっ！？」

何で知っているんだ！？　と言うような顔をしているな。まあそんな事はどうでもいい。

「もしかしてお前は、彼女である小山と結託していたんじゃないか？　そうでなければＣクラスがいきなり試召戦争をやるだなんて言い出さないし、俺達ＦクラスがＢクラスとの間に結んだ協定は知らない筈だからな。さあ、何か言い返すことはあるか？　俺の言っている事が何処か間違っていたら教えてくれ」

「う……あ……」

顔を青褪めている根本は完全に追い詰められている。

「何も言い返さないと言う事は事実みたいだな。長谷川先生、どうやら根本がＦクラスより先に協定を破っているみたいです」

「そのようですね。では根本君、Ｃクラス代表の小山さんと一緒に話しを聞かせて貰いましょうか？」

「……こ……今回の出来事は無かった事にして下さい！！」

そう言った根本は早々に去って行くのであった。

そして……。

『おい根本！　自分だけ逃げようとするな！！』

他のＢクラス生徒達も根本に続いて去って行った……和人だけは残っている。

「やれやれ、逃げた所で後日聞くつもりなんですが」

「長谷川先生、そんな事をする必要はありません。それは俺達の方で処理しますので」

「そうですか。では私はこれで失礼します。それと疑ってすいませんでしたね、天城君」

「いえいえ、お気になさらず」

「ではこれにて」

長谷川先生がそう言って職員室へと戻っていった。

「す……凄いよシュウ！！　あんな土壇場で逆転するなんて！！」

「アンタ一体どんな手品を使ったのよ！？」

先程まで呆然としていた明久と島田が急に息を吹き返したかのように、俺を問い詰めるかのように言ってくる。

「落ち着け二人とも」

「これが落ち着いている訳無いでしょ！！　だってシュウは戦う前からＢクラスを退かせたんだから！」

「さっさと教えなさいよ！！」

あーもう、この二人は……落ち着いて話しをする事が出来ないな。

と、その時……。

パチパチパチパチッ！

「いや～流石だったよ、修哉。見事な大逆転だったよ」

「「！！！」」

「和人、お前いたのか」

和人は拍手をしながら俺に賛辞の言葉を述べた。その事に明久と島田は驚きながら和人を見ている。

「根本を見てて滑稽だったよ。修哉にあそこまで言われて何も言い返せなくなったんだから。笑いを抑えるのが大変だった」

「あのな……俺はお前の代表である根本を追い詰めたんだぞ？普通は同じクラスメイトとして助ける筈だが？」

「生憎、俺はあんな卑怯な手段でしか勝てない小物を助ける気は無い」

「「なっ！？」」

同じクラスメイトだと言うのに根本を小物扱いする和人に、明久と

島田は驚く。

「だとしても、あそこでお前が助けなければ要らぬ疑いを掛けられるんじゃないのか？　俺とお前が幼馴染だって事を根本はもう知ってるし」

「あの状況で言い返せなかったら、俺が助けた所で勝手に自滅しそうだったからな。だから敢えて助けなかった」

「そうかい……で、和人がまだ此処にいるって事は、俺に用があるのか？」

「用が無ければいちゃダメなのかい？　つれないねぇ～修哉は」

「別にそんな事は言ってないが……と言うか戻ったほうが良いと思うぞ。遅れて戻ってきたら根本が何を言い出すか分からんし」

「それもそうだね。では戻るとしよう。じゃあまた明日の試召戦争で会おう。吉井、島田さん、失礼するよ」

「あ…うん」

「え…ええ」

和人は俺達に別れを告げると、ゆったりと教室へ戻るが……。

「ああ修哉、言い忘れてた。明日の試召戦争で俺は真っ先にお前と戦うからな。無論、正々堂々の勝負だ」

「そうか。だからと言って数学で挑まれるのは御免だが」

「そんなアンフェアな真似はしない。お互い得意科目である英語で勝負だ。じゃあな」

俺に対する宣戦布告を言って去って行った。

「やれやれ、真っ先に勝負を挑まれるとは……」

「「……」」

「どうした二人とも？」

無言になっている明久と島田に俺が問いかける。

「いや……佐伯君の事は前から知ってたけど……あんなにハッキリとシュウに正々堂々な発言をすると……」

「意外ね。Ｂクラスの代表が根本だから、てっきり卑怯な事をする奴だと思っていたけど……」

「和人は真っ向勝負を好む奴だからな。特に俺との勝負は……まあそんな事より、取り敢えず教室に戻って坂本に報告だ。行くぞ」

「そ…そうだね」

「ええ……って何でアンタが仕切るのよ」

そして俺と明久と島田は教室に戻るのであった。

第十一問

バカテスト　英語

問　以下の問いに答えなさい

『ｇｏｏｄおよびｂａｄの比較級と最上級をそれぞれ書きなさい』

姫路瑞希の答え

『ｇｏｏｄ　－　ｂｅｔｔｅｒ　－　ｂｅｓｔ
ｂａｄ　－　ｗｏｒｓｅ　－　ｗｏｒｓｔ』

天城修哉の答え

『ｇｏｏｄ　－　ｂｅｔｔｅｒ　－　ｂｅｓｔ
ｂａｄ　－　ｗｏｒｓｅ　－　ｗｏｒｓｔ』

教師のコメント

その通りです。

吉井明久の答え

『ｇｏｏｄ　－　ｇｏｏｄｅｒ　－　ｇｏｏｄｅｓｔ』

教師のコメント

まともな間違え方で先生驚いています。Ｇｏｏｄやｂａｄの比較級と最上級は語尾に－ｅｒや－ｅｓｔを付けるだけではダメです。覚えておきましょう

土屋康太の答え
『ｂａｄ　－　ｂｕｔｔｅｒ　－　ｂｕｓｔ』

教師のコメント
『悪い』『乳製品』『おっぱい』

俺と明久と島田が教室に戻っている最中の事。

「突然だが明久、ちょっと聞いてもいいか？」

「なんだい？」

「もし俺が残らずに、Ｂクラスと戦う事になったらどうやって切り抜けようとした？」

俺のちょっとした質問に明久は……。

「その時は逃げる事に専念して島田さんに消火器を使わせようと……」

「……それは本人がいる時に言う台詞じゃないな」

「あ……」

「……吉井、アンタ今度は本当にウチを実行犯にさせようと考えていたみたいね」

安心しきって思わずボロを出してしまい、俺はともかく島田は怒った顔をしていた。

「ご…ゴメン島田さん！」

「どうやらアンタはもう一回お仕置きをした方がよさそうね」

ポキポキと指の骨を鳴らして明久に近づこうとする島田。

どうやら俺は余計な事を聞いてしまったようだ。ここは俺が責任を持って対処しよう。

「島田、ここで明久を殴るなら、俺はお前を気絶させてでも止めるぞ。それが嫌なら拳を引っ込める事だな」

「……」

俺が本気だと思わせる雰囲気を出すと、島田は拳を引っ込め……。

「……吉井、許す代わりにウチの言う事を聞いてもらうわよ？」

「は…はい！　僕に出来る事なら何なりと！」

許す条件を出すと、明久は即座に答えた。少しは利口になったみたいだな。

「それじゃ、先ずは呼び方から変えてもらいましょうか」

「変える！　変えさせて頂きます！」

「じゃ、今後ウチはアンタの事を『アキ』って呼ぶから、アンタはウチの事を『美波様』って呼ぶように」

「み、美波様！　これでいい！？」

「……」

俺は島田の呼び方に少しばかり呆れた。『美波様』ってお前、女王様気取りでもしたいのか？

「今度の休み、駅前の『ラ・ペディス』でクレープ食べたいな～」

「おのれ！　僕が塩水で生活していると言うのに何と言う贅沢を……って！　お…奢ります！　奢らせて頂きますから殴ろうとしないで下さい美波様！」

呼び方の次は集りか……断ったら殴ろうとする脅しは気に食わんが、まあそれぐらいは見逃してやろう。

「よろしい。じゃ、最後に」

「まだあるの！？　もういいでしょう！？」

何か段々調子に乗り始めてきているな。そろそろ止めるか？

俺が割って入ろうとしたが……。

「ウチの事を愛してるって、言ってみて！」

「ウチの事を愛してる！」

「……」

……急にやる気が失せたので、俺はさっさと教室に戻った。

「戻ったぞ」

「ん？　って天城！　戻って来るの早くないか！？」

俺が教室に入ると坂本を始め、秀吉達も俺を見て驚いている。

「Ｂクラスと廊下で戦う前に退けさせたからな。だからこんなに早く帰ってこれた」

「何だと！？」

俺の言葉に坂本達は驚愕の顔をしていた。

「おい天城、それは一体どう言う……」

「天城君！　吉井君はどうしたんですか！？」

坂本が俺にどうやったかを聞こうとしたが、姫路が突然俺に詰め寄ってきた。

「吉井君が此処にいないって事は……まさか！」

「落ち着け、姫路。明久と島田も今戻ってくる。ほら、丁度いいタイミングで戻って来た」

「え？」

姫路が俺の後ろを見ると……。

「何か疲れた感じがする」

「よ、吉井君！　無事だったんですね！」

戸が開いて明久が教室に入ってくると、姫路がすぐに明久へと駆け寄った。

そんな姫路に明久は鼻の下を伸ばしていた……姫路の揺れている大きな胸を見て。

「うん。今回はシュウのおかげでいだぁっ！」

「ふんっ！」

姫路の胸に見とれていた明久に島田が、明久の爪先を思いっきり踏んだ。

おい島田、そんな事で嫉妬するなよ。心が狭い奴だと思われるぞ。

「し、島田さん、僕が何か悪い事でも……」

「（キッ！）」

「あ。い、いや。美波」

射殺すような眼光で睨んでいる島田に、明久は怯みながらも島田を名前で呼んだ……様付けはしなかったみたいだが。

まあ本人も何も言わないって事は気にしていないんだろう。

「……随分二人とも仲良くなったみたいですね？」

「え？　これで？」

明久と島田のやり取りに、姫路は面白く無さそうな顔をして見ていた。

何だ。姫路の方も明久の事が気になるみたいだな。良かったな明久、片思いじゃなくて。

「お。明久と島田も戻ったか。お疲れさん」

「お主等も無事じゃったようじゃな」

「ん。ただいま……と言っても、僕達は何もしていないんだけどね」
坂本と秀吉も明久に労いの言葉を掛けながら寄っている。土屋の方も明久を見て小さく頷いていた。
そして……。
「さて天城、聞かせてもらおうか。お前が言った戦う前にBクラスを退けたって事をな」
「修哉よ、お主はどうやってBクラスを退かせたのじゃ？」
「……俺も聞きたい」
「わ…私も聞かせて下さい」
明久と島田を除くFクラス全員が俺の方を見てきた。
「分かった。では説明しよう」
「ホントに凄かったんだから！　シュウがいなかったら僕達やられてたかもしれないからね！」
「ウチは手品かと思ったわよ」
「明久と島田、知っているとは言え少し静かにしてくれ」
坂本が二人を静かにさせると、俺は廊下での出来事を説明し始めた。

説明して5分後

「と言う訳だ」

「成程な……その手があったか。俺とした事が焦ってて考えていなかったな。それに根本がCクラス代表の小山とそんな関係だったとは……よく知ってたな、天城」

「去年のクラスメイトが言ってたのを思い出してな」

坂本が俺に賛辞を呈すると……。

「凄いのじゃ修哉！」

「……見事」

「す…凄いですね～天城君。私にはとても出来ません」

秀吉、土屋、姫路も感心しながら賛辞を呈した。何か妙に照れ臭くなるな。別にそんな凄い事じゃないんだが……まあいいか。

「明久が戦闘を始める前に長谷川先生を呼んでくれたから戦わずに済んだしな」

「うんうん、僕のお蔭で助かったんだよね」

「調子に乗るな、明久。俺がいなかったら、あのままBクラスと戦う事になっていただろうが」

「……ゴメン」

明久が調子付く前に釘を刺しておく。こうでも言わなければ明久は天狗になるからな。

「とは言え、坂本。Bクラスと戦うのを明日に持ち越して勝ったとしても、今度はCクラスが即行で仕掛けるぞ」

「そうだな。同盟戦が無い以上は連戦と言う形になるだろうが、正直Bクラス戦の直後にCクラス戦はきつい……ってか天城、長谷川先生にCクラス代表を問い詰める必要は無いって説明の際に言ってたが、何でやらなかった？」

「お前の事だ、Cクラスが敵になった際の対処を既に考えているんだろう？　長谷川先生に任せるより小山をもっと無様にする方法を……」

「え？　そうなの、雄二？」

俺の台詞に明久が坂本に問いかけると……。

「……よく分かってるじゃねえか」

坂本が正解と言わんばかりの顔をしながら感心していた。

「で、Cクラスをどうするつもりだ？」

「それは明日の朝に説明して実行する。目には目を、な」

そして続きは翌日へと持ち越しになった。

その頃、Bクラスでは

さて、根本の様子は……おやおや。

「くそっ！　くそっ！　くそっ！　Fクラス風情がよくもこの俺に恥を……！」

教室に戻ると、根本は地団太を踏みながら喚き散らしていた。他の

Bクラス達は根本に八つ当たりをされたくないのか、遠目で見ている。

「随分と荒れているなぁ～根本」

「五月蝿いぞ佐伯！！」

根本は戻って来た俺に早々八つ当たり染みた怒鳴り声を出してきた。
これは修哉の予想通り、何か突拍子も無い事を言いそうだな。

「作戦が失敗したからと言って、そんなに怒鳴り散らすなよ。たった一回失敗した位で……」

「どう言う事だ！！　お前から聞いた情報とは全く違うじゃないか！？」

俺が言ってる最中だと言うのに聞く耳持たない状態だな。

「何がだ？」

「惚けるな！！　お前の幼馴染である天城の事についてだ！！」

「俺は嘘を吐いてはいないんだが……」

「佐伯の情報では、『天城は前衛で戦う事のしか出来ない能無し』だって言ってたろうが！！」

「……俺はそんな風に言った覚えは無い。『修哉は基本的に真っ向勝負で挑む前衛タイプだ』って言ったんだ。誰も能無しだなんて一言も言ってない」

情報を歪めないで欲しいものだ。何で俺が修哉を罵倒したかのような情報になっている。不愉快だな。

「じゃあさっきのアレは何だったんだ!?　お前の言った前衛タイプが何故あそこまで頭が回る!?」

「あんなの冷静に考えれば、誰でも出来るだろう」

「Fクラスにそこまで考える連中なんかいないだろうが!!」

「修哉は考えてたぞ？　ってかさっきも言ったが怒鳴り散らすな。耳が響く」

こんな近くで怒鳴られたら鼓膜が破れそうだ。現に他の連中も耳を塞いでいるし。

「それにお前、あたかも俺の所為みたいな言い方をしているな」

「当たり前だ！　じゃなかったら、天城が俺と友香が付き合っているって情報を何処で知ったんだ!?　ソレを知った所為で俺は数学の長谷川に……！」

根本はそんな事を気にせずにまた怒鳴る。

おいおい、俺は修哉にそんな事を教えた覚えは無いんだが。それと教師を呼び捨てにするのはどうかと思うぞ。

「知るか。修哉が何処かで聞いたんだろ？　それと自分の失態を人の所為にするな。見苦しいにも程がある」

「そうさせたのはお前だろうが！！」

「だから俺は修哉にお前の事について何も教えてない。俺は根本の指示通りに動いて……」

「信用出来るか！！　勝手な事をした佐伯には罰を与える！！」

……もう小物に何を言っても無駄だな。いい加減に俺も我慢出来なくなりそうだ。

「俺を信用して欲しかったら、明日の試召戦争では天城を容赦なく叩き潰しガアッ！！」

「……黙れ」

根本が喋っている最中に俺は首を片手で掴む。その事に他のBクラス達は驚いているが、今はそんな事どうでもいい。

「俺はお前の指示通り動いているし、修哉に何も情報は与えていない。それなのに……」

「あ……がが……」

「人を勝手に密告者扱いするわ、罰を与えるとか……お前は何様のつもりだ？」

少々声を低くしながら殺気を出しているが、根本は余り聞いておらず俺の腕から逃れようと抵抗している。

これでは話が出来ないな。放してやるか。

「ゴホッ！　ゴホッ！　さ…佐伯！！　何のつもり……ヒィッ！！」

根本は俺の顔を見た途端に腰を抜かして尻餅を付いている。だがそんな事はどうでもいい。

「根本、余り調子に乗らないでもらおうか。俺はお前がＢクラスの代表だから従っているに過ぎない。だがな、自分の失態を俺に押し付けて罰を与えようとするのは従えないな」

「あ……あ……」

「そんな事をする暇があるなら、明日のＦクラスとの試召戦争で勝つ為の策でも考えているんだな。それと余り俺を怒らせようとするなよ？　ただでさえ試召戦争中にやった貴様の行動は不愉快だと言うのに、これ以上勝手な事を言うなら……お前が振り分け試験の際にやったカンニングを教師に報告するぞ」

「！！！！」

俺が根本にしか聞こえないように言うと、奴は顔を青褪めた。

おいおい、適当に言ったつもりだったんだが……まさか大当たりとはな。まあそんな事はどうでもいいか。

「な…何でお前がそれを……」

「そんな事を気にしている場合か？　……さあどうする？」

根本に問いかけると……。

「……わ…悪かった、佐伯。俺とした事が調子に乗り過ぎてた……」

流石にカンニングした事をバラして欲しくない為か、すぐに謝罪してきた。

立場が悪くなるとすぐ保身に走るか……とは言え、もしカンニングを教師に知られたら根本は代表じゃなくなり、それなりの重い処分も下されると思ったからこそ、こんな行動に出たのだろう。

根本は将来、己の地位を守る為なら何だってする悪党に成り下がりそうだな。

「そうか。なら明日の試召戦争で俺は即行で前衛に行かせてもらうぞ」

「も…勿論だ。好きにしてくれ」

よし、これで修哉と戦う準備が出来た。

後は怖がらせてしまった根本以外のBクラス達に謝罪とお願いをすれば良いだけだ。ふふふ……修哉、明日が楽しみだよ。

そして翌日

「昨日、天城に言った作戦を実行する」

現在、午前八時半過ぎ。既に登校済みの俺達に坂本は開口一番にそう告げた。さて、坂本はどんな作戦を実行するのやら。

「作戦？　でも、開戦時刻はまだだよ？」

明久は今日の九時に開始するBクラス戦の事を言っているのだろう。と言うか明久、お前は昨日俺が言ってた事を忘れてるのか？

坂本も明久の見当違いな発言に呆れている。

「Bクラス相手じゃない。Cクラスの方だ」

「あ、成程。それで何をすんの？」

「秀吉にコイツを着てもらう」

そう言って坂本が鞄から取り出したのは俺達の学校の女子の制服だった。

……待て坂本、作戦を行う以前に、その制服は何処で手に入れたんだ？　男のお前が女子の制服を持ってたら危険な感じがするんだが？

明久も俺と同様に坂本を信じられないような目で見ているし。一体坂本に何があったんだ？

「それは別に構わんが、ワシが女装してどうするのじゃ？」

待て待て秀吉、そこは構うだろうが。男のお前が女装する事に何の抵抗は感じないのか？

「秀吉には木下優子として、Aクラスの使者を装ってもらう」

……おいおい、秀吉を女装させて姉の木下を利用する気かよ。

確かに秀吉と木下は一卵性双生児かと思うほどよく似ており、違う個所と言えばテストの点数と話し方だ。

だからと言って秀吉を木下に化けてAクラスとして圧力をかけるのはどうかと思うんだが……やっぱり長谷川先生にCクラスを問い

詰めさせた方が良かった様な気がして後悔し始めて来た。

「と、言う訳で秀吉。用意してくれ」

「う、うむ」

坂本から制服を受け取り、その場で着替えようとした秀吉であったが……。

「待て秀吉」

「何じゃ？」

俺が待ったをかけて秀吉に近づいた。

「秀吉、そこの隅っこで着替えろ。坂本、俺と一緒に秀吉が見えないよう壁になれ」

「あ…ああ。それは構わないが」

俺の指示に秀吉は隅っこに立って着替え始め、俺と坂本は相手に見せないように壁として立った。

その事に……。

「シュウ！　何やってるんだよ！！」

「……そこをどけ！！」

『そうだそうだ！！』

案の定と言うべきか、俺と坂本を除く男子が一斉に抗議して来た。
土屋、お前は何故カメラを持っているんだ？　それで秀吉を撮るつもりか？

「おい天城、何でコイツ等はああなってんだ？　ってか俺とお前が壁になる必要があるのか？」

「奴等を見ると何故か危険な感じがした。それだけだ」

俺と坂本が男子達の抗議を無視していると……。

「よし、着替え終わったぞい。ん？　皆どうした？　と言うより修哉よ、ワシの着替えにそんな事をする必要があったのかの？」

秀吉が着替えを終えたみたいだ。

「さぁな？　俺にもよく分からん」

「気にするな、秀吉」

「おかしな連中じゃのう」

着替えを終えた秀吉が前に出ると、女子の制服を見た秀吉に男子達は複雑な表情をしていた。

それと同時に……。

「……無念！！！」

土屋がカメラを握りしめて物凄く悔しそうな顔をしていた。やっぱり着替え中の秀吉を撮ろうとしていたな。土屋の撮影行為を阻止出来て良かったかもしれん。

「んじゃ秀吉、Cクラスに行くぞ」

「うむ」

坂本が秀吉を連れて教室を出て行った。

「あ、僕も行くよ」

「俺も行く。何故か嫌な予感がするからな」

明久と俺は慌てて追いかける。

追いかけた俺と明久は坂本と秀吉と合流して暫く歩き、Cクラスを目の前にして立ち止まる。

「さて、ここからはすまないが一人で頼むぞ、秀吉」

秀吉が木下になってAクラスの使者に成りすます以上は、Fクラスである俺達が同行するのは不味い。それにより、俺達は離れた場所から様子を窺う事にする。

俺としては本物の木下が来ない事を願うんだが。もし木下が此処に来てCクラスの様子を見てしまったら、間違いなく木下は秀吉にお仕置きをする筈だ。そうならない為に俺が一緒に付いて行ったのである。

「気が進まんのう」

あまり乗り気じゃない様子の秀吉。それは当然だ。もしこれが木下に知られたら絶対に折檻されるだろうと予想しているのだから。

それを知っているのは俺が以前、休日に秀吉から家に招待されて遊んでいる時の事だった。その時に木下が下着姿で秀吉の部屋に入ってきた事によって、木下は羞恥で顔が真っ赤になりながらも秀吉を何処かに連れ込んでお仕置きをしていた事があったのだ。

あの時の木下を見て、弟には容赦しないタイプだと思った。それと同時に意外とルーズな所があるんだなと知ったら突然木下が現れて「もし学校に言ったらどうなるか分かってるわよね？」と言われて口止めされた。正直アレは恐ろしく、絶対に口外しないと即座に誓った。

とまあ、そんな事があったので俺は秀吉が木下に殺されないように一緒に来たのである。

「心配だなぁ……」

「シッ。秀吉が教室に入るぞ」

おっと、秀吉がいつの間にか教室に入ったみたいだな。

ガラガラガラ

秀吉がCクラスの扉を開ける音が聞こえた。

そして……。

『静かになさい、この薄汚い豚ども！』

……おい、ちょっと待て秀吉。何だその挑発は？

「流石だな、秀吉」

「うん。これ以上は無い挑発だね」

「いやいや待て二人とも、それ以前に可笑しいとは思わないのか？」

確かにあんな挑発をすればCクラスの敵意はAクラスに変わるんだが……もしこの事が木下にバレたら秀吉は絶対にタダでは済まないだろう。

『な、何よアンタ！』

教室の中から高い声はCクラス代表の小山だな。顔を見なくても怒っている事が容易に想像出来る。そりゃあいきなり豚呼ばわりされ

たら、誰だって怒る。

『話しかけないで！　豚臭いわ！』

コラコラ秀吉、自分から話し掛けたのに豚臭いってのは何だ？　ってか木下って普段からそんな事言ってるのか？　突っ込み所が満載なんだが。

『アンタ、Ａクラスの木下ね？　ちょっと点数良いからっていい気になってるんじゃないわよ！　何の用よ！』

小山は女装している秀吉を木下と見事に勘違いしている。まあ知名度としては秀吉よりもＡクラスの木下優子の方が高いからな。言うまでも無く小山は完全に騙されて冷静な判断力が無くなっている。あんまり賛同したくないが、見事な作戦である。

『私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの！　貴方達なんて豚小屋なんて充分だわ！』

『なっ！　言うに事欠いて私達にはＦクラスがお似合いですって！？』

待て小山、貴様は“Ｆクラス＝豚小屋”って方程式が成り立っているのか？　確かに汚いが豚小屋は無いだろうが。

『手が穢れてしまうから本当は嫌だけど、特別に今回は貴方達を相応しい教室に送ってあげようかと思うの』

……なあ秀吉、それは本当に木下が普段から家で言ってるのか？　もしそうなら俺は木下のイメージが物凄く変わって行くんだが。

『ちょうど試召戦争の準備もしているようだし、覚悟しておきなさい。近い内に私達が薄汚い貴方達を始末してあげるから！』

女装した秀吉はそう言い残し、靴音をたてながら教室から出て来た。

「これで良かったかのう？」

何故か妙にスッキリした顔をした秀吉がこっちに近づいてくる。なあ秀吉、お前は普段から木下に不満があったのか？

「ああ。素晴らしい仕事だった」

『Fクラスなんて相手にしてられないわ！　Aクラス戦の準備を始めるわよ！』

坂本が秀吉に労いの言葉をかけると、Cクラスの教室からは小山のヒステリックな叫び声が聞こえた。

……上手く行ったとは言え、根本と結託した小山に多少の罪悪感があるんだが。

「作戦も上手く言った事だし、俺達もBクラス戦の準備を始めるぞ」

「あ、うん」

そう行った坂本と明久はFクラスに戻り始めた。

「……なあ秀吉、ちょっと聞いて良いか？」

「何じゃ？」

俺は坂本と明久と一緒に付いて行ってる秀吉に問いかける。

「木下って家では何時もあんな感じなのか？　俺、木下に対するイメージがメチャクチャ変わったんだが……後で木下に聞いてみて良いか？」

「……そ…それは姉上に聞かないで欲しいのじゃ！！」

俺の問いに秀吉は顔を青褪めて、俺の肩をガシッと掴んできて迫るかのように見てきた。

「お願いじゃ修哉！　この事を姉上には黙っていて欲しいのじゃ！！」

「あのな……俺が黙った所で、いずれ木下の耳に入ると思うんだが」

「……」

追い討ちを掛けられたかのように秀吉はこの世の終わりみたいな顔をする。

そんな秀吉に俺は……。

「……ちゃんと木下に謝っておけよ。その時は俺もフォローしてやるから」

余りに気の毒すぎた感じがしたので助ける事にした。

「ほ…本当か修哉よ！」

「ああ。ってかそんなに顔を近づけなくても良いから」

「す…すまぬ」

秀吉はすぐに俺から離れて一緒に教室に戻るのであった。

けどこの時、俺と秀吉はまだ知らなかった。偶然見ていた生徒が俺と秀吉のやり取りを見て、さらに木下に誤解を招いた事に。

第十二問（前書き）

また無駄に長いです。
そして今回は修哉無双となっています。

第十二問

バカテスト　保健体育

問題　以下の問いに答えなさい

『女性は（　）を迎える事で第二次成長期になり、特有の体付きになり始める』

姫路瑞希の答え

『初潮』

教師のコメント

正解です。

天城修哉の答え

『思春期』

教師のコメント

惜しいです。間違ってはいませんが、今回は女性に関する問題ですので不正解です。

本当に天城君は吉井君達とは違って、まともな間違いをするので先生は安心します。決してバカにしている訳ではありませんが、謝っておきます。

吉井明久の答え

『明日』

教師のコメント
随分と急な話ですね

土屋康太の答え
『初潮と呼ばれる生まれて初めての生理。医学用語では、生理の事を月経、初潮の事を初経という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が１．５ｋｇに達する頃に初潮を見るものが多い為、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均１２歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境栄養状態などに影響される』

教師のコメント
詳しすぎです。

午前九時過ぎ、Ｂクラス戦が再会して早々に……。

「さあ修哉、始めようか」

「ああ、そうだな」

俺と和人は廊下で対峙していた。

「では遠藤先生、お願いします。それとフィールドは2～3m程度で」

「はい。では承認します」

和人が連れて来た英語の遠藤先生に声を掛けると、遠藤先生は試験召喚フィールドを展開した。

「「試獣召喚（サモン）！」」

フィールドが出た後に俺と和人は召喚獣を出す。

『Fクラス　天城修哉　英語　４０２点
VS
Bクラス　佐伯和人　英語　４０８点』

『……何だ、あの点数は？』

『佐伯が凄いのは知ってるが、天城って奴も凄いな……ホントにFクラスなのか？』

俺と和人の召喚獣の点数を見たFクラスとBクラスは呆然と見ていた。俺達はそれに全く気にしておらず無視している。

「流石は修哉だ。得意科目だけあって、点数もそれなりに高いな」

「若干お前に負けているけど。それはそうと何故フィールドを狭くしたんだ？」

「他の連中が割って入らないように狭めただけさ。その方が修哉やFクラスには好都合だろ？　これはあくまで俺と修哉だけの戦いなんだから」

「……試召戦争だと言うのに、そこまでして俺と戦いたいのか？　呆れた奴だ。ってかよく他のBクラスの連中は何も言わないんだな」

「な～に、ちょっとしたお願いをしたら快く承諾してくれたよ」

「……あっそう」

そんな会話を気にしないかのように俺と和人の召喚獣が互いに睨んでいる。

和人の召喚獣は、赤のロングコートを纏っている中に防刃ベストを着て、白のスラックスにロングブーツを穿いており、右手には大剣を持ったデフォルメの和人だ。

格好は俺の召喚獣と色違いで似ているが、武器だけは違うな。まあそんな事はどうでもいいが。

「では行くぞ、和人」

「お手柔らかに」

そう言った途端、俺の召喚獣と和人の召喚獣が駆け出した。

そして……。

シャキンッ！！　ガキィィィン！！！　キィン！　ガキンッ！　キィン！

居合いと斬撃の音が鳴り響いた。

言うまでも無く俺の召喚獣が居合いを放ち、和人の召喚獣が重そうな大剣であるにも拘らずに軽がると振り回して斬撃を繰り出している。互いの攻撃に刀と大剣がぶつかり剣戟を鳴り響かせていた……それも高速で。

「やるなぁ和人」

「修哉こそ。伊達に召喚獣の扱いには慣れてないね」

「それはお前にも言える事だがな」

ガギンッ！　ギンッ！　カァンッ！　キンッ！

『……』

俺と和人の召喚獣戦に敵味方問わず、呆然と見ていた。

「何をしているお前等！　こっちばかり気を取られているな！」

「俺と修哉の戦いを見てくれているのは嬉しいけど、今は試召戦争中だ。目の前の敵に集中してくれ」

『……はっ！！』

俺達の突っ込みにＦクラスとＢクラスはすぐに気が付き……。

「ど…ドアと壁を上手く使うんじゃ！　戦線を拡大させるでないぞ！　それと修哉と佐伯の戦いには決して割って入らないようにするのじゃ！」

秀吉がＦクラスに指示を出し……。

『お前等！　俺達は目の前のＦクラスを叩くぞ！　昨日佐伯に言われたとおり、二人の戦いに手を出すなよ！』

『おう！』

『佐伯く～ん！　頑張ってぇ～～！！！』

Ｂクラスも指示を出して頷いている……最後の方は佐伯を応援している女子達のエールであったが。

「相変わらず女子から好かれているな、お前は。その顔で一体何人落としているのやら」

「そうかい？　俺は普通に接しているつもりだが」

「……他の男から聞いたら、さぞかし嫌味だろうな……

まあいい。戦いに集中させてもらう」

「それは結構だ」

ブオンッ！　ヒュッ！　シャキンッ！　ガキンッ！　ブンッ！　キィンッ！

俺と和人の召喚獣は攻撃→防御→攻撃→回避→攻撃と言うような流れの繰り返しになっている。

それによって5分ほど続いているが……。

『Fクラス　天城修哉　英語　４００点
VS
Bクラス　佐伯和人　英語　４０２点』

召喚獣には大してダメージが無いのだ。

「ふむ。俺個人としては、このまま勝負を続けていたい……が、あんまりそうは言ってられないな。それに……」

ただでさえFクラスが不利な状況なのだから。

「そんな連れない事を言わないでくれよ、修哉。俺はもっとお前と戦っていたいんだから」

「それと同時に召喚獣の操作も完全に慣れておきたいんだろう？」

「……やっぱりバレてたか」

俺の台詞に和人は少し間を置いて答えた。

コイツ……やはりそう言う目的で俺との勝負を望んでいたみたいだな。

けれど和人の召喚獣操作レベルは他の生徒と違って高い。

先程までの勝負で俺と互角に戦っていた理由は、和人は過去に観察処分者である明久が教師の雑用作業をしている時に俺と一緒に監視していた事があった……とは言っても３～４回程度だが。

その時に和人も俺と同様に召喚獣の操作練習をして、一通りの操作が出来るようになっている。だが、あくまでそれだけだ。

「和人、すなまいが早々に決着を付けさせてもらう。お前を倒して、すぐに姫路の掩護に行かなければならないからな」

「やれやれ、バレてしまっては仕方ない。なら奥の手を使わせてもらうよ」

「何？」

奥の手だと？

「修哉も知っている筈だ。単体科目で４００点オーバーしていると、

特殊能力が付属される事を」

……やはりそう来たか。和人の召喚獣の腕に付いてる腕輪が光り始めてきている。

一体何の特殊能力は出るのやら。

と、考えたその時……。

『Fクラス　天城修哉　英語　４００点
VS
Bクラス　佐伯和人　英語　２０２点』

ん？　和人の点数が半分も消費した……まさか！

「そう。俺の召喚獣の特殊能力は点数を消費する事で……コレを作ったんだ」

和人の召喚獣が両手に持っている大剣から二挺拳銃に……ってヤバッ！！

「くっ！！」

「遅い！！」

俺の召喚獣は避けようとしたが……。

ダアンッ！　ダアンッ！　ダアンッ！　ダアンッ！　ダアンッ！

和人の召喚獣が即座に二挺拳銃を連射して来た。

それにより……。

『Ｆクラス　天城修哉　英語　２８９点
ＶＳ
Ｂクラス　佐伯和人　英語　２０２点』

避けてはいたのだが、掠りの連続に肩に一発受けてしまって点数が消費してしまった。

「あらら、仕留めかと思ったんだが……流石は修哉だ。そう簡単には倒せないみたいだね」

「……」

「まだ俺が思った通りに撃てないからと言う理由もあるけどね」

「……俺にとってはそれが唯一の救いだったな」

「でもだからと言って安心しないでね。この銃は一度出したら使い続けられるから」

「……チッ」

唯でさえ厄介な武器だと言うのに、あれを使い続けられたら此方としては分が悪い。遠距離攻撃を主体にされたら負けてしまう。

ならば……。

「だったらコッチも遠距離攻撃で行かせてもらうぞ！」

「ほう？　今度は修哉の特殊能力か」

俺の召喚獣の腕に付いている腕輪が光り始めた。

そして周りには六本の剣が浮いており……。

『Ｆクラス　天城修哉　英語　１０９点
ＶＳ
Ｂクラス　佐伯和人　英語　２０２点』

点数の大半が消費された。

「俺の特殊能力は剣を創生する事だ……」

因みに一本の剣を作るごとに３０点消費される。

「おいおい……それって少しばかり反則じゃない？　もしかして、その浮いている剣を……」

「ご明察……行け！」

ヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュン！！！

俺の召喚獣が片腕を前に出すと、六本の剣が一斉に和人の召喚獣に襲い掛かり始めた。

無論、和人の召喚獣は剣を避けているが……。

「ちょ…ちょっと！　剣を遠隔操作出来るなんて反則だよ！　これってファンネルかドラグーンみたいじゃないか！」

何度も向かってくるので避けるばかりであった。

「やかましいわ！　コレはお前の銃とは違って壊れたら無くなるんだよ！」

「だからと言って銃で撃っても剣が勝手に避けているじゃないか！」

「当たらない為に操作しているんだよ！　そら隙あり！」

「げっ！」

ザクッ！

一本の剣が和人の召喚獣の左腕に刺さり……。

ザクッ！　ザクッ！　ザクッ！　ザクッ！　ザクッ！

残りの剣も右腕、両足、両肩に刺さった。

『Ｆクラス　天城修哉　英語　１０９点
ＶＳ
Ｂクラス　佐伯和人　英語　２２点』

「チェックメイトだ、和人！！」

「くそっ！　こんな事になるなら先に修哉の方の能力を出させれば良かった！」

和人が後悔している最中……。

シャキンッ！　ザシュッ！

『Ｆクラス　天城修哉　英語　１０９点
ＶＳ
Ｂクラス　佐伯和人　英語　０点』

俺の召喚獣は串刺しにされている和人の召喚獣に居合いを使って倒

したのであった。

「0点になった戦死者は補習～～！！！」

「……西村先生、逃げたりしません。ですから俺を担ごうとしないで下さい」

「む？　そうか。なら行くぞ」

突然、西村先生が現れて連行するかのように担ごうとしたが、和人が逃げないと言ったのですぐに止めた。

「修哉、今回は俺の負けだけど、次はこうは行かないよ」

「楽しみにしてる」

「ふっ……そうそう、一つ教えておくよ」

「ん？」

和人が西村先生と一緒に補習室に行こうと俺を横切ろうとした時……。

「根本が姫路さんに対して下衆な手段を使っている。遠慮なく叩きのめしてくれ」

「何？　それはどう言う……」

小声で呟いた事に俺は再度聞こうとしたが、和人はもう行ってしまった。

「……和人の発言が気になるが……まあいい。取り敢えずは姫路の掩護に向かうか。あ、遠藤先生、もういいですよ」

「そうですか。では私はこれで」

遠藤先生が英語のフィールドを解除しようとしたが……。

「遠藤先生！　Ｂクラス芳野が天城に挑みます！　試獣召喚（サモン）！」

「同じくＢクラス工藤も挑みます！　試獣召喚（サモン）！」

「Ｂクラス真田も挑みます！　試獣召喚（サモン）！」

「ちっ！　邪魔が入ったか！」

Ｂクラス３名が俺に挑んできた。

『Ｆクラス　天城修哉　英語　１０９点
ＶＳ
Ｂクラス　芳野孝之　英語　１８２点
Ｂクラス　工藤信二　英語　１７８点
Ｂクラス　真田由香　英語　１７９点』

「弱った俺を即座に狙うとは……根本の指示か？」

「佐伯を倒したお前は危険だからな！　悪いが即行で倒させてもら

う！」

「姫路の次に厄介な相手をすぐに倒すのは定石だしな！」

「佐伯君の敵は取らせてもらうわよ！」

「そうか。なら掛かって来い！」

Bクラス3名の召喚獣が俺の召喚獣に襲いかかってきた。

ブンッ！　ヒュッ！　ブオンッ！　ヒュッ！　ブンッ！　ヒュッ！

「ふむ、流石に一斉攻撃をされたら避けるので精一杯だな」

俺の召喚獣が余裕そうな顔をしながら避けている事に……。

「な…何で当たらない！？」

「点数は俺達の方が上なのに！？」

「どうして！？」

Bクラス3名は驚愕していた。

「点数が上だからって勝てる訳じゃない。それに……」

シャキンッ！　ザシュッ！

『Ｂクラス　芳野孝之　英語　１３６点』

「ああっ！」

俺の召喚獣がＢクラスの芳野に攻撃をした事によってダメージを与えた。

「チッ。やはり点数が消費していると攻撃力も落ちているな……だが」

ザシュッ！　ザシュッ！　ザシュッ！

『Ｂクラス　芳野孝之　英語　２点』

「連続攻撃をすれば倒せるか」

「な…何だと！？」

「芳野は下がれ！　ここは俺と真田がやる！」

「何でこんなに強い相手がバカのFクラスにいるのよ！？」

Bクラスの芳野を下がらせる工藤と真田が俺の前に立ち塞がる。

「さて、どうするか……」

「行くぞ真田！」

「ええ！」

二人の召喚獣が再び一斉攻撃を仕掛けようとしたが……。

「真田って言ったか？　さっきの差別発言をすると、君の大好きな和人に嫌われるぞ？」

「なっ！？」

「隙あり」

シャキンッ！　ザシュッ！　ザシュッ！　ザシュッ！　ザシュッ！

『Bクラス　真田由香　英語　0点』

Bクラスの真田が動きを止めてくれたので、俺の召喚獣はすぐ真田の召喚獣に連続居合いをして戦死させた。

「さ…真田！　くそうっ！！」

「はい、一人目」

「ひ…卑怯よ！」

と、俺に訴える真田であったが……。

「戦死者は補習～～！！！」

「いやぁぁぁ～～～！！！」

西村先生にすぐ連行されてしまった。

「人の事は言えないだろうが。そっちも卑怯な手を使っておいて、よくあんな事が言えるな」

考えたのは根本だが。まあその根本に従って行動する他のＢクラスも同罪だ。

「さて、お前はどうする？　戦死覚悟で俺に挑むか？」

「くっ！　……お…覚えてろ！」

捨て台詞を言ったＢクラスの工藤は後退した。

「やっと退いてくれたか。さて、これで漸く姫路の掩護に……ん？」

姫路の所に向かおうとした俺であったが、姫路は召喚獣を出さずに

後方にいた。

どう言う事だ？　何で姫路が戦っていないんだ？　それと様子が可笑しい。一体姫路に何があった？

「そう言えば明久の姿が見当たらないな。アイツは一体何処に行った？」

と、俺が明久を探していると……。

「天城！　ちょっといいか！？」

「ん？　坂本？」

坂本が大声を上げながら本隊と一緒に俺の方に向かってきた。

「どうした坂本？　何でお前が此処に来ている？」

「今からDクラスに行って例の指示をする。だから天城も一緒に来てくれ」

例の指示……ってアレか。Dクラスの教室にあるBクラス用の室外機を壊すと言う指示を。

「……余り気は進まんが分かった」

「そう嫌そうな顔をするな。これは試召戦争なんだから」

「だからと言って室外機を壊そうと指示をするのはどうかと思うんだが……まあいい。で、姫路が何故か戦う気が無いみたいに思える

んだが、何か知ってるか？」

「知らん。それについては明久が知ってるみたいだが、アイツは理由を話そうとしない。おまけに何を血迷ったか、姫路を今回の戦闘から外して欲しいってお願いをされてな」

「何だと？　お前はそれを承諾したのか？　姫路が一番の戦力だと言うのに何故外そうとする？」

明久の不可解な提案だけでなく、それを承諾する坂本もどうかしてると思った。

「明久がいつもと違ってマジ顔になっただけでなく、俺に頭を下げてまで頼んだからな。条件付きで承諾した」

「……何？」

「天城なら分かるんじゃないか？　明久がそんな行動をするって事は」

「……」

坂本の台詞に俺は少し考えた。

和人が補習室に行こうとしている際に言った台詞、姫路が戦おうとも戦えない様子、そして明久の予想外な行動。

それ等を総合すると……。

「……そう言う事か」

漸く腑に落ちた。

恐らく姫路は根本に何か弱みを握られているから動けないに違いなく、明久が坂本に頭を下げた事にも納得が行った。

「ん？　何だ。天城は何か分かったのか？」

「一応な。それと坂本。明久は他にも何か言ってなかったか？」

「ああ。何でも根本の制服が欲しいって言ってたな」

……明久の要望に少しばかり呆れる俺だが、ソレを欲しいと言う事は恐らく姫路に対する弱みを取り返そうとする為にそう言ったのだろう。

「……まあアイツがそう言うって事は何かあるんだろうが、取り敢えずＤクラスへさっさと行こう」

「そうだな。じゃあ行くか」

俺と坂本と本隊はＤクラスへ向かう事にした。

現在の時刻は午後二時五十七分。Ｄクラスへ指示をした後、俺と坂本と本隊はＢクラス教室前にいて根本と対峙していた。

「お前等いい加減諦めろよな。昨日から教室の出入り口に集まりやがって暑苦しい事この上ないっての」

根本が余裕そうな顔をして俺達に言ってくる。

ドンッ！　ドンッ！

Ｂクラスの教室の壁の方から音が聞こえているが、俺は敢えて気にしなかった。

「どうした？　軟弱なＢクラス代表サマはそろそろギブアップか？」

「降参した方が良いんじゃないか？　お前達Ｂクラスの要である和人がやられたんだから、そっちの士気はガタ落ちの筈だが」

坂本と俺は根本の挑発には乗らずに言い返してくる。

「はぁ？　ギブアップするのはそっちだろ？　ってか佐伯の奴、俺に偉そうな事を言っておきながらＦクラス風情に負けるなんて……使えない奴だ」

「無用な心配だな」

「そのFクラス風情である俺に昨日、策を看破されたのは誰だ？
あの程度で言い負かされる貴様の方が使えないと思うぞ。そんな貴様に真っ向勝負で負けた和人を責める資格は無い」

「っ！！」

俺の言葉に根本は苦々しい顔をしていたが、すぐに激昂しなかった。

ドンッ！　ドンッ！

「はっ！　Fクラス風情に気遣われるなんて佐伯も地に堕ちたもんだな！　それと坂本、頼みの綱である姫路さんの調子が悪そうだぜ？」

おいおい根本、それは失言だと思うぞ？　それによって教室にいる女子達がお前を睨んでいるし。ってか此処のBクラス女子の大半は佐伯に落とされていたのか……本当にモテ男だな、アイツ。

「……お前ら相手じゃ役不足だからな。休ませておくさ」

「けっ！　口だけは達者だな。負け組み代表さんよぉ」

「負け組？　それがFクラスの事なら、もうすぐお前が負け組代表だな。つーかお前、昨日は天城に負けたじゃないか」

ドンッ！　ドンッ

「ちっ！　……さっきからドンドンと、壁がうるせぇな。何かやっているのか？」

「さぁな。人望の無いお前に対しての嫌がらせじゃないのか？」

「あり得るな。お前って卑怯な事しかやらない下種野郎だし」

ソイツは姫路の弱みを握っているお前に対して恨みを抱いている奴だからな。

「けっ。言ってろ。どうせもうすぐ決着だ。お前等、一気に押し出せ！　それと天城には集中攻撃だ！」

「……態勢を立て直す！　一旦下がるぞ！」

「了解」

「どうした、散々ふかしておきながら逃げるのか！」

俺達が下がってすぐに……。

「後は任せたぞ、明久」

と坂本が言った瞬間……。

ドゴォッ！！

先程からドンドンと聞こえている方から、いきなり壁が崩れた。

「ンなっ！？」

余りの出来事に驚いて引き攣った顔をしている根本に、壊れた壁の奥から召喚獣と一緒に出てくる明久。

……ってか明久、お前はどうして何時も何時も学校の器物を壊すんだ？　いくら試召戦争とは言え、器物破損はダメだろうが！　弁償出来るのか！？

「くたばれ、根本恭二ぃー！」

明久は俺の考えている事を無視するかのように、根本に勝負を挑む為に駆け寄っている。

「遠藤先生！　Ｆクラス島田が……」

「Ｂクラス山本が受けます！　試獣召喚（サモン）！」

「くっ！　近衛部隊か！」

根本に挑もうとした島田であったが、近衛部隊が根本を守るかのように立ち塞がって召喚獣を出した。

「は、ははっ！　驚かせやがって！　残念だったな！　お前等の奇

襲は失敗だ！　それに英語で挑むのは更に失敗だったな！　英語が得意な天城は佐伯によって点数が消耗しているから逆に此方の勝率を上げたも同然だ！」

明久の奇襲を嘲笑いながら蔑みの言葉を送る根本。近衛部隊も俺が英語でやるのであれば充分に勝てると踏んで、明久達の方に集中している。

「と、根本は言ってるが、どうなんだ坂本？」

「確かにこれは明らかな失敗だ。だがこれは計算の内で、目的も達成された」

「けっ！　ハッタリもそこまでかけると逆に感心するなぁ！　負け組代表！」

坂本の台詞に根本は虚勢だと思っていた瞬間……。

ダン、ダンッ！

エアコンが停止した故に、涼を求める為に開け放たれた窓。

そこから屋上よりロープを使って2人の人影が飛び込み、根本の前に降り立った。その二人の人影は土屋と保健体育担当の大島先生だ。

「……Fクラス、土屋康太」

「き…キサマ……！」

「……Ｂクラス根本恭二に保健体育勝負を申し込む」

「ムッツリィニィーッ！」

明久が近衛部隊を引き付けた事により丸裸になった根本。最早何処にも逃げ場は無い。

「……試獣召喚（サモン）」

『Ｆクラス　土屋康太　保健体育　４４１点
ＶＳ
Ｂクラス　根本恭二　保健体育　２０３点』

土屋の召喚獣は手にした小太刀を一閃して、根本の召喚獣を一撃で切り捨てた。

よって、Ｂクラス戦は終結したのである。

「全く、お前と言う奴は。何でそうやって物を壊すんだよ」

「明久、随分と思い切った行動に出たのう」

終戦後、俺が明久を少し説教していると秀吉がBクラスにやってきた。

「うぅ……。痛いよう、痛いよう」

明久は俺と秀吉の言葉を聞いておらず、負傷している手を擦っていた。それは当然だ。観察処分者である明久の召喚獣が素手で鉄筋コンクリートの壁を殴っていたから、痛みの何割かがフィードバックされているからな。その痛みは並大抵じゃない。

「なんとも……お主らしい作戦じゃったな」

「で、でしょ？　もっと褒めても良いと思うよ？」

「戯け。教室の壁を壊しておいて褒められる事じゃないだろうが」

少し調子に乗っている明久に叱咤すると……。

「後の事を何も考えず、自分の立場を追い詰める、男気溢れる素晴らしい作戦じゃな」

「……遠回しに馬鹿って言ってない？」

「それ以外に何があるんだ？」

「……」

俺の言葉に明久は凹んでしまった。

「明久、俺からの説教はここまでにしておこう。代わりに職員室で西村先生達のキツイ説教を存分にされる事だな」

「……出来ればシュウだけのお説教で終わらせたい」

「俺個人の説教で済む問題じゃないだろうが」

学校の壁を破壊するのは、とても俺だけの説教で済まされない。さっき俺が言ったが、明久は放課後に職員室で先生達のキツイお説教が待っている。もしこれが初犯じゃなかったら留年や退学は確実だ。

「ま、それが明久の強みだからな」

いつの間にか坂本が俺達の方に来ており、明久の肩をバンバンと叩いている。

坂本、それは明久にとって大変に不名誉な事だと思うぞ。

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談と行くか。な、負け犬代表？」

「……」

床に座り込んでいる根本。先程までの強気が嘘みたいに無くなって凄く大人しい。散々卑怯な手を使ったにも拘らず、俺達に負けた事にショックなんだろうな。同情はしないけど。

「本来なら設備を明け渡して貰い、お前等には素敵な卓袱台をプレゼントする所だが、特別に免除してやらんでもない」

そんな坂本の発言に、ＢクラスだけでなくＦクラスもザワザワと騒ぎ始める。

「落ち着け、皆。前にも言ったが、俺達の目標はＡクラスだ。ここがゴールじゃない」

「うむ。たしかに」

「ここはあくまで通過点だ。だから、Ｂクラスが条件を呑めば開放してやろうかと思う」

坂本の言葉によりFクラス全員は納得した表情になる。これはDクラス戦でも言ってた事でもあり、坂本の性格を理解しているのだろう。俺としてはこのままBクラスの設備を交換して欲しいが。

「……条件は何だ？」

力なく根本が問い掛けて来る。

「条件？　それはお前だよ、負け組代表さん」

「俺、だと？」

「ああ。お前には散々好き勝手やってもらったし、正直去年から目障りだったんだよな」

坂本が罵倒に等しい言葉を発しているが、俺は特に何も言わない。それだけの事をやっているのだ、根本は。その証拠に味方であるBクラス生徒達は誰一人根本をフォローしようとしない。無論、和人もその一人であるが。

「そこで、お前等Bクラスに特別チャンスだ」

それは昨日の昼に言ってた、あの取引の事を言うのだろう。

「Aクラスに行って、試召戦争の準備が出来ていると宣言して来い。そうすれば今回は設備については見逃してやってもいい。ただし、宣戦布告はするな。すると戦争は避けられないからな。あくまでも戦争の意思と準備があるとだけ伝えるんだ」

「……それだけで良いのか？」

疑うように坂本を見る根本。

しかしソレだけでは済まされない。何故なら……。

「ああ。Ｂクラス代表がコレを着て言った通りに行動してくれたら見逃そう」

坂本が取り出した女子の制服を着る事になっているからだ。因みにアレは午前に秀吉が着ていた制服だ。

どうして坂本がああ言ったのかは、明久が根本の制服を得る為にやったのだ。恐らく根本の制服のポケットの中に姫路の弱みとなる物が入っているのだろう。

それと同時に坂本の個人的な理由も含まれているような気がするが。

「ば、馬鹿な事を言うな！　この俺がそんなふざけた事を……！」

言うまでも無く根本は嫌がっていた。それは誰でも嫌がる。

しかし……。

『Ｂクラス生徒全員で必ず実行させよう！』

『任せて！　必ずやらせるから！』

『それだけで教室を守れるなら、やらない手はないな！』

他のＢクラス生徒達はやらせる気満々だった。コレを見るだけで根

本が今までどういった行動を取っていたのかが充分に分かる。

「んじゃ、決定だな」

「くっ！　冗談じゃない！！」

根本は教室から脱出しようとしたが……。

「おいおい根本、敗者であるお前が逃げるのはダメじゃないか」

「さ…佐伯……！」

教室の出入り口から和人が立ち塞がっていた。

「お前……補習はどうした？」

「そんな事はどうでもいいだろう。今お前がやるのは坂本の指示に従う事だ」

ドンッ！！

「ぐふぅ！！」

「根本は黙らせたよ。後はお好きに」

「お、おう。ありがとう」

和人の行動に驚いている坂本。和人も根本のやる事に相当頭に来て

いるんだろう。そうでなかったら、容赦なく気絶させないからな。

「では、着付けに移るとするか。明久、任せたぞ」

「了解」

坂本の指示に明久は根本に近づき制服を脱がせている……それも物凄く嫌な顔で。

「ま、男が男の服を脱がすのはさぞかし苦痛だろうね」

和人がそう言いながら俺の方に近づいてくる。

「服を脱がすのはやはり女が良いってか？」

「勿論♪」

「……」

即座に答える和人に俺は無言になった。ついでに和人は一体何人の女子の服を脱がせたんだろうと少し気になる俺であったが。

「で、吉井があんな嫌そうにしてまで根本の服を脱がせているのは？」

和人が急に真面目な顔をして俺に小声で問いかけたので……。

「お前が言った“根本が姫路に対して下種な手段を使った物”の回収だ。因みに先に気付いたのは俺じゃなくて明久の方だ」

「……そう」

俺が答えると納得した。

「明久は姫路の為なら平気で汚名を被るからな。その証拠に壁まで壊したから」

「……誰が壊したのかは気になっていたけど、アレは吉井が壊したんだね」

壊れた壁を見ている和人は呆れ顔になっていた。

「ま、放課後には職員室で先生達のお説教が待っているからな」

と、俺が和人と話していると、明久は根本の着ていた制服を持ってBクラスを出て行った。

「明久が出て行ったな。そう言えば、根本は姫路に対する弱みを握っていたのは知っていたが、実際は何を持っていたんだ？」

「……ラブレターだよ。誰宛かは知らないけど」

「……成程。確かに明久が怒る訳だ」

もし和人がBクラスじゃなかったら、間違いなく根本をお仕置きしていたに違いない。和人は女子の大切な物に対しての脅迫は誰よりも許せないから。

ま、それは今は置いといてだ。

「ところで和人、話は急に変わるんだが……昨日の戦いでFクラスの設備と俺達の筆記用具を壊した実行犯は誰だ？」

「ん？　ああ、あそこにいる四人だよ」

和人が指した方を見ると、根本の女装撮影会に快く手伝っている連中だった。

「そうか。ではソイツ等には俺の説教と同時に弁償させてもらおう。全員分の卓袱台と筆記用具代を、な」

「教室を破壊した事に関して俺もすまないと思ってる。お詫びとして卓袱台の方は俺の方で手配しておくよ」

「別にお前が壊した訳でも無いんだがな」

「流石に全員分の卓袱台となると、とても高校生が払える額じゃないからね。だからここは俺に任せてくれないか？」

「……分かった、ではそうしよう。にしても流石は佐伯グループの御曹司だ。よくまあポンポンと出せるもんだ」

「親友の修哉だからこそ出すんだよ」

「……そうかい。さて、俺はあそこの四人を連れ出して説教するか」

俺が坂本と一緒に撮影を手伝っている四人を呼んで別の部屋に連れて行くと、ソイツ等は断末魔の悲鳴をあげたのであった……キチンと筆記用具代も徴収済みだ。

その間に和人は携帯を使って卓袱台の手配をしていた。

第十二問（後書き）

原作だったら、筆記用具を壊した事は有耶無耶になっていたけど、ちゃんと覚えて実行犯に説教する修哉でした～～！！！

第十三問（前書き）

遅くなりました。

やっぱり原作本を片手に書いて考えていると時間が掛かりますね。

それではどうぞ！！

第十三問

バカテスト　生物

問題　以下の問いに答えなさい

『人が生きていく上で必要となる５大栄養素をすべて書きなさい』

姫路瑞希の答え

『？脂質　？炭水化物　？たんぱく質　？ビタミン　？ミネラル」

教師のコメント

流石は姫路さん。優秀ですね

天城修哉の答え

『？平穏　？常識　？ルール　？理性　？品行方正……特に騒ぎを起こす明久と坂本と土屋に必要なもの」

教師のコメント

……天城君らしくない回答ですね。けれど確かにそうかもしれません。

吉井明久の答え

『？砂糖　？塩　？水道水　？雨水　？湧水」

教師のコメント

それで生きていけるのは君だけです

土屋康太の答え
『初潮年齢が十歳未満の時は早発月経という。また、十五歳になっても初潮がない時を遅発月経、更に十八歳になっても所長がない時を原発性無月経といい……』

教師のコメント
保健体育のテストは一時間前に終わりました。

教室を破壊したBクラス生徒4名を説教して筆記用具代を徴収した俺は、Fクラス全員に各自の筆記用具代を渡した後、職員室にて肉体と精神がズタボロになって戻って来た明久を家まで送った。

そして和人によって手配した卓袱台を使い、補給テストを終えた二日後の朝。

俺達Fクラス生徒全員はAクラスと戦う前に坂本の説明を受けていた。

「先ずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたのにも拘らず此処まで来れたのは、他でもない皆の協力があっての事だ。感謝している」

素直に礼を言う坂本に俺は目が点になった。あの坂本があんな事を言うのが余りにも意外だったから。

明久も坂本を信じられないような目で見ている。

「ゆ、雄二。どうしたのさ。らしくないよ？」

「ああ。自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」

何だかんだ言って坂本もここまで行けた事に嬉しいのだろう。俺も俺で凄いと思っている。明久達の顔を見るとよくここまで来れたと喜んで多いに実感している。

「ここまで来た以上、絶対にＡクラスにも勝ちたい。勝って、生き残るには勉強すれば良いってもんじゃ無いと言う現実を、教師に突きつけるんだ！」

『おおーっ！』

『そうだーっ！』

『勉強だけじゃねぇんだーっ！』

最後の勝負の前にＦクラス全員の心は一つになっていた。

……だがな坂本、確かに勉強だけが全てじゃ無いが、それなりの学力が無ければ進学や就職を勝ち取るのは無理なんだぞ？
根性だけで生き延びるほど現実は甘くないんだから。

ま、今ソレを言ったら士気がガタ落ちになると思うから敢えて言わないが。

「皆ありがとう。そして残るＡクラス戦だが、これは一騎討ちで決着を付けたいと考えている」

それは四日前の昼食時に聞いた話だったから俺や聞いた明久、秀吉、土屋、姫路、島田は驚きはしなかったが、聞いていない他の連中はかなり驚いており、教室中がザワザワと広がった。

『どう言う事だ？』

『誰と誰が一騎討ちをするんだ？』

「落ち着いてくれ。それを今から説明する」

坂本がバンバンと机を叩いて周りを静かにさせる。

「やるのは当然、俺と翔子だ」

翔子？　翔子ってＡクラス代表の霧島翔子の事か？　名前で呼ぶとは随分と親しいんだな。もしかして俺と和人みたいな関係か？

と、俺が考えていると……。

「馬鹿の雄二が勝てる訳なぁぁっ！？」

明久が思った事を言った事により、坂本はカッターを投げて明久の頬を掠めた。

おい坂本、カッターは人に向けて投げるものじゃないぞ。お前は明久を殺す気か？

「次は耳だ」

「坂本、そんな事をしたら即座に俺の折檻が待っているぞ？　やるんだったら覚悟しとけよ」

「……」

「それと明久、思った事をすぐ口に出すのは止めろと前から言ってる筈だ」

「……ゴメン」

俺の台詞に坂本は青褪め、明久は謝るのであった。

「……ご…ゴホンッ！　まぁ、明久の言うとおり確かに翔子は強い。まともにやりあえば勝ち目は無いかもしれない」

認めているならカッターを投げるな。

「だが、それはＤクラス戦もＢクラス戦も同じだっただろう？　まともにやりあえば俺達に勝ち目は無かった」

しかし現に俺達Ｆクラスは今こうして勝ち進んでいる。

「今回だって同じだ。俺は翔子に勝ち、Ｆクラスはクラスを手に入れる。俺達の勝ちは揺るがない」

一応は坂本を信じてはいるんだが、俺は未だにどうやって勝つつもりなのかと疑問に思っていた。

「俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今皆に見せてやる」

『おおぉーーーっ！！』

俺以外の奴等は坂本を心底信じている。Ｂクラスまで勝ち進んだのだから坂本を信じるのは無理も無いが。

「さて、具体的なやり方だが……一騎討ちではフィールドを限定するつもりだ」

「フィールド？　何の教科でやるつもりじゃ？」

「日本史だ」

秀吉の質問に坂本は自信満々に答える。日本史って……霧島は日本史が苦手なのか？　それに坂本が日本史は得意だって事も知らないが。

「ただし、内容は限定する。レベルは小学生程度、方式は百点満点の上限あり、召喚獣勝負ではなく純粋な点数勝負とする」

……小学生程度のレベルで満点の上限あり……だと？

「……ま…待て坂本、お前は何を考えているんだ？　確かにそれは注意力の勝負にはなるんだが」

「そうだよ。それにもし同点になったら、きっと延長戦だよ？　そうなったら問題のレベルも上げられちゃうだろうし、ブランクのある雄二には厳しくない？」

「確かに修哉と明久の言うとおりじゃ」

明久と秀吉、俺が言いたいのはそう言う事じゃなくて。どうして小学生程度の日本史で挑むのかと聞きたいんだ。

「おいおい、余り俺を舐めるなよ？　いくらなんでも、そこまで運に頼り切った作戦などと言う物か」

「？？　それなら、霧島さんの集中を乱す方法を知っているとか？」

「いいや。アイツなら集中なんてしていなくとも、小学生レベルのテスト程度なら何の問題も無いだろう」

俺が聞こうとしているにも拘らず、明久と坂本は話しを進めている。

……もういいや、俺が何を言っても状況が変わるとは思えないから黙っている事にしよう。

「雄二、余り勿体ぶるでない。そろそろ種を明かしても良いじゃろう？」

それは秀吉だけじゃなく他の連中も思っている事だ。その証拠にＦクラス全員が頷いている。

「ああ、すまない。つい前置きが長くなった」

前置きが必要なのは分かるが、余り長すぎるのもどうかと思う。

「俺がこのやり方を採った理由は一つ。ある問題が出れば、アイツは確実に間違えると知っているからだ」

ある問題だと？

「その問題は……『大化の改新』」

大化の改新……６４５年に中大兄皇子・中臣鎌足らが蘇我氏を打倒して始めた政治改革。

誰でも知っている簡単な歴史の問題だ。

「大化の改新？　誰が何をしたのか説明しろ、とか？　そんなの小学生レベルの問題で出てくるかな？」

明久の質問に坂本は首を横に振る。

「いや、そんな掘り下げた問題じゃない。もっと単純な問いだ」

「単純というと……何年に起きた、とかかのう？」

「おっビンゴだ秀吉。お前の言う通り、その年号を問う問題が出た

ら、俺達の勝ちだ」

年号って……おいおい坂本、学年主席の霧島がそんな簡単な問題を間違えるとは到底考えられないんだが。

「坂本、いくらなんでもそれは無いだろう。そんな簡単な問題は明久でさえ間違えないと言うのに」

「そうだな。確かに明久ですら間違えない」

俺の台詞に坂本が頷いていると、明久が後ろめたいような感じで視線を逸らしていた……っておい明久、何で目を逸らす!?　間違えた事あるのか!?

「だが、翔子は間違える。これは確実だ。そうしたら俺達の勝ち。晴れてこの教室とおさらばって寸法だ」

明久の様子に呆れた視線を送っていた俺であったが、坂本は気にせずに話しを続ける。

……坂本がああ言うなら霧島は大化の改新の年号は間違えるんだろうが……それだけか？

と、俺が疑問を抱いたので坂本に聞こうとするが……。

「あの、坂本君」

「ん？　なんだ姫路」

「霧島さんとは、その……仲が良いんですか？」

先に姫路が坂本に質問をしたので後回しにした。何故なら俺も姫路の質問が気になっていたから。

「ああ。アイツとは幼馴染だ」

何だ、やっぱり幼馴染か。通りで名前で呼ぶわけだ。けど才色兼備の霧島と幼馴染とは少しばかり羨ま……。

「総員、狙えぇっ！」

「なっ！？　なぜ明久の号令で皆が急に上履きを構える！？」

「黙れ、男の敵！　Ａクラスの前にキサマを殺す！」

「俺が一体何をしたと！？」

……何やってるんだ、明久。そして坂本と秀吉を除く男子共。

「遺言はそれだけか？　……待つんだ須川君。靴下はまだ早い。それは押さえ付けた後で口に押し込む物だ」

「了解です、隊長」

「……おい明久、何故そんな下らん行動に走るんだ？　俺にはとても理解出来ないんだが」

「何言ってるんだよ、シュウ。雄二に霧島さんと幼馴染だなんて万死に値するじゃないか。僕としては、どうしてシュウも加わらなか

ったのかが疑問だよ。そうすればすぐに雄二を瞬殺出来るのに」

「……たかが幼馴染だからって、そこまでするお前等の方がどうかしているんだが。って事は俺もBクラスの佐伯和人とは幼馴染だから抹殺対象に入るのか？」

明久の言い分にメチャクチャ呆れる俺は念の為に聞いてみたが……。

『野郎はどうでもいい！！』

「……あっそ」

明久だけでなく、他の男子共が叫んで言った事で更に呆れた。要は女子の幼馴染が気に食わないって事か……実に下らん。

もしここで和人はかなりのモテ男で、俺はアイツに時々可愛い女の子が沢山いる合コンに連れて行かれていると知ったらどうなるんだろうか？　言った途端、即座に俺を抹殺すると思うが敢えて言わない。

と、明久が坂本を抹殺しようとする時……。

「あの、吉井君」

「ん？　何、姫路さん」

姫路が明久に声を掛けたので一時中断した。

「吉井君は霧島さんが好みなんですか？」

「そりゃ、まあ。美人だし」

「……」

「え？　何で姫路さんはボクに向かって攻撃態勢を取るの！？　それと美波、どうして君は僕に向かって教卓なんて危険な物を投げようとしているの！？」

「まぁまぁ。落ち着くんじゃ皆の衆」

「ってかお前等、話がドンドン変な方向に進んでいるぞ」

パンパンと手を叩いて取り持つ秀吉に、明久達に突っ込む俺。

「む。秀吉とシュウは雄二が憎くないの？」

「冷静に考えて見るが良い。相手はあの霧島翔子じゃぞ？　男である雄二に興味があるとは思えんじゃろうが」

秀吉の台詞に明久達は思い出したかのような顔になる。

「むしろ、興味があるとすれば……」

「……そうだね」

明久達が一斉に……。

「な…何ですか？　もしかして私、何かしましたか？」

姫路を見た事により、彼女は慌てた。

真実かどうかは分からないが、聞いた噂だと霧島は女子が好きで男には一切興味が無いみたいだ。

「とにかく、俺と翔子は幼馴染で、小さな頃に間違えて嘘を教えていたんだ」

坂本は早く話題を打ち切らせようとしている。

「アイツは一度覚えた事は忘れない。だから今、学年トップの座にいる」

まるで完全記憶能力を持っているみたいだな。もし霧島が坂本の言った大化の改新の年号を間違えたとしても、それ以外は確実に覚えて……ちょっと待て。それって不味くないか？

「おい坂本、質問なんだが……」

「ん？　何だ？」

俺の質問に坂本は俺を見る。

「……本当にそれで勝てるのか？」

「疑り深い奴だな。大丈夫だ、俺を信じろ」

「いや、俺が言ってるのはそうじゃなくて……」

「俺はそれを利用してアイツに勝つ。そうしたら俺達の机は……」

『システムデスクだ！』

坂本は聞いておらず、もう勝てると高揚していたのであった。

「……こりゃ負けるな」

俺はもう聞くのを止めて、後々の事を考えていた。

「一騎討ち？」

「ああ。Ｆクラスは試召戦争として、Ａクラス代表に一騎討ちを申し込む」

坂本はＡクラスに着いて早々、木下優子に試召戦争の申し込みをしている。本来は代表の霧島がするのだが、木下が代わりに交渉テーブルについている。

今回は代表である坂本を筆頭に、俺、明久、姫路、秀吉と土屋がＡクラスに着いていた。

……と言うか坂本、宣戦布告をするなら初めからこうすれば良かったんじゃないか？

「うーん、何が狙いなの？」

代表同士の一騎討ちに何かあるんじゃないかと木下は考えているみたいだ。まあ誰だって疑問に思う。何で下位のＦクラスが一騎討ちにするのかと。

「勿論、俺達Ｆクラスの勝利が狙いだ」

あたかも当然のように言う坂本の台詞に更に考える顔をする木下。何か裏があるんじゃないかと考えているに違いない。

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせる事が出来るのはありがたいけどね、だからと言って態々リスクを犯す必要もないかな」

「懸命だな」

信じる事が出来ない木下の返答に、坂本は予想通りと言った様子で返事をする。確かここからが本格的な交渉をするんだったな。

「所で、Ｃクラスの連中との試召戦争はどうだった？」

坂本は腕を組み、顎を手に当てながら木下に聞く。

「時間は取られたけど、それだけだったよ？　何の問題もなし」

あらら、坂本の罠に嵌められたとは言えCクラスも気の毒に……
根本と結託した代表の小山には同情しないけどな。今のCクラスはDクラスと同等の設備で授業を受けているのだとすぐに分かった。

「Bクラスとやりあう気はあるか？」

「Bクラスって……、昨日来ていたあの……」

「ああ。アレが代表をやっているクラスだ。幸い宣戦布告はまだされていないようだが、さてさて。どうなる事やら」

「でも、BクラスはFクラスと戦争したから、三ヶ月の準備期間を取らない限り試召戦争は出来ない筈だよね？」

確かに木下の言うとおり、試召戦争に敗北したクラスは三ヶ月間の期間が無ければ再戦は出来ない。

だが……。

「知っているだろ？　実績はどうあれ、対外的にはあの戦争は『和平交渉にて終結』ってなっている事を。規約には何の問題も無い。……Bクラスだけじゃなくて、Dクラスもな」

坂本が設備交換をしないで、こっち指示に従うのを了承しただけだからBクラスとDクラスは再戦出来るのだ。

「……それって脅迫？」

「人聞きが悪い。ただのお願いだよ」

悪役みたいな顔をしながら坂本は言う。

「ねえシュウ、今の雄二って何だか根本君みたいだね」

「アイツも根本と同様に狡賢いからな」

明久が俺にしか聞こえないように小声で話しかけてきた。それと同時に木下の後ろにいるAクラス勢の中から何やら視線も感じる。

それは……。

「……くっ……い君が……天城君に……羨ましい……！」

久保の視線だった。たかが明久に話し掛けられた位であんな顔をしないで欲しいのだが。

「うーん……分かったわ。何を企んでいるのかは知らないけど、代表が負けるなんてあり得ないからね。その提案受けるわ」

「え？　本当？」

木下と坂本はそれに気付かず交渉をしていると、参加していない明久が声をあげた。

「だって、あんな格好した代表のいるクラスと戦争なんて嫌だもん……」

だろうな。女子の制服を着た根本と戦うなんて俺だって嫌だ。木下の気持ちは良く分かる。

「でも、こちらからも提案。代表同士の一騎討ちじゃなくて、そうね、お互い五人ずつ選んで、一騎討ち五回で三回勝った方の勝ち、って言うのなら受けてもいいわ」

やはりそう簡単には事を上手く運べず、木下は警戒している。それは当然だけど。

「成程。こっちから姫路が出てくる可能性を警戒しているんだな？」

「ええ。多分大丈夫だと思うけど、代表が調子悪くて姫路さんが絶好調だったら、問題次第では万が一があるかもしれないわ。けどアタシとしては、天城君が得意科目で代表と一騎討ちをするって事になったら……」

「何だ？　Ａクラスが天城を警戒するとは意外だな」

木下の発言に坂本は目を少し見開く。

「当然よ。天城君は得意科目だとＡクラス並だし、召喚獣の操作もアタシ達と違って上手く出来るのよ。いくら代表の点数が高いからと言って、操作次第では負けるかもしれないわ」

「おいおい木下さん、それは買い被り過ぎじゃないか？　俺如きがＡクラスの代表に勝てるとは思えないが」

俺が割って入って言うが……。

「Ｂクラスの佐伯君と互角な戦いをして勝った貴方が言う台詞じゃ無いわよ、天城君？　聞いた情報だと、かなりの高得点でハイレベ

ルな戦いをしていたみたいね」

「う……」

すぐに言い返すことが出来なかった。

「姫路だけじゃなく天城も警戒してたって事か。まあ安心してくれ、うちからは俺が出る」

「無理ね。その言葉を鵜呑みには出来ないわ」

これは競争じゃなくて戦争だから、と木下は付け足す。全くもってその通りだ。おまけに脅迫紛いな事をされたのだから坂本を簡単には信じないだろう。

「そうか。それなら、その条件を呑んでも良い」

「え？」

坂本の意外な返事に、明久は素っ頓狂な声を出す。

「ホント？　嬉しいわ♪」

「けど、勝負する内容は此方で決めさせて貰う。その位のハンデはあっても良い筈だ」

「え？　うーん……」

条件を呑んだ事に喜ぶ木下だったが、ハンデを付けろと言われたので再び考える顔になってしまった。

と、木下が悩んでいる時……。

「……受けてもいい」

「ぅわっ！」

いつの間にかＡクラス代表の霧島が現れた事により、明久は情けない声を出しながらびっくりしていた。

「……雄二の提案を受けてもいい」

霧島も霧島で坂本の事を名前で呼んでいるな……幼馴染だから当然か。

と言うか、そんな事より全く気配を感じさせないで来るとは凄いな。

何か武術でもやっているのか？

「あれ？　代表。良いの？」

「……その代わり、条件がある」

「条件？」

「……うん」

霧島が頷いて坂本を見た後に姫路を値踏みするかのように、じっくりと観察し……。

「……負けた方は何でも一つ言う事を聞く」

それを終えると、再び坂本の方に顔を向けて言い放つ。

おいおい、本当に噂通り霧島は同性愛趣味を持っているのか？　久保だけじゃなく霧島まで……何でこんな身近にいるんだよ。勘弁してくれ。

「……（カチャカチャ）」

「ムッツリーニ、まだ撮影の準備は早いよ！　と言うか、負ける気満々じゃないか！」

……土屋の行動と明久のバカ発言は放っておこう。

「じゃ、こうしない？　勝負内容は五つの内三つそっちに決めさせてあげる。二つはうちで決めさせて」

木下の妥協案に坂本は……。

「交渉成立だ」

「ゆ、雄二！　何を勝手に！　まだ姫路さんが了承してないじゃないか！」

了承すると、明久が抗議して来た。

「心配すんな。絶対に姫路に迷惑はかけない」

自信満々に言う坂本。大化の改新の年号を間違えるだけで、そこまで勝利する確信があるのか？

「……勝負はいつ？」

「そうだな。十時からでいいか？」

「……分かった」

どうでもいいんだが、霧島の話し方って土屋に似ているな。おまけに気配を消して現れる所も。

「よし。交渉は成立だ。一旦教室に戻るぞ」

「そうだね。皆にも報告しなくちゃいけないからね」

交渉を成立し、俺達はＡクラスを後にしようとした。

第十三問（後書き）

次回は明後日までに出しますのでお楽しみに！！

第十四問（前書き）

また無駄に長くなって記録更新しました。
それではどうぞ！！

第十四問

時刻は十時過ぎ。再び俺達はＡクラスに赴いて試召戦争を開始する。

「では、両名共準備は良いですか？」

今回のＡクラス戦での立会人は、Ａクラス担任かつ学年主任の高橋先生であった。知的な眼鏡を掛けて、ビシッとしたスーツを纏っている。教師や生徒達からは憧れの先生として有名だ。

「ああ」

「……問題無い」

高橋先生の質問に坂本と霧島は気にする事無く答える。二人の返答に高橋先生は試召戦争を開始した。

「それでは一人目の方、どうぞ」

「アタシから行くわ」

最初は木下優子か。相手をするなら俺の方がいいかな？

と、俺が思っていると……。

「ワシがやろう」

木下の弟である秀吉が前に出た。

「待て、秀吉」

「何じゃ？」

「聞いておきたいんだが、姉に勝てる心算があるのか？」

「それは……」

秀吉が俺の質問に答えようとした時……。

「大丈夫だよ、シュウ。秀吉にはお姉さんの苦手科目や集中力の乱し方を知ってる筈だよ。この勝負は秀吉が木下さんの心をどう乱すかで決まるんだから」

明久が代わりに答えた。

「阿呆。Ａクラスの木下相手にそんな稚拙な心理戦が通じる訳無いだろうが。秀吉、まさか明久みたいな回答はしないだろうな？」

「……」

無言で逸らすな。ってか本気で心理戦をやるつもりだったのか？

「……ならもう一つ聞こう、秀吉。一昨日の件は姉に謝ったのか？」

「一昨日？」

「忘れたのか？　お前は……」

一昨日のCクラス代表の小山を挑発した事を言おうとしたが……。

「秀吉、ちょっといいかしら？」

「何じゃ？　姉上」

姉の木下優子が対戦する秀吉に近寄ってきた……それも少しばかり怖い笑みで。

木下があんな顔になってるって事は、一昨日の事を知ったみたいだな。

「Cクラスの小山さんって知ってる？」

「はて、誰じゃ？」

コラ秀吉、何で都合良く忘れているんだよ。お前は坂本の指示で姉に変装して小山を挑発したじゃないか。

「じゃーいいわ。その代わり、ちょっとこっちに来てくれる？」

「うん？　ワシを廊下に連れ出してどうするんじゃ、姉上？」

木下は秀吉の腕を引っ張って教室を出た。

「……これは不味いな」

何か嫌な予感がしそうだったので、俺も教室から出ると……。

「姉上、勝負は……どうしてワシの腕を掴む？」

「アンタ、Cクラスで何をしてくれたのかしら？　どうしてアタシがCクラスの人達を豚呼ばわりしている事になっているのかなぁ？　それとアタシが天城君に無理矢理キスしようとしたって噂が立っているのよ！？」

「はっはっは。それはじゃな、姉上の本性をワシなりに推測して…あ、姉上っ！　ちがっ……！　その関節はそっちには曲がらなっ……！」

「はいはい、木下さん。そこでストップ」

「あ…天城君！？」

木下が秀吉に関節技を仕掛けようとする所を俺が止めると、困った顔をして見る木下。

「しゅ…修哉……」

「秀吉、この状況から見て木下にまだ謝っていなかったみたいだな」

「ううっ……色々あり過ぎて忘れてたのじゃ」

「はあっ……お前なぁ。それと木下さん、自分の弟だからと言って関節技をやるのはどうかと思うぞ？」

「うっ……」

姉弟揃って罰が悪そうな顔をしている。

「全く……とは言え木下さん、一昨日の件はすまなかった。あれはうちの代表の指示で、Cクラスが Aクラスと戦わせる為に秀吉を差し向けたんだ」

「……じゃあ何？　坂本君はアタシ達Aクラスを利用した後、何食わぬ顔で脅迫紛いな宣戦布告をしたってわけ？」

「結果的に言えばそうなるな」

「修哉よ、ソレを言ったら……」

「今更もう隠す必要は無い。それに話さなきゃ秀吉はキツイ折檻をされていたんだ。これは秀吉の為でもあるんだぞ？」

「……」

俺の台詞に秀吉は何も言い返すことが出来ない。

「そう言う訳だ木下。全面的に秀吉だけが悪いんじゃなく、指示をした坂本や、ソレを止めなかった俺にも責任がある。だから秀吉には……」

「……良いわ。そう言う事なら、秀吉だけを責めるのはお門違いね」

「あ…姉上よ……」

許してくれるのかと言おうとした秀吉だったが……。

「けど、秀吉がやった事には変わりないわ。アンタにはそれなりの

罰を下すから覚悟しておきなさい」

「や…やはりそう簡単には許してもらえんみたいじゃのう……」

世の中そんなに甘くはないみたいだ。

「安心しなさい、さっきみたいな事はしないから」

「なら良いのじゃが……」

「因みに木下さんの言った罰って何をするのか聞いてもいいか？」

「え…えっと……これはアタシと秀吉の問題だから、天城君は何も聞かないで。さっきも言ったけど、秀吉に暴力を振るったりしないから」

「ならいいが」

まあ木下がここまで言うなら聞かないが……俺には他にも聞かなければいけない事がある。

「木下さん、もう一つ聞きたい事があるんだが」

「何？」

「秀吉を折檻する前に、木下さんが俺に無理矢理キスをしたってどう言う事だ？」

「……」

俺の問いに木下は無言になりながら顔を赤らめ……。

「それは俺も初耳なんだが……」

「やっぱり秀吉は今すぐ折檻されなさい～～～！！！！！！」

「ギャアアアアア～～～～！！！！！！」

「っておい！　何をやってる木下さん！？」

すぐさま秀吉に関節技を仕掛けるのであった。

そして五分後

ガラガラガラ

Ａクラスの扉を開けて戻ってくる俺と木下。

「坂本君、秀吉は急用が出来たから帰るって言ってたわ。代わりに天城君と戦ってもいいかしら？」

「あ、ああ……。それは構わないが……」

「……」

怖い笑みを浮かべながらハンカチで返り血を拭う木下。流石の坂本もすぐに木下の要求を呑んだ。

「……お…おい天城、秀吉は一体どうした？」

「さあ？　誰かさんの所為で秀吉が帰ってしまったとしか言えないな」

「…そ…そうか」

「取り敢えず、坂本には試召戦争が終わったら後で木下に謝っておけよ」

「何でだ？」

「俺が一昨日の事を木下に教えたから」

「……何でバラした？」

俺の台詞に坂本は顔を青褪めながらも俺を問い詰める。

「教えなかったら秀吉が惨い事になってたからな。それに……俺や秀吉だけが理不尽な目に遭っておいて、指示したお前が何もされないってのは割に合わなさ過ぎだから。と言う訳でちゃんと木下に謝れよ」

「待て！　それはお前の個人的な八つ当たりじゃねえか！！」

坂本の言葉を無視して木下と立ち合う。

「高橋先生、俺が秀吉の代わりに木下さんと戦いますので」

「分かりました。では教科はどうしますか？」

高橋先生の質問に……。

「数学でお願いします」

即座に答えたのであった。

「ちょ…ちょっとシュウ！　どうして自分から苦手科目を……」

「良いんだ、明久」

明久が不味いと思って言おうとしたが、俺が遮る。

「では始めようか、木下。試獣召喚（サモン）！」

「試獣召喚（サモン）！」

俺と木下は召喚獣を出すと……。

『Ｆクラス　天城修哉　数学　９０点
ＶＳ
Ａクラス　木下優子　数学　３７５点』

点数差は圧倒的に桁外れだった。

因みに木下の召喚獣は騎士の鎧を着てランスを持ったデフォルメ姿の木下だ。

「あああ……差がありすぎる。シュウが負けちゃうよ」

「天城の奴、何で自分から苦手科目を……ここは諦めるしかないな」

「そこ、静かに見てろ」

明久と坂本の呟きに俺は即座に突っ込む。

その直後、俺と木下の召喚獣での対決が始まった。

ダッ！　スカッ！　シャキンッ！　ザシュッ！　ダッ！　スカッ！
シャキンッ！　ザシュッ！

『Ｆクラス　天城修哉　数学　９０点
ＶＳ
Ａクラス　木下優子　数学　３４１点』

木下の召喚獣が持っているランスを使っての突進攻撃を難なく避ける俺の召喚獣は居合いをやってダメージを与えている……ほんの少しだが。

「やっぱり点数差があり過ぎると、ダメージもかなり低いな」

「くっ！　点数が高くても簡単には倒せないわね……！」

「その代わり一発でも喰らったら終わりだが」

簡単に避けられている俺の召喚獣を見て木下は苦い顔をする……。

他のＡクラス生徒達や高橋先生は驚いた顔をして見ているが。

『凄い。避けるだけじゃなく、ちゃんと反撃もするなんて』

『木下さんの言ったとおり凄い奴だな、天城って』

『何であんな強い奴がＦクラスにいるんだ？』

Ａクラス生徒達は感心しながら見ており……。

「流石は天城君ですね。点数差があっても、ここまでの戦いを繰り広げるとは」

高橋先生も同様に感心していた。

『Ｆクラス　天城修哉　数学　　９０点
ＶＳ
Ａクラス　木下優子　数学　２９９点』

「やっと３００点を切ったか。倒すには結構時間が掛かりそうだな」

「っ！！　……すぅ～～～はぁ～～～すぅ～～～はぁ～～～。落ち着け、落ち着くのよアタシ。焦ったら天城君の思う壺……すぅ～はぁ～」

「流石は木下さんだ。他の連中とは違って冷静だな」

Dクラスやbクラスだったら焦って隙を見せてくれたが、木下はそう簡単には行かないみたいだ。深呼吸をして焦った心を落ち着かせるのは懸命な判断である。

『天城～！　そのまま一気に行け～～！』

『お前なら倒せるぞ～！』

『突っ走れ～～！！』

未だにダメージを負ってない俺の召喚獣を見て、Fクラス達は後押しするかのように応援してくる。

バカが、下手に気を抜けばコッチがやられる。押してるとは言え、未だに向こうが優勢なんだぞ。

「……どうしたの、天城君。貴方からは攻撃しないのかしら？」

「さあ？　どうしようかな？」

「……なら！」

木下の召喚獣が再びランスを使って突進すると……。

ダッ！　スカッ！　シャキンッ！　ザシュッ！

またさっきの繰り返しで俺の召喚獣は避けて居合いをしたのであった。

『Ｆクラス　天城修哉　数学　９０点
ＶＳ
Ａクラス　木下優子　数学　２７１点』

そして木下の召喚獣がフラフラした状態になっている。

『シュウ！　今がチャンスだよ！！』

『そのまま止めを刺せ～！』

「……」

明久や他のＦクラス達が言っても俺の召喚獣は動かなかった。

「ふむ、点数が低くなると少しばかりダメージも高くなるみたいだな」

「……やっぱりね」

「ん？」

「天城君、アタシの召喚獣が怯んでいるにも拘らず、攻撃する気配が全く無いわね」

「……何の事だ？」

木下の指摘に俺はわざと惚けていたが……。

「貴方はこう思っているんでしょう？　下手に自分から攻撃を仕掛けたら、即座にアタシから反撃を喰らって負けてしまうって。違うかしら？」

「……」

次の指摘では言い返すことが出来なかった。

「やっぱりそう言う事だったの。隙を見せても動かないなんて相当用心深いのね」

「……だが分かった所でどうするつもりだ？　俺は木下さんが仕掛けない限り、動く気は無いぞ」

「そうね。アタシが何を言っても絶対に動かないと思うから……こっちから仕掛けるわ！」

木下の召喚獣は再び突進攻撃を繰り出してくる。

ダッ！　スカッ！

「残念だが、それはもう完全に見切った」

シャキンッ！　ザシュッ！

『Ｆクラス　天城修哉　数学　　９０点
ＶＳ
Ａクラス　木下優子　数学　２３１点』

そして俺の召喚獣も再び居合いをやってダメージを与えたが……。

ガシッ！

「なっ！？」

予想外な事に、木下の召喚獣は俺の召喚獣の片腕をランスを持っていない片手で掴んだ。

「やっと捕まえたわ」

「ま…まさか、始めからダメージを受ける気で……」

「ええ。そうでもしないと、貴方の召喚獣の捕らえる事が出来ないから。さあ、これで終わりよ！！」

ドスンッ！！

木下の召喚獣は動けない俺の召喚獣にランスを当てて……。

『Fクラス　天城修哉　数学　0点』

俺は敗北してしまった。

「勝者、Aクラス　木下優子」

「はあっ……捨て身覚悟でやられたらそりゃ負けるよなぁ～」

高橋先生の宣言により、俺はガックリとする。

「そこまでガッカリしなくてもいいわよ、天城君。苦手科目であるにも拘らず、あれ程の点数差でも追い詰めていたんだから。もし天城君の得意な国語か英語で挑んでいたら、間違いなく負けていたわ」

「木下さんの言うとおりですよ。正直、私もあそこまで善戦するとは思ってもいませんでしたから。寧ろ誇って下さい」

「……それはどうも」

木下と高橋先生の台詞を聞いて俺はすぐに引き下がる。

「悪い、負けてしまった」

「そんなに気を落とさないで良いよ、シュウ。Aクラス相手にあんなすごい戦いをする事に驚いているんだから」

「そうだな。まあ負けてしまったのは残念だが、苦手科目で挑んだなら……ってかどうして数学を選んだんだ？　国語か英語を選べば、充分に勝てただろうが」

明久はあそこまで奮戦した事に驚いているみたいであったが、坂本は労いながらも俺の行動に疑問を抱いていた。

「一昨日の謝罪と言えば分かるか？」

「だからと言って……」

「お前が何を言おうが、俺達は木下にかなりの迷惑を掛けてしまったんだ。戦争とは言え、元クラスメイトを利用した俺としても、これぱっかりは譲れなかったからな」

「……」

俺の台詞に坂本は何も言い返すことが出来ないみたいで無言だった。

「では、次の方どうぞ」

「私が出ます。科目は物理でお願いします」

高橋先生が二回戦のコールをすると、Aクラスからは眼鏡を掛けた黒髪のセミロングの女子……確か佐藤美穂だったな。

対してFクラスからは……。

「よし。頼んだぞ、明久」

「え！？　僕！？」

明久が行く事になった。

「おい坂本、何故明久に行かせようとする？」

「信じているからな」

「何をだ？」

「……」

俺の質問に坂本は答えず無言だ。コイツ……二回戦は勝てないと判断して明久を捨て駒にしようとしているな。

「ふぅ……。やれやれ、僕に本気を出せって事？」

「ああ。もう隠さなくても良いだろう。この場にいる全員に、お前の本気を見せてやれ」

完全に騙されている明久を更に調子付かせる坂本。

『おい、吉井って実は凄い奴なのか？』

『いや、そんな話は聞いた事は無いが』

『いつものジョークだろ？』

Fクラスの連中からは信じていないような感じで言ってくる。

「吉井君、でしたか？　あなた、まさか……」

何か勘違いをしている対戦相手の佐藤。

「あれ、気付いた？　ご名答。今までの僕は全然本気なんて出しちゃいない」

じゃあ何で袖をまくって手首を振ってるんだ？　召喚獣バトルには全く関係ないぞ。

「それじゃ、あなたは……」

「そうさ。君の想像通りだよ。今まで隠してきたけれど、実は僕……」

明久が大きく息を吸って、この場にいる全員に告げようとしたが……。

「明久、まさか左利きなんてバカな事を言うんじゃないだろうな？」

「……」

俺の突っ込みに明久は無言になり……。

『……』

ここにいる全員も無言になった。

そして……。

『Ｆクラス　吉井明久　物理　　６２点
ＶＳ
Ａクラス　佐藤美穂　物理　３８９点』

明久の召喚獣は瞬殺されて敗北したのであった。下らん事を言う暇があるなら、負けるのを覚悟で一矢報いろよ。

「このバカ！　テストの点数に利き腕は関係無いでしょうが！」

「み、美波！　フィードバックで痛んでいるのに、更に殴るのは勘弁して！」

ま、いくら明久の召喚獣操作が俺より上だからと言って六倍以上の点数差があったら即座に負けるな。こんな事になるなら、一回戦と二回戦を同時にやる為に明久と組んでタッグ戦でもやれば良かった。

そうすれば点数が低いからと言って、それなりの戦果があったし…
…まあ今更言っても遅いが。

「よし。勝負はここからだ」

「ちょっと待った雄二！　アンタ僕を全然信頼して無かったでしょう！」

「今更何を言ってる、明久。坂本がお前を信頼してるわけ無いだろう。と言うか、いい加減に坂本の言葉を信じるなよ」

「信頼？　何それ？　食えんの？」

安心しろ坂本、俺はお前が霧島に勝つ事に微塵も信頼していないから。

「……本気を出した左腕でお前を殴りたい！！」

「その前に先ずは島田をどうにかする事だな」

「え！？　シュウは助けてくれないの！？」

「今回も坂本に騙されたとは言え、変に調子に乗った罰だと思って諦めろ」

「酷い！！」

人の事を云々言う前に、坂本に良い様に利用されているって事を学習して欲しいんだが。

「では、三人目の方どうぞ」

「……（スック）」

三回戦のコールに土屋が立ち上がる。

次は此方の科目選択権だから、ここで土屋の得意科目が出ると確信する。その科目は保健体育だ。

何故なら土屋はBクラス戦で根本を討ち取った時の点数がAクラス並、いやそれ以上の点数を持っていたから。

「じゃ、ボクが行こうかな」

Aクラスからは俺の元クラスメイトである工藤愛子が出てきた。

あ、確か工藤の得意科目って……これはちょっと不味いか？

「一年の終わりに転入してきた工藤愛子です。よろしくね」

「教科は何にしますか？」

工藤が自己紹介を終えると、高橋先生が土屋に尋ねる。

「……保健体育」

それは当然の選択科目であり、土屋の唯一最強の武器だった。

「土屋君だっけ？　随分と保健体育が得意みたいだね？」

工藤が余裕な顔をして土屋に話しかける。Fクラスの男子達は工藤の行動に疑問を抱いているが俺は知っている。

何故なら……。

「でも、ボクだってかなり得意なんだよ？　……君と違って、実技で、ね♪」

工藤も土屋と同様に保健体育が得意なのであった。

「そっちの君、吉井君だっけ？　勉強苦手そうだし、保健体育で良かったらボクが教えてあげようか？　勿論実技で」

今度は明久に誘いをかけて来た……それって勉強の誘いだよな？

「フッ。望むところ……」

「アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんて要らないのよ！」

「そうです！　永遠に必要ありません！」

「……」

「島田に姫路、明久が死ぬほど哀しそうな顔をしているんだが」

「二人とも、何故そこまで断言するのかが俺には全く理解出来ないぞ。それに工藤は勉強の誘いをしただけに過ぎないんだがな。と言うか工藤さんも少々からかい過ぎだ」

「あ、バレた？」

『え？』

俺の台詞に明久達は俺の方に顔を向ける。

「いや～何だか吉井君が気の毒そうに見えて……」

「だからと言って変に誤解を招く事を言うな」

「じゃあ天城君がボクと本格的な実技をやってくれる？」

「それは和人に言ったらどうだ？　アイツなら喜んで引き受けるぞ」

「……いや、佐伯君は遠慮しとく」

工藤は冷や汗を掻きながら首を横に振った。和人曰く、「工藤さんは性行為の実技に関しては全くの未経験で、見栄を張っているだけに過ぎない」と言ってたのだ。

あの様子からして未だに経験は無さそうだな……どうでもいい事だが。

と、そんな時……。

「そろそろ召喚を開始して下さい」

高橋先生が痺れを切らしたのか、召喚獣を出すよう催促してきた。

「はーい、試獣召喚っと」

「……試獣召喚」

土屋と工藤は召喚獣を出すと、それぞれ武器を持って出現する。土屋は前回のBクラス戦で見せた小太刀二刀流。

対する工藤の武器は……。

「何だあの巨大な斧は!?」

明久が驚愕しながら言った。工藤の召喚獣はセーラー服を纏い巨大な斧を持った召喚獣。見るからにかなり強そうな感じだ。おまけにあの腕輪もある。

「実践派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ」

だから工藤、見栄を張るのは止めとけ。そこまで言うなら和人を呼ぶぞ?

「それじゃ、バイバイ。ムッツリーニ君」

そして雷光を纏った大斧を振るう工藤の召喚獣は、土屋の召喚獣に襲い掛かる。あの雷光は腕輪の特殊能力を発動させているみたいだな。その証拠に腕輪が光っているし。

「ムッツリーニっ!」

土屋がピンチだと思った明久は声を上げ、斧が召喚獣を両断しようとしたが……。

「……加速」

その直後、土屋の召喚獣の腕輪が輝いて姿がブレた。

「……え？」

思いも寄らない事に戸惑う工藤。

けど俺は少しばかり見えた。土屋の召喚獣が物凄いスピードで工藤の召喚獣の全身を切りつけている所を。

「……加速、終了」

土屋がポツリと呟く。その後には工藤の召喚獣は全身から血が吹き出して倒れた。

『Ｆクラス　土屋康太　保健体育　５７２点
ＶＳ
Ａクラス　工藤愛子　保健体育　４４６点』

凄い点数だな。もしかして教師以上じゃないか？

「つ、強い！　下手をすると僕の総合科目並の点数だよ！」

「……はあっ」

明久の余りの点数の低さに溜息を吐きながら呆れる俺であった。

「Bクラス戦の時は出来がイマイチだったらしいからな」

驚く明久と呆れる俺に説明する坂本。

前回の戦いでは本気じゃなかったのかよ。凄い点数に感心するべきか、バカげた点数に呆れるべきか……どうすればいいか分からなかった。

「そ…そんな……！　この、ボクが……！」

自分の得意科目である保健体育で負けた事に、工藤はショックを受けて床に膝を付く。ま、上には上がいるって事だな。

「これで二対一ですね。次の方は？」

高橋先生は淡々と作業を進めている。自分のクラスが負けたと言うのに余り気にしてない様子だ。

「それなら僕が相手をしよう」

次に出たのは久保利光であった。

あれ？　宣戦布告の時はやたらと悔しそうな顔をしてたのに、随分と冷静な顔をしているな。

「やはり来たか、久保利光」

坂本は久保の登場に真剣な顔をして見ている。まあコイツがああなるのは無理もない。

何しろ久保は姫路に次ぐ学年三位の実力者で、振り分け試験を姫路がリタイアした事により、現在は学年次席の座にいる。

「ここが一番の心配どころだ」

「そうだな」

坂本の言葉に俺は頷く。

久保の実力は姫路とほぼ互角。連戦で疲れている姫路に果たして久保に勝てるかどうかは不安なのだ。

「科目はどうしますか？」

高橋先生が久保と姫路に問いかける。

そう言えば、選択科目権はコッチが三回で向こうは二回。順番は決めてなかったような。これって早く言った者勝ちか？

「総合科目でお願いします」

と、久保はすぐに答えた。

「ちょっと待った！　何を勝手に……」

「明久、向こうにも選択科目権はあるんだ」

「でもだからって……！」

俺の言葉に明久がまだ何か言おうとしたが……。

「構いません」

「姫路さん？」

姫路がすぐに止めた。

「それでは……」

高橋先生が操作を行うと、姫路と久保の召喚獣が呼び出され……

…一瞬で決着が付いた。

『Ｆクラス　姫路瑞希　総合科目　４４０９点

ＶＳ

Ａクラス　久保利光　総合科目　３９９７点』

『ま、マジか！？』

『いつの間にこんな実力を！？』

『この点数、霧島翔子に匹敵するぞ……！』

敵味方問わず驚きの声が上がっている。

これは凄いな。まさか姫路が４０００点オーバーしていたと同時に、久保との点数差も４００点オーバーだ。とんでもない実力だ。

「ぐっ……！　姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ……？」

まさか久保もここまでの実力差があったとは思いもしなかっただろう。

久保の質問に姫路は……。

「……私、Ｆクラスの皆が好きなんです。人の為に一生懸命な皆のいる、Ｆクラスが」

「Ｆクラスが好き？」

「はい。だから、頑張れるんです」

何ともまあ、Ｆクラス全員に対しての嬉しい事を言っていたのであった。俺はてっきり、大好きな明久の為に頑張っていたと予想してたんだがな。

「これで二対二です」

おや？　どうやら高橋先生の方も若干の変化があったみたいだな。姫路の急成長に驚いているのか、もしくはＦクラスがＡクラスと此処まで渡り合っている事に戸惑っているのか……果たしてどっちだろうな。

「最後の一人、どうぞ」

「……はい」

大将戦は言うまでもなく、Ａクラス代表の霧島翔子が出てきた。

そして、Ｆクラスからは……。

「俺の出番だな」

坂本雄二であった。

「教科はどうしますか？」

Ａクラスの連中は霧島が負ける事は無いと思って静かに見ている。

それは俺も同じだ。

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」

坂本が選択した教科と内容により……。

ざわ……！

流石のＡクラス達もざわめきが立ち始めた。

『上限ありだって？』

『しかも小学生レベル。満点確実じゃないか』

『注意力と集中力の勝負になるぞ』

Aクラスの皆さん、そこまで警戒する必要は無いよって言いたいな。

明久達は勝利の可能性があると思っているみたいだが、ハッキリ言って無い。もう気付いていると思われるが、読者の皆様は何故俺が此処まで坂本は絶対に負けると断言出来るのかお分かりでしょうか？まあ、もう少し後になれば分かるので今すぐに答えませんけど。

「分かりました。そうなると問題を用意しなくてはいけませんね。少しこのまま待って下さい」

高橋先生はノートパソコンを閉じて教室を出て行く。小学生レベルのテストを作る為に職員室へと向かったのだろう。

そんな高橋先生の背中を見送った明久は、坂本に近づく。

「雄二、後は任せたよ」

グッと坂本の手を握っている。

「ああ。任された」

明久の言葉に坂本は力強く握り返す。

「……（ビッ）」

土屋も坂本に歩み寄り、ピースサインを向ける。

「お前の力には随分助けられた。感謝している」

「……（フッ）」

土屋は口の端を軽く持ち上げて、元の位置に戻った。

「坂本君、あの事、教えてくれてありがとうございました」

「ああ。明久の事か。気にするな。後は頑張れよ」

坂本は姫路と何か話していたが俺には関係無いみたいだ。

「はいっ」

姫路は元気な返事をして、坂本は楽しそうにやんわりとした笑みを浮かべた。

そして俺も坂本に近づく。

「坂本、俺は信じているぞ」

お前が最高の道化を演じてくれる事を、な。

と、俺が内心そう思っていると……。

「ああ、任せてくれ」

坂本はやっと俺を信頼してくれたと思っているのか、最高の笑みを浮かべた。

「（ニコッ）楽しみに待っているぞ」

無様に負けてくれる事を思いながら俺は笑みを浮かべる。

そして１０分近く経つ

『では、問題を配ります。制限時間は五十分。満点は百点です』

テストの準備が終えたので坂本と霧島は視聴覚室におり、Ａクラスにいる俺達はスクリーンを通して見ていた。

画面の向こうには坂本と霧島の他に、日本史担当の飯田先生が問題用紙を裏返しのまま二人の机に置く。

『不正行為等は即失格になります。いいですね？』

『……はい』

『分かってるさ』

『では、始めて下さい』

飯田先生の合図に、二人は裏返しになってる問題用紙を表にした。

「吉井君、いよいよですね……」

「そうだね。いよいよだね」

「これで、あの問題が無かったら坂本君は……」

「集中力や注意力に劣る以上、延長線で負けるだろうね。でも」

「はい。もし出ていたら」

「うん」

明久と姫路、そしてFクラス全員とAクラス全員が固唾を呑んで見守っていた。

その中で……。

「……ふわぁ～～～。この椅子って結構座り心地が良いなぁ～。思わず寝てしまいそうだ」

『……』

俺だけが唯一スクリーンを見ないでリクライニングシートに座って

寛ぎながら欠伸していた。その事に俺以外の面子は呆れて見ている。
今の俺は確実に空気を読んでいない状況だ。けどそんな事は気にしないで、俺は未だに寛いでいる。

「ちょ…ちょっとシュウ！　何してるの!?」

「見ての通り寛いでいるんだが」

「そう言う事言ってるんじゃない！　何でスクリーンを見ていないのさ!?」

「天城君、吉井君の言う通りよ。どうして貴方は見向きもせず、そんなに寛いでいるのかしら?」

明久と木下が俺の行動を注意するかのように言ってきた。

「見る必要が無いからな」

「え?　……それって?」

「もう結果は分かってるって事だ」

俺の言葉に明久や木下、そしてこの場にいる全員が驚いた顔をする。

「な…何だ、そう言う事か。だからシュウはそんなに余裕な態度なんだね。雄二が勝つのを分かってて」

「……天城君がそこまで余裕って事は……まさか代表が…」

安堵する明久に、不安になる木下。実に対照的な二人だ。俺の言葉を聞いた他の面子も同様に明久と木下みたいな顔になっている。

「ま、結果を見れば分かるさ。お？　問題が出ているみたいだな」

『！！！』

スクリーンを見た俺が問題が出ている事を言うと、全員は一斉にスクリーンの方に集中した。俺も一応は見ておこう……椅子に座りながら。

《次の（　）に正しい年号を記入しなさい》

（　）年　平城京に遷都

（　）年　平安京に遷都

ふむ、流石は小学生レベルだ。俺でも簡単に解ける。この様子なら出ていそうだな。

（　）年　鎌倉幕府設立

（　）年　大化の改新

お？

「あ……！」

明久が見つけたかのように声を漏らす。

「よ、吉井君っ」

「うん」

「これで、私たちっ……！」

「うん！　これで僕等の卓袱台が」

『システムデスクに！』

俺以外を除く、揃ったFクラスの言葉。

「最下層に位置した僕等の、歴史的な勝利だ」

『うぉぉぉぉっ！！』

教室を揺るがすような歓喜の声。

「お前等、喜んでいる所を悪いが、とても無残な結果が表示されているぞ」

『え？』

俺の台詞にFクラスが再びスクリーンを見ると……。

《日本史勝負　限定テスト　１００点満点》

《Ａクラス　霧島翔子　９７点》
ＶＳ
《Ｆクラス　坂本雄二　５３点》

本当に無残な結果だ。

かくしてＡクラスとの戦いが終わり、俺達Ｆクラスは負けて卓袱台から蜜柑箱へとなった。

「ア～～ッハッハッハッハ！　俺の思ったとおり、坂本は最高の道化を演じてくれたなぁ～！」

「雄二ぃぃぃぃ～～～～！！！！！！！」

『坂本ぉぉぉぉぉ～～～～！！！！！！！』

俺の笑い声を合図に、姫路と島田を除くＦクラスの面々は怒りの雄叫びをあげて、視聴覚室へと向かったのであった。

「ハハハハハ……分かってたとは言え、笑いが止まらないなぁ～」

「あ…天城君、まさか貴方……」

「坂本君が負けるのを分かってて寛いでいたの？」

「どうしてそれを言わなかったんだい？」

俺が笑っている最中に、木下と工藤と久保が椅子に座っている俺に問いかけてきた。

「あの時のアイツ等は俺が言った所で絶対に信用しないからな。それに……」

「「「それに？」」」

「霧島が大化の改新の年号が絶対に間違える程度で、勝てると思い上がっていた坂本には丁度良いお仕置きだったから」

「「「……」」」

Aクラス3名は脱力したかのように呆れていた。

「さ…坂本君はそれだけで……代表に勝てると思ってたの？」

「それ以外は間違えないって考えてなかったのかな？」

「いや、それ以前に坂本君は何故あんなに酷い点数なのかが分からない……僕にはとても理解出来ないよ」

「それは簡単だ、久保。単に坂本が思い上がったバカなだけだ」

「「「……」」」

あっさり答える俺に、再び無言となる木下と工藤と久保であった。

第十四問（後書き）

次回はエピローグですので、短くなると思います。

第十五問　（第一巻終了）

バカテスト　歴史

問題　次の（　）に正しい年号を記入しなさい。

『（　）年　キリスト教伝来』

霧島翔子の答え

『１５４９年』

教師のコメント

正解。特にコメントはありません。

坂本雄二の答え

『雪の降り積もる中、寒さに震えるキミの手を握った１９９３』

教師のコメント

ロマンチックな表現をしても、間違いは間違いです。

Fクラス対Aクラス戦が終わり……。

「三対二でAクラスの勝利です」

視聴覚室になだれ込んだ明久達に対して、高橋先生が締めの台詞を言う。

うわ、明久達は坂本を今すぐにでも殺しそうな雰囲気だな。

「……雄二、私の勝ち」

床に膝を付く坂本に霧島が歩み寄っている。

「……殺せ」

「良い覚悟だ、殺してやる！　歯をくい縛れ！！」

「吉井君、落ち着いて下さい！」

「姫路の言うとおりだぞ、明久」

坂本の発言により明久は即座に仕掛けようとしたが、姫路が明久を後ろから抱き付く。ちょっと羨ましい光景だ。当の本人は坂本に対する殺意で全く気付いていないけど。

「だいたい、５３点ってなんだよ！　０点なら名前の書き忘れとか

も考えられるのに、この点数だと……」

「いかにも俺の全力だ」

「この阿呆がぁーっ！」

「アキ、落ち着きなさい！　アンタだって３０点も取れないでしょうが！」

「それについては否定しない！」

コラ、そこは否定しろよ。ってか明久、お前まだ自分が良い思いをしてるって事に気付いていないみたいだな。

「それなら、坂本君を責めちゃダメですっ！」

「くっ！　何故止めるんだ姫路さんに美波！　この馬鹿には喉笛を引き裂くと言う体罰が必要なのに！」

「それって体罰じゃなくて処刑です！」

姫路が必死に体を張って明久を止めている。

全くこのバカは……仕方ないな。

「あのなぁ明久、その台詞は一騎討ちで勝った奴が言う台詞だ。負けたお前がそんな偉そうな事を言う資格は無いんだぞ。それに体罰が必要なら、負けた俺やお前も同様に必要だと思うが？」

「うっ！！」

俺の発言に明久は急に大人しくなった。

まあ明久が此処まで憤る気持ちも分かる。坂本はFクラス全員に期待させておいて無様に負けたんだからな……俺は最初から期待していなかったけど。

俺も少しは嫌味を言わせてもらうか。

「坂本、今回の敗因は過信と勉強不足だったな」

「……」

「今だから言うけど、俺は始めからお前が霧島に勝てるって微塵も思ってなかったから」

「……俺を信頼してなかったのか？」

「信頼？　何それ？　食えんの？」

「……」

坂本が明久に言った台詞をそのまま言うと、完璧に打ちのめされていた。

どうだ坂本、今まで明久にやってた事を逆にやられた気分は？　お前はいつもそうやって明久を騙していたんだからな。

「……でも、危なかった。雄二が所詮小学校の問題だと油断してなければ負けてた」

「言い訳はしねぇ」

霧島がああ言うって事は、当時の坂本はさぞかし秀才だったんだな。一体何が原因で坂本はああなっているのかは知らんが。

「……ところで、約束」

あ、そう言えば宣戦布告の時に霧島が負けた時の条件を出していたんだったな。

「……！（カチャカチャカチャ！）」

土屋が撮影の準備の為にカメラを弄っている。おいコラ明久、ドサクサに紛れて手伝おうとするな。

「分かっている。何でも言え」

やけに潔い坂本の返事。ってか坂本にしては随分と素直だ。

「……それじゃ――」

霧島が姫路に一度視線を送って、再び坂本に視線を戻す。まさか本当に姫路を狙っているのか？

と、俺がそう思っていると……。

「……雄二、私と付き合って」

霧島は坂本に告白をした。

……は？

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか」

「……私は諦めない。ずっと、雄二の事が好き」

……こ…これは予想外の事態だ。まさか霧島が坂本の事を好きだったとは。

「その話は何度も断っただろ？　他の男と付き合う気はないのか？」

「……私には雄二しかいない。他の人なんて、興味ない」

……どうやら霧島の同性愛趣味は根も葉もない噂みたいだったな。霧島が男子に見向きもしないのは坂本以外の男子に全く眼中に無くて、姫路を見ていたのは坂本に近づく女子をマークしていたって事かな？

あ～良かった。霧島が同性愛趣味を持っていなくて。明久達は予想外な出来事に未だ戸惑っているみたいだな。

「拒否権は？」

「……無い。約束だから、今からデートに行く」

「ぐぁっ！　放せ！　やっぱこの約束は無かった事に……」

霧島が坂本を連れて教室を出ようとする時……。

「ちょっと待ってくれないか？」

俺が止めた。

「……何？」

「坂本には試召戦争が終わった後、説教をする約束があってね」

「……悪いけど、今はこっちが優先」

「そうは言ってもねぇ……」

「いや、天城！　いくらでも説教を受けるから取り敢えず助けてくれ！」

俺を救世主みたいに見てくる坂本。

どうやら坂本は霧島とデートをする事が相当嫌みたいだな。

だったら……。

「……まあ別に坂本をすぐに説教をする必要は無いから、後でいいか」

説教より霧島のデートを優先させる事にした。

「テメエ！」

「……ありがとう」

怒鳴る坂本に、礼を言う霧島。

「その代わり、君の携帯番号とメールアドレスを教えてくれないか？」

「……何故？」

「もし坂本が妙な事をしたら即座に連絡する為って言う理由で納得してくれる？」

「……天城、貴方はとても良い人」

霧島は礼を言いながら携帯を出したので、俺は自分の携帯を出して赤外線受信をする。

「良い人じゃねぇ！！　ってか何考えてやがる天城！！」

「いやぁ、そうすれば坂本がバカな事をした際には俺が手を下す手間が省けて……ゴホン！　もとい、坂本と霧島の仲を応援する為に……」

「今、サラリと本音を言ったろ！？」

坂本の言葉を無視してると、俺の携帯は赤外線通信を終えて霧島の携帯番号とメールアドレスを取得した。

「これで良しっと。手間を取らせてすまなかったな。では坂本とのデートをどうぞ」

「……それじゃあ」

「待て翔子！　俺はあの野郎をぶっ飛ばさなきゃ……！」

霧島は喚いている坂本の襟首を引っ張りながら教室を出て行ったのであった。

「……」

「……」

「……」

「ハッハッハッハ、もし坂本は霧島と結婚したら絶対尻に敷かれるな」

教室に沈黙が訪れている最中、俺だけが言葉を発していた。

と、その時……。

「さて、Ｆクラスの皆。お遊びの時間はここまでだ」

「ん？」

突如、西村先生の声が聞こえたので、俺は聞こえた方向に顔を向ける。

「あれ？　西村先生。僕等に何か用ですか？」

「ああ。今から我がＦクラスに補習についての説明をしようと思ってな」

西村先生の回答に、明久は嫌な予感をしていそうな顔をしている。

「おめでとう。お前等は戦争に負けたおかげで、福原先生から俺に担任が変わるそうだ。これから一年、死に物狂いで勉強出来るぞ」

『なにぃっ！？』

「ほう、それはそれは」

Ｆクラスの男子生徒達全員が悲鳴を上げている……が、俺だけは違った。

「補習はともかくとして、西村先生が担任になってくれるのは嬉しいですよ。俺としては大変に心強い」

『なんだとっ！？』

俺の台詞に驚愕するＦクラス生徒達全員。ってかお前等うるさいぞ。

「天城、入学早々に大変だったな。だが安心すると良い。俺が担任になった以上、吉井と坂本はキッチリと監視するからな」

「それは多いに助かります。俺一人だけじゃとても無理ですので」

「ちょっとシュウ！　それどう言う意味！？」

「そのままの意味だ」

明久の問いに俺はシレッと答える。

そして西村先生は俺以外のＦクラス生徒達の方に顔を向けて……。

「いいか。確かにお前等はよくやった。Ｆクラスがここまで来るとは正直思わなかった。でもな、幾ら『学力が全てではない』と言っても、人生を渡っていく上では強力な武器の一つなんだ。全てじゃないからと言って、蔑にしていい物じゃない」

と、大変にありがたいお言葉をさしあげた。

「くっ！　雄二が勝ってればこんな事には……！」

「あのなぁ明久。説教くさい話だと思うが、西村先生の言ってる事は事実だぞ。お前は根性があれば乗り切る事が出来ると思っているだろうが、それなりの学力が無ければ進学や就職を勝ち取るのは無理だ。根性だけで生き延びるほど現実は甘くない。無論、明久だけじゃなく他の連中にも言える事だ」

「うむ、全く持って天城の言うとおりだ」

俺の言葉に西村先生が頷く。

「吉井。さっきも言ったがお前と坂本は特に念入りに監視してやる。なにせ、開校以来初の《観察処分者》とA級戦犯だからな」

「そうは行きませんよ！　何としても監視の目を掻い潜って、今まで通りの楽しい学園生活を過ごしてみせます！」

「……お前には悔い改めるという発想は無いのか。だがな吉井、万が一にも俺から逃れたとしても……」

「その時は俺が捕まえるから覚悟しとけ、明久」

「な…何て事だ！　僕には退路が無いと言うのか！？」

バカな事を言っている明久であるが、それでも多少は勉強をする気になっているみたいだ。

「取り敢えず明日から授業とは別に補習の時間を二時間設けてやろう」

「そうしてくれると助かります。遅れた授業の分を取り戻したかったので」

「……鉄人から逃れる為には……三ヵ月後の試召戦争で……（ブツブツ）」

明久、お前の考えている事はお見通しだからな。それと聞こえているから、もう少し小声で言った方が良いと思うぞ。

と、俺が明久に内心で突っ込んでいると……。

「さぁ～て、アキ。補習は明日からみたいだし、今日は約束通りクレープでも食べに行きましょうか？」

「え？　美波、それは週末って話じゃ……」

島田が明久の手を掴んで教室から出ようとしていた。と言うか島田はいつの間にかそんな約束をしていたんだな。

更には……。

「だ、ダメです！　吉井君は私と映画を観に行くんです！」

「ええっ！？　姫路さん、それは話題にすら上がってないよ！？」

今度は姫路も参戦して来た。

恐らく明久と約束をした島田に嫉妬して話題にもなっていない事を言い出したんだろう。そうでなきゃあんな事は言わないからな。

明久は意外とモテているんだが、鈍感ゆえに気付いていない。

「に、西村先生！　明日からと言わず、補習は今日からやりましょう！　思い立ったが仏滅です！　シュウもそう思わないかい！？」

「「『吉日』だ、バカ」」

「二人揃って同じ事を言わないで下さい！　そんな事どうでもいいですから！」

「うーん、お前にやる気が出たのは嬉しいが……どう思う、天城？」

「そうですね、俺としてもそれは大変に嬉しいんですが……」

俺と西村先生は言葉を区切って、明久と島田と姫路を見ると……。

「俺達は試召戦争をやって疲れがかなり溜まっていますし、補習をやった所で頭に入らないからすぐに忘れてしまいますよ」

「うむ、俺もそう思ってた。と言う訳で吉井、無理する事は無い。今日だけは存分に遊ぶといい」

ニヤニヤと笑みを浮かべて明久に言い放った。

「おのれ鉄人とシュウ！　僕が苦境にいると知った上での狼藉だな！　こうなったら卒業式には伝説の木の下で釘バットを持って貴様等を待つ！」

「斬新な告白だな、オイ」

「だったら俺は木刀を持って、お前と戦うよ。本気で相手してやるから」

「うっ！！」

俺の台詞に明久は薮蛇だったと言う感じに顔を顰めた。それは俺が剣道の心得があるから故だ。だから明久は俺が木刀を持つと聞いた瞬間にあんな顔になっている。

「アキ！　こんな時だけやる気を見せて逃げようったって、そうは行かないからね！」

「ち、違うよ！　本当にやる気が出ているんだってば！」

「吉井君！　その前に私と映画です！」

「姫路さん、それは雄二じゃなくて僕となの！？」

「？？　坂本君？　何の事ですか？　私はずっと前から吉井君の事を……」

「アキ！　いいから来なさい！」

「あがぁっ！　美波、首は致命傷になるから優しく……」

こうして明久は島田と姫路に無理矢理連れて行かれ教室を出て行くのであった……島田の行動を咎めたかったが。

『いやぁぁ！　生活費が！　僕の栄養がぁっ！』

「だったら自分の生活を改める事だな、明久。趣味にばかり金を費やすからそんな目に遭うんだ」

廊下から聞こえた明久の台詞に突っ込む俺。

「吉井は相変わらず自堕落な生活を送っているみたいだな」

「ええ。俺が何度も言ってるのにも拘らず……」

「……どうやら補習だけでなく、生活指導の方もしておいた方がいいかもしれんな」

「それは俺がやっておきますので、西村先生は補習に専念して下さい」

「そうか？　では任せよう。それと天城、お前も帰って休むといい」

「あ、はい」

と、俺が西村先生の言葉に従って帰ろうとするが……。

「ちょっと天城君、何処へ行くのかしら？」

「ん？」

Fクラスやクラスの生徒達、そして西村先生が教室から出ている間、木下優子が突然俺に話しかけてきた。

「まさかアタシとの約束を忘れてはいないでしょうね？」

「……ああ、そう言えば」

俺が木下と一回戦をやる前の事……。

『木下さん!!　それ以上やると秀吉が死んじゃうから!!』

『放して天城君!!　このバカにはお仕置きをしないとアタシの気が治まらないわ!!』

木下が秀吉に関節技を使ってノックアウトにしたのにも拘らず、まだ痛めつけようとしていたので俺は羽交い締めをして阻止していた。

『何でそこまで怒ってるのかは知らないけど、取り敢えずそこまでにするんだ!』

『嫌よ!　いくら天城君でもこればっかりは……!』

『じゃあ俺が秀吉の代わりにお仕置きを受けるから!!　それでも無理なら聞ける範囲で木下の言う事を聞くから!』

『……え?』

『な…何だ?　急に大人しくなったな』

「……あ…あの、天城君……それって、アタシのお願いを聞くって事?」

『だからそう言ってるでしょうが』

『……それじゃあ試召戦争が終わった後にアタシの言う事を聞いてくれる?』

「分かった。だからもう秀吉には手を出さないでくれ」

と言う事があったのだ。

「で、木下さんのお願いって何だ？」

「そ…その……これからはアタシの事を優子って呼びなさい」

「……は？」

木下のお願いを聞いた俺は素っ頓狂な声を出した。

「あ…あの、木下さん？　まさかお願いって……」

「呼び方が違うわよ」

「は…はあ……じゃあ優子さん、どうして呼び方を変えろって言うんだい？」

「貴方は弟の秀吉には名前で呼んでるのに、アタシには苗字で呼ぶのはちょっと疑問に思ってね……それとさん付けで呼ばなくていいわ。アタシも貴方の事を修哉って呼ばせてもらうから」

「……わ…分かった……優子」

「よろしい。それじゃあ次のお願いは……」

木下……もとい優子が言っている最中に……。

「ちょっと優子〜、何か面白そうな事をしているねぇ〜」

「あ…愛子!?」

工藤が急に現れては優子に絡んできた。

「あ…貴方!　帰ってたんじゃなかったの!?」

「いやぁ〜教科書を忘れて教室に戻ったんだけど、何か甘い空気になってたんだよねぇ〜♪」

「なっ!?」

工藤の発言に優子は顔を赤らめる。何で優子は顔を赤らめているんだ?

「ってか何が甘い空気なんだ、工藤さん?」

「気にしない気にしな〜い。それと天城君、優子と同じく今度からボクの事を愛子って呼んで♪　ボクも修哉君って呼ぶから」

「はあ……それは別に構わないが」

「あ…愛子!?　貴方何言ってるの!?」

「だって優子だけ天城君に名前で呼ばれるって仲間ハズレな気がして……それともボクが名前で呼ばせる事に何か不味い事でも?」

「……」

「……あ…あの～。俺もう帰って良いかな？」

俺がさりげなく帰ろうとするが、優子は即座に俺の顔を見る。

「！！！　だ…ダメよ修哉！　アタシのお願いはまだ残って……」

「あれぇ～？　優子ってば、もう修哉君の事を名前で呼んでいるんだねぇ～」

「なっ！？　って言うか愛子も呼んでるじゃない！！」

「ボクは親しみを込めて呼んでるだけだよ」

「……付き合いきれないから帰ろう」

優子と愛子が未だに言いあっている中、俺は教室から去って行った。

第十五問　（第一巻終了）　（後書き）

一巻を書き終えるまでに結構時間が掛かりました。
次回はちょっとしたオリジナルと閑話です。
それでは！！

どうでもいいけど、感想もお願いしま～～す！！！！

第十六問（前書き）

今回はオリジナル話で、凄く短いです。

第十六問

「やれやれ、あの二人はどうしてああなったんだか……」

優子と愛子が言い合っている最中に俺は教室から出てFクラスに戻り、帰宅準備を終えて玄関に向かっていた。

「にしても木下……優子が名前で呼べとは意外だったな。どう言う心境であんな事を言ったかは知らんが、親近感が増したと言う事にしておこう」

愛子の方も同様にな。

そして玄関に着き、自分の名前が書かれている靴箱を開けて靴を取り出すと……。

「お、修哉。今帰るところか？」

手提げ鞄を持った和人が俺に声を掛けてきた。

「ああ、試召戦争が終わったからな」

「そうか。なら俺と一緒に帰らないか？」

「構わないが……ってか珍しいな。いつもは周りに女子がいるのに一人もいないとは……」

和人が俺と帰る時は必ずしも最低二人は女子がいる筈なんだが、和人だけしかいない事に目を疑う。

「偶にはそう言う時もあるさ。それに修哉と話したい事もあるからな」

「話し？」

「今日のＡクラス戦について聞こうと思ってね」

「それはもう聞いただろ？　俺達Ｆクラスは負けたって事を」

「だからどうして負けたのかを聞きたいんだよ。俺達Ｂクラスを倒したんだから、聞く権利はあるだろ？　それに修哉は俺を倒したんだから」

「……はいはい。じゃあ歩きながら話すよ」

俺と学校を出て和人と一緒に帰りながら、Ａクラス戦について話し始めた。

帰宅中にＡクラス戦の詳細を話し終えると……。

「実に修哉らしいね。木下さんに謝罪をする為に苦手科目で挑むなんて」

和人は納得した顔をしていた。

「作戦とは言え、木下を利用してしまったからな。それにそうでもしなきゃ秀吉が酷い目に遭っていたし」

「……本当だったらちょっとした嫌味を言いたいけど、そう言う理由なら仕方ないね。もし俺も修哉の立場だったら同じ事をしているだろうし」

「そう言ってくれると助かる」

女子に優しく接する和人にしては、俺の行動は正しい判断だと思っているみたいだ。

しかし……。

「けど代表の坂本にはガッカリだね。散々勝てると豪語しておいて、最後は無様に負けたんだから」

坂本に対する評価はかなり下落していた……当然だけど。

「Aクラス代表の霧島さんに勝つ為の策があるから小学生レベルの日本史を選択しておいて……」

「その策は大化の改新の年号を間違えるだけしか無かったからな」

「……よくそれだけで挑もうとしたね。その年号以外は間違えないって事は考慮してなかったのか？」

「でなきゃ霧島に挑んでないからな。俺からして見れば坂本は最高の道化だったよ」

でも案外負けて良かったかもしれない。もし勝ってたら坂本はこの先ずっと天狗になっていると思うし、他の連中も同様にずっとだらけているだろう。

「そう言う訳で、俺達Ｆクラスは卓袱台から蜜柑箱になってしまったって事だ。折角、和人が卓袱台を手配してくれたんだが無駄になってしまったな」

「別に構わないよ。あの程度の卓袱台は大して高くなかったから。それに修哉にとっては負けて良かったんじゃないの？」

「……どうしてそう言える？」

間を置いて逆に聞き返したが……。

「もし勝ってたら坂本はこの先ずっと天狗になってるし、他の連中も坂本と同様にだらけるんじゃないか……って修哉は考えているんだろ？」

「……よくお分かりで」

和人の返答に俺は正解だと言わんばかりに頷く。流石は和人だ。俺の考えはお見通しみたいだな。

「伊達に修哉の幼馴染＋親友じゃないからね♪」

「……人の心を読んだかのような言い方をするな。それとこの話にはまだ続きがあってな」

「続きって？」

「和人は知ってると思うが、霧島の噂を知ってるだろう？」

噂好きの和人は絶対に知らない筈は無いからな。

「噂？　……ああ。確か霧島さんは男子に興味が無く、代わりに女子が好きだって噂だね。現にそうみたいだけど」

「実は違うんだよ」

「え？　それってどういう事？」

「霧島はな……以前から幼馴染である坂本の事が好きだから、他の男子には興味無かったんだ」

「！！！！　……嘘だろ？」

俺の発言に和人は目を見開き、信じられない顔をしている。

けど和人がこんな顔をするのは無理もない。何せ俺も最初は信じられなかったからな。

「残念ながら真実だ。それに霧島は今、坂本を連れてデートしているし」

「……坂本が霧島さんと幼馴染だと言う事に凄く意外だったのに、まさか霧島さんが坂本を……信じられないにも程がある」

「何だ？　和人は霧島を狙っていたのか？」

「……そう言う訳じゃ無いんだけど、何か坂本に負けた気がして。でもどうして高嶺の花と呼ばれる霧島さんが坂本を……？」

「まあ良いじゃないか。霧島が誰を好きになろうが俺達には関係無い事だし」

俺はショボリとしている和人の肩をパンパン叩きながら言う。

それに俺達が霧島の恋愛に口を出す権利は無いからな。静かに見守るのが一番良いと思う。

「けど坂本は幸せ者だな。霧島さんと付き合えるなんて……羨ましい」

「いや、和人が思ってるような展開にはなっていないぞ」

「は？　それってどう言う意味だ？」

「いや、実はね……」

俺が試召戦争が終わった後の事を説明すると……。

「……俺には坂本の考えている事が全然分からん。何であんな美人な霧島さんから逃げたがるのを」

予想通りと言うか、和人は坂本の行動を否定していた。

「何で逃げているのかは知らんが、取り敢えず俺は霧島を応援しているよ。それに……」

「それに？」

「坂本の弱点が霧島だって事が分かったからな。アイツが調子に乗って何か悪さをした時には霧島に連絡すれば簡単に済むだろうし……ふふふふ」

「……」

何か和人が呆れている顔をしているが気にしないようにする。

「そう言えば、修哉。君に関する噂があるんだけど」

「……それって木下が俺に無理矢理キスを迫ったってやつか？」

「ああ。もう学校中で噂になってるよ」

「……だったら和人の方で何とかしておいてくれないか？　あれは全くの出鱈目だって」

「そうは言ってもなあ……簡単には収まらないと思うぞ。それに木下さんは修哉の事を……」

「ん？　何か言ったか？」

「……何でもない」

最後の辺りが何故か小声だったので俺が聞いても、和人は答えてくれなかった。

「ところでさ、修哉は弟の木下を助ける為に言う事を聞く事になっていたみたいけど、何をお願いされたんだい？」

話題を変えるかのように問いかけて来る。

「ああ、それか。お願いって言っても、木下が名前で呼べって言われたんだよ。木下も俺の事を名前で呼ぶ事になってな」

「……え？　そ…それってもしや……」

「どうした？　やけに活き活きとした顔になっているな」

優子のお願いを言うと、和人は元気になったかのように目がキラキラしていた。まるで自分好みのネタを見つけたみたいに。

「それでそれで？　他にも何かお願いされたの？」

「……和人、随分と嬉しそうだな」

「いや～修哉にも漸く春が訪れたと思うとねぇ～。嬉しくなるんだよ」

「何を訳の分からん事を……ってか今の季節は春だろうが」

「いや、俺が言ったのはそう言う意味じゃなくて……」

「もしかして恋愛に関しての事か？　だったらそれはお門違いだぞ」

何やら和人が勘違いをしているみたいだから、此処はハッキリと言っておく必要があるみたいだな。

「俺は木下には恋愛感情なんて無いし、優子も同様だ。それに優子の好みのタイプは知的な人だって言ってたぞ」

「……」

「だから和人が思ってるような事じゃ無いと言って……何だよ、その顔は？」

「いや、気にしないで。……はあっ、木下さんは気の毒に」

俺がハッキリ言ったのにも拘らず、和人は不満そうな顔をしながら呆れていた……最後の小声は聞こえなかったが。

と、その時……。

「あ、修哉の家だ」

「え？　……ってもう着いたか」

和人の呟きに俺は目の前にある自分の家を見ると、かなり話し込んでいたなと思った。

「時間があるなら、家に上がってゲームでもするか？」

「……折角の誘いだけど、遠慮しとくよ。明日のパーティーの下準備があるからね」

「パーティー？」

また和人の父親主催のパーティーの付き添いでもやるのだろうか？

あの父親も和人と同様にイベント好きだからな。

「俺主催の合コンパーティーだ。何だったら修哉も参加するかい？」

「……いや、いい」

普通のパーティーなら参加しているが、合コンは興味ないからな。

もし明久がいたら、絶対に参加するって言いそうな気がする。

「相変わらずつれないねぇ～。俺としては出てくれたほうが嬉しいんだけど……」

「合コンじゃなかったら喜んで参加するよ」

と言っても庶民の俺が出るのは場違いな気がするが。

「次の機会には唯のパーティーをやるから、その時は参加してくれよ」

「ああ、分かった」

「それじゃあ、またな」

「おう」

和人が手を振りながら去って行くと、俺は自分の家に入って行った。

ガチャッ！

「ただいま～」

「お帰り、修哉」

玄関に入ると、俺の目の前には見た目が二十代後半の若々しい男性がいた。信じられないと思われるだろうが、俺の父の天城聖也だ。

普通は家に母親がいるのだが、家の母は既に他界して俺と父さんだけの父子家庭である。

「あれ？　父さん、店は？」

因みに父さんの職業は個人経営の喫茶店の店長をやっている。店の名前が“ＡＭＡＧＩ”で、ちょっとした評判の良い店だ。俺も時々

手伝っている事もある。

「今日はもう閉店したよ。思ってたよりお客さんが少なかったからね」

「……で、本音は？」

「中年層の女性客が自分の娘と見合いをしてくれと、しつこく頼まれたから」

「……相変わらず諦めていないんだね、その人達。当然断ったんでしょ？」

「当たり前だよ。父さんは今でも妻の香奈枝を愛しているからね」

本音を聞いて俺は呆れると同時に、女性客の執念に舌を巻いた。

けど女性客の気持ちも分かる。父さんは見た目が若く、爽やかな青年に見えて女性受けが良い。母さんが他界した事を知った女性客達は父さんを狙うかのように見合いやらアタックしている事がある。言うまでも無く父さんは断っているのだが、それでも女性客達は最後まで諦めず現在も日々奮闘して狙っているのだ。

「取り敢えず父さんが早く帰ってきたのは分かったよ。ところで、台所の方から音が聞こえるんだけど……」

「え？　……って忘れてた！」

父さんは急に思い出したかのように台所へと向かった。

余談ではあるが、家は父子家庭だから父さんは主夫である。炊事、洗濯、掃除はそこら辺の専業主婦より家事スキルが高い。俺も手伝う事はあるが殆ど父さんがやってしまうので、少しばかり気が引く。仕事と家庭を両立する父親ってあまりいないと思うが。

「匂いから察するに、カレーでも作っていたか。部屋に戻ろう」

カレーは好きだから今日の夕飯は楽しみだと思いながら、自分の部屋に戻る俺であった。

第十六問（後書き）

次回は3．5巻であった、僕と暴徒とラブレターです。
お楽しみに！！

オリキャラ紹介2

名前　佐伯（さえき）　和人（かずと）

身長　１８０ｃｍ　体重　６３ｋｇ

趣味　デート

特技　ナンパ（本人は無自覚）

外見　赤味が帯びた少し長め茶髪で、端正な顔立ち。

性格　真面目だが軟派

得意科目　英語・数学

文月学園２－Ｂの男子生徒。

佐伯グループの御曹司で、天城修哉の幼馴染。

女子に対する接し方も巧く柔らかな笑みを浮かべて、見事に落とすプレイボーイ。

告白された回数は2～３０回を軽く超えており、今でも学園では何人の女子に告白されている。女子だけでなく男子にも普通に接するので、２－Ｂではかなりの人気者。

２－Ｂでは根本が代表なのだが、クラス内では和人こそが代表に相応しいのではないかと呟かれている。切れ者であると同時に、かなりの実力を持っているが物凄い気分屋。

幼馴染の修哉と戦う事に関しては必ず真っ向勝負で挑む。

名前　天城（あまぎ）　聖也（せいや）

身長　１７８ｃｍ　体重　６５ｋｇ

趣味　ガーデニング

特技　家事

外見　修哉が年上になった感じで、髪が若干伸びている。

性格　温厚

修哉の父親。見た目が二十代後半と思われるくらいの童顔で、仕事と家事を両立。

１０年以上前に妻を亡くし、墓前では自分が修哉を最後まで育てると固く誓っている。

名前　天城（あまぎ）　香奈枝（かなえ）

修哉の母親。既に他界している。

第十七問（前書き）

今回は修哉が……ちょっとした事になります。

第十七問

Ａクラスとの試召戦争が終わり、西村先生が担任になって数日が経った。

朝の通学路にて……。

「明久、俺は今でも凄く信じられないんだが」

「ちょっと酷いよ、シュウ。僕が迎えに着たくらいで……」

「お前が朝早く俺の家に来た時は、槍が降るかと思ったぞ」

俺と明久は学校へと向かっていた……それも何時もより一時間も早く。

朝食や準備を既に終えた俺はまだ家でゆったりとしているのだが、明久が突然訪れて学校に行こうと言い出して来たので余りの衝撃に目が点になった。あの明久が平日に早起きをして家に来るなんてあり得なかったから、思わず既に見た天気予報を何度も確認し外を見上げてしまったのだ。もしかして天変地異が起きるのではないかと。

とまあそんな奇天烈な行動を取ってしまうほど、明久の行動は物凄くあり得ないのだ。今になって冷静に考えれば、明久は時折予想外な行動をするから早起きは珍しくもない。学校で起こす騒動と比べればマシなのだから。

「僕だって時々早起きぐらいはするよ」

「いつも深夜まで起きてゲームをしては寝過ごすお前を知っている俺としては今でも信じられんがな」

「だから言ってるでしょ？　時々は早起きをするって……まさか昨日学校から帰ってすぐに寝ちゃって、気がつけば明日になったって言えないよね」

「ん？　何か言ったか？」

「う…ううん！！　何でもないよ！」

明久の最後辺りの呟きが聞こえなかったので聞いてみたが、取り繕うかのように振舞っている。

「そ…それにしても早起きって良いねぇ～。早起きは三文の徳って言うし、何か良い事があるといいなぁ～」

「早起きをしたからと言って、必ず良い事が起きる訳じゃないぞ」

「そんな不安がるような事を言わないでよ」

「あくまで可能性を述べただけだ。良い事もあれば悪い事も……お？　もう着いたな」

歩きながら明久と話している最中に何時の間にか学校に着いた。そして校門の近くには見知った後ろ姿を見かける。

その後ろ姿は俺達Ｆクラスの担任である西村先生だ。

「鉄人って学校に来るの早いんだね」

「何を今更そんな当たり前の事を」

「まあ一応担任だし、挨拶でもしておこうかな」

「挨拶をするのは至極当然なんだが」

明久の発言に呆れながら、挨拶をしようと俺と明久は西村先生に近づく。

「先生、おはようございまーす」

「おはようございます、西村先生」

後ろから声を掛ける俺と明久に、西村先生はこっちを向いて爽やかな笑顔で振り向いてくる。

「おう、おはよう！　どうした天城？　今日はいつもより早いな。それと……」

俺には笑顔で言ってくる西村先生だが、明久を見た途端に動きが止まった。やっぱり流石の西村先生でも信じられないよな。

「えっと……どうかしましたか、先生？」

明久は西村先生の動きが止まった事に何か遭ったのかと聞いてみたが……。

「吉井、こんな早朝に学校に来て、今度は何を企んでいる」

案の定、爽やかな笑顔から警戒心を露わにした表情をする西村先生であった。

「別に何も企んでいませんよ。と言うかどうしてそんなに警戒しているんですか？　シュウに接していた態度とは全然違うじゃないですか」

「天城はお前とは違って真面目な生徒だからな。それにお前を警戒するのは教師として当然の事だが……。それはそうと、丁度良かった。《観察処分者》のお前がいるなら手間が省けるからな」

「げ。《観察処分者》って事は、また力仕事ですか？」

「そう言う事だ。古くなったサッカーゴールを撤去してくれ」

「やれやれ。早起きなんてするんじゃなかったなぁ……」

「だから言ったろ、明久。必ずしも良い事が起きる訳じゃ無いって」

俺の言葉が止めとなったのか、明久は項垂れているが……。

「そうだ西村先生。よろしかったら明久の監視をしていいでしょうか？　教室に行っても何もする事はありませんので」

「俺が監視するから、その必要は無いんだが……まあ良いだろう。万が一の事を考えて、吉井が召喚獣を使って何か悪さをしない為の措置としておこう」

「ありがとうございます♪」

「あああ……シュウまで僕を監視するなんて……早起きだけじゃなく、シュウと一緒に学校に来るんじゃなかった」

俺が監視すると分かった途端、絶望したかのように両手と両膝を地面に付けた。因みに体勢を文字で表現するなら“ＯＴＬ”だ。

「随分な言い草だな、明久。お前が一緒に行こうって言ったから俺も付き合ったんだぞ」

「後悔するのは早起きや天城と一緒に行く事でなく、観察処分を受けたお前の態度だと言う事に気付くべきだと思うがな」

俺と西村先生は呆れながら明久の顔を見て溜息を吐く。

「うぅ……。僕はそんなに悪い事なんてしていないのに……」

「……いつも騒ぎを起こしては俺に説教されているお前が言うな」

「……どの口でそんな事が言えるんだ。いいからグラウンドに来い」

「へーいへい」

西村先生がグラウンドへ行くと、俺と明久も一緒に付いて行く。そこに着くと朝練をしている陸上部がトラックを走っている。

「吉井、頼んだ」

「了解です。試獣召喚（サモン）」

西村先生の立会いの下、明久は召喚獣を出し……。

「俺も試獣召喚っと」

俺も召喚獣を出した。

「シュウ、僕はもう逆らったり逃げたりしないよ」

「西村先生の前でやらないだろうが、他の先生達ではどうしてたかな？」

「うっ……」

「ほら、さっさと西村先生の指示に従う」

「……分かったよ」

明久は渋々と西村先生の指示通りに動こうとする。

「それじゃ、そのゴールを持たせて」

「はいよ」

明久が指示をした召喚獣が身の丈の何倍もあるサッカーゴールを軽々と担ぐ。

しかし物理干渉とは言え凄いな。とても人間一人だけでは持てないサッカーゴールを難なく持てるなんて。おまけにかなりの腕力とスピードもあるからな。けど、よくよく考えてみれば召喚獣とはかなり危険な物かもしれない。

もしこれで物理干渉が教師や観察処分者の明久だけでなく、他の生徒達も持つようになったらとんでもない事になりそうだ。例えば喧嘩目的の為に召喚獣を使用したりとか、犯罪行為を召喚獣にやらせるとか等々……言い出したらきりが無いので止しておこう。

まあともかく、誰かが召喚獣を悪用して大変な事にならないのを祈ろう。

「吉井、それを町外れの産廃場まで行ってこい」

「何キロあると思ってんですか！？」

「そうなったら明久は完全に遅刻しますね」

「ってシュウ！　ここは突っ込む所だよね！？」

いや、お前の現状を考えれば当然の罰だと思う。

「冗談だ。ゴールネットを外して校門前に邪魔にならないように置いておけばいい」

「なんだ、ビックリした～」

冗談だと分かった明久は安堵していたが……。

「お前が破壊した校舎の修繕費用を考えれば、その程度の罰も当然だと思うがな」

「そうだぞ、明久。本来なら壊した本人が責任を持って弁償するん

だから、寧ろ軽い罰だと思え」

「うぐ……でもこっちにも事情が……」

俺と西村先生の言葉に痛い所を突かれた顔になった。

「事情があっても壊した事に変わりないからな。それとも罰から逃れる為に修繕費を今すぐ払うか？」

「……無理です」

「だったらその程度の罰は甘んじて受けるんだな」

「……はい」

「……ふむ。どうやら吉井は俺が言うより、天城に言われた方が効果的だな」

俺と明久のやり取りを見ている西村先生が何やら感心していた。

「天城、よかったら吉井を常時監視してくれないか？　そうしたら吉井は更生するかもしれないからな」

「止めて下さい。ただでさえ学校で騒ぎを起こしている明久を捕まえて説教するのは疲れるのに、休日までもそんな事をしたら……」

「ハッハッハ！　冗談だ。そんな事をしたら天城が倒れてしまうからな」

「ちょっと二人とも！　まるで僕が常に騒ぎを起こしている言い方

じゃないか！」

「「否定出来るのか？」」

「……」

明久は俺と西村先生の問いに答える事が出来ない。普段が普段だからな。

「まあ、そんな事はどうでもいい。外したネットは別口で処分するから、取り敢えずは体育用具室にでも置いといてくれ」

「……はぁ……。今日も一日良い事なんて無さそうだなぁ」

ま、不運だと思って諦めろ。ゴールネットを外すくらいは手伝ってやるから。

「おい明久、何もゴールネットを教室にもって行かなくても良いと思うんだが」

「仕方ないでしょ。コレ運んでいたら、もうＨＲが始まる寸前だったんだから」

作業を一時中断してゴールネットを持っている明久は、俺と一緒に玄関で靴を履き替えている。まあ明久の言うとおり、教室に置いとくのが無難かもしれないが。

「まあいい、取り敢えず教室に急ぐぞ」

靴を履き替えた俺はすぐに教室に向かおうとしたが……。

「なっ、なんじゃこりゃぁぁっ！？」

「いきなりなんだ？」

明久が急に叫び声を上げたので足を止めた。

ん？　明久の片手に何か手紙らしき封筒を握っているみたいだが……成程、そう言う事か。

どうやら明久にも漸く春が訪れたかと思ったその時……。

「どうした、明久？」

「おわぁぁ！！」

坂本がいきなり現れては声を掛けてきたので、明久は咄嗟に持っている手紙をポケットに隠した。

賢明な判断だ。もし見られたら坂本が何を仕出かすかわからないからな。とは言え、少しばかり遅かったが。

「おい明久、さっさと教室に行くぞ」

「え？　あ…そ…そうだね！　早く教室に行こう」

「坂本、お前も急げ」

「お…おう」

俺の一声で明久と坂本は急いで教室に向かい始めた。

その間に……。

「ありがとうシュウ。助かったよ」

と、明久が俺に礼を言ってたが……。

「……明久が持っていたアレは……ラブレターか」

坂本が小声で明久が持っていた手紙に気付いていたみたいだ。

面倒な事にならなければいいんだがな。

「工藤」「はい」「久保」「はい」

チャイムと同時に教室に駆け込むと、間髪容れずに西村先生が来て出席を取り始めた。

流石は西村先生だ。必ず決まった時間に来るからな。因みに俺は出席番号が一番なので、もう既に返事を終えている。

「近藤」「はい」「斉藤」「はい」

ダルそうな返事だな。よくもまあ、あそこまで西村先生相手にそんな返事が出来るもんだ。けど西村先生は大して気にはしていないみたいだが。

淡々と進んでいる毎朝の出席確認。

そんな静かな教室に……。

「坂本」「……明久がラブレターを貰ったようだ」

『殺せぇぇっ！！』

坂本が見事にぶち壊してくれた。

あのバカ……何考えていやがる。やっと平穏な時間が訪れると思ってたのに……！

「ゆ、雄二！　いきなり何て事を言い出すのさ！」

明久はとんでもない事になったと言う顔をしながら坂本に怒鳴る。

と言うか坂本の小声を聞き逃さず聞いた連中は、何故ラブレター程度で殺そうと考えているんだ？　おかしいだろ。

『どう言う事だ！？　吉井がそんな物を貰うなんて！』

『それなら俺達だって貰ってもおかしくないはずだ！　自分の席の近くを探してみろ！』

『ダメだ！　腐りかけのパンと食べかけのパンしか出てこない！』

『もっとよく探せ！』

『……出てきたっ！　未開封のパンだ！』

『お前は何を探しているんだ！？』

それ以前に貴様等は何をやっているんだ？　ってか腐りかけと食べかけのパンはさっさと捨てろ。

下らなさ過ぎる怒号が飛び交い、クラス全員が明久に妬みの視線を送りながら怒り狂っている。

おい坂本、貴様の所為で下らん騒ぎになってしまったぞ。どうしてくれる？

「お前等っ！　静かにしろっ！」

……シ～～ン

西村先生の一喝ですぐに教室が静かになった。まるで鶴の一声だな。

そして……。

「それでは出欠確認を続けるぞ」

再び出欠確認が開始された。

「手塚」「吉井コロス」「藤堂」「吉井コロス」「戸沢」「吉井コロス」

「皆落ち着くんだ！　何故だか返事が『吉井コロス』に変わっているよ！」

「吉井、静かにしろ！」

「いや、西村先生。ここは物騒な返事をしている奴等に注意するべきじゃないんですか？」

「天城、今は出欠確認の最中だ。静かにするように」

「え？　え？」

な…何故？

「シュウの言うとおりですよ！　このままだとクラスの皆は僕に殴る蹴るの暴行を加えてしまいますよ！」

「新田」「吉井コロス」「布田」「吉井マジ殺す」「根岸」「吉井ブチ殺す」

明久の抗議に全く聞いていない西村先生は出欠確認をしている。いくら明久がFクラスで観察処分者だからって少しばかり酷くないか？

「よし。遅刻欠席はなしだな。今日も一日勉学に励むように」

「待って先生！　行かないで！　可愛い生徒を見殺しにしないで！」

明久は保身の為か必死になって鉄人を呼び止める。

あの～西村先生？　いくら明久が問題児だからと言ってそろそろ助けた方がいいのでは？

「吉井、間違えるな」

間違えるなって何をだ？

「お前は不細工だ」

いや、そう言う問題じゃないでしょ！？

「不細工とは言われるとは思わなかったよバカ！」

「授業は真面目に受けるように」

「先生待って！　せんせーい！」

西村先生は明久を見捨てるかのように教室を出て行った。あの様子

を見る限りでは明久を助ける気は全く無かったみたいだな。

明久が普段からの日頃の行いが悪いのか、観察処分者だからか……どっちにしろ見捨てられる原因を作ってるのは明久だから、身から出た錆、もしくは自業自得って所か。

にしても坂本の奴、自分が騒動を起こした原因のくせして面白そうに追い詰められている明久を見ているし。アイツには後で仕置きが必要だな。

俺がそう考えていると……。

「アキ、ちょ～っと話を聞かせて貰える？」

島田が明久の肩をグワシッと関節が外れてしまいそうな勢いで掴んでいた。どうやら島田も物騒な事を考えていそうだな。

「あ、あはは……。美波、顔が怖いよ？」

「手紙を貰ったの？　誰からなの？　どんな手紙なの？」

怖い表情をしながら明久を問い詰める島田。何故だかポニーテールが角みたいに見える。

「あー、えっと、そのー」

もし明久がここでラブレターを貰ったなんて言ったら、島田は即座にぶっ飛ばしそうだ。もしそんな事をするなら俺が力ずくで止めさせて貰うが。

「いいからおとなしく指の骨を…じゃなくて、手紙を見せなさい」

断らせない為の脅しか……と言うか島田。お前にはそんな事をする権利なんて無いんだぞ？

「あの、吉井君」

「ん？　なに？」

今度は姫路が明久に話しかけてきた。まさか島田みたいな事を言わないだろうな？

「その……できれば、ですけど……私にも手紙を見せて欲しいです……」

何でどいつもこいつも明久からの手紙を見ようとするんだ？　何でそこまで人のプライバシーを探ろうとする？　おかしいだろうが。

「その……ごめん」

明久は誠意を込めながら断った。そこまでする必要は無いと思うが。

「でも、でも……」

しつこく食い下がってくる姫路。

「いくら姫路さんの頼みでも、コレばっかりは」

「でも、私は吉井君に酷いことをしたくないんです！」

「ちょっと待って！　姫路さんまで僕に暴力を加えることが前提なの！？」

……どうやら姫路はＦクラスに馴染んでしまったみたいだ。もう姫路を常識人と見ない方が良いかもしれない。まるで大事な仲間を失ったかのような感覚だ。

「皆、ちょっと落ち着け」

そんな中、パンパンと手を叩く音が教卓の方から聞こえた。発生源は騒ぎを起こした元凶の坂本。貴様はこれ以上何をするつもりだ？

「今問題なのは明久の手紙を見ることじゃない」

ほう？　じゃあ何が問題なんだ？

「問題は、明久をどうグロテスクに殺すかだ」

「……」

……あのバカゴリラは。あれだけの騒動を起こしておきながら、そこまでして明久を追い詰めたいか……！

「前提条件が間違ってんだよ畜生！」

荷物を持った明久はすぐに教室から逃走した。

「逃がすなぁっ！追撃退を組織しろ！」

「手紙を奪え！吉井を殺せ！」

「サーチ&デス！」

『そこはせめてデストロイで！』

バカ共が団結していると、廊下からは明久が突っ込むかのような声が聞こえた。それが合図かのようにバカ共が一斉に教室を出て明久を追撃していくのであった。

「しゅ…修哉よ、これはどうすれば良いのじゃ？」

「……」

隣にいる秀吉が問いかけてくるが、俺は無言だ。

そして……。

「そろそろ一時間目が始まるのじゃが……先生にはどう説明すれば良いのじゃろうか」

「……の……もは……」

「修哉？」

「……あのバカ共は何考えているんだ！！！！！」

俺は完全にキレた。

「どいつもこいつも下らん事で突っ走りやがって！！！　貴様等には明久からの手紙を見る権利も無ければ、殺す権利も無い！！！」

「しゅ…修哉!!　落ち着くのじゃ!!」

「おまけに元凶である坂本は面白そうに周りを煽っておいて更には、参加するとは許さん!!!!　あのクソゴリラは徹底的に叩きのめしてやる!!!!」

俺が意を決して教室を出ようとすると……。

「待つのじゃ修哉!!　お主まで行ったらワシはどうすれば良いのじゃ!?」

秀吉が俺の両肩を掴んで阻止してきた。

「止めるな秀吉!!　俺は今すぐあのバカ共を制裁しなければいけないんだ!!」

「そうは言ってももうすぐ授業が始まるのじゃぞ!!」

「俺が後で先生に説明する!!　だから放せ!!」

「落ち着くのじゃ修哉〜〜!!!!!!」

教室を出ようとする俺だが、秀吉が必死に俺を止めるので出る事が出来なかった。

と、そんな時……。

「皆さん、授業をはじめま……えっと、どうして天城君と木下君だけしかいないんでしょうか?」

英語担当の遠藤先生が教室に入ってきた。一時間目の授業が英語だからである。

「遠藤先生!!　訳は後で話します!!　俺は今すぐバカ共を連れ戻してくるので!!」

「お願いじゃ遠藤先生!!　修哉を止めて欲しいのじゃ!!」

「……あの～。状況が全然分からないんですが」

遠藤先生の頭の上には“？”ばかり浮かんでいるのであった。

第十七問（後書き）

次回は修哉がバカ共を制裁します。お楽しみに！！

第十八問

バカテスト　国語

問　以下の意味を持つことわざとを答えて、例文を作りなさい。

自分がした事の報いは、必ず自分自身が受ける事

姫路瑞希の答え

『ことわざ……自業自得
例文……彼が行った事は自業自得だから仕方ない』

教師のコメント
正解です。姫路さんには簡単すぎましたね。

天城修哉の答え

『ことわざ……自業自得
例文……下らん事で騒ぎを起こすバカ共がお仕置きをされるのは自業自得である』

教師のコメント
……正解なのですが、例文が書き殴っているかのように凄く雑ですね。何か遭ったのですか？

須川亮の答え

『ことわざ……自業自得
例文……ラブレターを貰った吉井が俺達に抹殺されるのは自業自得だ！！』

教師のコメント
天城君の回答文が書き殴っている理由が分かりました。

島田美波の答え

『ことわざ……自業自得
例文……アキが手紙をウチに寄こさないから殴られるのは自業自得』

教師のコメント
貴方もですか。

「さて、さっさと明久の救出とバカ共を鎮圧するか」

遠藤先生に粗方の説明を終えた俺は、すぐに教室を出てバカ共を追い掛け始めた。

「特に坂本は懲らしめてやらないとな。下らん騒動の引き金を引いた挙句、明久の抹殺にも加わって……」

と、俺が坂本を成敗しようと固く誓っているとき……。

「「「ぎゃぁぁぁっ！！」」」

「ん？　空き教室から聞こえたな。さては其処か」

悲鳴が聞こえたので俺はすぐに空き教室へと向かった。

「あ…あああ……」

「うう……うあああ」

「か…かか……」

「……くそっ。一足遅かったか」

空き教室に入った俺は周りを見ると、そこには明久はおらず、バカ

数名がゴールネットに覆い被されて倒れていた。

と言うか、何でコイツ等はこんな状態になっているんだ？　それにあのゴールネットは体育館用具室に持っていく筈だったんだが……。

「おい、一体何があったんだ？」

「よ…吉井が……俺達に濡れたネットを被せて……スタンガンで……」

「あの外道……俺達を何だと思ってやがる……」

「吉井……こんな事をしておいて……タダで済むと思うなよ……！」

「成程。だからネットが濡れてて、お前達から焦げた臭いがするのか」

学校の物をまた無断で使ったかと本来は怒る俺だが、ゴールネットは捨てる予定の物だったから特に何も言わない。

「た…頼む、天城。一人だけ幸せになろうとする吉井を……」

「俺達の代わりに……」

「ぶっ殺してくれ……！」

俺に託そうとしているバカ共を……。

「そうか、なら後は俺に任せろ……なんて言うと思ったか、このバカ共が」

ドゴッ！　バキッ！　ゴスッ！

「「「ウギャアア～～～！！！！！」」」

「そこで暫く寝てろ」

速攻でボコボコにしてやった。

「な…なんでだ……天城……お前は……俺達の同士じゃ……」

「吉井が……憎く…ないのか？」

「どうして……」

「誰が味方だと言った？　それに俺は下らん事をやっているお前等を教室に連れ戻しに来たんだ」

「だ…だからって、何で俺達にこんな……」

「人のプライバシーを平然と土足で上がりこんだ挙句、下らん理由で明久を殺そうとしているからな。明久の友人として黙っている訳にはいかないだろうが」

「そ…そんな事で……俺達を……理不尽だ……」

「明久に理不尽な事をしているお前等に言われたくないな。と言う訳で、さっさとくたばれ」

バキッ！　ドカッ！　ドスンッ！　バゴッ！

「「「……（ピクッ……ピクッ……）」」」

「さっさと行くか」

バカ共を気絶させた俺は空き教室から出て、再び明久の捜索を始めた。

明久を捜索して２０分近く経つ

二階の渡り廊下で……。

「ったく。明久は一体何処にいるんだ？　さっきからバカ共しか見付からないし」

「うう……お…鬼だ……」

「な…なんで……俺達が……」

「こんな目に遭わなきゃ……」

「いけないんだよぉ……」

明久を捜索している俺であったが、さっきから暴走したバカ共を半分以上鎮圧していた。それはそれで構わないのだが、俺としては元凶の坂本を見つけたい。

と言うかコイツ等、どうして自分達が理不尽な目に遭っているんだと言う様な顔をしているな。

「五月蝿いぞ、お前等。そもそもお前等が下らん事をしているだろうが。自業自得だ。仮に明久を始末したとして、タダで済むと思っているのか？」

もしお前達が目的を完遂して教室に戻って来た途端、俺が即座に叩きのめしているぞ。

「お…お前は吉井が幸せになる事に……何にも感じないのかよ？ぶち殺そうとは……思わないのか？」

「そんな事は微塵も思わないな」

祝福はしても、憎いから殺すなんてあり得ない。と言うか、そんな事をするお前等の方がどうかしてる。

「ま…まさか……お前も……ラブレターを……貰ったとか……」

近藤の台詞によって……。

『ならお前も敵だ～～！！！！！』

いきなり復活した残りのバカ共が一斉に立ち上がって俺に総攻撃を開始した。

「何故そう言う解釈になるのかは分からんが、取り敢えずお前等は……西村先生、お願いします！！」

「全く、俺が言ったのにも拘らず授業を平然とサボるとは……承認っ！」

『げっ！　鉄人っ！』

俺は捜索の最中に西村先生を連れていたので、即座にフィールドを展開するようにお願いすると……。

「試獣召喚（サモン）！」

俺はすぐに召喚獣を出した。

『Ｆクラス　天城修哉　現代国語　３９２点』

「な…何で鉄人がここに！？」

「そんな事を気にしてる暇があったら、さっさと召喚したらどうだ

？　さもないと棄権と見なされて補習送りにされるぞ？」

『さ…試獣召喚（サモン）！』

バカ共が俺の言葉にハッと気付き、すぐに召喚獣を出した。

『Ｆクラス　バカ二十数名　現代国語　平均８０～９５点』

「ひ…怯むな！　天城の点数が高くても、これだけの数でかかれば……」

近藤が一斉攻撃の指示をしようとしたが……。

『Ｆクラス　バカ二十数名　現代国語　０点』

「何か言ったか？」

『い…いつの間に！？』

俺の召喚獣はすぐにバカ共の召喚獣を蹴散らしていた。向こうの召

喚獣が出てすぐに、だ。

「生憎だが今日の俺はいつもより頭が冴えていてな。召喚獣の操作も思った通りに動いてくれたよ」

バカ共に対する怒りがそうさせたのか、調子が良かったかは知らないが。

そして……。

「さあ負け犬共！！　授業をサボった罰として今日一日は補習だ～！！！！！」

『嫌だぁ～～！！！！！』

西村先生は戦死した須川達を連れて補習室へと向かった。

「さて、残りの連中もさっさと探すか……」

俺は再び捜索をしようと少しばかり歩いていると……。

「……天城」

「ん？　今度は土屋か」

土屋が堂々と廊下を歩いていた。

「何故お前が平然と廊下を歩いているのかは知らんが、取り敢えずは捕まえさせてもらうぞ」

「……（ブンブン）待て、俺は明久の味方だ」

「何を訳の分からん事を言ってる。お前も明久を殺そうとしていた一人じゃないか」

「……明久と交渉の末、味方になった」

「……因みにどんな交渉だ？」

もしエロ本の進呈とかだったら、確実に味方となっているだろう。

「……極秘事項により黙秘させて貰う」

「どうせエロ本での交渉をされたから、明久の味方になったんだろ？」

「！！！（ブンブンブン！）……そんな事実は無い」

「……お前って本当に分かりやすい奴だな」

やはりエロ本についての交渉だったか。だとしたらコイツは明久の味方だと信用出来る。エロに関する交渉だったら、土屋は絶対に傾くからな。恐らく明久の事だから、今後も自分が襲われそうになった時はエロに関しての交渉をしようと思っているに違いない。

「まあそんな事はどうでもいいか。それより明久は今何処にいる？」

「……正確な場所は分からないが、多分屋上に向かっている」

「屋上に？」

明久が屋上へ行くとするなら……もしかして、そこで手紙を読むつもりか？　まさかアイツは“屋上で待ってる”と手紙に書いてあると思って向かった……いや、それは無いか。いくら明久がバカでも、そんな見当違いな事を考えるとは思えん。けどまあ、念の為に屋上に行くとするか。もしかしたら坂本がそこで待ち構えているかもしれないからな。

「……取り敢えず情報提供には感謝する」

「……このくらい、どうって事無い」

土屋はスタスタとFクラスへと戻って行った。

「よし、じゃあ早く屋上に……」

俺は屋上へ行く為の階段を登って三階に着くと……。

『くっ！　丸腰じゃなかったのか！』

「ん？　今の声は須川か？」

三階の廊下から須川の声が聞こえた。

「まるで誰かと対峙してるような感じだが……もしや明久か！」

俺は屋上へ行くのを止めて三階の廊下に行くと……。

「って、爪切りで勝てるワケないじゃないかバカぁっ！」

「吉井……。お前って――本当にバカだなぁ……」

明久は持ってる爪切りに突っ込んでおり、須川が呆れながら明久に憐れみの視線を送っていた。ってかアイツは一体何をやっているんだ？

「ち、畜生！　こうなったら爪切りでもやってやる！　素手よりはマシな筈だ！」

「いや、明らかに素手の方がマシだろう！？」

「黙れぇぇっ！」

「須川の言うとおりだと思うんだが、明久」

「「！！！」」

俺の突っ込みに明久と須川が俺の方を見てくる。

「しゅ…シュウっ！？　ま…まさか君まで！？」

「おお！　来てくれたか、天城！」

俺が来た事に明久は不味い顔になっており、須川が援軍だと思って嬉しそうな顔をしている。

「全く、探すのに少しばかり苦労したぞ」

「あ…あああ……も…もうダメだ。シュウが相手じゃ逃げ切れない」

明久は何を勘違いしているのか、俺を須川達と同様に始末しようと考えているみたいで……。

「さあ天城！　俺とお前の二人で挑めば吉井なんて、すぐにぶっ殺せる！　一斉攻撃するぞ！」

俺の隣にいる須川も勘違いして、一緒に倒そうと言ってくる。

「……はあっ。全く、二人揃って何を言ってるんだか……」

「「え？」」

「俺はな……お前の味方だ！」

ドゴッ！

俺が須川の股間に目掛けて蹴りを当てると……。

「%』&『$&『』%）&（$）”$’（%’！！！！！！！」

「……うわぁ」

須川が目玉が飛び出そうな顔をして股間に手を当てながら前のめりになり、明久はやられてもいないのにも拘らず痛そうな顔をしていた。

「あ……あああ……あ…天城…な…何故だ？　お…俺は……み…味方で……」

「いつ俺がお前等の味方だなんて言ったんだ？　まあそんな事はどうでもいい。須川、お前は後で補習室に送ってやるから……取り敢えず今は寝てろ」

ドンッ！

「うっ！！」

須川の首筋に手刀で当てると、須川は即座にバタンと倒れて気絶した。

「さてと……やっと見つけたぞ、明久」

「た…助かったよ、シュウ。僕はてっきりシュウが敵だと思っちゃった」

「あのなぁ、俺がお前宛ての手紙を無理矢理奪うとでも思ってるのか？」

明久の発言に少しばかり呆れる。アイツ等と同類だなんて心外にも程があるのだが。

「それを奪う奴等の方がどうかしているんだが」

「そ…そうだね……アハハハ」

「……まあそんな事はどうでもいい。で、もう手紙は読んだのか？」

「ううん、これから読む為に屋上へ行こうかと」

「……念の為に聞くんだが、どうして屋上で読もうとする？」

俺の予想が当たって欲しくないと思って聞いてみるが……。

「そこだと読みやすいと思って、それに……」

「それに？」

「もしかしたら手紙に『屋上で待ってます』って書いてあるかもしれないと思ったんだよね。そうしたら洒落にならないと思って……ってシュウ！　何で呆れ顔になってるの！？」

物の見事に当たってしまったので、物凄く呆れる俺であった。

「お前なあ……どうして、そう言う解釈になるんだ？」

「で…でも、告白する場所といったら屋上が定番で……」

「アホか、学園で告白する場所なんて他にもあるだろうが……って今はそんな事どうでもいい。屋上に行くのは止した方がいい」

「え？　どうして？」

「恐らく屋上には……」

坂本がいるだろうと言おうとした時……。

『いたぞ！　吉井はあそこだ！！』

『ア～キ～～！　アンタよくもやってくれたわね～～～！』

『吉井ぃっ！　絶対殺すぅぅっ！』

『ガンホー！　ガンホー！』

残りのバカ共がコッチに向かってきた。

「ひいっ！！　皆が来た！！」

「何だ？　特に島田が殺意全開だが……お前、アイツに何をした？」

「説明してる暇は無いから！！　シュウ、ここは任せた！！　僕は何としても手紙を読まなければいけないから！！」

「あっ！　コラ待て、明久！　屋上には行くなと……ってもう行ったか」

明久はバカ共を俺に任せてすぐに屋上へと向かってしまった。あのバカ、屋上には坂本がいるかもしれないのに。

仕方ない、今は残りのバカ共をさっさと鎮圧するか……須川の持っている木刀を使って。

「待て、お前等は何処へ行こうとする？」

と、俺がバカ共の道を阻むと……。

「どけ天城！　俺達は吉井を抹殺しなければいけないんだ！！」

「ラブレターを貰って幸せになろうと大罪を犯す吉井は死刑にしなければ！！」

「今すぐアキにお仕置きしなきゃいけないのよ！！　さっさとそこをどきなさい！！」

バカ共は身勝手極まりない事を言っていた。島田の場合は何か仕返しをしたそうだが無視しておく。

「……はあっ。分かっていたが、お前等がどれだけバカなのかが良く分かったよ」

『何だと！？』

「明久がラブレターを貰おうが幸せになろうが、お前等には関係の無い事だ。俺としては邪魔をするお前等の行動が凄くあり得ないんだが」

『ふざけるな！！　あの野郎だけ幸せになるなんて許せねぇ！！』

『そうだそうだ！！』

『バカがモテるなんてあり得ねえんだよ！！』

『アキにはそんなの必要無いのよ！！』

「……そうかい」

正論で言ったつもりだったのだが、コイツ等には何を言っても無駄であった。と言うかどこまで身勝手な奴等だ。

「もうお前等に何を言っても無駄だと言うのが良く分かった。さっさと終わらせてやる」

『吉井の味方をするとは……まさかお前もラブレターを貰っているのか！？』

『だとしたら天城も敵だ！！』

『こ～ろ～す～！！』

島田を除くバカ共が何を勘違いしてか、一斉に俺に襲い掛かってきた。

「一人相手だからと言って……いい気にならないでもらおうか！！」

俺は持っている木刀で……。

ドカッ！　バキッ！　ドゴッ！　ズガンッ！　ゴギャッ！　ゴスッ！　グシャッ！（？）

『ウギャアアア～～～～！！！！！！』

バカ共を一撃で伸して気絶させた。大して自慢出来る物じゃないが、俺はこれでも剣道三段だ。おまけに奴等は単純に突っ込んで来ただけだから、避けるのは簡単ですぐに倒せた。

「後はお前だけだ、島田。覚悟しろ」

「あ…アンタ！　それでウチを殴る気なの！？」

「いいや、お前の相手は後ろだ」

「は？」

「島田、まさかお前も授業をサボるとはな思わなかったぞ」

「に…西村先生！？」

いつの間にか島田の後ろに西村先生が立っていた。

「さあ島田、そこで倒れているバカ共と一緒にお前も今日一日補習漬けだ」

「ま…待って下さい！！　ウチにはアキをお仕置きしなきゃいけないんです！！」

「そんな事は補習が終わってからにしろ！！　さっさと来い！！」

「島田、自業自得だと思って諦めるんだな」

「天城～～！！　アンタ覚えてなさいよ～～！！！」

西村先生は先に島田を連れて補習室へと行ったのであった。

「では屋上へ行くとするか」

島田がいなくなったのを確認した俺は、気絶しているバカ共を踏みながら屋上へと向かった。

屋上に向かった俺であったが……。

「俺はお前の幸せが大嫌いなんだよ」

「知ってるよバカ！　ちくしょー！」

着いた途端に坂本が既に明久の持っている手紙を燃やしていた。そこには姫路も一緒にいて何故か安堵した顔になっていたが。

「ちっ！　遅かったか」

俺は舌打ちをしながら坂本を睨んでいる。

アイツはよくあそこまで、人の物を平然と燃やす事が出来るな。坂本、そんな事をしておいてタダで済むと思うなよ？

確かこの間の休日、偶然に坂本が霧島に追いかけられていたのを見たな。その後はキツイお仕置きをさせられていたが。何故そんな展開になっていたのかは知らんが、取り敢えず坂本にも明久と同様の目に遭ってもらおう。

けどその前に……。

「俺は明久の幸せを妨害出来たらそれでいい」

「そうか。なら今度はお前を不幸のどん底に叩き落してやる」

「何？」

ドゴッ！！

「がぁっ！！」

俺は持っている木刀で坂本の頭を思いっきり殴ると、坂本は気絶した。

「あ……シュウ」

「あ…天城君」

俺の存在に気付いた明久と姫路はこっちを見る。

「全く、このバカゴリラは……人の手紙を容赦なく燃やすとは」

「シュウ……手紙が…手紙が……」

「……ここまで燃えてしまったら、もうどうする事も出来ないな」

明久の悲壮感漂う台詞に手紙を見ると、もう跡形も無く燃えてしまった手紙を見る。

「で、姫路。どうしてお前も明久からの手紙を奪おうとしたんだ？」

「あ…いや……それは」

「まさか坂本と一緒に明久の幸せが許せないなんて、バカな事を言い出すんじゃないだろうな？」

「え…えっとぉ……その……あの手紙は……」

他のバカ共とは違って様子が変だな。ちょっとカマをかけてみるか。

「姫路、あの手紙はまさか君が……」

「わぁ～～～！！！　わぁ～～～！！！」

「ひ…姫路さん！　急にどうしたの！？」

俺が最後まで言わせないが為に、姫路は大声を出した。

「……成程、そう言う事か」

「え？　え？　シュウ、そう言う事ってどう言う事？　もっと詳しく」

「ああああ吉井君は聞いちゃダメですっ！！」

「こぺっ！？」

「……姫路、明久の首が真後ろを向いているんだが」

力が無い割には凄いな。一瞬で明久の首を絞めるなんて。って感心してる場合じゃない！

「ご、ごめんなさいっ！　私、大変な事を！」

「謝る前に早く元に戻せ！」

「は…はい！」

姫路は荒業と言うべきか明久の首を元に戻した……コイツ、もしかして状況次第では凄い力が出るのか？

「な…何とか戻せました」

「う…う～ん……僕は一体何を？」

「……記憶が無くなっている節が見受けられるが……まあいいか。

さて二人とも、大人しく補習室に行ってもらうぞ」

「「……え？」」

明久と姫路はキョトンとしながら俺を見ている。何でそこに行かなければならないのかって顔をしているな。

「あのなぁ、まさか授業をサボってタダで済むと思ってないか？だとしたら大間違いだぞ」

「で…でもシュウ。僕は被害者だから、それは……」

「被害者だからと言って授業をサボった事に変わりない。と言うか、お前が逃げなかったらこんな事にはならなかったろうが」

「そうは言っても、逃げなかったら殺されてたし……」

「そんな事しなくても、俺が助けたっての。明久はもう少し先の事を考えて行動してくれ。そうでなきゃ、こんな騒ぎにはならなかったんだから」

「ううう……」

明久はその場で思いついたら即座に行動してしまうからな。何度も注意しているんだが全く改善していない。

「と言う訳だ姫路、騒動を起こしたお前も補習室に行ってもらうからな」

「……はい」

姫路は明久と違って理由を話せば納得するみたいだ。これで何か言い返してきたら手に負えなくなる。

「さて、そこで気絶しているバカには……今は休み時間だから大丈夫だな」

「ん？　どうしたの、シュウ？　いきなり携帯なんか出しちゃって」

「バカのお仕置きに必要な手順を踏んでいるんだ」

そう言いながら俺は携帯を使って、とある人物に連絡をする。

「もしもし？　ちょっと報告する事があってね。……そう、坂本の事だ。授業中にも拘らず屋上で女子と二人っきりだったんだよ……ああ、今は俺が気絶させているから後はご自由に。……よし、これで完了だ」

「……ねえシュウ、電話した相手ってもしや……」

「明久の想像通りの人物だ。さ、補習室に行ってもらうぞ」

俺は明久と姫路を連れて補習室へと向かったのであった。

「……う…う～～ん……イテテテ……天城の野郎、木刀で思いっきり殴りやがって……アイツ絶対後で……」

「……雄二」

「ん？　翔子？　何でお前が屋上にいるんだ？」

「……そんな事はどうでもいい。雄二、授業を抜け出して屋上で女の子と二人っきりになってたって本当？」

「はあ？　何言ってんだ？　俺は姫路と一緒に屋上に来る明久を待ってて……はっ！！」

「……どうやら本当みたいね」

「ま…待て翔子！　俺は何もやましい事はしてない！　ってかお前、何で俺が姫路と一緒だったって事を知ってるんだ！？」

「……親切な人が教えてくれた」

「誰だソイツは！？」

「……そんな事はどうでもいい。雄二、浮気は許さない（バチバチバチ！！）」

「ま…待て！　そのスタンガンは明らかに凄い電圧でアバババババ！！！！！！」

第十八問（後書き）

バカ共があれほどの騒ぎを起こしておいてタダで済むとは、あり得ないと思ったから修哉に成敗してもらいました。
次回は清涼際編ですので、お楽しみに！！

第十九問　（第二巻開始）（前書き）

清涼祭編開始です。
それではどうぞ！

第十九問　（第二巻開始）

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力ください
『あなたが今欲しい物はなんですか？』

姫路瑞希の答え
『クラスメイトとの思い出』

教師のコメント
成程、お客さんの思い出になる様な、そういった出し物も良いかもしれませんね。
写真館とかも候補になりうると覚えておきます。

土屋康太の答え
『Hな本（訂正）　成人向けの本』

教師のコメント
取り消し線の意味があるのでしょうか

吉井明久の答え
『カロリー』

教師のコメント
この回答に、君の生命の危機が感じられます。

天城修哉の答え

『平穏』

教師のコメント
君の気持ちは痛いほど伝わって来ます。

桜色の花びらが坂道から徐々に姿を消し、代わりに新緑が芽吹き始める季節。

文月学園では、新学年最初の行事である“清涼祭”の準備が始まりつつあって、各クラスに活気があふれている。

「しかしまあ、もう夏ですか。何かあっと言う間の数ヶ月でしたよ」

「そうだな。Ｆクラスにいると時間があっと言う間に過ぎていく」

俺と西村先生は清涼祭実行委員の会議が終わってＦクラスに戻っている最中であった。

言うまでもなく俺は実行委員の一人であり、西村先生はその付き添

いである。本来であれば実行委員は代表の坂本がやるんだが、西村先生が俺を選んだのだ。

西村先生曰く、「代表の坂本に任せると碌でも無い事になりそうだからな」ってキッパリ言った。普通はあり得ないのだが、その判断は間違っていないと思う。明久から聞いた話だと、坂本は興味の無い行事には全然やる気が無いと言ってたから。まあ仮にやる気があったとしても何か良くない事が起こりそうだが。

ま、そう言う訳で俺が実行委員に選ばれたのだ。俺としてもあまり実行委員はやりたくなかったが、西村先生に選ばれた以上やるしかなかった。一応、西村先生に信頼されているからな。

「それにしても、アイツ等は何時になったら学園祭の出し物を決めるんでしょうか？　もう締め切り間近なのに」

「これ以上待たせる訳には行かんから、今日の内に何が何でも決めてさせておかないとな」

「そうですね」

そして俺と西村先生は教室に戻ったが……。

「……おい、秀吉。これはどう言う事だ？」

「何故お前達しかいないんだ？」

そこには秀吉、姫路、島田しかいなかった。

「明久達は今何処にいるんだ、秀吉？」

「あ…いや……それが……そのう……あそこじゃ」

秀吉が俺の視線に負けたかのように外の方へと人差し指を向ける。

「何で外の方に……アイツ等は……」

「……あのバカ共が……！」

俺と西村先生が外を見ると、グラウンドで野球をやっている明久達がいたのであった。

そして俺と西村先生は速攻で教室を出て……。

「お前等！　何やってるんだ！？」

「貴様等！　学園祭の準備をサボって何をしているか！」

グラウンドへ向かい、野球をやっている連中に怒鳴りながら向かっていた。

野球をしている連中は俺達の登場に蜘蛛の子を散らすかの様に逃げている最中、明久と坂本を追い掛けている。

「吉井！　貴様がサボりの主犯か！」

「ち、違います！　どうして何時も僕を目の仇にするんですか！？」

西村先生の質問には否定する明久だったが……。

「じゃあ坂本か！？」

「そうだよシュウ！　クラス代表の坂本雄二が野球を提案したんだよ！」

俺の質問はすぐに肯定した。

と、坂本は明久に何やら訴えるかのように視線を合わせている。お前の考えている事は分かるぞ。逃走中にそんな事をするのは、明久をスケープゴートするって事くらいお見通しだ。

「西村先生！　坂本が明久を利用して一人だけ逃げようとしています！」

「分かった！　なら俺は坂本を捕まえるから、天城は吉井を！」

「何で天城は俺の考えてる事が分かるんだよ！？」

作戦がバレたと言う様な顔をする坂本は逃げながらも俺の方を見て突っ込んでくる。

「明久と一緒に逃げる時は必ずやるって事がもう分かってるんだよ！」

坂本の台詞に何を今更と思っていたが、取り敢えず明久を捕まえる事に専念する。

「全員教室へ戻れ！　この時期になってもまだ出し物が決まっていないなんて、うちのクラスだけだぞ！」

西村先生の恫喝が響くと、逃げている連中は全て西村先生によって捕まりFクラスの教室へと連れ戻した。

「さあ明久、さっさと戻るぞ」

「うう……僕は何も悪くないのに」

「野球をやった時点で、お前も同罪だ」

そして俺も明久を捕まえてFクラスの教室へと戻った。

「さて、そろそろ春の学園祭、『清涼祭』の出し物を決めなくちゃいけない時期が来たんだが……」

野球をやっていた連中を教室に戻らせた後、Fクラス代表の坂本は床にござを敷いて座る明久達を見下ろしながら宣言する。顔から見てやる気ゼロだな。明久の言うとおり、本当に清涼祭には興味無さそうだ。

「とりあえず、議事進行並びに実行委員として誰かを任命する。そいつに全権を委ねるので、後は任せた」

「おいコラ、何だその人任せな態度は。ってか俺が実行委員だろうが」

坂本の隣にいる俺はそう突っ込む。西村先生は急遽職員室に戻ったので、俺が坂本達がまた逃げないように監視している。

「ああ、そう言えばそうだったな。じゃあ天城、議事進行も頼んだぞ」

「お前な……それぐらいはやれよ。本来なら代表の坂本が……」

「わりい、俺こう言うのに興味無くてな……ふあ～～。そんじゃ任せた」

「おい！」

坂本はすぐに自分の席に戻って座り速攻で寝てしまった。

「あのバカは……」

寝た坂本を見て俺は呆れ顔になりながら呟く。

試召戦争だったら率先してやるくせに、こう言うイベントには率先のその字も無いな。まあアイツには大して期待はしていなかったから、そこまで気にする必要は無い。無理にやらせたところでダラダラやるだろうし。なのでここは俺がやるしかない。

「それじゃあ俺が坂本の代わりやらせてもらう。反対する奴がいるなら手を上げろ」

『……』

他の連中も大してやる気が無いのか、誰も手を上げない。多分、手伝わされると思って上げていないんだろう。

俺がそう思っていると、明久と咳き込んでいる姫路が何やら会話していたので……。

「明久と姫路、話は後にしてこっちの方に集中してくれ」

「あ……う…うん」

「は…はい」

注意をすると、二人は会話を止めて俺の方を見る。

「姫路、体調が悪いなら保健室に行くか？」

「い…いえ、大丈夫です」

「そうか」

姫路が咳き込む理由は知っている。それは教室の設備の悪さだ。俺達Fクラスは Aクラスに敗北した後、腐った畳と卓袱台から傷んだござと蜜柑箱になっている。ただでさえ不衛生な教室なのにも拘らず、設備ランクが落ちて拍車に掛かったから、体の弱い姫路がこのところ体調が更に悪化している。

明久も当然それに気付いており、何とかしなければと思っているに違いない。こればかりは俺も何かと手を打っておいたほうが良いかもしれないな。

けど取り敢えず今は学園祭の出し物の方を決めるとしよう。

「さて、俺一人だけで実行委員をやるのは少しばかりキツイから…明久、お前も手伝え」

「ええっ!?　僕!?」

俺からの指名に明久は戸惑った顔をする。

「ぼ、僕なんかより姫路さんの方が適任なんじゃないの?」

「え?　私ですか?」

自分がやるよりかは姫路の方が良いのではないかと明久は言ってくる。

確かに俺も最初はそう思ってはいたが……。

「悪いが姫路には無理だ。多分全員の意見を聞いている内に時間切れになる。それにただでさえ時間が無いってのに、とてもそんな悠長な事はしてられないからな」

「……」

当然理由があるのであった。それを言うと明久は納得した顔になっている。

「じゃあ姫路さんが無理なら美波を……」

「ダメよ、アキ。ウチと瑞希は召喚大会に出るんだから、それはち

ょっと困るわ」

「え？　そうなの？」

「はい。美波ちゃんと組んで出場するつもりなんです」

明久に向かって言う島田に、小さな手を握りしめる姫路。召喚大会か……そう言えばこの二人は参加するって言ってたな。

「学校の宣伝みたいな行事なのに、二人とも物好きだなぁ」

明久の言うとおり、今回行う召喚大会はハッキリ言って宣伝同然だ。

俺達の通う文月学園は、世界的に注目されている『試験召喚システム』がある。それを今回の清涼祭で『試験召喚大会』と言う企画を催して世間に公開するのだ。和人曰く、「学生側にしては楽しいイベントだけど、教師側にとっては学園の評判を更に上げて新しいスポンサーと契約させる為の餌だよ」と言ってた。

思わず嫌な現実だと思われるだろうが、和人の言ってる事は間違っていないだろう。何しろ和人の父親はかなりのお偉いさんだから、和人も上層部に関して色々と見聞きしているからな。

「ウチは瑞希に誘われてなんだけどね。瑞希ってば、お父さんを見返したいって言って聞かないんだから」

「お父さんを見返す？」

「うん。家で色々言われたんだって。『Ｆクラスの事をバカにされたんです！　許せません！』って怒ってるの」

「あらら。姫路さんが怒るなんて珍しいね」

「だって、皆の事を何も分かってないくせに、Ｆクラスって言う理由だけでバカにするんですよ？　許せませんっ」

姫路、悪いがそれは事実だ。何しろうちの連中は単なるバカじゃなく、下らん事で暴走する奴等なんだから。前にあったラブレター騒動が良い例だ。と言うかソレは姫路にも言える事だが。

「だから、Ｆクラスのウチと組んで、召喚大会で優勝してお父さんの鼻をあかそうってワケ」

成程、姫路はそう言う理由で召喚大会に出ようって意気込んでいたんだな……ってしまった。今は話しを聞いている場合じゃない。

「三人とも、こっちの話を続けてもいいか？」

「あ、ゴメンねシュウ。美波が実行委員になる話だったよね？」

いや、俺はお前を指名したんだがな。

「だからウチは召喚大会に出るって言ってるのに」

「安心しろ。実行委員って言っても此処の議事進行だけで、それ以外の事は俺がやる。あくまでサポート役だ。それだったら文句は無いだろ、明久？」

「えぇ～……」

明久は未だに嫌そうな顔をする、ならこうするか。

「何なら島田と一緒にやるか？　俺としては二人一緒にやってくれた方が好都合なんだが」

「ん～……そうね。それ位ならやってもいいけど……」

恐らく島田は明久と一緒にやれるなら、かえって良いかもしれないと思っているだろう。そうでなきゃ、やろうとはしないからな。

「そうか。では島田、議事進行は任せるぞ」

「出来ればもう一人追加して欲しいわ。ウチとしてもそっちの方が良いし」

「……良いだろう。ではお前達にもう一人のサポート役候補を挙げてもらう。その中から島田が二人を選んで多数決で決めれば良い」

俺がそう言うと、教室内がざわめき始める。サポート役と言っても面倒な役に変わりないので、ちらほらと推薦者の名前が出てきた。

『吉井が適任だと思う』

『やはり坂本がやるべきじゃないか？』

『ここは須川にやってもらった方が』

『姫路さんと結婚したい』

おい最後の奴、それは全く関係ないだろうが。何やら明久が物騒な

事を考え始めているぞ。

「ワシは明久が適任じゃと思うがの」

そんな中、秀吉が明久を推薦する。あ、今更ながら秀吉を選べば良かったって少し後悔した。

「って、秀吉。僕もそう言う面倒な役は、できればパスしたいな～なんて」

「それは他の皆とて同意見じゃ。ならば適任の者にやってもらった方が良いじゃろう？　それにお主は修哉に指名されたではないか」

「むぅ……。それはそうだけど……」

秀吉の正論に明久は納得している顔になる。ってか秀吉、お前はただ単にやりたくなかったからそう言ったんだろう？　俺が指名される前にて手を打っておこうと。

「島田、今挙がった連中から二人を選んでくれ」

「そうね～。それじゃ……」

ある程度候補の名前が挙がると、島田はボロボロの黒板に候補者の名前を書き連ねた。

『候補？……吉井』

やはり予想通り明久の名前が出たか。

『候補？……明久』

また明久の名前……っておい！

「待て島田、お前は何を考えてる？」

「そうだよ美波！　明らかにおかしいでしょ！？」

俺と明久の突っ込みに島田は素知らぬ顔をする。

『どうする？　どっちが良いと思う？』

『そうだなぁ……どちらもクズには変わりないんだが……』

安心しろ。ラブレター程度で明久を殺そうとするお前等も充分クズだ。

「こらぁ！　真面目に悩んでるフリするんじゃない！　あと、平然とクラスメイトをクズ呼ばわりなんて、君らは人間のクズだ！　このクラスのモラルはどうなってるんだ！」

明久が言っても余り説得力が無いんだが、確かにその通りだ。

「ほらほら、アキってば。そんな事より、ウチとアンタでやることに決まったんだから、前に出て議事をやらないと」

「そうさせたのはお前だけどな。それとまだ多数決はしてないぞ」

俺の突っ込みに島田は聞いておらず、明久を無理矢理立たせようとする。

「なんだか僕はいつもこんな貧乏くじを引かされている気がするよ……」

「サポート程度で貧乏くじ何て言うなら、俺の代わりに本格的な実行委員をやるか？」

「遠慮します！」

即座に拒否する明久。そこまでしなくても、俺はお前にやらせる気なんて無いがな。

「ウチは議事進行をやるから、アキは板書をお願いね」

「ん、了解」

明久と島田が前に立ったのを見て俺は少し離れて見る。

「それじゃ、ちゃっちゃと決めるわよ。クラスの出し物でやりたいものがあれば挙手してもらえる？」

島田が告げると、数名が挙手する。全員が全員やる気が無い訳じゃないみたいだ。

「はい、土屋」

「……（スクッ）」

名前を呼ばれて立ち上がったのは土屋だ。クラスメイトからはムッツリーニと呼ばれているが、相応しい渾名だと思う。ムッツリスケ

べの由来からムッツリーニって呼ばれているからな。けど俺から見れば土屋はムッツリスケベじゃなく、オープンスケベじゃないかと思い始めている。まあ、そんな事はどうでもいいんだが。

「……写真館」

「……土屋の言う写真館って、かなり危険な予感がするんだけど」

島田が思いっきり嫌そうな顔をするが、その反応は間違っていないと思う。

盗撮をされている女子から見れば土屋の撮る写真は嫌だからな。けど男子からして見れば宝の山と言えるだろう。俺も一応興味はあるが、女子に軽蔑されるような事はしたくないし、そんな物を認めるわけにも行かない。

「アキ、一応候補だから黒板に書いてもらえる？」

「あいよー」

「んなもん却下だ。書く必要は無い」

適当な返事をする明久が短いチョークを使って黒板に書こうとするが、俺がすぐに止めた。

「でもさぁシュウ、一応候補だよ？」

「どうせ土屋の言う写真館なんて碌な物じゃ無いからな。候補から除外だ」

「……失礼な」

心外と言わんばかりに土屋が言い返してくるが、俺はそれを無視する。

「天城、ここはウチとアキがやるからアンタはそこで見てなさい」

「いや、そうは言ってもな……」

「そんなに文句を言うならアンタがやればいいじゃない。それが嫌なら黙ってて」

『そうだそうだ！』

『天城は黙ってみてろ！』

『俺達の提案にケチをつけるな！』

「……」

島田の言葉に他の連中が掩護するかのように、俺にブーイングをする。

「……はあっ……もう好きにしてくれ」

俺は諦めて溜息を吐きながら教室を出ようとすると……。

「シュウ、何処に行くの？」

「トイレだ。すぐ戻ってくる」

明久が問いかけにすぐ答えた俺はトイレに向かった。

そしてトイレで用を足した俺は教室に戻って黒板を見ると……。

『候補１　写真館「秘密の覗き部屋」』

『候補２　ウェディング喫茶「人生の墓場」』

『候補３　中華喫茶「ヨーロピアン」』

「……」

実にふざけているとしか思えない候補に言葉を失ってしまった。それに候補で外した写真館も入って嫌なネーミングだ。他のネーミングにも言える事だが。

「皆、清涼祭の出し物は決まったか？」

「今のところ、候補は黒板に書いてある３つです」

西村先生が教室に戻り、島田が候補が書かれている黒板を見せようとする。

「……天城、お前がいながら何故こんな事になっている？」

「俺が明久と島田に議事進行を任せて、トイレに言ってる間にこうなってました。申し訳ありません、これは俺の完全な失態です。責任を取る為に補習を受けますので」

「いや、天城をそんな事をする必要は無い。必要なのはそこにいるバカ共だからな。コイツ等には補習の時間を倍にしておく」

「お願いします。ってかお前等、さっきまで俺に偉そうな事を言っておいて、コレは一体どう言う事だ？」

俺と西村先生は完全に呆れた顔になっていると……。

「あ…天城！　先生！　それは違うんです！」

「そうです！　それは吉井が勝手に書いたんです！」

「僕らがバカな訳じゃありません！」

バカ共はみっともない言い訳をしていた。おまけに自分達が助かりたいが為に明久を売ろうとしている。

「馬鹿者！　みっともない言い訳をするな！」

西村先生の一喝で、背筋が伸びる一同。

「そんな言い訳をする時点で、お前等はバカ同然だ」

「天城の言うとおりだ！　それにバカな吉井を選んだこと自体が頭の悪い行動だと言う事が分からんのか！？」

「あの、西村先生。その発言は教育者として問題がありますよ？」

「全くお前達は……少しは真面目にやったらどうだ。稼ぎを出してクラスの設備を向上させようとか、そういった気持ちすらないのか？」

西村先生は俺のツッコミを無視して、バカ共に向かって呆れながら溜息混じりで言う。その言葉にクラス全員の目が急に輝き始めた。

『そうか、その手があったか！』

『なにも試召戦争だけが設備向上のチャンスじゃないよな！』

『いい加減この設備にも我慢の限界だ！』

現金な奴等だ。自分達に利益があると分かった途端にやる気を出すとは。こんな事になるなら議事進行を決める前に言っておけば良かったな。

「み、皆さんっ！頑張りましょう！」

と、姫路が珍しく率先して立ち上がりながら言った。

けど妙だな。姫路は設備に関しては不満や文句を言う事は無く過ごしているんだが。姫路の場合、大好きな明久と一緒に過ごせるから

教室の設備なんて関係無い筈だ。その姫路があそこまでして言うって事は……今の現状では分からんな。

『出し物はどうする？　利潤の多い喫茶店が良いんじゃないか？』

『いや、初期投資の少ない写真館の方が』

『けど、それだと運営委員会の見回りで営業停止処分を受ける可能性もあるぞ』

姫路の言葉に拍車が掛かり、色々な意見が飛び出て活気が溢れている。

『中華喫茶ならはずれはないだろう』

『それだと目新しさに欠けるな。汚いせいであまり人が来ない旧校舎だと、その特徴のなさは致命傷じゃないか？』

『ウェディング喫茶はどうだ？』

『初期投資が高すぎる。たった二日の清涼祭じゃ儲けは出ないんじゃないか』

『リスクが高いからこそリターンも大きいはずだ』

やる気があるのは大変良い事だが、全然纏まりが無くバラバラだった。

「はいはい！　ちょっと静かにして！」

島田が手を叩いて注意するが全然効果は無く、好き勝手な事を言い始めて……。

『お化け屋敷なんかの方が受けると思う』

『簡単なカジノを作ろう』

『焼きとうもろこしを作ろう』

更に意見がバラバラになっていた。

コイツ等……やる気はあっても統率しようって気が全く無いみたいだな。

「お前等、少し静かにしろ！　そんな調子じゃ決まらないだろうが！」

と、俺が言っても連中は無視している。秀吉と姫路、そして明久と島田以外は聞こうともしていない。

コイツ等は大きな声を出して聞こえていないか、はたまた俺が以前のラブレター騒動を鎮圧させた事を根に持って無視しているかのどちらかだな。

坂本だったらすぐに纏め上げる事が出来るんだが……当の本人は未だに寝ていた。利益が得られると分かっても、アイツはやる気が無いのか。どうやら本当に明久の言ったとおり、試召戦争以外の行事には興味が無いみたいだな。

そんな中、明久と島田が何か話しているが連中の大きな声によって

聞こえなかった。

だから俺は……。

「すぅ～～～～……お前等！！！　いい加減静かにしろ！！！」

『！！！』

シ～～～～ン

息を吸って思いっきり叫ぶと、連中は漸く静かになった。

「島田、続けてくれ」

「助かったわ。それじゃあ皆、何時までも意見を出していたら決まりそうにから、店はさっき挙がった候補の中から選ぶからね！」

島田が無理矢理纏めると、すぐにブーイングが飛んできた。

「ほらっ！　ブーブー言わないの！　この三つの中から一つだけ選んで手を挙げること！　いいわね！」

反論を眼力で押さえ、決を採りにかかる島田。案外、島田に任せて良かったかもしれないな。

「それじゃ、写真館に賛成の人！　……はい、次はウェディング喫茶！　最後、中華喫茶！」

教室が島田の声で響いているが、それでも喧騒は収まらない。騒がしい中、島田が挙げられた手の本数をカウントし始める。

その結果……。

「Fクラスの出し物は中華喫茶にします！全員、協力するように！」

接戦で中華喫茶に決まったのであった。俺としても、この選択は正しいと思う。他の二つはハッキリ言って論外だからな。

「それなら、お茶と飲茶は俺が引き受けるよ」

須川が立ち上がると……。

「……（スクッ）」

何故か土屋も立ち上がった。

「土屋、お前が立ち上がったって事は料理を引き受けるって事でいいのか？」

「……（コクッ）」

「ムッツリーニ、料理なんて出来るの？」

「……真摯の嗜み」

……一応料理は出来るみたいだから、敢えて突っ込まないでおく。どうせ土屋の事だから、下心があったついでに出来るようになった

と思われる。

まあ土屋はそれ以外に手先は器用そうだし、裏方に向いていると思う。

「先ずは厨房班とホール班に分かれてもらうからね。厨房班は須川と土屋のところ、ホール班はアキのところに集まって！」

何故か明久がホール班のトップになっていたが、気にする必要は無いか。

「それじゃ、私は厨房班に……」

姫路が恐ろしい事を口にしたので……。

「待て姫路！　お前はホール班に行け！」

「ダメだ姫路さん！　君はホール班じゃないと！」

俺と明久が同時に阻止した。

姫路が厨房に入って毒物料理を作るなんて冗談じゃない。んな事されたら速攻で営業停止になるだろうが！

『修哉、明久、グッジョブじゃ』

『……！（コクコクッ！）』

毒物料理の威力を知っている秀吉と土屋からのアイコンタクト。そして一番の被害者であった坂本は未だに寝ていて、恐ろしい事態一

歩手前な事に気付いていない……と思っていたが、良く見ると小刻みに震えているな。恐らくクラスの連中が大声を出している時に起きて狸寝入りしていたのだろう。

「え？　吉井君、天城君、どうして私はホール班じゃないとダメなんですか？」

全く自覚の無い毒物料理人が首を傾げている。ここは本当の事を言っておくか。

「姫路が料理を作ったら確実に……むぐぅっ！？」

死人が出るから作らないでくれと、俺は言おうとしたが明久に手で口を塞がれた。

『何しやがる明久！！』

『ダメだよシュウ！　そんな事言ったら姫路さんが傷付くじゃないか！！』

『喧しい！！　この場でハッキリ言っておかないと被害が出るんだぞ！！』

『とにかく！　ここは僕に任せて！　シュウは何も言わないように！！　良いね！？』

アイコンタクトで会話しているが、明久のバカは何を血迷ったのか事実を言わないように釘を刺してきた。

「どうしたんですか、吉井君？　いきなり天城君の口を塞いじゃっ

て……」

「な…何でもないよ。えーと、さっきの事についてだけど……ほら、姫路さんは可愛いから、ホールでお客さんに接したほうがお店として利益が痛あっ！　み、美波！　僕の背中はサンドバックじゃないよ！？」

「か、可愛いだなんて……吉井君がそう言うなら、ホールでも頑張りますねっ♪」

ホールだけにしてくれ！　ってか明久！　いい加減に手を放せ！！

「え…あ、ご、ごめんシュウ！」

明久が俺の視線の訴えに気付いたのか手を放した。

と、その時……。

「アキ。ウチは厨房にしようかな～？」

「うん。適任だと思う」

「……」

あ、島田が無表情になった。

「それなら、ワシも厨房にしようかの」

「秀吉、何を馬鹿なことを言ってるのさ。そんなに可愛いんだから、もちろんホールに決まっているって美波！！　どうして僕を殺そう

みたいな顔になってるの！？」

明久の眼前には島田が殴り殺そうとしていたが、俺が島田の襟首を掴んで阻止していた。

「放しなさい天城！　このバカにはお仕置きしないと！！」

「そんな事する暇があるなら、お前もさっさと役割を決めろ。明久、俺はホールでいいか？」

「う…うん。分かったよ」

俺の希望に明久は了承するが……。

「いつまでウチを掴んでるのよ天城！！　さっさと放しなさい！」

島田はまだ抵抗していた。

「お前が明久に暴行をしなければ今すぐにでも放すが？」

「その前に邪魔するアンタを……！」

「島田、お前に選択権を与えてやろう。このまま大人しく俺の言うとおりにするか、それとも……Ｄクラスの清水美春と二人っきりにする状況を作ってやろうか？」

「！！！」

俺が出した選択権に島田はビクッとして怯えた顔になった……特に二つ目の選択権を聞いてから。

因みに俺がDクラスの清水美春を知っている理由は、明久から聞いた。何でもAクラス戦後にて明久が島田と姫路と一緒にクレープを食べに言った時に追いかけられていたみたいだ。それで清水が島田の事を好きだと言う事を知り、同時に島田の弱点だと言う事も分かった。

コレは有効活用が出来るので、いざと言う時の為に利用しようと思っていたが、まさかこんな早く使う事になるとは思わなかった。

「どうする、島田？」

「……分かったわよ！　大人しくしてればいいんでしょ！」

「分かればよろしい」

島田が大人しくなると、俺は襟首を話す。

「アンタ、何処で美春の事を知ったのよ？」

「前から知ってた。と言うか今はそんな事どうでもいいだろう。で、島田は厨房かホール、どっちにするんだ？」

俺は明久から聞いた事を黙っておき、はぐらかしながらどっちかを聞く。下手な事を言ったら明久がボロを出してしまうからな。

「……ならウチもホールにするわ。アキ、勿論良いわよね？」

「そ、そうですね……それが、いいと、思います……」

有無を言わせない島田の迫力に明久は怯えながらも了承する。

と言うか、こんな状況で果たしてやっていけるのかと不安を感じる俺であったが。

第二十問

バカテスト　地理

問　以下の問いに答えなさい。

『バルト三国と呼ばれる国名をすべてあげなさい』

姫路瑞樹の答え

『リトアニア、エストニア、ラトビア』

天城修哉の答え

『エストニア共和国、ラトビア共和国、リトアニア共和国』

教師のコメント

そのとおりです。

それと天城君、共和国を付けなくても正解ですよ。

土屋康太の答え

『アジア、ヨーロッパ、浦安』

教師のコメント

土屋君にとっての国の定義が気になります。

吉井明久の答え

『香川、徳島、愛媛、高地』

教師のコメント

正解不正解の前に、数が合っていないことに違和感を覚えましょう。

帰りのＨＲが終わった放課後。

「修哉よ、一緒に帰っても良いかのう」

「悪いがやる事があるから無理だ」

秀吉の誘いに俺は断りながら帰り支度をしている。

「やる事とは何じゃ？」

「実行委員長にＦクラスの出し物が決まった報告をしなきゃ行けないからな。少し待ってくれれば一緒に帰れるが」

「なら待つのじゃ」

秀吉は待つと言って教室に残るみたいだ。

「そうか。じゃあすぐに戻ってくる」

「うむ」

俺がそう言ってすぐ帰れるように準備を終えると、教室を出て委員会室へと向かおうとしたが……。

「う～ん、それは難しいなぁ……。さっきも言ったけど、雄二は興味の無い事には徹底的に無関心だからね」

「でも、アキが頼めば動いてくれるわよね？」

明久は帰っておらず、島田と話していた……何やら島田が明久に期待の眼差しを送っていたが。

「明久、帰ったんじゃなかったのか？」

「え？　ああ、シュウ。ちょっとね」

「島田もまだ帰らないのか？」

「ちょっとアキに用があるのよ」

「ふ～ん。あんまり遅くなるなよ」

島田が若干棘を含んだ言い方をしてくるが、俺は特に気にしなかった。議事進行での出来事に少し根に持っているなと分かっていたから。

だから俺はすぐに委員会室へと向かい始める。

「美波、別に僕が頼んだからって、アイツの返事は変わらないと思うけど」

「ううん。そんな事無い。きっとアキの頼みなら引き受けてくれる筈。だって……」

再び開始した明久と島田の会話を歩きながら聞いていたが……。

「だってアンタと坂本、愛し合っているんでしょう？」

「もう僕お婿に行けないっ！」

「待て島田！　お前は一体何の話をしてるんだ！？」

俺は即座に引き返して島田に突っ込んだ。

「何よ天城。話の邪魔をしないでくれる？」

「そんな事どうでもいい！　ってか明久と坂本が愛し合ってるって何だ！？　何でそんな気色悪い事を平然と言うんだ！？」

「そうだよ美波！　誰が雄二なんかと！　だったら僕は、断然秀吉の方がいいよ！」

「いや待て！　突っ込み所が間違ってるぞ、明久！」

「……あ、明久？」

俺が島田と明久に突っ込んでいると、いつの間にか廊下にいた秀吉

の動きが止まった。

「そ、その、お主の気持ちは嬉しいが、そんなことを言われても、ワシらには色々と障害があると思うのじゃ。その、ホラ。歳の差とか……」

「待て秀吉！　お前は気が動転してるから、そんな可笑しな事を言ってるんだよな!?　第一お前と明久は同い年だし！　ってかそれ以前に性別と言う大きな障害があるじゃないか！」

それと何で顔を赤らめて俯いているんだ!?

「そ…それにワシは……告白されるなら修哉の方が……」

「ストップストップ！　やっぱり気が動転してるんだろ!?　お前は男だろうが！！」

と言うか何コレ!?　俺が戸惑っているのに、何で明久は俺を嫉妬するかのように睨んでいるんだ!?　俺は久保や清水みたいな同性愛趣味は無いぞ！！

「ちょっと天城、アンタさっきからうるさいわよ！」

「島田がいきなり変な事を言ったからだろうが！！」

「シュウ……まさか僕を裏切ったの？　信じてたのに……」

「何で明久は悲壮感漂う顔してるんだ！　何か勘違いしてるだろ！？」

「しゅ…修哉、お主が良いのであれば……ワシは……」

「秀吉！　お前さっさと正気に戻れ！！　って何なんだよ、この状況は～～！！！！」

俺の叫びに下校している生徒が一斉にこっちを見ていた。

『天城のやつ、どうしたんだ？』

『何か葛藤しているかのように叫んでるけど……』

『天城君、もしかして……Fクラスに居過ぎた所為で……』

『ついにあの真面目な天城までもが可笑しくなったか……Fクラス、恐るべし』

『Fクラス唯一の常識人がついに消えてしまった……』

と、好き勝手な事を言っている連中がいたので……。

「お前等！　何を勝手な事ばかり言ってやがる！！　俺は正常だからこうなってるんだよ！！」

キチンと突っ込みをいれておいた。

数分後

「で、キチンと説明してもらおうか、島田？」

「え…えっと……ウチはアキに相談してて……」

俺は明久、島田、秀吉を教室に連れ込んで正座させ、教壇に立ちながら事の顛末を聞こうとしている。

「さっさと答えろ。元はと言えばお前が変な事を言った所為でこうなったんだろうが」

「……分かったわ」

有無を言わせない俺の睨みに島田は負けて話そうとした。

「その、ウチがアキに相談したのは……坂本を何とか学園祭に引っ張り出して欲しいって頼んだのよ」

「坂本を？」

「愛し合ってるアキに頼めば坂本は絶対に動いてくれると思って……」

「……突っ込みたい所だが、もう既に言ったから止めておくとして……あのなぁ島田、アイツは明久と愛し合ってないし、頼みを聞こうともしないぞ」

ってか明久と坂本がそんな関係だったら俺は明久と距離を置いてるぞ。頼むからそんな気色悪い事を言わないでくれ。

「し…シュウの言うとおりだよ、美波。僕が頼んだ所で、雄二は知った事かの一言で切って捨てると思うし。それに僕は秀吉の方が…」

「明久、そこから先は喋るな」

「……」

明久がまた変な事を口走りそうだったので俺は言わせないようにする。そうしたら秀吉がまた気が動転してしまうからな。

「それじゃ、坂本は動いてくれないって事？」

「え？　あ、うん。そう言う事になるかな」

島田は明久に問うと、明久は島田の方を見て無理だと答える。

「何とか出来ないの？　このままじゃ喫茶店が失敗に終わるような……」

目を伏せて、沈んだ面持ちになる島田。この様子から見て是非とも坂本を動かして欲しい感じだな。

確かに坂本が動けばクラスの連中を統率出来るし、喫茶店も成功すると思う。それと同時に成功した利益を使ってFクラスの設備をいい物に換える事も出来て、姫路の負担を減らせるからな。

そこは俺も考えてはいたんだが、アイツは俺が何を言った所で動こうともしないからな。何せアイツもクラスの連中と同様に俺に対する恨みがあるし。下手に無理言ってお願いをしたら逆に付け上がって何か要求すると思う。あくまで俺の予想だけど。

「島田よ、話は大体分かったのじゃが、どうしてそこまで思いつめた顔になっておるのじゃ？　喫茶店が失敗したからと言ってそんなに深刻な話になるとは思えないのじゃが」

まだ少しばかり顔が赤い秀吉が島田に聞く。ってかまだ引き摺ってたのか。言っておくが秀吉、俺はお前に告白する気なんて一切無いからな。

「そうだよ、美波。喫茶店の経営と設備の話し程度で、そこまで……」

「アキ、そうじゃないの。本当に深刻な話なのよ」

「え？」

「島田、それはどう言う事だ？」

島田が真剣な顔して言うと、明久は戸惑い、俺は不可解に思いながら聞く。

「本人には誰にも言わないで欲しいって言われてたんだけど、事情が事情だし……。けど、一応秘密の話だからね？　アンタ達もいいわね？」

「う、うん、分かった」

「安心しろ、誰にも言いはしない」

「ワシもじゃ」

島田が念を押して言うと、明久と俺と秀吉は頷く。ここまで言ってくるとなると、どうやらかなり深刻な話になりそうだな。

「実は、瑞希なんだけど」

「姫路さん？　姫路さんがどうしたの？」

「あの子、転校するかもしれないの」

「ほぇ？」

「何だと？」

島田の発言に明久は素っ頓狂な声を出し、俺は目を見開いた。

姫路が転校するだと？　一体何故？

「島田、姫路がどうして転校するのかを詳しく……って、おい明久、お前な……」

俺は教壇から離れて島田に詰め寄ろうとすると、明久のが両耳から煙が出ていて停止状態寸前になっていた。

「む。マズイ。明久が処理落ちしかけておるぞ」

「このバカ！　不測の事態に弱いんだから！」

「確か明久は中学の頃にも、こんな現象を起こしていたな」

「え？　それどう言う事よ、天城」

「今はそんな事どうでもいいから、さっさと明久を戻すぞ」

「明久、目を覚ますのじゃ！」

島田の追求を無視していると、秀吉は明久の肩を揺する。

明久が意識を取り戻すと……。

「秀吉……、モヒカンになった僕でも、好きでいてくれるかい……？」

「……本当に以前と同じ状況だな。前も変な事を口走ってたし」

「……どう言う処理をしたら、瑞希の転校からこう言う反応が得られるのかしら」

「ある意味、稀有な才能かもしれんのう」

ズレまくっている質問をする明久に、俺たち三人はそれぞれ感想を言う。

と、そんな時に明久はやっと正常に意識が戻った。

「美波！　姫路さんが転校って、どう言う事さ！」

気を取り直した明久は、すぐに島田に詰め寄る。

「どうもこうも、そのままの意味。このままだと瑞希は転校しちゃうかもしれないの」

「このままだと……？」

随分と妙な言い回しだな。転校となれば俺達がどうする事も出来ないが、島田の言い分ではまだ確定した訳じゃないみたいだ。

「島田よ。その姫路の転校と、さっきの話が全然繋がらんのじゃが」

確かに秀吉の言うとおりだ。喫茶店が成功しようが失敗しようが別に転校とは何の関係も……待てよ。

「島田、もしかして姫路の転校の理由は……Fクラスの環境か？」

「ええ、正にソレよ」

俺の質問に島田は頷くの見ると、すぐに納得した。

「ってコトは、転校の理由は両親の仕事の都合とかじゃなくて……」

「そうね。純粋に設備の問題って事になるわ」

「だろうな。こんな不衛生極まりない教室に居続けたら悪化するし、流石に両親も黙っていないだろう」

おまけに設備が更にランクダウンしているから、姫路の体調の悪化に拍車がかかっているし。

「それに瑞希は、身体も弱いから……」

「そうだよね。それが一番マズいよね」

一応掃除はしているんだが、ハッキリ言って焼け石に水程度で大して変わらない。今の所はまだ大丈夫なのだが、冬の季節に入って寒い隙間風が入ってきたら姫路以外でも確実に体調を崩してしまう。

「なるほどのう。じゃから喫茶店を成功させ、設備を向上させたいのじゃな」

「うん。瑞希も抵抗して『召喚大会で優勝して両親にFクラスを見直してもらおう』とか考えているみたいなんだけど、やっぱり設備をどうにかしないと」

設備だけじゃなくて、Fクラスの大半はバカの集まりだからな。もしかしたら姫路の両親はそれも理由に姫路の転校を勧めているのかもしれない。まあ一番の問題は姫路の健康だと思うが。

「……アキはその……瑞希が転校したりとか嫌だよね……？」

島田が探るような目で明久を見ると……。

「もちろん嫌に決まってる！　姫路さんに限らず、それが美波や秀吉やシュウであっても！」

実に明久らしい答えが出た。こんな友達思いな所があるからこそ、

俺は明久との友人関係が今でも続いている。

「そっか……うん、アンタはそうだよね！」

島田が嬉しそうに頷く。

余談だが、明久は恐らく坂本が転校すると言う話になったとしても顔色一つ変えずに一言で片付けると思う。

「そう言う事なら、何としても雄二を焚き付けてやるさ！」

「そうじゃな。ワシもクラスメイトの転校と聞いては黙っておれん」

「微力ながら俺も手伝おう」

「それじゃ、先ずは雄二に連絡を取らないとね」

明久はポケットから携帯を取り出して、坂本に電話をする。教室に坂本はいないが、鞄がまだ置いてあるからまだ学校内にいる筈だ。

「あ、雄二。ちょっと話が……」

明久は坂本に連絡が着いたので話しをしようとするが……。

「え？　雄二。今何をしてるの？」

坂本は何やら様子がおかしいみたいだ。

「雄二！？　もしもし！　もしもーし！」

どうやら話しを出来る状況じゃなく電話を切ったようだ。

「坂本は何て言ってた？」

「えっと、『見つかっちまった』とか『鞄を頼む』とか言ってた」

「……なにそれ？」

島田が使えない奴を見るような目で明久を睨んでいる。ってかその態度は何だ？　厚かまし過ぎるぞ。

「明久、他には何か言ってたか？」

「う～ん……あ、そう言えば翔子って叫んでたような気が……」

「……成程、そう言う事か」

「大方、霧島翔子から逃げ回っているのじゃろう。アレはああ見えて異性には滅法弱いからの」

俺は坂本の事情を知り、秀吉が腕を組んでうんうんと頷いている。

アイツが霧島から逃げ回ってるって事は、また何かやらかしたのか？　……いや、多分それは無いな。

以前に坂本が霧島に追いかけられた後は、理不尽とも言えるお仕置きをされていたから……何であんなったのかは知らんが、またそんな展開になっているんだろう。

「そうすると、坂本と連絡取るのは難しいわね」

「かと言って、アイツ抜きでやるのは無理があるし……」

島田が大きく息を吐き、俺は後々の事を考えていると明久が何か閃いたかのような顔をする。

「いや、これはチャンスだ」

「なんだと？」

「え？　どういうこと？」

「雄二を喫茶店に引っ張り出すには丁度いい状況なんだよ。うん。ちょっと三人とも協力くれるかな？」

「それはいいけど……坂本の居場所はわかっているの？」

「大丈夫。相手の考えが読めるのは、なにも雄二だけじゃない」

「何か考えがあるようじゃな」

「お前がそんな頼もしい台詞を言うなんて……珍しい事もあるもんだ」

「まぁね」

ニヤリと笑った明久は、俺達を連れて教室を後にした。

俺は明久と一緒に雄二のいる所へと向かっている。

「雄二はここにいると思うよ」

「ここって……待て、ここは絶対にあり得ないと思うんだが」

「いーや、絶対いるね」

「……どうしてそんなに自信を持って言える？」

俺は呆れながら明久に問い掛ける。

何故ならその場所は……女子更衣室だからだ。

「普通はこんな所に男子が隠れる訳が無いと思うんだが……」

「そこだよ。シュウはいつも雄二が裏を掻いた策を使っているのは知ってるでしょ？」

「……ああ、そうだな」

「雄二の事だから、普通は男子が絶対に隠れないと思われる場所を選んで、此処を選んだって訳だよ。どう？　僕の推理はどこか間違

っているかな？」

「……まあ……間違ってはいないんだが」

俺は間違いを正そうと考えていたのだが、明久の推理はどこも間違っていないので正す事が出来なかった。と言うか間違って欲しい。

霧島から逃れる為に裏を掻いて隠れた坂本を賞賛……とまでは行かないが、それなりには凄いと思う。だが俺からして見れば、坂本の行動は血迷ったとしか思えなかった。

「それじゃあシュウ。早く入ろう」

「いや、俺はここで待つ」

「どうして？」

「お前な……男二人が揃って堂々と女子更衣室に入るのは問題だろうが」

と言うか平気な顔して女子更衣室に入ろうとする明久にも問題があるんだが。

「そんな事言わずに、シュウも早く入ろうよ」

「遠慮する。それにもし女子の誰かが入って来た時の事を考えて残っていないと不味いしな」

「あ、それもそうだね。じゃあシュウ、そこで待ってて」

と言って明久は女子更衣室に入った。

「はあっ……もし此処に坂本がいなかったら、明久はただの変態……いや、入った時点で既に変態だな」

俺は女子更衣室付近で明久達を待ちながら、坂本がどうかいるようにと祈っていた。

と、そんな時……。

「あれ？　修哉じゃない」

「ん？」

俺の名前を呼んだ女子がいたので振り向くと、そこには体操着姿の木下優子がいた。

「ああ、木下さんか。お久し……」

「……」

挨拶をしている最中に優子が睨んで来た。

「あ…あのう？　木下さん、どうしてそんな怖い顔をして……」

「優子」

「え？」

「前に言ったでしょ？　アタシの事を優子って呼んでって」

「……あ、ああ。そうだったな、優子」

俺は以前のＡクラス戦後でのお願いを思い出しながら、すぐに名前で呼んだ。

「ところで優子はどうして、そんな格好をしてるんだ？　部活には入ってないって聞いたけど」

「Ａクラスの出し物の準備をしてて体操着に着替えてたの」

「って事は、もう出し物の準備は終えたのか。流石はＡクラスだな、うちとは大違いだ」

「まだそんな早く終わってないわ。Ａクラスの教室は広いから、まだまだ準備が掛かってやっと半分って所よ」

「それでも充分に凄いんだが」

「時間も時間だったから中断して、また明日に持ち越しになったの。だから更衣室で着替えようとしたんだけど……」

「俺がいたから声を掛けたって事か」

「そう言う事」

優子は腕を組みながら俺に説明をしていた。優子って時折、誰かと話す時には腕を組んで話している事があるんだよな。一種の癖か？

まあ、そんな事はどうでもいいけど。

「そうだ、修哉。アタシ着替え終わったら帰るから、一緒に帰らない？」

「いや、俺はまだやる事あるから一緒に帰れない」

「そうなの？　じゃあまた次の機会って事で……」

優子が女子更衣室に入ろうとするので……。

「ちょ…ちょっと待て優子、聞きたい事があるんだが……」

「何？　着替え終わってからじゃダメなの？」

俺はすぐに引き止めた。

「ま…まあな……アハハ……」

「？」

優子を引き止める事には成功したが、どうやって時間を稼ごうか考えている。ってか明久！　さっさと出て来い！　これ以上は無理だ！

「で？　聞きたい事って？」

「あ…ああ。それはな……」

と、俺が何か言おうとしたのだが……。

ガチャッ

「！！！」

優子の後ろから女子更衣室の扉が開いて明久と坂本が出てきた。

「ん？　誰か着替えてたの？」

「「！！！」」

優子が後ろを向こうとする瞬間、明久と坂本はやばいと言う様な顔をしていたので俺は咄嗟に……。

「おっと！！」

ギュウッ！

「え？　ええ！？　しゅ…修哉！？　い…いきなり何を！？」

優子を振り向かせない為に抱き締めてしまった。

『早く行け！　明久！　坂本！』

「「……（コクコクッ！）」」

「ちょ…ちょっと修哉！　何のつもりよ！？」

俺がアイコンタクトを送ると、明久と坂本は即座に撤退した。そし

て俺に抱き締められている優子は未だに戸惑いながらもジタバタと暴れている。

「す…スマン！！　ちょ…ちょっと転んじゃって……あ…アハハハハ」

「どうして立ち止まっているのに転ぶの！？　ワケ分からないわよ！」

優子に謝りながら離れるが、顔を赤らめながら許さないと言わんばかりに怒鳴ってきた。確かに優子の言うとおり、いきなり転ぶなんて可笑しな話だ。まさか女子更衣室から出た明久と坂本の姿を見せないために、態と優子に抱きついたなんて口が裂けても言えない。

「本当に申し訳ない。じ…じゃあ俺はこれにて……」

「ああっ！　ちょっと待ちなさい！」

俺は颯爽と退散して明久と坂本が逃げた方へと向かったのであった。

「な…何なのよ、もう！！」

修哉は逃げるように去って行って、もうとっちめる事が出来なくなった。

って言うか修哉は何考えてるのよ！　いきなりアタシに抱きついたくせに、大して謝りもしないで逃げるなんて！

「け…けど……修哉に抱き締められちゃった……修哉の胸板って結構逞しい……って違う！」

あ…あ…アタシは何考えてるのよ！？　べ…別に修哉に抱き付かれて嬉しかったなんて……これっぽっちも思ってないわよ！！　こ…今度会ったらタダじゃおかないんだから！！

と、アタシが心に誓っていると……。

「優子ぉ～♪」

「！！！　あ…愛子！」

急に後ろから愛子が声を掛けてきた。

「な…な…何で愛子が此処にいるのよ！？」

「着替えに行こうと思って更衣室に行こうと思ったんだけどねぇ～。優子が修哉君と良い雰囲気になってたから、つい……」

「ついって何よ！？　まさか見てたの！？」

「そりゃあ……修哉君に抱き締められている所を見たら誰だって足を止めちゃうからね♪」

「！！！！」

……さ…最悪だわ。まさか見られて欲しくない相手に見られるなんて……不覚だわ。ああ～～もう、確認する必要が無いくらい自分の顔が真っ赤になってるのが分かる。恥ずかし過ぎて……穴があったら入りたい。って言うか修哉！！　貴方覚えてなさいよ！！絶対に許さないんだから！！

「やれやれ、何とか事無きを得たか。明久と坂本は……あそこか」

優子から逃げた俺は明久と坂本を探していると、一階と二階の間にある踊り場にいた。

俺が階段を上がると、二人は話していて……。

「……家族に紹介したいそうだ」

「……まだ付き合ってるわけじゃないんだよね？」

「と言うかお前等、一体何の話しをしてるんだ？」

思わず突っ込みを入れてしまった。

「あ、シュウ。助かったよ、シュウが機転を利かせてくれなかったら、僕と雄二が大変な目に遭っていたからね……それでも木下さんに抱き付いていたのは少しばかり憎かったけど」

「ああでもしなければ鉄人に追いかけられていたかもしれないからな……」

「いや、今はそんな事どうでもいいから。何の話しをしてたんだ？」

「えっと……雄二が霧島さんに追い掛けられていた理由を聞いてたんだよ。霧島さんが雄二に家族を紹介する為に家に呼ばれていたみたいで……」

「へぇ～。坂本はもう既に霧島とそんな深い関係になったのか。で、もう正式に婿入り決定となったのか？」

「んな訳ねえだろうが！　テメエ分かってて言ってるだろ！？」

明久から理由を聞くと、俺は笑みを浮かべて冗談交じりで聞いた瞬間に坂本は即座に否定した。

「何だよ、冗談の通じない奴だな。それ位乗ってくれても良いと思うんだが」

「ふざけんな！　下手な事を言ったら俺の人生は終わりだ！」

「人生って……大袈裟過ぎじゃないか？」

「いや。翔子はマジで俺に家族を紹介するつもりだ」

「……」

坂本が物凄い真剣な顔をして言ってくるので、俺はどうにも言い返すことが出来なくなった。

「二人とも、今はそんな事はどうでもいいじゃないか。それより雄二、キミに朗報ですっ！」

「何だ？　嫌な報せだったら殺すぞ。ってかどうでもいいってフザケンナ。俺の人生が掛かってるんだぞ」

「……」

殺意を込めながら言う坂本に、明久は言葉を失うが……。

「こ、こちらの携帯電話をどうぞ」

それでも負けずに懐から携帯を取り出して坂本に渡した。

「全く、何の真似だ？」

坂本は不審に思いながらも携帯を受け取って耳に当てて会話を始める。

「島田か。一体何の真似だ？　……替わる？　誰と――おい。もしもし」

話している最中に向こうの携帯が誰かに渡された雰囲気が伝わってきた。

確か明久の作戦で、電話が出る相手は霧島の声真似をした秀吉……。

「人違いです」

プツッ。

俺がそう思った瞬間に坂本はすぐに携帯の通話を切ったのであった。

「コロス」

と、片言の日本語で言いながら殺気を出す坂本。そんな坂本に明久は怖がる様子を見せないで話しかける。

「まぁまぁ、ちょっと落ち着いてよ。お願いを聞いてくれたら悪いようにはしないから」

「お前が暴れるんなら、即座に霧島を呼ぶぞ」

「……ちっ！　お願いって言うと……ふんっ。学園祭の喫茶店の事か」

どうやら坂本は明久と俺の狙いが分かったみたいだ。頭の回転が速い事で。腐っても神童と言ったところか。

と、俺が考えていると坂本は明久の方に顔を向けてニヤニヤした表情になり……。

「やれやれ。こんな回りくどい事をしなくても、お前が『大好きな姫路さんの為に頑張りたいんだ！　協力して下さい！』と言えば、面倒だが引き受けてやるのに」

「なっ！？　べ、別に、そんな事は一言も……！」

「あー、はいはい。話は分かった。仕方ないから協力してやるよ」

仕返しのつもりだろうか完全に明久をからかっていた。俺に関しては何も言い返さないみたいだが、今はどうでもいいか。

「まぁとにかく、引き受けてくれてありがとう」

「取り敢えず、お前がいなければクラスの奴等は話しをちゃんと聞こうとしないからな」

「気にするな。それより、島田と翔子は親しかったのか？」

あ、やっぱりコイツ疑っている。流石に島田が霧島と一緒にいた事が気になるみたいだ。

「う～ん、聞いても怒らない？」

「バーカ。どうせ引き受けたんだ。今更怒ってどうするんだ」

「じゃあ坂本。念の為に言うが、殴る蹴るもやるなよ？」

「……分かってる」

コイツ……怒らなくても明久を殴るつもりだったな。手を打っておいて良かったよ。

「それじゃ、教えてあげよう。実は電話の向こうにいたのは、霧島さんの声真似をした秀吉なんだよ」

「坂本は見事に明久の策に嵌ったって事だ。電話の会話を見て少しばかり面白かったぞ」

「……テメエ等。後で絶対にシバく」

「だってさ、シュウ。どうする？」

「そうだな。その時は霧島に連絡して、ある事無い事言って坂本に仕返しをしよう。例えば……坂本が女子更衣室に隠れて女子の下着を漁ってたとか」

「止めろ！！　そんな事をしたら俺は翔子に抹殺される！！」

やっぱり坂本って霧島に対して弱腰なんだな。

第二十一問

「そうか。姫路の転校か……」

場所は変わって俺達Ｆクラスの教室。俺と明久と坂本は島田と秀吉の二人と合流して、Ｆクラスの教室内にいる。

「そうなると、喫茶店の成功だけでは不十分だな」

「確かに坂本の言うとおり、それだけじゃ姫路の両親は転校を却下しないだろう」

「不十分？　却下しない？　どうして？」

「お前なぁ、粗方の予想は教室で話したのに、もう忘れたのか？」

「明久、お前は相変わらず忘れる奴だな……まあいい。姫路の父親が転校を勧めた要員は恐らく三つ」

明久の度忘れに呆れる坂本であったが、一先ず置いといて指を三本立てて見せた。

「まず一つ目。ござと蜜柑箱という貧相な設備。快適な学習環境ではない、という面だな。これは喫茶店が成功したらなんとかなるだろう」

坂本はそう言いながら指を一本引っ込める。それは俺が坂本に会う前に言った内容だ。

「二つ目は、老朽化した教室。これは健康に害のある学習環境という面だ」

「一つ目は道具で二つ目は教室自体ってこと？　って確かにそれはシュウが言ってたね」

「やっと思い出したか。でもな明久、喫茶店の利益程度じゃ改善は難しいんだ。設備は良いとしても、教室自体の改修となれば、学校側の協力が不可欠なんだ」

思い出した明久に俺が補足を加えると、明久は納得した顔になる。

椅子や机ならお金を出して買うだけなので特に問題は無いが、教室の改修となれば業者の出入りや手続きが必要になる。これは教師がやる事だ。

「そして最後の三つ目。レベルの低いクラスメイト。つまり姫路の成長を促す事の出来ない学習環境と言う面だ」

三つ目に関しては明久も分かっており、何とも言えない顔になっている。はっきり言ってFクラスでは、姫路の能力を伸ばす為の実力に近い者がいなければ、競争する相手もいない。大半がバカの集まりだからな。

「参ったね。随分と問題だらけだ」

「そうじゃな。一つ目だけならともかく、二つ目と三つ目は難しいのう」

……明久と秀吉、言っちゃ悪いんだが、お前等も三つ目のカテ

ゴリに入っているからな。

明久はゲームばかりやって大して勉強はしておらず、秀吉は秀吉で演劇に夢中で疎かになり過ぎている。俺としては少しでも良いから勉強して欲しい。

「そうでもないさ。三つ目の方は既に姫路と島田で対策を練っているんだろう？」

坂本が島田に視線を送る。

そう言えばＬＨＲの時に姫路が言ってたな。『お父さんの鼻を明かす』と。確かに姫路が召喚大会で優勝すれば、最底辺と呼ばれるＦクラスでも学園トップと渡り合える生徒がいるって証明出来るしな。

「この前、瑞希に頼まれちゃったからね。『どうしても転校したくないから協力して下さい』って。召喚大会なんて見世物にされるだけみたいで嫌だけど、あそこまで必死に頼まれたら、ね？」

まるで面倒見のいいお姉さんみたいに言う。どうでも良い事だが、島田は弟か妹のどちらかがいるかもしれないな。

そして更にどうでも良い事がもう一つあるのだが、召喚大会はハッキリ言って外部に宣伝させる為の見世物だ。島田の考えは決して間違っていない。

「翔子が参加するようなら優勝は難しいが、アイツはこういった行事には無関心だしな。姫路と島田の優勝は充分ありえるだろう」

「そうだね。二人ならきっと何とかなるよ」

「仮に霧島が出たら勝率はガクンと下がるが……あれ？」

霧島をよく知ってる坂本の言葉は間違いないだろうが、俺は何か忘れていた。何だっけ？　確か坂本にとって大事な事だったような気がするんだが。

「え～～っと……」

「どうした、天城？」

俺が思い出そうとしていると、坂本は俺の方を見てきた。

「何か忘れているような気がして……まあ多分そんな大した事じゃ無いと思う。大事な事だったら、すぐに言ってると思うし」

「ならいいが」

坂本関連の事なんだが、下手に中途半端な内容を言って坂本を混乱させる訳にはいかなかったので敢えて伏せる。坂本は俺を気にしなくなって再び明久達の方に顔を向けた。

でも本当に何だっけ？

「本当なら姫路抜きでＦクラスの生徒が優勝するのが望ましいけどな」

「それは言いっこ無しだよ」

坂本の台詞に明久が突っ込む。

確かに坂本の言うとおり、姫路以外の俺達Ｆクラスの生徒が優勝すればいいのだが、それは物凄く難しいだろう。

「姫路と島田が優勝したら、喫茶店の宣伝にもなるし一石二鳥じゃな」

「だな」

秀吉がうんうんと頷いていると、俺も同様に頷く。Ｆクラスの女子コンビが優勝すれば、二人見たさに客が喫茶店に来ること間違い無いし。

「で、坂本。それはそうと、二つ目の問題はどうするの？」

島田が話題を変えて坂本に質問する。島田の言った二つ目の問題は教室の改善の事についてだ。

「どうするも何も、学園長に直訴したらいいだけだろ？」

あっさりと島田の質問に当然の如く答える坂本。

「それだけ？　僕らが学園長に言ったくらいで何とかしてくれるかな？」

「あのな。ここは曲がりなりにも教育機関だぞ？　いくら方針とは言え、生徒の健康に害を及ぼすような状態であるなら、改善要求は当然の権利だ」

「坂本、確かにそうすれば良いとは思う……けど直訴する前に、

担任の西村先生へ話しを通した方がいいんじゃないか？」

「まあ普通はそうだな。けど鉄人に話したとしても、そう簡単には納得してくれないだろう。そんな事をするより俺達が学園長に言った方が手っ取り早い」

「やっぱりそうするしかないか」

坂本の回答に俺は納得せざるを得なかった。それに今は清涼祭の準備中だし、今から教室の改善を西村先生に話した所で後回しにされてしまうだろう。

「それなら、早速学園長室に行こうよ」

「そうだな。学園長室に乗り込むか。天城と秀吉と島田は学園祭の準備計画でも考えておいてくれ」

立ち上がって指示を出す坂本であるが……。

「坂本、悪いが俺も一緒に行かせてもらうぞ」

「何？」

俺が行くと言った事によりこっちを見てきた。

「坂本と明久だけに任せておくと、何かしらの衝突が起きる可能性があるかもしれないな。それにお前達は教師側にして見れば一番の問題児と呼ばれているし、学園長に訴えても一蹴される可能性が充分にある」

「シュウ、雄二はともかく僕が問題児だなんて失礼……」

「試召戦争中に学校の器物や教室の壁を壊す時点で充分問題児だ」

「……」

心外だと言わんばかりに抗議してくる明久であったが、俺が過去の話しを出すと無言となる。

坂本の方は……。

「……まあ天城の言う事に一理あるな。分かった。お前も一緒に来い」

納得して俺の同行を了承した。

「それじゃあ秀吉、島田、準備は任せたぞ」

気を取り直した坂本は秀吉と島田に言って、教室を出ようとする。

「うむ。了解じゃ。それと霧島翔子を見かけたら帰ったと伝えておこう」

微笑みながら言う秀吉に、霧島の名前を出された坂本は言葉に詰まっている。

「アキ、しっかりやってきなさいよ」

「オッケー。任せといてよ」

島田の声援を受けた明久は、俺と坂本と一緒に学園長室を目指して教室を後にした。

『……賞品の……として隠し……』

『……こそ……勝手に……如月ハイランドに……』

新校舎の一角にある学園長室前に着くと、扉の向こうから言い争っている声が聞こえた。

どうやら今は取り込み中みたいだな。それになんか不穏な空気も漂っているし。にしても賞品や如月ハイランドって……一体何の話だ？

その会話は明久も聞こえているみたいで聞き耳を立てている。

「どうした、二人とも」

俺と明久の様子が可笑しい事に気付いた坂本が聞いてきた。

「いや、中で何か話しているみたいなんだけど」

「それに加えて、言い争っているみたいだが」

「そうか。つまり中には学園長がいると言う訳だな。無駄足にならなくて何よりだ。さっさと中に入るぞ」

「お…おい坂本！　取り敢えずは向こうの話が終わるまで……って聞いてないし」

坂本と明久は俺の話しを聞かずに学園長室に入ろうと、ノックをしてすぐに入った。

「失礼しまーす！」

と、学園長室に入った明久が声を出して言いながら坂本と一緒にズンズンと中に入る。

「本当に失礼なガキ共だねぇ。普通は返事を待つもんだよ」

「も…申し訳ありません、学園長。止めたんですが、聞かなくて。あ、俺は二年Ｆ組の天城修哉です」

俺が謝罪しながら入ると、長い白髪が特徴の藤堂カオル学園長が椅子に座っている。同時に試験召喚システム開発の中心人物である。

けど明久と坂本を見て早々にガキ共って言うのはちょっと……この人は研究者だから、多少口が悪いんだろう。

「ん？　お前さんは確か……まあいい。と言うかそこのガキ共、アンタ等はどうしてああ言う謝罪が出来ないんだい？」

学園長は俺の顔を見て何か思い出したかのような顔をしていたが、すぐに明久達の方に顔を向けて注意してくる。

「やれやれ、取り込み中だと言うのに、とんだ来客ですね。これでは話しを続ける事も出来ません。……まさか、貴方の差し金ですか？」

眼鏡を弄りながら学園町を睨み付けるのは教頭の竹原先生。鋭い目つきとクールな態度で一部の女子生徒に人気が高い。

あれ？　そう言えば竹原先生ってこの間、うちの喫茶店に来てたような気が……。竹原先生は俺に気付かず相手の会話に集中して怪しげな雰囲気を出していたな。

「馬鹿を言わないでおくれ。どうしてこのアタシがそんなセコい手を使わなきゃいけないのさ。負い目があると言う訳でもないのに」

「それはどうだか。学園長は隠し事がお得意のようですから」

俺達が来たと言うにも拘らず、学園長と竹原先生はまた言い争い始めている……まるで互いに相手の腹を探り合うかのように。

「さっきから言っているように隠し事なんて無いね。アンタの見当違いだよ」

「……そうですか。そこまで否定されるなら、この場はそう言う事にしておきましょう」

そう告げて、竹原先生は部屋の隅に視線を送り……。

「それでは、この場は失礼させて頂きます」

踵を返して学園長室を出て行った。

けど妙だな。竹原先生は此処を出ようとする時に何故隅っこを見ていた？

「んで、ガキ共。アンタ等は何の用だい？」

竹原先生との会話を中断された事に大して気にしなく、俺たちに話を振ってくる学園長。

何か俺達が来た事に好都合みたいな感じで言ってるな。そんなに竹原先生との話は嫌だったのか？

「今日は学園長にお話があって来ました」

坂本が学園長の前に立って話しを切り出す。ってかコイツが敬語を使うなんて初めてみたな。普段から教師相手にタメ口で話すのに。まあ目上の人相手にお願いする時に敬語を使うのは至極当然なんだが。

「私は今それどころじゃないんでね。学園の経営に関する事なら、教頭の竹原に言いな。それと、そこにいる天城みたいに名前を名乗るのが社会の礼儀ってもんだ。覚えておきな」

学園長はお願いを即座に却下するついでに礼儀を説いた。

「失礼しました。俺は二年Ｆ組代表の坂本雄二。それでこっちが……二年生を代表するバカです」

「坂本、普通に名前で言えよ。そこは代名詞じゃなく……」

俺が坂本に突っ込みを入れているが……。

「ほぅ……。そうかい。アンタ達がFクラスの坂本と吉井かい」

「ちょっと待って学園長！　僕はまだ名前を名乗っていませんよね！？」

どうやら学園長は坂本の紹介で連想して明久だと分かったみたいだ。

あ、明久が涙が出そうな顔をしてる。

「気が変わったよ。話しを聞いてやろうじゃないか」

気が変わったって……さっきは容赦なく一蹴しておいて、坂本と明久の名前を知った途端に目の色を変えたな。何か企んでいるかもしれない。

「ありがとうございます」

「礼なんか言う暇があったらさっさと話しな、ウスノロ」

「分かりました」

……この人は本当に学園長なのか？　ここまで口汚い罵倒をする教育者は初めて見たぞ。それと同時に坂本も特に言い返さず淡々と言ってるし。

「Fクラスの設備について改善を要求しに来ました」

「そうかい。それは暇そうで羨ましい事だね」

「今のFクラスの教室は、まるで学園長の脳みそのように穴だらけで、隙間風が吹き込んでくるような酷い状態です」

あ、坂本が途中から言動が綻び始めている。

「学園長のように戦国時代から生きている老いぼれならともかく、今の普通の高校生にこの状態は危険です。健康に害を及ぼす可能性が非常に高いと思われます」

やはり坂本は学園長の罵倒に相当頭に来てたみたいだな。お返しと言わんばかりに学園長を人外みたいな言い方をしてるし。本当だったら坂本を叱咤するところだが、学園長が教育者らしからぬ事を言ってるので敢えて見過ごす。

「要するに、隙間風の吹き込むような教室のせいで体調を崩す生徒が出てくるから、さっさと直せクソババァ、と言うワケです」

「大変に申し訳ありません、学園長。坂本には俺から後で説教をしておきますので」

いつもの坂本に戻ったので俺は即座に学園長に謝る。

けど学園長は坂本の慇懃無礼な説明をしても、大して気にしていないかのように思案顔となって黙り込んでいた。

「あの、学園長？」

明久が黙り込んでる学園長を見て声を掛けるが、当の本人は未だに何も言わない。

「……ふむ。丁度良いタイミングさね……」

何だと？　俺達に聞こえないように小声で呟いていたがバッチリ聞こえたぞ。明久と坂本は聞こえていなかったみたいだが。

「よしよし、お前達の言いたい事は良く分かった」

「え？　それじゃ、直してもらえるんですね！」

明久が嬉しそうに言う。

が……。

「却下だね」

学園長は即座に却下と言った。この人……俺達がバカのFクラスだから手を貸さないのか、そんな事をする気はないのかのどちらかは分からないが、どっちにしろ教育者とは言えないな。根っからの研究者だ。

「雄二、このババァをコンクリに詰めて捨ててこよう」

「……明久。もう少し態度に気を遣え」

「それは坂本にも充分言える事なんだがな」

明久を注意する坂本に俺が突っ込みを入れた。だが坂本は俺の突っ込みを無視して学園長の方に顔を向ける。

「まったく、このバカが失礼しました。どうか理由をお聞かせ願えますか、ババァ」

「そうですね。教えてください、ババァ」

「お前等、それが目上の人に対して聞く態度か？　言葉を丁寧にしたところで呼び方が酷ければ、聞くものも聞けないぞ」

「全くその通りだね。お前達、本当に聞かせてもらいたいと思ってるのかい？」

俺が坂本と明久に呆れながら言うと、学園長が俺の言葉に賛同するかのように呆れながら言い放った。と言うか学園長、貴方にも問題があるんですけどね。

「理由も何も、設備に差をつけるのはこの学園の教育方針だからね。ガタガタ抜かすんじゃないよ、なまっちろいガキ共」

……ちょっと俺も少しばかり頭に来たかな？

「学園長、そんな事を言うのでしたらこっちにも考えが……」

「それは困ります！　そうなると、僕等はともかく体の弱い子が倒れて」

「明久、人が喋ってる時に横槍を入れるな」

俺が割って入る明久に注意していると……。

「……と、いつもなら言っているんだけどね」

俺と明久の台詞を遮り、学園長が顎に手を当てて続きを話し始める。

「可愛い生徒の頼みだ。こちらの頼みを聞くなら、相談に乗ってやろうじゃないか」

交換条件を出してきたか。だがどう言うつもりだ？　散々罵倒しておいて、コロッと掌を返すとは……これは何か裏がありそうだな。

「……」

坂本も俺と同じ考えなのか、口元に手を当てて何か考えているみたいだ。

「その条件って何ですか？」

取り敢えず聞こうと言った感じで学園長に問う明久。コイツは学園長の台詞に、大して疑っている様子は無いな。

「清涼祭で行われる召喚大会は知ってるかい？」

「ええ、まぁ」

「じゃ、その優勝賞品は知ってるかい？」

「え？　優勝賞品？」

優勝賞品だと？　実行委員会の会議で聞いた時は確か……賞状とトロフィーに『白金の腕輪』だったか。それと副賞は……あ、教室で忘れていた事をやっと思い出した。

「なんだい、実行委員から大会の優勝賞品について聞いてないのかい。学校から送られる正賞には、賞状とトロフィーと『白金の腕輪』、副賞には『如月ハイランド　プレオープンプレミアムチケット』が用意してあるのさ」

あ、思ったとおり坂本がピクッと反応して俺を睨んでる。何しろ坂本にとってはかなり不味い状況だからな。

「はぁ……。それと交換条件に何の関係が」

「話は最後まで聞きな。慌てるナントカは貰いが少ないって言葉を知らないのかい？」

明久は知らないと言わんばかりの顔をしている。因みに学園長の言ったナントカの正解は乞食（こじき）だ。

「この副賞のペアチケットなんだけど、ちょっと良からぬ噂を聞いてね。出来れば回収したいのさ」

「回収？　それなら、賞品に出さなければ良いじゃないですか」

「そう出来るならしているさ。けどね、この話は教頭が進めたとは言え、文月学園として如月グループと行った正式な契約だ。今更覆す訳には行かないんだよ」

噂は本当みたいだな。『学園長は召喚システムの開発に手一杯で、経営に関しては教頭に一任している』と。まあさっき学園長が“学園の経営に関する事なら、教頭の竹原に言いな”って言った時点で薄々分かっていたが。

「契約する前に気付いて下さいよ。学園長なんだから」

「五月蝿いガキだね。白金の腕輪の開発で手一杯だったんだよ。それに、悪い噂を聞いたのはつい最近だしね」

「だからと言って経営を全部人任せにするのはどうかと思いますよ。学園長がちゃんと監督していれば、そんな事態にならなかったんですから」

「……アンタも随分言うじゃないか」

「事実を言ったまでです」

「……ふんっ」

俺の台詞を言い返さないと言う事は、それなりの責任があるみたいだな。

「それで、悪い噂ってのは何ですか？」

「つまらない内容なんだがね」

と前置きを言って学園長は噂の内容を言い始める。

「如月グループは如月ハイランドに一つのジンクスを作ろうとして

いるのさ。『此処を訪れたカップルは幸せになれる』って言うジンクスをね」

「？　それのどこが悪い噂なんです？　良い話じゃないですか」

「そのジンクスを作る為に、プレミアムチケットを使ってやって来たカップルを結婚までコーディネートするつもりらしい。企業として、多少強引な手段を用いてもね」

最悪だな。それって付き合って間もないカップルでも無理矢理そうさせるって事だろ？　そんな事してカップルが不幸にでもなったら、大変な事になるんじゃないかと思う。

そしてそのジンクスには当然……。

「な、なんだと!?」

坂本が慌てるのであった。

「天城!!　何で優勝賞品の事を俺に教えなかった!?」

「色々あり過ぎて忘れていたんだ。ってかジンクスについては俺は全く知らなかったぞ。それにな坂本、俺が教えたところでアイツをどうにかする術があるのか？」

「くっ!!」

俺の質問に坂本は苦い顔をしている。

「どうしたのさ、雄二。そんなに慌てて」

「慌てるに決まってるだろう！　今ババアが言った事は『プレオープンプレミアムペアチケットでやって来たカップルを如月グループで強引に結婚させる』って事だぞ！？」

「坂本、同じ事を言う必要は無いぞ」

「うん。言い直さなくても分かってるけど」

言い直さなくても良い位に坂本は気が動転しているな。

「そのカップルを出す候補が、我が文月学園って訳さ」

「くそっ。うちの学校は何故か美人揃いだし、試験召喚システムと言う話題性もたっぷりだからな。学生から結婚まで行けばジンクスまで申し分ないし、如月グループが目をつけるのも当然って事か」

悔しげに唇を噛みながらまた俺を睨む坂本。

「ふむ。流石は神童と呼ばれていただけはあるね。頭の回転はまずまずじゃないか」

学園長が坂本の独白に頷いている。思ったんだが学園長は坂本について随分と詳しいな。それに明久もバカと言っただけですぐに分かったし。と言う事は、俺が騒ぎを起こしている明久や坂本を鎮圧している事も知ってるかもしれないな。俺の顔を見た時に何か思い出してた顔をしてたし。

「雄二、取り敢えず落ち着きなよ。如月グループの計画は別にそこまで悪い事でもないし、第一僕等はその話しを知っているんだから、

行かなければ済む話じゃないか」

「いや、そうでもないんだ」

「え？　シュウ、それってどういう事？」

「それはな……」

俺が坂本の方に指を指すと……。

「……絶対にアイツは参加して、優勝を狙ってくる……。行けば結婚、行かなくても『約束を破ったから』と結婚……。俺の……将来は……！」

目が虚ろになって言葉が途切れ途切れになっていた。

「シュウと雄二が言ってたアイツってもしかして……」

「お前の予想している奴だ」

「……それであんなに慌てていたんだね」

「大方、坂本が霧島に『チケットを手に入れたら一緒に行ってやる』って安請け合いをしたんじゃないかと思う」

「かもしれないね。雄二は相変わらずバカな事をしているなぁ」

安心しろ明久、後先考えないで発言するお前も充分バカだから。

「ま、そんな訳で、本人の意思を無視して、うちの可愛い生徒の将

来を決定しようって計画が気に入らないのさ」

さっきから人をガキ共やウスノロって言ってた学園町の言葉とは思えんがな。

「つまり交換条件ってのは……」

「そうさね。『召喚大会の賞品』と交換。それが出来るなら、教室の改修くらいしてやろうじゃないか」

随分と割りに合わない条件だな。優勝しても教室の改修程度とは。

「無論、優勝者から強奪なんて真似はするんじゃないよ。譲ってもらうのも不可だ。私はお前達に召喚大会で優勝しろ、と言ってるんだからね」

と、学園長が釘を刺すかのように言ってきた。明久が良からぬ事をさせない為に言ったのだろう。その証拠に明久が考えを読まれたみたいに苦い顔をしている。

「……僕達が優勝したら、教室の改修と設備の向上を約束してくれるんですね？」

「何を言ってるんだい。やってやるのは教室の改修だけ。設備についてはうちの教育方針だ。変える気はないよ」

だろうな。こんな取引で設備を導入なんてしたら、他のクラスに示しがつかない。まあ設備の向上なんて初めから当てにしてない。

「ただし、清涼祭で得た利益で何とかしようって言うなら話は別だ

よ。特別に今回だけは勝手に設備を変更する事に目を瞑ってやってもいい」

利益に関しては何も言わないか。

「そこを何とかオマケして設備の向上をお願い出来ませんか？　僕等にとっては教室の改修と同じくらい設備の向上も重要なんです」

「それで？」

「もしも喫茶店が上手く行かずに設備の向上が危うかったら、そっちが気になって集中出来ずに僕等も学園長も困った事に……」

「なんだ、それだけかい。ダメだね。そこは譲れないよ」

「でも！　設備の向上を約束してくれたら大会だけに……」

「明久、無駄だ。ババァに譲る気が無いのは明白だ。この取引に応じるしか方法はない」

いつの間にか正気に戻った坂本が明久の肩を叩いている。

明久は悔しそうな顔をして……。

「分かりました。この話、引き受け……」

「待て明久、それを言う前に俺からも言わせてくれ」

「え？」

引き受けようと言おうとした直前に俺が止めた。

「何のつもりだい？　アンタ達が何を言った所で、私は設備の向上なんてさせる気は無いよ」

「でしょうね。と言うか、それについては何も言いません。ですが教室の改修だけは、俺達が大会に勝っても負けてもやって貰いますから」

「アンタは話しを聞いてなかったのかい？　優勝しなければ教室の改修はしないって」

学園長はそれ以外の選択は無いからさっさと取引に応じろと言うように催促してくる。

「そうですか。やってくれないのでしたら、この学園の評判は落ちることになりますね」

「それはどう言う意味だい？」

俺が意味深に言うと学園長は睨みながら問う。明久と坂本も同様に俺を見る。

「学園長は俺達Fクラスにいる姫路瑞希をご存知ですか？」

「勿論だよ。優秀な生徒の名前は覚えているさね。振り分け試験の時は気の毒に思ってはいるが、体調管理も試験の一部だからね。こればっかりはどうしようもないよ」

「その姫路が転校する事になりそうなんですよね」

「何だって？」

「ちょ…ちょっとシュウ！　それは……！」

俺が学園長と話している最中に明久が止めようとするが、坂本が阻止して喋らせないようにしていた。

「姫路が不衛生なＦクラスにいるせいで体調が悪化しているのを知った両親が、別の学校に転校させようと考えているみたいなんですよ」

「……」

「学園長の言う優秀な生徒が転校なんてしたら世間はこう思うんじゃないですか？　“文月学園が実践主義とは言え優秀な生徒を不衛生な教室に入れたのにも拘らず、何も対処しないなんて学園長は一体何を考えているんだろうか？”ってな感じで」

「……」

「もしそんな事になったら、学園の評判は落ちるんじゃないでしょうか？　ただでさえこの学園は世界的に注目されている試験校だから、契約しているスポンサー側も黙ってはいないと思いますよ。下手すれば解約される恐れもあります」

「……」

「それでも学園長は教室の改修はしないと跳ね除けますか？」

俺が喋っている間、学園長は何も言い返さずひたすら黙っていたので、再度聞いてみると……。

「……アンタ、随分と頭が切れるじゃないか。学園長である私にそんな事を言うなんて」

「俺はただ単に姫路が転校した後の事を予想しただけに過ぎません」

と言う俺に学園長は大変苦々しい顔をする。流石の学園長も、学園にちょっとした不祥事が起きるとなると不味いみたいだ。

そう言えば半年前くらいに……。

……

……

《修哉、今の文月学園はとてもデリケートな状態なんだよ》

《どう言う事だ？》

《文月学園は世界的に注目されている最先端技術“試験召喚システム”を導入して、色々なスポンサーに支えられている試験校って事は誰もが知っている》

《ああ。それによって学費が安いから、俺や父さんも凄く助かっているよ》

《そうだね。でも考えてみな。学費が安いのはスポンサーがついているからであって……もし試験召喚システムに異常が発生した

り、不利益な事が起きたらどうなると思う？》

《そりゃあ学園に通っている生徒の両親や契約しているスポンサーが即座に抗議……ってまさか》

《そう。そんな事になったら文月学園の評判はガタ落ちになって、下手したら無くなってしまうんだ》

……

……

ってな事を和人と話していたな。

「それで学園長、返答は？」

さて、果たして学園長はどうするのやら。

「……こりゃとんだ食わせ者がいたさね」

「何か仰いましたか？」

学園長の呟きに俺が聞いてみると……

「何でもないよ。……いいだろう、アンタ達が大会に勝っても負けても教室の改修をしてやろうじゃないか」

と言ってるが、やはり学園の評判が落とされるのを不味いと思っているんだろう。

「……その手があったか。やっぱ天城を連れて来て正解だったな」

坂本は小声で呟きながら俺のやった事を賛同しているみたいだ。

「助かりますよ。これで断ったら、どうしようかとヒヤヒヤしました」

「……あそこまで言われて断ると思っているのかい？」

「どうでしょう。バカなFクラスにいる俺には、あれ以上の考えが全くありません。頭の良い学園長ならすぐに切り返してくるかと思いました」

「……」

「じゃあ大会はどうでもいいって事になるんだ！　だったら店の方に集中して……」

と、明久が嬉しそうな顔をするが……。

「明久、それは無理だと思うぞ。どの道、大会に出て優勝しなければいけないからな」

「え？　どうして？」

すぐに俺が突っ込みを入れると俺に聞いてくる。

「俺が言ったのはあくまで教室の改修だけだ。大会を疎かにして負けてしまったら、喫茶店で得た利益は貰えないからな」

「あ…そうだった」

「そのとおりだ。私が応じたのは改修だけさね。利益に関しては話は別だよ」

明久が首をガクンと下に向けていると、俺の確認の質問をに頷く学園長。

「さて、俺からは以上だ。坂本の方は？」

「俺の方は提案だがな」

坂本が提案を言う為に学園長の顔を見る。

「召喚大会は二対二のタッグマッチ。形式はトーナメント制で、一回戦は数学だと二回戦は化学、と言った具合に進めて行くと聞いている」

勝ち上がる度に教科が変わるのは、一回戦で消耗した点数でそのままやり合うと、試合の派手さに欠けるからだろう。学校の宣伝行事、もしくはスポンサーとの契約するための餌だしな。

「それがどうかしたのかい？」

「対戦表が決まったら、その科目の指定を俺にやらせてもらいたい」

まるで学園長を試しているみたいな感じだな。けど坂本がこんな事を言い出すなんて、何か気になる点があった筈だ。

「ふむ……。いいだろう。点数の水増しとかだったら一蹴していたけど、それくらいなら協力してやろうじゃないか」

「……ありがとうございます」

坂本の目つきがさっきより更に鋭くなったな。と言うか俺も少しばかり疑問に思う。どうして学園長は俺や坂本の話しを承諾しているのかを。

俺の場合は学園の評判に関してだから断る事はしないと思うが、学園長がその気になればどんな手を使ってでも不祥事なんて揉消す筈だ。

次に坂本の提案は選択教科の改竄だが、こんなの普通は認められるものじゃない。にも拘らず学園長はそれを認めた。

ここまで協力すると言う事は、学園長は何が何でも大会に優勝して欲しいみたいだな。恐らく副賞のペアチケットは口実に使われているかもしれない。まあ今考えたところで仕方ない。それよりペアを決めないと。

「坂本、ペアの方はどうするつもりだ？　召喚大会は二人一組で出る事になっているんだが」

「ああ。そっちについては俺と明久が組む。天城は、そうだな……Bクラスの佐伯と組んでくれないか？」

「和人か。でもアイツの事だから、女子とペアを組んでるかもしれないぞ？」

「もしそうなってたら秀吉と組んでくれ」

「秀吉ねぇ。ま、アイツが良かったらの話だが」

と、一応はペアは決まる。俺の場合は予定だけどな。

「さて、そこまで協力するんだ。当然召喚大会で、優勝出来るんだろうね？」

学園長が念を押してくる。この様子から見て、ペアチケットなんてもうどうでもいいような感じだな。

「無論だ。俺達を誰だと思っている？」

不敵な笑みを浮かべて言う坂本。あれは試召戦争の時に見た、やる気全開の表情だ。

「絶対に優勝して見せます。そっちこそ、約束を忘れないように！」

お返しと言わんばかり学園長に念を押す明久。明久も明久でやる気全開で、絶対に優勝しようと意気込んでいる。

「それじゃ、ボウズ共。任せたよ」

「「おうよっ！」」

「はい」

そして俺達は学園長室を出たのであった。

あっ。実行委員長に出し物が決まった報告をまだしてなかった。すぐに行かないと。その後は和人にも会わないとな、

第二十二問

清涼祭アンケート

学園祭の出し物を決める為のアンケートに御協力ください。
『喫茶店を経営する場合、制服はどんなものが良いですか?』

姫路瑞希の答え
『家庭用の可愛いエプロン』

教師のコメント
いかにも学園祭らしいですね。コストもかからないですし、良い考えです。

天城修哉の答え
『上は白のウイングカラーシャツと黒の蝶ネクタイ、下は黒のストレッチパンツ』

教師のコメント
そう言えば天城君の父親が喫茶店を経営していましたね。

土屋康太の答え
『スカートは膝上１５センチ、胸元はエプロンドレスの様に若干の強調をしながらも品を保つ。色は白を基調とした薄い青が望ましい。トレイは輝く銀で照り返しが得られる位のものを用意し、裏にはロゴを入れる。靴は５センチ程度のヒールを……』

教師のコメント
裏面にまでびっしりと書き込まなくても。

吉井明久の答え
『ブラジャー』

教師のコメント
ブレザーの間違いだと信じています。

学園長室を出た俺は明久と坂本と別行動を取り、実行委員長に出し物の報告を終えて、すぐにBクラスへ向かっていた。

「この時間だと和人はもう帰っていそうな気がするが……」

だが会って話したとしても和人がペアを組んでいたら意味が無い。

「ま、いなかったら携帯で連絡すれば良いか……ん？」

Bクラスへ向かっている最中、三階の渡り廊下にて……。

「お願い佐伯君！　私をペアを組んで！」

「ダメよ！　私が佐伯君と組むのよ！」

「アタシとペアを組んで優勝して、一緒に如月ハイランドに……」

「先輩からの頼みだと思ってここは私と……」

『佐伯君！　お願い！！』

「え…え～～っと……」

和人が囲まれている沢山の女子にペアを組んでくれと懇願されていた……その中には三年も含まれている。中心にいる和人は物凄く戸惑っていてどうしようかと悩んでいる。

「……あの様子だと和人はまだペアを決めていないみたいだな。ってか凄い人数だな」

女子の頼みを断らない和人でも、あんなに沢山いる女子のお願いは流石に無理だ。何しろ女子達の今回のお願いはペア決めだから。

いつもは余裕に対応している和人があそこまで戸惑っているのは初めてで新鮮に見えるが、取り敢えず助けておくか。

そして俺が女子に囲まれている和人の方へと向かい……。

「あ～お取り込み中にすまない。和人、ちょっといいか？」

「え？　あ、修哉！」

声を掛けると、和人は良いタイミングで来てくれたと言わんばかりに笑顔で俺の方へ近づいてくる。

「どうしたんだ？　修哉、俺に何か用かい？」

「あ…ああ。和人にちょっと大事な話があってな……」

「大事な話？　此処で話しちゃ不味いこと？」

「いや、それほどでもない……」

俺が言ってる最中に……。

「そうか。大事な話なら仕方ないね。なら別の所で話しをしようじゃないか」

「え？　ちょ…ちょっと待て……」

和人は遮ってすぐに俺の腕を引っ張り別の場所へと行こうとしていた。

その途中に和人は女子達の方へと顔を向けて……。

「ゴメンね皆。ちょっと修哉と話があるから、ペアについてはまた今度ね」

『そ…そんなぁ～』

「それじゃあ、また明日♪」

と言ってすぐに俺を連れてどこかへと連れて行ったのであった。

「ふうっ。助かったよ、修哉」

「お前なぁ。有無を言わさず俺を連れて行こうとするのは無理があり過ぎるぞ」

和人が俺を連れて来たのは屋上だ。

「だからと言ってあのままいたら、女の子達が俺を奪い合う為の醜い争いをする事になっていたからね」

「……俺以外の男子が聞いたら、確実に怒り狂う台詞だな」

コイツが女子にモテている事は以前から知っている事なので、俺は大して気にしていない。Fクラスの男子共が聞いたら和人を絶対に殺そうと躍起になるが。

「まあ今はそんな事どうでもいいか。でだ、和人。単刀直入に言うんだが」

「なんだい？」

「清涼祭のイベントにある試験召喚大会で俺とペアを組んでくれないか？」

すぐに返答は無いだろうと思いながらも、俺が和人に聞いてみたが……。

「いいよ」

「そうか。流石にすぐに……え？」

あっさり了承した事に目が点になった。

「え…えっと……い…今、何て言った？」

「だから、修哉とペアを組むのは構わないって言ってるんだよ」

念の為にもう一度聞いてみたが、和人は何の疑問を抱かずに組んでいいと言っている。

「良いのか？　俺とペアを組んで」

「問題ない。寧ろ俺にとっては好都合な展開だからね」

「そうか、なら……」

宜しくなと言おうとした瞬間……。

「但し、理由を教えてくれないかい？　修哉が召喚大会に出ようとする理由を、ね」

「……」

やはりそう簡単に事を進める事は出来ないみたいだ。

「教えないとダメか？」

「ダメって……親友の俺に理由を話す事が出来ないのか？」

「……そんな心外そうに哀しいな顔をするな。お前分かってやってるだろ？」

「あ、バレた？」

和人は哀しいな顔をしていたが、俺の問うと一変して悪戯がばれたみたいな顔をする。

「ま、教えないってのは冗談だ。それで理由なんだが……」

そして俺が召喚大会を出る理由を話すと……。

「成程。そう言う事か」

和人は納得顔になっていた。

「だから俺は和人にペアを組もうと頼んだって事だ」

「それならお安い御用だよ。俺も可憐な姫路さんが転校するのは嫌だからね」

「……言っておくがな和人。姫路には既に好きな相手がいるぞ」

「知ってるよ。吉井の事が好きなんだろ？」

「何だ。知ってたのか」

釘を刺しておこうと言った俺であったが、和人が知っていた事に少し驚く。

「この間、吉井が姫路さんと仲良く歩いているのを見かけてね。姫路さんがさりげなく吉井にアプローチをしていたけど、当の吉井は全く気付いていない素振りで……」

「だからと言って無粋な真似はするなよ？」

「言われなくても分かってるよ。俺は人の恋愛に口を出す気は無いから」

「そうか」

「まあそれは良いとして……俺が一番気になるのは学園長の方だね」

「と言うと？」

和人がいきなり真面目な顔になって考ったので聞いてみた。

「学園長がどうして一生徒である修哉達に頼んだのかが納得出来ないんだよ。学園長の性格が修哉の言うとおりの人なら、副賞のペアチケット程度でそこまで協力的になるなんてあり得ないからね」

「やっぱり和人もそう思うか」

和人の疑問は俺も同様である。あの学園長の事だから、絶対に何か裏がある筈だ。

「俺が思うに、学園長は別の目的があってペアチケットを口実にしたんじゃないかな」

「それは俺も考えてはいたんだが、そこまでは分からない。どの道、優勝しなければ学園長の真の目的も掴めなし」

「ふむ……ま、今の情報だけじゃ無理だな」

「そう言う事だ。と言う訳で和人、大会は宜しく頼むぞ」

今考えた所で分からないので、取り敢えず今度の大会のパートナーである和人に手を差し出すと……。

「任せな。修哉の足を引っ張らない為に頑張るよ」

「どっちかと言うと俺が足枷になりそうな気がするがな」

和人も手を差し出して俺と握手をした。

そして清涼祭当日の朝。

「いつもはただのバカに見えるけど、坂本の統率力は凄いわね」

「ホント、いつもはただのバカなのにね」

島田と明久、いつも下らんやり取りをしているお前等も充分バカだぞ。

「しかしまあ、あの汚い教室がここまで変わるとはな」

二人に内心突っ込みながら教室の周りを見る。

俺達の教室はいつもの小汚い様相を一新して、中華風の喫茶店に様変わりしていた。

「そうだね。このテーブルなんて、パッと見は本物と区別がつかないよ」

明久がそう言いながら教室内に到る所に設置されている綺麗そうなテーブルを見る。だがこのテーブルは、俺達の教室にあった蜜柑箱なのだ。巧く積み重ねて綺麗なクロスをかけることによって、汚い箱から立派なテーブルに変身したと言う訳である。

「あ、それは木下君が作ってくれたんですよ。どこからか綺麗なクロスを持って来て、こう手際よくテキパキと」

尊敬の眼差しで秀吉を見る姫路。まあ確かに、ここまで見事なテーブルを作るとそうなるな。秀吉の事だから演劇部の小道具を借りて来たんだろう。

「ま、見かけはそれなりの物になったがの。その分、クロスを捲るとこの通りじゃ」

秀吉がクロスを捲ると、その先には積み重ねた蜜柑箱が見えた。

「これを見られたら店の評判はガタ落ちね」

「確かにな」

島田の台詞に俺が頷く。こんなみすぼらしい蜜柑箱を見られてしまったら、イメージダウンは確実だ。

「きっと大丈夫だよ。こんな所まで見ないだろうし、見たとしてもその人の胸の内にしまっておいて貰えるさ」

「そうですね。態々クロスを剥がしてアピールするような人はいませんよ、きっと」

「仮にそんな事をする奴がいたら、営業妨害が目的でやってるとしか思えないからな」

明久と姫路に続いて俺も言葉を繋げる。いたとしても絶対に摘まみ出す。

「室内の装飾も綺麗だし、これなら上手く行くよね？　シュウはどう思う？」

周りを見ながら言う明久であるが、最後の方は俺に聞いてきた。俺の父さんが喫茶店を経営してるから、一緒に手伝っている事のある俺から見てどう思っているのかを聞きたいのだろう。

「大丈夫だと思う。後は俺達の接客と料理でお客が満足してくれるかだ」

「そっか。なら安心だね」

「アキ、どうして天城にそんな事を聞くの？」

「それに天城君も良く分かるような言い方ですね」

安堵する明久に島田と姫路が疑問を抱いて聞いてくる。

「美波と姫路さんは知らないんだったね。シュウのお父さんは喫茶店の店長さんなんだよ」

「へぇ～そうなの？」

「ああ。因みに喫茶店の名前は俺の苗字そのままで“ＡＭＡＧＩ”だ」

「そう言えば、喫茶店“ラ・ペディス”のライバル店だって聞いた事があります」

島田の質問に答えると姫路が思い出したかのように言う。

「父さんにはライバル意識なんて無いけどな。何なら今度来て見るか？　俺の口添えで何割か安くしておくよう父さんに言っておくぞ」

「ケチ臭いわね。タダか半額にしてくれないの？」

「生憎だが俺はそこまでお人好しじゃない」

図々しいにも程がある島田の発言に俺は顔を顰める。そんな事したら父さんに怒られるっての。

と、そんな時……。

「……飲茶も完璧」

「おわっ」

「ん？」

突然、後ろから土屋の声が聞こえると明久が驚き、俺は後ろを向いた。相変わらず土屋は存在感を消すのが巧いな。意識してやってるのか、元からなのかは分からんが、そこまでする必要は無いと思う。

「ムッツリーニ、厨房の方もオーケー？」

「……味見用」

明久の問いに土屋は答えながら、木のお盆を差し出す。その上には陶器のティーセットと胡麻団子が載っていた。

「わぁ……。美味しそう……」

「土屋、これウチ等が食べちゃって良いの？」

「……（コクリ）」

「では、遠慮なく頂こうかの」

「それじゃあ俺も」

姫路、島田、秀吉、そして俺が手を伸ばし、作りたてで温かい胡麻団子を勢いよく頬張る。

「お、美味しいです！」

「本当！　表面はカリカリで中はモチモチで食感も良いし！」

「甘すぎない所も良いのう」

「凄いな土屋。こんな美味い胡麻団子を作るなんて」

父さんからも合格点を貰えるほどの美味しさだ。

「お茶の方は、と……ほう。これも中々」

「お茶も美味しいです。幸せ……」

「本当ね～……」

俺がお茶を美味しく飲んでいると、姫路と島田が目がトロンとしてトリップ状態になっていた。少しばかりオーバーのような気がするが。

「それじゃ、僕も貰おうかな」

「……（コクコク）」

明久も胡麻団子を味見しようとすると、土屋が残った一つを差し出す。

手でつまんで軽く一口を頬張る明久だったが……。

「ふむふむ。表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ。辛すぎる味わいがとっても……んゴバっ」

「あ…明久！？」

あり得ない味の内容を言いながら倒れた事に俺は慌てた。

明久が一瞬で倒れると言えば……ってもしや！

「あ、それは姫路が作った物じゃな」

「おい土屋！！」

秀吉の呟きに俺がすぐに土屋を怒鳴ると……。

「……！（グイグイ！）」

「む、ムッツリーニ！　どうしてそんなに怯えた様子で胡麻団子を僕の口に押し込もうとするの！？　無理だよ！　食べられないよ！」

「土屋！　姫路を止めなかった貴様が責任を持って食え！」

「……！！（ブンブンブン！！！）」

明久に残りの半分の胡麻団子を食わせようとしていたので、俺が土屋に食わせようとした。

土屋はすぐに抵抗をして物凄い勢いで首を横に振っていると……。

「うーっす。戻って来たぞー」

そんな時に坂本が戻って来た。

「あ、雄二。おかえり」

「ん？　何だ、美味そうじゃないか。どれどれ」

坂本は躊躇い無く明久の食べかけの毒物（胡麻団子）を口に運んだ。
知らないとは言え、何の疑いも無く食べるとは……凄いな。

「……大した男じゃ」

「雄二。キミは今、最高に輝いているよ」

「お前を勇者と称えよう」

「？　お前等が何を言っているのかは分からんが……。ふむふむ。
表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ。甘すぎず、辛すぎる味
わいがとっても……んゴバっ」

明久と同じ感想を言いながら倒れる坂本であった。同じ体験をした
明久はデジャブを感じているだろう。

「あー、雄二。とっても美味しかったよね？」

床に倒れ伏した坂本に明久が何か目で訴えていた。おい明久、目が
合っていないんだから伝わってはいないと思うぞ。

「ふっ。何の問題も無い」

あれ？　伝わっていない筈なのに何故か返事をしたな。

「あの川を渡れば良いんだろう？」

ってそれは三途の川だろ！

「ゆ、雄二！　その川はダメだ！　渡ったら戻れなくなっちゃう！」

「起きろ坂本！！」

食べかけの胡麻団子を一口でこんな状態にさせるなんて……何で姫路はここまで恐ろしい毒物を作るんだよ！？　いい加減に本当の事を言って料理止めさせた方が良いんじゃないか！？　ってか何でホールの姫路が作ったんだよ！？

「え？　あれ？　坂本君はどうかしたんですか？」

普通の方の胡麻団子を食ってトリップしていた姫路が漸く元の状態に戻って、こっちの様子に気がついた。

「あ、ホントだ。坂本、大丈夫？」

姫路と同様にトリップしていた島田も気がつく。こんな状況に言える事じゃないが、土屋が作った胡麻団子は喫茶店でかなりの売り上げが期待出来るかもしれないな。

「大丈夫だよ。ちょっと足が攣ったみたいだから。おーい、ゆーじー、おきろー」

取り敢えずと言った感じでおどけた口調で坂本を起こそうとする明久……ただし、手は坂本の胸に手を置いて必死に心臓マッサージをしていたが。

「六万だと？　バカを言え。普通渡し賃は六文と相場は決まって…
…はっ！？」

本当に三途の川を渡りそうな坂本であったが、漸く意識を取り戻した。

安心したぞ坂本。もしお前が死んでしまったら姫路を警察に突き出さなければいけなかったからな。

「雄二、足が攣ったんだよね？」

明久は坂本が余計な事を言わせない為に畳み掛けている。俺としては真実を言って欲しいんだが。

「足が攣った？　バカを言うな！　あれは明らかにあの団子の……」

坂本は倒れた原因である胡麻団子の事を言おうとしたが……。

「……もう一つ食わせるぞ」

「足が攣ったんだ。運動不足だからな」

明久が小声で呟くと、急にコロッと変えた。その直後には明久と坂本が睨み合っている。

「おい姫路、どうして胡麻団子を作ったんだ？　お前はホール担当の筈だが」

「えっと。やっぱり私も手伝った方が良いかと思いまして」

「……大変に喜ばしい親切心だが、勝手な事はするな。ホールだけ専念しろ」

「は…はい」

少し棘を含んだ俺の注意に姫路はシュンとなる。本当だったら二度と料理を作らないでくれと言いたいところだが、言おうとしても明久がすぐに阻止してくるので注意だけで済ませる。

俺と姫路のやり取りを他所に……。

「ふーん、坂本ってよく足が攣るのね」

島田が明久と坂本を見て何か怪しんでいた。

「ほら、雄二って余計な脂肪が付いていないでしょう？　そう言う身体って、筋が攣りやすいんだよ。美波もよく攣るから分かるとぐべぁっ！」

「……俺が手を下すまでも無かったな」

明久が言い訳をしてる最中に余計な事まで言って島田の拳を受けていると、坂本が哀れみの視線を送っていた。今回は明久の自業自得だから俺は何も言わない。

「ところで、雄二は何処に行っておったのじゃ？」

秀吉は話題を変えようと坂本に不在だったの理由を聞く。

「ああ、ちょっと話し合いにな」

「……」

歯切れの悪い坂本の返事に俺は無言となる。

恐らく坂本は学園長室に行って、例の試験科目の指定をしてきたのだろう。とてもフェアな事じゃないから正直には話せず、ああ言って適当に誤魔化したに違いない。

「そうですか～。それはお疲れ様でした」

人を全然疑わない姫路が坂本の言葉を信じて笑みを贈る。本当は姫路の為にやっている事だけどな。

「いやいや、気にするな。それより、喫茶店はいつでも行けるな？」

「バッチリじゃ」

「……お茶と飲茶は完璧」

「土屋、完璧じゃないだろ」

「あ？　どう言う事だ？」

万全だと思っていた坂本が俺の言葉に疑問を抱きながらコッチを見る。

「さっき坂本が食った物が混ざっている可能性があるぞ」

「……ムッツリーニ、開店ギリギリまでに確認しておけ」

「……時間は無いがやっておく」

俺の台詞に坂本は顔を青褪めながら土屋に指示を出し、土屋は一応出来るだけやってみると頷く。

「よし。少しの間、喫茶店は秀吉とムッツリーニに任せる。俺と明久と天城は召喚大会の一回戦を済ませてくるからな」

気を取り直して言う坂本は秀吉と土屋の肩を叩く。

「あれ？　アンタ達も召喚大会に出るの？」

確認するように明久を見る島田。

「え？　あ、うん。色々あってね」

明久は適当に言葉を濁している。学園長が『チケットの裏事情については誰にも話すな』と口止めされているので言えないのだ。だが俺や坂本、そして事情を話した和人にしてみれば別の事情があるだろうと考えている。

「もしかして、賞品が目的とか……？」

島田が探るような視線を明久に刺していると……。

「う～ん、一応そう言う事になるかな」

と言ってはぐらかしている。

チケット以外の賞品には、確か『白金の腕輪』と言う物があったな。アレは噂によると召喚獣を二体同時に呼び出せるタイプと、先生の代わりに立会人になれるタイプがあるとか。俺としては後者の方が欲しいな。そうすればバカ共を成敗する為に態々先生を呼ぶ必要は無いし。

そう言えば学園長は白金の腕輪の開発に忙しいとかどうのこうの言ってたが、それについて何も触れていなかったな。まるで腕輪の事はどうでも言いみたいに……あれ？　どうして腕輪の事について何も言わなかった？　研究者である学園長が腕輪について何かしらの説明をすると思うが……まさか学園長の目的は……。

「……誰と行くつもり？」

「吉井君。私も知りたいです。誰と以降と思っていたんですか？」

「だ、誰と行くって言われても……」

俺が考えている最中に島田と姫路が目を細めて恐ろしい殺気を放っていた。

「おい明久、この状況は何なんだ？」

取り敢えず考える事を中断した俺は、明久に状況の説明を求める事にした。

「そ…それが、僕にもサッパリで……」

いまいち状況が掴めない俺と明久であったが……。

「明久は天城と行くつもりなんだ」

突如、坂本が変な事を言った。コイツは一体何を言ってるんだ？
坂本の言葉に島田が目を丸くしているし。

「え？　天城とペアチケットで、『幸せになりに』行くの……？」

「ちょっと待て島田。何だその可笑しな質問は？」

「やっぱりアキは天城と……」

「島田！！　お前は俺が先日言った事を忘れたのか！？　ってか今度は俺と明久かよ！」

俺の質問を聞いていない島田は、またしても明久と坂本の同性愛疑惑が浮かび上がっていたので、俺が即座に先日の事を思い出させた。

と、俺が島田に突っ込んでいる最中に……。

「天城は何度も断っているんだがな」

坂本の方はまた可笑しな事を言っていた。コイツ、分かってて言ってるな。

「アキ、アンタやっぱり、木下より天城の方が……」

「ちょっと待って！　その『やっぱり』って言葉は凄く引っ掛かる！」

「修哉よ、お主本当に明久と……？」

「待て秀吉！　お前はまた俺に同じ事を言わせるつもりか！？　俺に同性愛趣味は無いぞ！」

島田はともかく、秀吉もかよ！？　ってかそんな寂しそうに俺の裾を掴むな！

「吉井君。男の子なんですから、出来れば女の子に興味を持った方が……」

「それが出来れば明久だって苦労はしてないさ」

「雄二！　尤もらしくそんな事を言わないで！　全然フォローになっていないから！」

「坂本！　貴様仕返しのつもりか！？」

明久と俺の台詞を聞いていないように無視している。お前がそう来るんなら、俺にだって考えがあるぞ。

「っと、そろそろ時間だ。行くぞ明久……って何やってんだ？　天城」

「坂本、今すぐ俺に土下座して謝罪したら、さっきの事は許してやる。ってかさっさとやれ」

「何でだ？　俺は本当の事を……お、おい待て。何で携帯を持っているんだ？」

「謝罪は無しか。なら先日霧島から逃げる為に、ある所へ隠れてい

た事をメールで報告させてもらおう。言うまでも無く、霧島にな」

「すまなかった天城！！　それだけは止めてくれ！！」

俺が送信ボタンを押そうとする瞬間に、坂本が即座に土下座する。

「今度また下らん事を言ったら有無を言わさずにやるからな」

土下座している坂本に、明久はスッキリした顔になっており、姫路、島田、秀吉、土屋は呆然としていた。

第二十三問（前書き）

遅くなりました。それではどうぞ！！

第二十三問

坂本を土下座させ、同性愛説疑惑を浮かんでいる姫路と島田に否定した後に召喚大会の会場へと向かった。

「えー。それでは、試験召喚大会一回戦を始めます」

校庭に作られた特設ステージにて、今回のイベントである試験召喚大会が催される。俺と和人はAブロックで、明久と坂本はDブロックであった。

「全く。バカの坂本と島田はいいとして姫路も完全に染まっているな」

「修哉、愚痴ってないで大会の方に集中してね」

「分かってる」

和人の台詞に俺は愚痴るのを止めて気持ちを切り替えた。

一回戦の立会人は数学の長谷川先生で、勝負科目は数学だ。

「一回戦から俺の苦手科目か……」

「修哉なら大丈夫じゃないの？　点数差があってもそれなりには戦えるんだから」

「差が歴然だったら、話にならんがな」

で、相手は……。

「佐伯君、どうして私じゃなくて、Ｆクラスの男子なんかとペアを組んだのよ」

「私も佐伯君と組みたかった……」

三年の女子ペアだった。

「相手方はお前の事を知ってるみたいだな」

「３－Ｂの安藤結衣（あんどうゆい）先輩に、３－Ｃの山下千穂（やましたちほ）先輩だね。前のデートは楽しかったなぁ～」

「しかもデート済みかよ……」

三年との交流があった事は知っていたが、デートまでする関係だったとは……本当にコイツの女癖の悪さにはホトホト呆れる。ま、今に始まった事じゃないけどな。

「では、召喚して下さい」

「「試獣（サモン）召喚っ！」」

相手の２人が呼び声をあげると、お馴染みである魔方陣が足元に現れて召喚者の姿をデフォルメした召喚獣二体が現れた。

『Cクラス　山下千穂　数学　１３２点
&
Bクラス　安藤結衣　数学　１７８点』

山下と言う人の召喚獣はアラジン衣装を纏って曲刀を持っており、もう一人の方の召喚獣は西洋風の鎧と剣を持っていた。

「それじゃあ今度は俺達も召喚するか」

「そうだね」

「「試獣召喚（サモン）っ！」」

次に現れる俺と和人の召喚獣。

『Fクラス　天城修哉　数学　８７点
&
Bクラス　佐伯和人　数学　３２４点』

「千穂、先ずは先にザコの方を片付けるわよ」

「そうね。その後は二人掛かりで佐伯君を倒した方がいいわね」

先輩二人は俺を完全に雑魚扱いしていた。まあ点数が低いから雑魚と見られるのは仕方ないがな。

「本当に俺って思いっきり戦力外だな」

「そうかな？　その点数でも修哉なら充分勝てると思うけど」

「そう買い被られても困るんだが……」

俺は少し嫌そうな顔をしながら言い返すが、和人は未だに笑みを浮かべている。

「とは言え、その点数はちょっとばかり問題があるね。良かったら今度、俺が教えてあげようか？」

「……教えられても“あの時の事”を思い出してしまうんだがな」

「……ゴメン。俺が悪かった」

船越先生の顔を思い出した俺が少しばかり顔を青褪めていると、和人は俺の肩に手を置いて憐れみの眼差しを送っていた。ついでに俺の会話を聞いていた審判の長谷川先生も、俺を見ながら同情した顔になっている。

「……それでは試合を始めて下さい」

若干間のあった開始宣言を告げると、長谷川先生は俺等から距離を取った。

その直後に……。

「千穂！」

「結衣！」

「「行くわよ！」」

相手の二人は互いに名前で呼び合って頷きながら、俺と和人を挟み込むかのように移動してくる。

「クラスは違えど、息はピッタリだな」

「二人はテニス部でダブルスのペアだからね。息が合うのは当然だよ」

「そんな情報は要らないんだが……」

俺と和人は囲まれているにも拘らずに会話を続けていると……。

「アンタみたいなバカなFクラスはさっさとやられなさい！」

「あたし達の邪魔をした罪は絶対に許さないんだから！」

三年の女子二人は何故か怒りながら召喚獣を操作し、俺の召喚獣に攻撃をやろうとしていた。

「先輩方、これはタッグマッチですよ」

「俺もいる事を忘れないで下さいね」

俺の召喚獣に集中攻撃をやろうとしていた相手側二体召喚獣であったが、山下先輩の方を俺が、安藤先輩は和人が請け負った。

「和人、そっちは任せたぞ」

「了解」

和人が頷いたのを確認した俺は、相手の方へと顔を向ける。

「さて先輩、パートナーが和人と戦っていますので、俺と一対一で勝負してもらいますよ」

「くっ！　アンタみたいな奴は私一人で充分よ！」

そう言った山下先輩は召喚獣を、俺の召喚獣に攻撃を仕掛ける。

ビュッ！　スカッ！　ビュッ！　スカッ！　ビュッ！　スカッ！

「山下先輩、攻撃が単調ですよ？」

「五月蝿いわね！　すぐに終わらせるんだから！」

俺の召喚獣が難なく回避している事に山下先輩はイライラしながらも攻撃を続けている。

ビュッ！　スカッ！　ビュッ！　スカッ！　ビュッ！　スカッ！

「な…何でよ！？　どうして攻撃が当たらないの！？　点数はこっ

ちが上なのに！」

「点数が上だからと言って、絶対に勝てる訳じゃありません。それにそんな攻撃じゃ、俺の召喚獣に当てるのは無理ですよ」

「くっ！　一々癇に障る言い方ね！　Ｆクラスの癖に！」

「癇に障るって……と言うか、先輩方はどうして俺を憎んでいるんですか？　俺はお二人に何もしていませんよ？」

「アンタが佐伯君と組んだからよ！　余計な事をした所為で佐伯君と幸せな一時を過ごせなくなっちゃったんだから！」

「……そんな理由で」

山下先輩の台詞に俺は物凄く呆れながらも召喚獣を操作しており、攻撃を回避していた。

ビュッ！　スカッ！　ビュッ！　スカッ！　ビュッ！　スカッ！

「このっ！　さっさと当たりなさい！」

ダメだこの人。もう完全に逆上している。これ以上続けても同じ攻撃の繰り返しになるから、さっさと終わらせるか。

ビュッ！　スカッ！　シャキンッ！　ザシュッ！　ザシュッ！

『Cクラス　山下千穂　数学　７８点』

「なっ！？」

さっきから攻撃を回避していた俺の召喚獣は、即座に反撃をやって相手の召喚獣にダメージを与えると、山下先輩は驚愕する。

「先輩、後輩である俺が言うのは大変失礼なんですが、もう少し冷静になった方がいいですよ」

「何ですって！？」

「では、これで終わりにさせて頂きます」

シャキンッ！　ザシュッ！　ザシュッ！

『Cクラス　山下千穂　数学　０点』

「はい、終了」

「嘘！？　この私が、Fクラス如きに負けるなんて……！」

相手の召喚獣をあっと言う間に倒した事に、山下先輩は大変に悔しそうな顔をしていた。

「先輩の敗因は、俺をFクラスだからと言って侮った事による油断と慢心です」

「流石だねぇ～修哉。点数差があっても勝つなんて」

「さ…佐伯君!?」

「和人、終わったのか?」

和人が突然、会話に入ってきたので俺と山下先輩は安藤先輩の方を見ると……。

「うう……私は佐伯君を思って言ったのに……」

『Bクラス　安藤結衣　数学　0点』

妙に凹んでおり、召喚獣の方も倒されていたのであった。

「安藤先輩はああ言ってるが、何か遭ったのか?」

「どうして修哉と組んだのかとか、Fクラスとペアを組んだら碌な事が無いって言ってね。流石に少しばかりイラッと来たから瞬殺した♪」

「……あっそう」

相手がしつこかったのか、俺の為に怒ってくれたのかは知らないが、和人は聞いててウンザリしていたから速攻で倒したのだろう。

「勝者、天城・佐伯ペア」

会話をしてると、長谷川先生が勝者の名を告げる。

「ま、取り敢えずは一勝だな」

「そうだね」

そう言いながら俺と和人がステージを下りていると……。

「さ、佐伯君。これだけは聞かせて……」

「どうして私たちとペアを組まなかったの？」

敗者となった安藤先輩と山下先輩が和人に問い掛けた。

「あ～、俺は修哉の頼みで……」

「和人、俺は先に戻っているぞ。二回戦の時に会おう」

「え？　ちょ……修哉！」

振ってくるかのように和人がこっちを見てきたので、俺は即座に離れて教室へ向かう事にした。

「そう言えば明久達の方は……」

ふとDブロックの方を見てみると……。

「そろそろ……いきますかぁっ！」

「え？　わっ！　きゃあっ！」

明久が宣言すると同時に、明久の召喚獣が相手の召喚獣を滅多打ちにしており……。

「ふはははは！　無駄無駄駄無駄ぁっ！」

坂本は悪役らしからぬ台詞を言いながら、メリケンサックを嵌めた坂本の召喚獣が相手の召喚獣をボコボコにしていた。

「……向こうも勝利確定か」

相手がＢクラスだったから、もしかしたら負けるのではないかと危惧していたが取り越し苦労だった。

しかし……。

「だが観客側からすれば非道に見えるだろうな」

状況だけを見れば可憐な女子生徒の召喚獣が、ヤンキーの格好をした明久と坂本の召喚獣に苛められている光景だ。観客や立会人の教師が明久と坂本を白い目で見ている。

「勝負に性別なんて関係ないんだが……と言ったところで周りは納得しないか」

と言うか勝負に男女差別を持ち込むのはどうかと思うが。今の勝負で、もし立場が逆転していたら何も言わないだろうな。女が男を滅

多打ちにしても。

「思えば、この学園の女子ってやたらと強気であると同時に、何かあれば性差別する事があるな。俺から言わせれば見苦しい言い訳にしか聞こえないが」

そんな事を考えながら、俺は会場を出るのであった。

「今戻ったぞ」

「ん？　おお、修哉。お帰りなのじゃ」

俺が教室に戻ると、秀吉が出迎えてくれる。

「どうだ？　店の状況は」

「うむ。それなりに繁盛しておるのじゃ。ムッツリーニの胡麻団子

が好評でのう」

「そうか」

確かに秀吉の言うとおり、土屋の作った胡麻団子は美味かった。客の方を見ると、ウットリした顔になって胡麻団子を頬張っており、少々トリップ状態になっている。

「土屋があんなに料理が上手なら、盗撮なんて止めて、何処かの料理店を経営すれば良いんじゃないかと思うが」

「……俺の本業は撮影だ」

「お前は相変わらず人の背後を取るのが好きみたいだな、土屋」

土屋が何時の間にか俺の背後から現れた事に大して驚かない。ってかもう慣れた。

「まあ良いか。土屋、良かったら俺の喫茶店でバイトしてみないか？　盗撮よりバイトの方が、お前の為になると思うんだが」

さりげなく盗撮阻止と勧誘する俺に土屋は……。

「……今の所バイトは必要ない。それに撮影を止めるつもりは毛頭無い」

「そうか、残念だ」

勧誘を拒否し、撮影も止めないと言ってきた。やはりそう簡単には行かないみたいだ。

「修哉よ、今はそんな事より手伝ってくれんかのう？」

「分かってる。二回戦が始まるまでは時間があるしな」

そう言って俺は教室の奥に入って準備をして、ウェイターをやる事にした。

そう言えば明久と坂本はまだ戻って来ないな。アイツ等もそろそろ試合が終わったと思うんだが。

俺がウェイターをやって三十分位経っても明久と坂本は未だに戻って来なかった。

「ありがとうございました。……おい秀吉、明久と坂本は？」

「まだ来てないのじゃ」

満足したお客の一人が行ったのを確認した後に秀吉に聞いても、入り口近くにいた秀吉が廊下を見ながらいないと言ってくる。

「全く。アイツ等は一体何をやっているんだか……」

「もしや梃子摺っておるのかのう？」

「いや、それはない。俺が見ていた時は明久達の方が優勢で、あの状況では逆転されたとはとても思えなかったから、俺は教室に戻ったんだが」

まあ観客や立会人の教師がブーイングをされていて未だに来れないと言うなら話は別だが。

「じゃとしても、あまりにも遅すぎじゃ。ワシが二人を探した方が良いかもしれんのう」

「そうしてくれ。何時までも戻ってこないんじゃ……」

俺が秀吉に探すのを頼もうとしていると……。

「おい見てみろこの机！　クロス剥がすと蜜柑箱じゃねえか！」

「マジかっ！？　うわ汚ねぇ！　こんなヒデェ机で飯を食えってか！？」

客席の方からデカイ声を出しながらクロスを捲っている二名の客がいた。

「何だ？　あの二人は。見たところ三年だが」

「うむ。ブレザーから見て、三年に間違いないのじゃ」

俺の言葉に秀吉が頷いていると、三年の二人は未だにデカイ声で叫んでいる。

「あり得ねぇな！　こんなきったねぇ机で食わせるなんて！」

「客の事、全然考えていねぇじゃねぇか！」

さっきから叫んでいるのは、若干モヒカン頭らしき髪型と丸坊主の男子生徒二名だ。上級生だと言うのに何を考えているんだろうか。

と、思っている最中に……。

『確かに酷いな……』

『クロスで誤魔化していたのか』

『ちょっと問題があるわね』

他の客がクロスを捲って嫌そうな顔をしていた。

「…あの二人は確実に」

「……営業妨害をしている」

俺が顔を顰めながら舌打ちをして言うと、土屋が言葉を繋げて迷惑そうに二人を見ている。

「だな。俺達の誰かに文句を言えばクレーム処理をすればいいが、態々大声で聞こえるように言ってれば明らかに営業妨害だ」

「どうするのじゃ、修哉？　このままじゃと確実に店がイメージダウンしてしまうのじゃ」

「決まってる。あの二人を即座に追い出す。その後は他の客達に説

明して対処すれば良いからな」

「……天城、追い出すなら俺も手伝う」

土屋はそう言いながらスタンガンを出してくる。コイツは意外と頼もしい所があるな。

「待つのじゃ二人とも。他にも客がおると言うのに荒事を起こしたら更に問題になってしまうのじゃ」

秀吉はさせまいと俺と土屋を阻もうとするが……。

「安心しろ。そんな事をする気は無い。こっちが口で言ってる最中に、向こうが手を出してきたら正当防衛になるからな」

「じゃとしても……」

「取り敢えず秀吉は、明久と坂本を探して連れ戻してくれ。それまで俺が時間を稼いでおくから」

「……分かったのじゃ。なるべく早く連れ戻してくるから穏便に頼むぞい」

俺の説得により明久と坂本を探しに行ったのであった。

「では土屋、お前は姫路の作った胡麻団子を持ってきてくれ」

「……追い出すだけじゃないのか？」

「万が一の為だ。それにあそこまで営業妨害をしておいて、タダで

済ませないからな」

「……了解した」

土屋は了承してすぐに姫路(毒物兵器)が作った胡麻団子を持ってくる為に調理場へと向かい……。

「さて、行くか」

そして俺はさっきから声高に叫んでいる二人の所へと向かう。

「お客様方、そんなに騒がれると他の方にもご迷惑が掛かるのですが」

「ああん!?」

「んだとコラ!」

俺が座っているモヒカン頭と丸坊主の二人に注意すると、心外だと言わんばかりに此方を睨んで立ち上がる。

「客に向かって、その態度はなんだコラ！？」

「そのお客である貴方達に問題があるから、私が来たんですが」

「ふざけんな！　こんな汚ねえ机で飯を食わせようとするテメエ等に問題があるだろうが！」

「汚い机って……ちゃんと掃除はしているから問題はありませんよ」

強気になっている二人は俺に詰め寄りながらもデカイ声で叫んでいる。耳が物凄く響くんだが。

「んな事どうでもいい！　さっさと此処の責任者を呼べ！」

「直接文句を言わなきゃ気が治まらねえからな！」

「でしたら私に言って下さい。責任者の坂本には伝えておきますから」

「テメエじゃ話になんねえよ！」

「ってかテメエ！　俺たちにこんな酷くて汚ねえ所で飯を食わせてタダで済むと思ってんのか！？」

俺だって貴様等みたいな連中をタダでは済ませないんだがな。

「それは大変に申し訳ありませんでした。ですが貴方達のやっている事は他のお客様に迷惑が掛かっておりますので……」

「誰が迷惑だ！」

「俺達は此処にいる客達を代表して抗議してんだぞコラ！」

「ですから、抗議に関しましては私の方で伺いますので……」

「うるせえ！　テメエじゃ話にならねぇって言ってるだろうが！」

バシャッ！

モヒカン頭の奴が水の入ったコップを振って、俺に水をぶっかけて来た。

「さっさと責任者を呼べつってんだろ！」

バシャっ！

丸坊主の方も同様にコップの入った水をぶっかけて来る。

「……」

落ち着け。今コイツ等を殴ったら問題になる。

「何だその顔は？」

「テメエみてえな失礼な従業員はさっさと失せろ！」

調子に乗ってるバカ二人は更に俺を煽ってくる。もう良い。貴様等が低俗極まりない連中だと言うのが良く分かった。

だったら……。

「失礼なのは君たちの方じゃないかい？　いくら客だからと言って限度と言う物があるよ」

「「ああん!?」」

ん？　誰だ……って父さん!?

「全く。さっきから黙って見てれば随分と乱暴な物言いだね。修哉、大丈夫かい？」

「まあ、濡れただけだから大丈夫だけど」

父さんが俺に話しかけてくる。と言うか何で父さんが此処にいる？　店はどうしたんだ？

「そ…そんな事より、どうして……」

「何だテメエ！　俺達はソイツと話してんだ！」

「部外者は引っ込んでろ！」

俺の言葉を遮る二人は父さんに向かって叫ぶ。

「ん？　テメエよく見れば、そこの奴とよく似ているな。ソイツの兄貴か？」

「兄貴なんかに用はねえから失せな」

いや、兄じゃなくて父なんだが。

「……私は修哉の兄じゃないんだが……まあいい。それより君達は何で営業妨害をしているんだい？」

「営業妨害なんてしてねえよ！？　俺達はヒデェ所で飯を食わせる此処の従業員に文句を言ってんだ！」

「こんな所で食わせようとする連中の気が知れねえからな！」

「……」

父さんは二人の言い分を聞いて少し考えている顔をしていると……。

「ああ言ってるけど、どうなんだい？」

今度は俺に問い掛けてきた。

「確かに見た目は汚いと思われますが、ちゃんと掃除はしています。テーブルに関しては誠に申し訳ないのですが、このクラスでは蜜柑箱しか使う事を許されなかったので、ああするしか他に無かったのです」

「ふむ……」

「それにあそこの二人は文月学園の生徒で三年生ですから、ここの設備が悪いという事は既にご存知の筈なんですが……」

「「！！！」」

「成程。それを知っている上で、汚いだの酷いだのと文句を言って来たのか。これは明らかに営業妨害だね」

俺の説明にモヒカン頭と丸坊主は不味いと言うような顔をしており、父さんは二人を見て呆れ顔になっている。

「とても上級生のやる事じゃないね。それに後輩の模範とも言うべき君達がそんな事をするとは……生徒以前に人として問題があるみたいだね。ここは君達の担任の先生に報告した方が良いみたいだ」

「！！！　あ…いや……それは……夏川！　ズラかるぞ！」

「お…おい待て常村！！」

常村と夏川と呼ばれた二人は立場が悪くなった為か、すぐに逃げ出した。

「あ…アイツ等！」

「大丈夫だよ、修哉。あの二人の顔と名前は覚えたから追う必要は無い」

俺が追いかけようとしたが、父さんが俺の肩に手を置いて首を横に振る。

「けど……」

「今はそんな事より、此処にいるお客さんに説明をするんだ」

有無を言わせない父さんの言葉に……。

「……ゴホンッ！　お客様、お見苦しい所を見せてしまい大変に申し訳ありませんでした。ですがこれだけは言わせて下さい。当店の周囲やテーブルは汚いと思われるでしょうが、キチンと掃除をして綺麗にしております。何卒ご容赦下さい」

俺は他の客に向かって頭を下げながら説明をした。

『ま…まあ、そう言われたら……』

『あそこまで言われて、別の店に移ったら罰が当たるよな』

『言われて見れば、そんなに汚くはないな』

『この蜜柑箱も意外に丈夫そうに見えるし』

『それにここの胡麻団子は凄く美味いしな』

客達は店から出ず、居続けてくれたのであった。

「ありがとうございます。それでは、ごゆっくり御過ごし下さい」

再び頭を下げて言い、俺は控え室に戻ると何故か父さんも一緒に付いて来た。別に構わないけど。

「ふうっ。助かったよ、父さん」

控え室に入った俺は一緒に入ってきた父さんに礼を言う。

「な～に。息子のピンチに父親が助けるのは当然じゃないか」

「それは良いんだが……店はどうしたんだ？　今日は休業日じゃなかった筈なんだが」

「臨時休業にしたんだよ。それに学園祭にも来て見たかったしね」

「……経営者がそんなんで良いのかよ」

「他にも理由があるよ。ここには元同級生の西村宗一君や、何時も店に来ている高橋洋子さんに会おうと思ってたから」

「……父さん、もう一回言ってくれるかな？」

今聞き捨てならない台詞を言ったので、俺はもう一度聞こうと確認しようとしたのだが……。

「おい天城、あの状況はどう言う事だ？」

「秀吉が営業妨害されているって聞いて、すっ飛んで来たけど……」

「修哉よ、これは一体どう言う事じゃ？」

「……俺も知りたい」

「それも気になりますけど……」

「何で部外者がココに入ってるのかしら？」

突如戻って来た坂本、明久、秀吉、土屋、姫路、島田が控え室に入ってきた。

「ん？　ああ、お前等か。随分と遅かったな。明久と坂本、一体何をしてたんだ？」

「そんな事より俺たちの質問に答えろ。秀吉から営業妨害されていると聞いたのにも拘らず、どうして店は何とも無い状態になってるんだ？」

「営業妨害した二人組みはどうしたの？」

「どうして部外者を此処に入れてるの？」

俺の質問を跳ね除けた坂本が俺に質問すると、明久と島田も続いてきた。

「そんな一編に質問しないでくれ。順を追って話すから」

「まあまあ、皆さん落ち着いて」

俺が話そうとすると、父さんが明久達を宥めるかのように言ってくる。

「アンタは……よく見ると天城に似ているな。天城の兄貴か？」

「よく言われるけど、残念ながら違うよ。先ず最初に私から自己紹介をしておこうか。私は天城聖也。修哉の父親だよ」

『……は？』

笑みを浮かべながら自己紹介をする父さんに明久達は目が点になった。

まあそうなるのは無理もない。何せ和人も最初は明久達と同じ反応をしていたからな。

「……誰だって、ああなるよな。さてと……」

「何がだい？　と言うか修哉、どうして耳を塞ごうとしているんだい？」

「いいから父さんも早く耳を塞いで」

「？」

未だに分からない顔をしている父さんであったが、俺の言われたとおり耳を塞ぐ。

そして……。

『……えええええ～～～～～！！！！！！？？？？？』

明久達は数秒後に叫び声をデカイ声を出して叫ぶのであった。

第二十四問（前書き）

遅くなりました。今回の話はオリジナル中心となっております。
それではどうぞ！

第二十四問

俺がチンピラ共によって水をかけられた所をタオルで拭いていると……。

「う…嘘だろ？」

「シュウのお父さんって……」

「まさか……修哉の父上殿が……」

「……若過ぎるにも程がある」

「ど…どう見てもお兄さんにしか……見えません……」

「あの見た目で天城の父親……あ…あり得ない……」

叫び声をあげた後の坂本達は信じられない顔になって、父さんをマジマジと見ている。

「嘘も何も私は正真正銘、修哉の父親なんだけどね」

「父さんは童顔だから年相応に見られないからな」

「……悪かったね。どうせ父さんは童顔だよ。一生修哉の兄呼ばわりさ」

「そんな事するから、年相応に見られないんだよ」

父さんが拗ねた顔をしながらプイッと背ける事に突っ込みを入れる。

「まあそんな事はどうでも良い。坂本達、今から説明をするから何時までも父さんを見てないで、こっちを向け」

「酷い修哉。父さんを蔑ろにしてる。すまない香奈枝。私は修哉を真面目にさせる事が出来なく……」

「訳の分からん事を言ってないで、父さんも説明するのを手伝うように」

俺の台詞に坂本達は正気に戻ったかのようにこっちを見てきた。

だが……。

「あ…あの、天城君のお父さん！　お聞きしたい事があります！」

「どうやって若さを保っているんですか!?　教えて下さい！」

「いや……私は別に何もしていないんだけどね……」

姫路と島田が父さんに詰め寄り、変な事を聞こうとしていた。その事に父さんは戸惑っている。

「そこの二人、早く説明に入りたいから先に言っておくが、父さんが若く見えるのは元からだ。俺が物心付いた時からな」

「「……」」

俺が言うと何故か二人は両手と両膝を地面に付く。文字で表すなら

“ＯＴＬ”ってな感じだ。

「と言う事は天城君も天城君のお父さんと同様に何十年経っても今のまま……」

「反則よ。詐欺よ。ウチ等が年老いても天城だけが若いままなんて……」

「……ねえ修哉、この子達はどうしてこんなに落ち込んでいるんだい？」

「知らん。ってかもうソイツ等は暫くほっとく」

ショックを受けている姫路と島田を放っておいて、俺は坂本達に営業妨害での出来事を説明し始める事にした。

「と言う訳だ」

俺が一通りの説明を終えると……。

「成程な」

「信じられないね。生徒の中で一番大人のくせに、一体何を考えているんだろう？」

「それで修哉の父上殿がいる訳じゃな」

「……納得」

坂本は考えるかのように頷き、明久は連中の行動に呆れ、秀吉と土屋は父さんがいる事に納得した。

「因みにどんな奴等だ？」

「分かりやすい特徴をした男子二人で……」

「一人目は常村って言う中肉中背の一般的な体格でソフトモヒカンの髪型をしてて、二人目は１７５センチ位で丸坊主が特徴をした夏川と言う男子だよ。二人の共通点はチンピラと言ったところだね」

坂本の質問に答えてる最中に父さんが言ってきた事で少しばかり顔を顰めるが、敢えて気にしないようにする。

「何とも分かり易い特徴だな。まあ、取り敢えず状況は分かった」

「分かったなら今度はこっちの質問に答えてくれ。坂本と明久は秀吉が来るまで何してたんだ？」

「あ…いや……それは……」

「えっと……」

「……秀吉、この二人は何をやってたんだ？」

坂本と明久は言い辛そうな顔をしていたに何となく予想は付いていたが、代わりに秀吉に聞く事にした。

「それが……何故か殴り合いをしておったのじゃ」

「……お前等、どう言う理由でそんな下らん事をした？」

「雄二が思ったより使えなかったから……」

「何言ってやがる明久！　自分の無能を人の所為にしてんじゃねぇ！！」

「雄二だって人任せにしようとしてたじゃないか！　自分が無能と言ってるも同然だよ！！」

「んだとコラ！！」

「何だと！！」

「ちょ…ちょっと君達、喧嘩は……」

二人が突然殴り合いを始めそうになったのを父さんは止めようとしたが……。

「土屋、例の物は持ってきてるか？」

「……ここに」

「よし。では今から、とある女子が作った胡麻団子を明久と坂本に食べてもらうとしよう」

「「！！！」」

さり気なく死刑宣告をすると、明久と坂本はすぐに中断し……。

「ゴメンなさい！！」

「俺が悪かった！！　頼むからそれだけは勘弁してくれ！！」

即座に俺に謝るのであった。

「流石に再び三途の川は渡りたくないみたいだな」

「修哉、三途の川ってどう言う意味だい？　それにその胡麻団子は……？」

「父さんは気にしなくて良いから」

当事者でない父さんに教える気も、食べさせようなんて気は全く無い。世の中には知らない方が幸せ方って事もあるんだよ。

「取り敢えず明久と坂本が遅かった理由は分かった。あとは姫路と島田なんだが……おい、いつまでショックを受けているんだ？」

姫路と島田の方を見たが、未だに父さんを見てショックを受けているのであった。そこまで引き摺る事なのか？

父さんは父さんで何故か二人を慰めているし。それが余計に二人の心の傷を抉っているのを知らないで。

「……坂本、この二人って一回戦は勝ったのか？」

「あ…ああ。教室へ向かっている最中に会って勝利した事を聞いた」

「そうか。なら二回戦が始まるまでは、此処で店の手伝いが出来るな」

「まあ、そうだが……」

坂本は急に何か考える顔になる。

「どうした？　いきなり考える顔して……」

「天城父子が追い出した連中の事なんだが……」

「あのチンピラ共か……」

坂本の台詞に俺も一緒に考え始める。

奴等の事だから、また妨害をしそうだろうな。ああ言う奴等は絶対に仕返しをしなきゃ気が治まらなさそうな連中だったし。

「万が一の事を考えてテーブルを調達した方がいいかもしれないな」

「そうは言っても、借りれるテーブルなんて何処にも無いぞ。どうするつもりだ？」

坂本の台詞に俺が尋ねると……。

「なに、ちゃんと当てはあるから安心しろ。明久、二回戦までは後どれくらい時間がある？」

そう答えながら明久に時間を確認した。

「えっと……小一時間ってところかな」

「そうか。あまり時間が無いな……。ちゃっちゃと行くか。明久、ついて来い」

明久が腕時計を見ながら言うと、坂本は明久に向かってクイクイと指を動かす。

「ウチ等は手伝わなくて良いの？」

と、何時の間にか復活していた島田が坂本に尋ねた。さっきまで意気消沈してたのに、どうして元に戻っているのかは知らないが。

「お前等は喫茶店でウェイトレスをやっていてくれ。評判を更に上げる為に、笑顔で愛想よく、な」

「はいっ！　頑張りますっ！」

姫路も島田と同様に復活しており頑張ろうと躍起になっていた。本

当にこの二人はどうして元の状態に戻っているんだ？　父さんが何か行ったのか？

「♪～♪」

俺が父さんを見ても、当の本人は顔を逸らして口笛を吹いている。あの様子だと何か可笑しな事を言ったみたいだな。まあ今はそんな事どうでもいいか。

「おい明久。行くぞ」

「あ、うん。でも何処に行くのさ？」

教室を出ようとする坂本に明久が呼び止めると……。

「テーブル調達だ」

悪そうな笑みを浮かべて答えたのであった。

そして坂本と明久はテーブル調達の為に一時教室を出る。しかし俺は後悔した。俺も付いて行けば、先生方に迷惑が掛からなかったと言う事に。

「全く。どうしてアイツ等は後先考えずに、あんなバカな事を仕出かすんだよ……」

「また吉井と坂本が何かやらかしたみたいだね」

特設ステージに向かっている最中、俺のボヤキに一緒にいる和人が言ってくる。

店の手伝いをしている時に明久と坂本が戻り、テーブルを持ってきたのは良かったんだが……理由を聞くと残念な事にソレは盗んできた物だったので喜べなかった。

本当なら二人を説教する予定だったが、召喚大会が始まりそうだったので後回しにして特設ステージへ向かっているのだ。

「坂本を頼ってしまった俺がバカだった……あの無責任野郎は……」

「無責任と言えば修哉も一回戦で勝った時、俺に丸投げしなかったか？　先輩二人を誤魔化すの大変だったんだぞ」

「……」

和人の言葉に俺は言い返すことが出来なかった。

「修哉がいてくれたら、すぐに済んだんだけどねぇ～」

「……それはすまなかった」

程度は違うが俺もあまり坂本の事は言えないな。いくらあの時、あの先輩二人が絡んでくるのは面倒そうだったとは言え、和人にだけ任せるのはいけなかった。次からは気を付けよう。

そう思っている最中、特設ステージに着いた俺と和人は既に到着済みである二回戦の相手を見る。

「まさか天城君が出場していたなんて予想外だったよ」

「やっほ～修哉君♪　ボク達はてっきり出ないかと思ってたよ」

対戦者である久保と愛子がこっちを見て意外そうな顔をしていた。

「それは俺にも言える台詞なんだがな」

「やあ二人とも、久しぶりだね」

和人が割って入って二人に挨拶をすると……。

「まさか佐伯君が天城君と組むとは……」

「さ…佐伯君……」

またまた予想外な事が起きていると言った感じで和人を見る久保に、厄介な相手に当たったと思うように冷や汗を浮かべる愛子。

「聞いたよ工藤さん。君が保健体育でFクラスの土屋に負けたんだって？」

「……よく知ってるね」

「まあね。もし土屋にリベンジする時には俺が保健体育の勉強を教えてあげるよ。言うまでも無く本格的な実技で、ね」

「……」

「和人、会って早々にセクハラは感心しないぞ」

本気で実技を教えそうな雰囲気を出す和人にタジタジな愛子だったので、俺が助け舟を出す事にした。

それにしても常に余裕のある愛子が得意科目である保健体育の誘いに対して何も言わないとは……分かってはいた事だが、やはり和人の言うとおり実体験は一切無くて見栄を張っているだけなんだな。

流石の愛子も性行為体験済みの和人の前では形無しと言うか何と言うか。

「そうだよ佐伯君。天城君の言うとおりセクハラは良くないよ」

「俺はただ勉強を教えてあげようと言っただけなんだけど……」

久保の台詞に心外そうな顔をする和人。久保は和人の事を良く知っているから、目的が勉強じゃない事がお見通しだと分かっているのだ。

「それでは、試験召喚大会二回戦を始めて下さい」

俺達が会話をしている最中に、準備を終えたように言う立会人の先生……あれ？　あの先生は確か平賀達Ｄクラスの担任だったな。

名前は大原（おおはら）先生だったか。英語担当だとは知らなかった。
って今はそんな事はどうでもいい。さっさと召喚獣を出すか。

「「「「試獣（サモン）召喚っ！」」」」

俺達が一斉に召喚獣を出現させると……。

『Ａクラス　久保利光　英語　３９４点
＆
Ａクラス　工藤愛子　英語　２８７点』

流石はＡクラスコンビだ。久保は文系が俺と同様に文系が得意だから点数がかなり高い。それに対して愛子は久保と比べると点数は低いが、それでもＡクラス並だから充分に高い。

『凄い点数だな。流石はＡクラス。圧倒的に高いな』

『今回ばかりは天城でも勝てないだろうな』

『あれだけの点数だと……』

観客側から見ても圧倒的に向こうが勝つだろうと思っているだろうが……

『Ｆクラス　天城修哉　英語　４０４点
　　＆
Ｂクラス　佐伯和人　英語　４１０点』

英語は俺と和人の得意科目だから、こっちも負けてはいない。

「こ…これは！？」

『何ぃ！？』

『嘘だろ！？』

『天城や佐伯の点数がＡクラス以上！？』

立会人の大原先生や観客達はあまりの予想外な出来事に驚愕していると言ったところか。俺だって得意科目はあるからな。

「くっ！　流石は天城君だ……それに佐伯君も」

「英語は天城君の得意科目だからね。けど佐伯君も同様に得意だったのは予想外だよ……」

久保と愛子は揃って苦い顔をしていると……。

「二人とも、悪いが手加減をする気は無いからな」

「全力で挑ませてもらうよ」

俺と和人は真剣な顔になって挑もうとする。

「それはこっちの台詞だ！」

「点数が上だからって絶対に勝てるって思わないほうが良いよ！」

負けじと言い返してくる久保と愛子。

……どうでも良い事なんだが、このやり取りって明らかに立場が逆だよな。普通はＡクラスの久保と愛子が俺達の台詞を言うべきなんだが。物凄く違和感があり過ぎて変な気分だ。

まあいい。取り敢えず始めよう。

「行くぞ和人！」

「おう！」

俺と和人の召喚獣は武器を構えて、久保と愛子の召喚獣に挑もうとする。

「工藤さん、ここは固まって戦ったほうが良い！」

「そうだね。下手に個々で戦ったら負けちゃうし！」

離れないようにして武器を構える久保と愛子の召喚獣は……。

シャキンッ！　ブオンッ！　ガキィィィン！！

俺達の攻撃を防いだのであった。

「成程。個々で戦うのは無理だから、連携で倒そうって考えか」

「立場が逆だったら俺と修哉も同じ事をしているね」

防がれても俺と和人は大して驚かない。それは予想済みだったからな。

そして……。

「工藤さん！」

「うん！　二人とも、お返しだよ！」

「おっと」

「危ない危ない」

向こうの召喚獣が反撃をしてきたので、俺達の召喚獣はすぐにかわして距離を取る。

「どうやら二人は防御に専念するみたいだな」

「その後は反撃をしても一切追撃はしない、か。やり辛いったらありゃしない」

「俺がＡクラス戦で優子と戦った時に使った戦法だな」

倒すのには時間が掛かる戦い方だが、久保と愛子は確実に勝つ方を選んだってところか。

「天城君の戦いはとても勉強になったからね」

「卑怯だと思われるかもしれないけど、使わせてもらうよ」

「別にそんな事は思っていないんだが……」

戦い方を真似る事は決して卑怯じゃない。寧ろ当然の行為だ。

「う～ん。向こうがそう来るとなると下手な攻撃は出来ないな。どうする、修哉？」

「このまま攻撃した所で、こっちの点数が確実に減るのは目に見えてる。けど……」

「けど？」

「あの戦い方は欠点があるんだよ」

「と言うと？」

「それはな……こう言う事だ」

俺は召喚獣にある指示を下す。
それは……。

『Ｆクラス　天城修哉　英語　１０４点』

「「なっ！？」」

俺の点数が消費されると同時に、俺の周囲に１０本の剣が浮かんでいた。その事に久保と愛子が驚く。

前にも言ったが俺の特殊能力は剣を創生し、１本の剣を作る事により３０点消費される。そしてその剣でダメージを与えられると、俺の持ち点とは何の関係無く確実に相手の点数を３０点削る事が出来る物だ。剣の数が多ければ多いほどダメージを与えられる。

「そう言う事か……だったら俺も」

俺の狙いが分かった和人も……

『Ｂクラス　佐伯和人　英語　２１０点』

ジャキッ！

「これで行かせてもらおう」

特殊能力を使って点数を消費して、二挺拳銃を作り出した。

「ね…ねえ久保君。これって不味くない？」

「まさか二人の特殊能力が遠距離攻撃だったとは……これは予想外だ」

焦る表情をする久保と愛子。

「お二人さん、その戦法は確かに時間が掛かって確実に勝てる。だがそれは相手が接近戦の武器だけを持っていたらの話だ」

「遠距離攻撃の武器を持つ俺達には全くの無意味なんだよ」

「それでは……」

「行くぞ！」

俺と和人が召喚獣に攻撃の指示を下し……。

ヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュン！！！

ダアンッ！　ダアンッ！　ダアンッ！　ダアンッ！　ダアンッ！

浮いてる剣と銃弾が一斉に久保と愛子の召喚獣に襲い掛かってきた。

「こ…これは！」

「明らかに反則だよ～～！！！」

召喚獣二体が襲い掛かる剣をかわしても銃弾に当たり、たとえ銃弾をかわしても剣が当たる。

未だに召喚獣の操作に慣れていない久保と愛子には全て避ける事が出来なく当たる一方であり、ハッキリ言って俺達のワンサイドゲームだった。

1分後

『Aクラス　久保利光　英語　0点
&
Aクラス　工藤愛子　英語　0点』

『……』

俺達の一方的な攻撃により久保と愛子の召喚獣は消えたのであった。
その事に観客達は呆然としている。

「こんな事になるなんて……」

「あ～あ。やられちゃった……」

「悪いな二人とも」

「恨むんだったら、二回戦の対戦科目を英語に指定した先生を恨んでくれ」

先生じゃなくて坂本が指定したんだがな。まあ取り敢えず二回戦は勝ちって事で。

「大原先生、終わりましたよ」

「……え…あ、はい。天城君と佐伯君の勝利です！」

これにて三回戦進出ってところか。

「ところでさ、久保達はどうして召喚大会に出たんだ？　二人はこの大会に興味が無いと思っていたんだが」

と、ステージから降りた俺は一緒にいる久保と愛子に出場した理由を聞く。

「ボクは久保君に頼まれて大会に出たんだよ」

「頼まれてって……久保がそんな事を言うなんて珍しいな」

「僕は賞品が欲しい為に出たんだ」

「賞品？　それって腕輪の事か？」

「いや、そっちじゃなくて副賞の方を……」

「「……」」

「あ…あはは……」

久保の理由を知った俺と和人は無言になると、愛子は苦笑している。大方、久保はチケットを入手して明久と一緒に行こうと考えていたのだろう。男同士で行くのは無理だっての。

因みに和人も久保が明久の事を好きなのを知っているから俺と同じ事を考えているに違いない。

「ねえ修哉。久保ってまだ吉井の事が好きなのか？」

「残念ながら……」

「……」

俺にしか聞こえないように小声で言う和人の質問に答えると、何とも言えない顔になる和人であった。

「そ、それじゃあ敗者のボクと久保君は店に戻るから」

「天城君、頼みがある。もし優勝したら……」

「悪いけど却下だ」

「そんな！」

何か言う前に俺が即座に否定すると、ショックを受けた顔になる久保。ってかその先は聞きたくない。

「愛子、悪いがさっさと久保を連れてってくれ」

「う、うん。ほら久保君、行くよ。それと二人とも、時間があったらボク達の店に来てね。メイド喫茶だから」

「……」

そう言って愛子はショックを受けている久保を引き摺って教室に戻って行った。

「はあっ。色々な意味で勝って良かった」

「もし久保が吉井と当たったら変な事になってたかもしれないな……はあっ」

二人が去って行ったのを確認した俺と和人は揃って溜息を吐く。

「それはそうと修哉。工藤さんと名前で呼ぶ関係になっていたんだね」

「ああ、それか。Ａクラス戦が終わった後に名前で呼んでくれって頼まれてな」

「へぇ～」

「もっともソレは優子がお願いした事を愛子が便乗したに過ぎないが……」

「ふ～ん、そう言う事か」

理由を知った和人は妙に納得している顔になる。

と、そんな時……。

「「「「試獣召喚（サモン）っ！」」」」

「ん？　お、和人。アッチを見てみろ」

「……そう言えば根本も参加するって言ってたな」

Dブロックの方から明久と坂本、そしてBクラス代表の根本とCクラス代表の小山がいた。和人はどうでもいいように見ているが。

「根本と小山が出場しているって事は、チケット目当てで出ているのか？」

「多分そうだろうね。けどいくら小物とは言え、吉井と坂本じゃあ少々荷が重いんじゃないかい？」

和人の言葉に点数を見てみると……。

『Bクラス　根本恭二　英語　１９９点
&
Cクラス　小山友香　英語　１６５点』

『Fクラス　坂本雄二　英語　７３点
&
Fクラス　吉井明久　英語　５９点』

明久と坂本では荷が重かった。

「確かに勝つ確立はかなり低いな。けどアイツ等の事だ。恐らくアレを使うだろう」

「アレって……ああ。門外不出の根本恭二写真集『生まれ変わったワタシを見て！』か」

「態々言う必要は無いんだがな」

対戦者側を見ると、坂本が例の本を取り出して相手に見せるようにしている事に根本の表情が固まっていた。

「アレを脅しに使って根本を降参させるか。やり方は卑怯だけど……」

「散々卑怯な手を使った小物には一切同情しないよ。自業自得だ」

「同感だな……って、どうやらアレはCクラス代表の小山に見せるみたいだ」

根本に使うのかと思っていた俺と和人であったが、坂本は小山に写真集を渡していた。それをさせまいとする根本であったが、明久が羽交い締めをしている。本を渡された小山は写真集を開いてマジマジと中身を見ている。

「小山の顔を見る限り、根本にかなり幻滅してるだろうな」

「無理も無いよ。付き合っている彼氏に女装趣味があったなんて知ったら誰だってそうなるよ」

「あの様子じゃ小山は別れようって言いそうな気がしそうだ。あ、小山達が棄権した」

棄権により明久と坂本が勝利し、三回戦進出となった。

そして……。

「小山が根本を見捨てるかのように去ってるな」

「見捨てられた根本は言い訳をしながら付いて行ってるか……見苦しいね」

まあ今まで卑怯な事をしてきた天罰だと思って諦める事だ、根本。
それと同時に相手の弱みに付け込んで陥れた報いでもある。

「さてと、教室に戻って再び店の手伝いをしないと」

「あ、修哉。俺も一緒に行って良いかな？　俺は三回戦まで何もやる事無いから、Fクラスの喫茶店に行こうと思ってたんだけど」

「別に構わないぞ。来てくれた方が俺達としても結構ありがたいからな」

根本達の事をどうでもいいように、俺は喫茶店に戻り、和人も同行

するのであった。

第二十四問（後書き）

遅れた分を取り戻すために、明日か明後日までに更新します。

第二十四．五問（前書き）

今回は閑話話であり、修哉の父親である聖也からの視点です。
それではどうぞ！！

第二十四．五問

「やれやれ、召喚大会がまだ一般公開されないとは……」

修哉と別行動をしている私は学園の中を散策している。

本当だったら召喚大会を見物しようと思っていたけど、修哉が三回戦終了するまでは見に行けないと言われたので、仕方なく他の店を見て回るしかなかった。

「しかしまあ、この学園は極端と言うべきか……新校舎と旧校舎の差がここまで歴然としているとは」

文月学園は実践主義だと言う事は知っている。優秀な生徒が立派な設備で勉強に励み、そうでない生徒は酷い設備に配置されるのは仕方の無い事だ。

だがこれは少しばかり問題があるんじゃないだろうか。Ｆクラスの生徒達がいくら成績が最低だとは言って、不衛生極まりない教室で勉強させるのは些か見過ごせない。

修哉達がいた教室を見て分かったが、アレは一目で見てかなり酷いと思った。

掃除されているとは言え、あそこまで酷いんじゃ誰かの体調が悪化するだろう。体が丈夫な修哉は問題ないけど、他の生徒が不衛生な教室の所為で体調不良になって、その両親が訴えてきたら学園側はどうやって対処するのやら。

そう考えている最中に……。

ドンッ！

誰かとぶつかってしまった。

「す…すいません。大丈夫ですか？」

「いや、問題な……ん？　お前は……」

謝罪をしながら安否を聞くと、相手が私の顔を見て何か思い出したかのように見て来た。

「え？　……あっ！」

ぶつかった相手を見ると何と……。

「宗ちゃんじゃないか！」

「お…お前！　聖也か！？」

私の元同級生の西村宗一君だった。

「いや～久しぶりだねぇ～宗ちゃん。会うのは何年ぶりかな～？」

「まさか聖也が学園に来ていたとは……ん？」

宗一君が急に周りを見て不味そうな表情をしている。どうしたんだ

ろう？

「……聖也、悪いが場所を変えさせて貰うぞ。此処では人目に付く」

「そうかい？　私は別に気にしてはいないんだが……」

「取り敢えず付いて来い」

「まあいいけど……」

私は宗一君の後に続くと、学園の生徒が私達を珍しそうな顔をして見ていた。もしかして宗一君は、生徒の目を気にしてるのかな？

場所は生活指導室に変わる。

「酷いじゃないか、宗ちゃん。時間があったら私の店に来るって言ってたのに全然来ないじゃないか」

私と宗一君は椅子に座って世間話をしていた。

「こっちもこっちで色々と忙しくてな。それと聖也、その呼び方は止めろ」

「良いじゃないか。私と宗ちゃんの仲なんだから」

「学園外なら構わんが、此処では西村先生と呼んでくれ。そんな呼び方をして他の生徒に示しが付かないからな」

「やれやれ。相変わらず真面目だねぇ～宗ちゃんは。だったら宗一君で……」

「それもダメだ」

宗一君はぶっきら棒に言い放つ。ま、そこが宗一君の良い所なんだけどね。

「別に今は宗ちゃんって呼んでも良いじゃないか。この場には私と宗ちゃんしかいないんだから」

「……決して生徒の前では呼ぶなよ」

「分かってるって」

念を押してくる宗一君に私は頷く。

「ところで宗ちゃん、急に話しを帰るんだけどさ。修哉は学園ではどうなんだい？」

「聞くまでも無いだろう。真面目で良識のある行動を持った生徒だ」

「いや～何か照れるなぁ～」

「……聖也を褒めたつもりは無いんだがな」

「私は修哉をちゃんと育てるって誓ったからね……香奈枝の墓前で」

「……そうだったな」

呆れ顔になっていた宗一君は急に真面目顔に切り替わった。

「今だから言えるが、あの時のお前はとても見ていられないほど酷いとしか言えなかった」

「そうだね。香奈枝が亡くなって、私は自暴自棄になりかけていた」

あれは十三年前、香奈枝が急に病気になって死んでしまった。あまりの突然の事に、私は頭が真っ白になった。

「俺が聖也の家に来た時は、お前は息子を放っておいて酒ばかり飲んでいたな」

「自分でも信じられないくらい飲んでいたね……」

葬式が終わって以降、香奈枝が死んだ悲しみに耐えられなかった私は酒で紛らわす日々を過ごしていた。当時、小さかった修哉は「どうしてお母さんはいないの？」って私にいつも問い掛けていた。

「俺に息子自慢をしていたお前が殴ったのを見た時は、とても信じられなかった」

「アレは最悪だったね。どうして私は大事な息子の修哉を殴ってしまったんだと」

酒を飲んでいた私はイライラしてて、挙句には修哉を黙らせる為に殴っていた。今の私にはとても考えられないな。

「余りの出来事に俺が一時的に天城を預かっていた時があったな。当時の天城は小さくて俺の事を覚えてはいなかったが」

「宗ちゃんが修哉を預かっていなければ、私は取り返しの付かない事をやっていたからね」

「だがお前はその後、一人で必死に考えた」

「あの時ほど、どれだけ自問自答して悩み苦しんだ事か……」

宗ちゃんが修哉を一時的に預かり、時間が経つにつれて私は必死に考えていた。自分はこれからどうすればいいか、香奈枝がいない人生をどう過ごせばいいのかと。

「考えている途中で眠っていると、香奈枝に会った夢を見たんだよね」

「俺に話した時は確かこう言ってたな。『貴方、一緒に修哉を育てる事が出来なくてゴメンなさい』と」

「うん。香奈枝も修哉を大切にしていたからね」

その時の私はこう思った。自分は一体何をしているんだ？　私と香奈枝の息子である修哉をちゃんと育てると誓った筈じゃないかと。

「そして私は宗ちゃんの家に行き、修哉を連れて香奈枝の墓前で再び誓った」

「その時の聖也の顔は今でもはっきり覚えているぞ。俺の家に来た時は、酒に溺れていた聖也が別人の様に変わって強い意志を持った顔をしていたな」

「今思えば、アレが新たにスタートした第一歩だったね」

「そうだな。聖也が誓って十三年後、今の天城がいると言う訳だ」

「最初は四苦八苦したよ。香奈枝がやってた家事があんなに大変だったなんてね。まあ今はそれほど大して苦じゃないけど」

仕事が終わった後は家に帰ってきてすぐに炊事に洗濯に掃除、そして修哉の教育。本当に苦労の連続だった。

「お前みたいに仕事と家事を両立できる男は滅多にいないだろうな」

「何だったら私が宗ちゃんに家事を教えてあげようか？」

「生憎だが俺は今忙しくて、とてもそんな時間は無い」

キッパリと断る宗一君に私は少しばかり残念だった。同じ仲間が欲しかったんだけど。

「それにFクラスの担任も受け持っているしな」

「へぇ～。宗ちゃんは修哉のクラスの担任なんだ」

堅物の宗ちゃんが担任になるのは修哉も少しばかり気の毒と言うか……。

「……聖也、今何か失礼な事を考えているだろう」

「何も考えていないよ」

ちっ！　人の考えを読むのは相変わらず得意みたいだ。

「……お前も相変わらず顔に出やすいところがあるぞ」

「はて、何の事やら？」

「今さっき舌打ちをしてただろうが」

「そうだっけ？」

敢えて惚けると、宗一君は呆れ顔になりながら……。

「……どうやら聖也を久しぶりに説教した方が良さそうだな。もしくは補習でも構わないが」

「ちょ！？　そりゃないでしょ！？」

宗一君の説教なんて冗談じゃないよ！

「冗談だ」

「な…何だ。冗談か」

「だが二度目は無いぞ」

「……肝に銘じておきます」

寛大な宗一君に私は頭を下げるのであった。

と、そんな時……。

コンコンッ！

ガチャ！

「西村先生、少しよろしいでしょうか？」

「どうしました、高橋先生？」

「あれ？　高橋さんじゃないですか」

「え……って天城さん！？」

これは偶然か、私の店の常連客である高橋洋子さんが入ってきた。

「ど…どうして貴方が此処に！？」

「どうしてって……私は此処が学園祭だと知って来たんですが」

「何だ聖也、高橋先生を知っているのか？」

「彼女は私の店の常連さんだからね」

高橋さんが戸惑っている中、宗一君は私に問い掛けたから答えると……。

「ほう。高橋先生が聖也の店に……」

「え…あ…そ…それはですね、西村先生……」

意味深な顔をして高橋さんを見ている。どうして高橋さんがあんなに慌てているのかは分からないけど。

「にしても会えて良かったですよ、高橋さん。この後は貴方に会おうと思っていましたから」

「わ…私に！？」

「ええ」

「……」

宗一君は何か考えるかのよう無言になり未だに高橋さんを見続けている。そんな宗一君に私は気にせず立ち上がり、高橋さんに近づこうとする。

「もし時間がありましたら、私と一緒に昼食は如何でしょうか？勿論、私が奢ります。いつも店に来て下さっているお礼として」

「あ…いや…そ…そのう……」

「ん？　どうしました？　お顔が赤いようですが……」

「え…えっと……に…西村先生！　後で御用件を言いますので失礼します！！」

「ちょ…た…高橋さん！？」

高橋さんは宗一君に言ってすぐに去ってしまった。

「……あの様子じゃ高橋先生は聖也に惚れているみたいだな」

「宗ちゃん、何か言ったかい？」

「いや、何でもない。それにしても、まさか高橋先生が聖也の店に来ていたと意外だったな。何時から来てたんだ？」

宗ちゃんは何か話題を変えるかのように話してくる。

「えっと……去年あたりかな？　それ以降は何度も来ているよ」

「ほう、去年からか……だとすれば一目惚れと言ったところか。まさか高橋先生が既に春が訪れていたとは……」

「あのさぁ宗ちゃん。さっきから小声で言ってて聞き取りづらいんだけど。それに今の季節は夏だよ」

「気にするな。それと聖也、もう一つ聞きたいんだが」

「何を？」

「お前は再婚とか考えていないのか？」

「まさか。私は妻の香奈枝を裏切るなんて真似はしないよ。今でも香奈枝を愛しているからね」

何を言うかと思えば。宗一君は私が香奈枝を忘れて他の人と結婚するとでも思っているのかな？　だとしたら心外だ。

「では今後も再婚しようと考える気はないのか？」

「そんな当たり前な事を聞くまでも無いと思うんだけど……」

「……はあっ」

「何でそこで溜息を吐くんだい？」

「何となくな……高橋先生がコイツを攻略するのはかなり時間が掛かるだろうな」

また小声で言ってる宗一君だけど敢えて無視する。聞いた所で教えてくれないからね。

「おっと、俺とした事が少しばかり話し込んでしまったな。聖也、悪いが俺はこの後やる事があるから、ここまでにさせてもらうぞ」

「そっか……残念だ。宗ちゃんとはもっと話したかったんだけど」

「今は清涼祭中だから、そう言う訳には行かないからな」

宗一君はそう言って生活指導室を出ようとすると、私も一緒に出る。

「宗ちゃん、時間があったら私の店に来てくれるかな？」

「時間があったらな。それと聖也、その呼び方は……」

「分かってますよ、西村先生」

「……ならいい。ではまた会おう」

注意される言う前に訂正すると、宗一君は何処かへと行ってしまった。

「さてと、私は再び他の店を散策しますか」

と言って散策しようとする私であった。

第二十四．五問（後書き）

次回は修哉の視点に戻ります。

第二十五問

バカテスト　現代社会

問　以下の問いに答えなさい。

『ＰＫＯとは何か、説明しなさい』

姫路瑞希の答え

『Ｐｅａｃｅ-Ｋｅｅｐｉｎｇ　Ｏｐｅｒｅｔｉｏｎｓ（平和維持活動）の略。国連の勧告のもとに、加盟各国によって行われる平和維持活動のこと』

教師のコメント

そうですね。豆知識ですが、Ｕｎｉｔｅｄ　Ｎａｔｉｏｎｓ　Ｐｅａｃｅｋｅｅｐｉｎｇ　Ｏｐｅｒｅｔｉｏｎｓとも呼ばれたりします。余裕があれば、覚えておくと良いでしょう。

天城修哉の答え

『Ｐｅａｃｅ-Ｋｅｅｐｉｎｇ　Ｏｐｅｒｅｔｉｏｎｓ（平和維持活動）の略。紛争の拡大の防止、休戦・停戦の監視、治安維持、選挙監視などにあたる。俺としては下らん事で暴走するＦクラスのバカ共を監視して欲しい』

教師のコメント

最後の文が天城君の個人的な希望になっていますよ。気持ちは分か

りますが、それでＰＫＯが動いたら他の学校もそうする事になるでしょう。

土屋康太の答え
『Ｐａｎｔｓ　Ｋｏｓｈｉ－ｔｓｕｋｉ　Ｏｐｐａｉの略。世界中のスリーサイズを規定する下着メーカー団体のこと』

教師のコメント
君は世界の平和をなんだと思っているのですか。

吉井明久の答え
『パウエル、金本、岡田の略』

教師のコメント
それはセ界の平和を守る人達です。

「ところでさ、修哉の店って何をやってるんだい？」

「中華喫茶で、名前は『ヨーロピアン』だ」

「……中華喫茶は良いとして、店の題名は突っ込み所が満載だね」

二回戦を終えた俺は喫茶店に戻り、和人が一緒に来ている。そしてFクラスのやっている店と題名を教えると、呆れ顔になる和人。

「まあそこは敢えて突っ込まないでくれ。題名はともかく、料理は結構いけるから。特に胡麻団子は目玉商品だ。そのおかげで客が一杯来ている」

「へぇ～。修哉がそこまで言うって事は美味しいんだね」

「だが気を付けろよ。その胡麻団子の中にはハズレが入っているかもしれないからな」

「……あのさぁ、目玉商品なのに何でハズレがあるの？」

「ハズレの中には姫路が作った物があるからだ。因みに姫路の料理には何故か化学薬品が入っていてな。それを食べたら速攻であの世行きになる程の威力だ」

「……ねぇ修哉、一番に突っ込みたい所があるんだけど」

「悪いがその突っ込みは受け付けない。ほら、着いたぞ」

戻りながら和人と会話をしていると、Fクラスの中華喫茶に到着した。

そこに入ると……。

「あれ？　修哉の言ってた話とは違って、客が全然いないね」

「……これはどう言う事だ？」

何故か客が殆どいないのであった。

「おお、戻ったか修哉。ん？　お主は確か佐伯じゃったか……」

「そ。暇だったから修哉に付いて来たんだ」

「そうか。ならゆっくりしていくのじゃ。修哉よ、試合はどうだったのじゃ？」

「勝った。二回戦の対戦科目が得意の英語だったからな」

「しかも相手はＡクラスの久保と工藤さん相手に、ね」

「何と！　Ａクラスに勝ったのか！　凄いのう。流石は修哉じゃ！」

俺と和人の結果報告に、秀吉は驚いて賞賛するかのように見ている。

ってか、そこまで褒められると照れるんだが。

「ちょっと木下。その言い方だと、まるで修哉だけが戦って勝ったみたいな言い方だね。俺も修哉と一緒に戦ったんだけど」

「あ…す、すまぬ。気を悪くしてしまったかのう？」

「冗談だよ。そんなに気にしてないから」

「それはそうと秀吉。客が全然いないんだが、何か遭ったのか？」

和人と秀吉の会話に割って入り、俺は状況を聞きだそうとする。この客のいなさは余りにも可笑しいからな。

「それがワシにも分からなくてのう」

秀吉が答えている最中に……。

「ただいまー……って、あんまりお客さんがいないなぁ……」

明久が戻って来た。

「お、明久も戻って来たようじゃの」

「無事勝ってきたよ」

「それは何よりじゃ」

秀吉は明久達が勝った事に笑みを浮かべている。

あれ？　秀吉は俺が勝ったって聞いたら凄く褒めていたのに、明久に対しては普通だな。この差は一体何なんだ？　俺と和人がＡクラス相手に勝ったから喜んだと思うんだが、オーバーだった様な……まあ今はそんな事どうでもいいか。

「明久、坂本はどうした？　姿が見えないんだが」

「うん。トイレに寄ってくるってさ」

「そうか」

てっきりまた何処かでブラブラしているかと思ったが、違ったみたいだ。

「それより秀吉、これはどう言う事？　お客さんが全然いないじゃないか」

「…むぅ。さっき修哉にも言ったのじゃが、分からなくてのう。ワシはずっとここにおるが、妙な客はアレ以降来ておらんぞ？」

秀吉が首を傾げる。

「って事は、教室の外で何かが起きているのかな？」

「かもしれんのう」

「恐らく奴等の仕業かもしれないな」

「……あのさぁ三人とも、一体何の話しをしてるんだい？」

俺達が考えている最中、状況が全く分からない和人が聞いてくると……。

『お兄さん、すいませんです』

『いや、気にするな。チビッ子』

『チビッ子じゃなくて葉月（はづき）ですっ』

坂本と小さな女の子らしき声が聞こえてきたので、和人を含む俺達

は出入り口の方を見る。

「雄二が戻って来たようじゃな」

「あ、うん。そうみたいだね」

「どうした、明久？　何か思い出しているような顔をしているが」

「いや、どこかで聞いたことのある声のような、そうでないような……」

「はあ？」

曖昧な明久の返答に俺は分からない顔になる。

『んで、探しているのはどんな奴だ？』

ガラッと音を立てて教室の扉が開き、坂本が入ってきた。話し相手の女の子は小柄の所為か、坂本の後ろにいて姿が見えない。

『お、坂本。妹か？』

『可愛い子だな～。ねえ、五年後にお兄さんと付き合わない？』

『俺は寧ろ、今だからこそ付き合いたいなぁ』

坂本と女の子はあっと言う間にクラスの男子達に囲まれてしまった。と言うかお前等、暇なのは分かるが小さい女の子相手にナンパは止めろ。それと最後の奴、貴様はロリコンか？

『あ、あの、葉月はお兄ちゃんを探しているんですっ』

あの女の子は人探しをしていたのか。にしても坂本の奴、小さい子には意外と面倒見が良くて優しい所があるんだな。

『お兄ちゃん？　名前は何て言うんだ？』

『あぅ……。わからないです』

『？　家族の兄じゃないのか？　それなら、何か特徴は？』

名前が分からない相手でも探そうとする坂本の気遣いが感じられるな。坂本は案外、子供好きかもしれない。

『えっと……バカなお兄ちゃんでした！』

おいおい、それは特徴じゃないんだが。

『そうか。だが……』

坂本はそう答えて囲んでいる男子達を見て……。

『……此処には沢山いるんだが？』

否定出来ない事を言った。確かに此処にはバカが多いからな。

『あ、あの、そうじゃなくて、その……』

『うん？　他に何か特徴があるのか？』

『その……すっごくバカなお兄ちゃんだったんです！』

『『『吉井だな』』』

スマン明久。今回ばかりはフォローする事が出来ない。あ、明久が泣きそうな顔をしているし。

「全く失礼な！　僕に小さな女の子の知り合いなんていないよ！絶対に人違い――――」

「あっ！　バカなお兄ちゃんだっ！」

明久が抗議するように大声で叫ぶと、小さな女の子が見つけたと言わんばかり明久に抱き付いた。

「絶対に人違い、がどうした？」

「どう見ても、その子は明久の事を知っている様にしか見えないが？」

「……人違いだと、いいなぁ……」

坂本と俺の問いに、ばつが悪そうな顔をする明久。こんな状況でも、お前はまだそんな事を言うのか？

「って、君は誰？　見たところ小学生だけど、僕にそんな知り合いはいないよ？」

明久はそう言って、相手の顔を見るために女の子を引き剥がしている。

「え？　お兄ちゃん……。知らないって。ひどい……」

おいおい明久、それがやっとの思いで尋ねて来た女の子に言う台詞か？　明らかにその子はお前の事を知っている顔だぞ。

「バカなお兄ちゃんのバカぁっ！　バカなお兄ちゃんに会いたくて、葉月、一生懸命『バカなお兄ちゃんを知りませんか？』って聞きながら来たのに！」

あ、明久が本格的に泣きそうな顔をしてきた。流石にここはフォローを入れないと。

「あ、あのさあ、葉月ちゃんって言ったかな？　君の発言は明らかに悪口だよ。バカなんて言葉は軽々しく言っちゃいけないってお父さんやお母さんに教えられなかったかな？」

俺が葉月と呼ばれる女の子に注意をしているが……。

「明久――じゃなくて、バカなお兄ちゃんがバカでゴメンな？」

「そうじゃな。バカなお兄ちゃんはバカなんじゃ。許してやってくれんかのう？」

「バカなお兄ちゃんは記憶力に関してはバカだからね。許してあげてね？」

「おいコラ！　坂本！　秀吉！　それと和人！　お前等、揃いも揃ってバカを連呼するんじゃない！！」

「し…シュウ」

明久は救われたかのように俺を見ている。

「いくら本当の事でも多少はフォローしろっての！」

「……しくしくしく」

「……おい天城。お前が止めを刺してるじゃねえか」

「え？　……わ…悪い明久！！」

しまった！　つい本音が出てしまった！

「酷いよシュウ。君までそんな事を言うなんて……」

「すまない。今のは本当に俺が悪かった！」

泣きべそ気味になってる明久に精一杯謝る俺。

「でもでも、バカなお兄ちゃん、葉月と結婚の約束もしたのに――」

女の子のとんでもない発言に……。

「瑞希！」

「美波ちゃん！」

「「殺るわよ！」」

「ごぶぁっ！？」

「ってお前等！　いきなり何をやってる！？」

突如、姫路と島田が現れて早々、明久に攻撃をしてきた。

「な…何なの？　この展開は……」

「姫路に島田か。どうやら勝ったようだな」

戸惑う和人に、落ち着いて言う坂本。

「瑞希、そのまま首を真後ろに捻って。ウチは膝を逆方向曲げるから……って何するのよ天城！」

「こ、こうで……きゃあっ！」

「お前等、戻ってきて早々何をやってるんだ」

バカな事を仕出かそうとする姫路と島田に俺が阻止して、二人の襟首を掴む。

「放しなさい、天城！　ウチ等は今アンタに構ってる暇はないんだから！」

「そうです！　今は吉井君にお仕置きをするんです！」

「お…お仕置きって……」

「そんな事をさせない為に俺がお前等を止めているんだがな……」

ジタバタと暴れる姫路と島田に和人が呆れ顔になっている。と言うか何でコイツ等は、さも当然のように明久にお仕置きをするのかが分からん。ってか姫路、どうやらお前は完全にFクラスの仲間入りになってしまったようだな。残念にも程があるよ。

「ちょっと待って！　結婚の約束なんて、僕は全然――」

「ふぇぇぇんっ！　酷いですっ！　ファーストキスもあげたのにーっ！」

……どうしよう。友達として明久を警察に引き渡した方が良いのか、見守った方が言いのかが分からなくなってきた。子供の発言とは言え、デカイ声で宣言されたら俺にはどうしようも……。

「坂本は包丁を持ってきて！　五本あれば足りると思うわ！　それと天城！　さっさと放しなさい！」

「吉井君！　そんな悪い事をするなんて！　天城君！　早く放して下さい！」

「これから殺人を犯そうとするお前等を放す訳が無いだろうが。で、明久。事と次第によっては、お前を警察に引き渡さなきゃいけないんだが？」

「お願いします！　話しを聞いて下さい！」

暴れる姫路と島田に恐怖しながらも、必死に弁明をしようとする明久。

「仕方ないわね！　二本刺したら聞いて……」

「島田、それ以上ふざけた発言をすると、今すぐ清水美春の所に連れて行く。そうなれば色々な物を無くしただけでなく、大会の方も不戦敗になるぞ？　それでも続けるか？」

「うっ！」

切り札を出すと島田はキッと俺を睨んで来る。

「……この卑怯者！」

「お前にそんな事を言われる筋合いは無い。で、どうする？　無論、姫路の方もな？」

「「……」」

大人しくなった所を見ると、もうバカな真似はしないみたいだな。取り敢えず放してやろう。

「た…助かった……。あのね、美波。言っておくけど包丁は一本でも刺さったら致命傷なんだよ？」

助かった事に安堵する明久は、島田に悟らせるように言う。

そんな時……。

「あ、お姉ちゃん。遊びに来たよっ！」

女の子が大人しくなった島田を見て涙を引っ込めた。ってお姉ちゃ

ん？　もしかしてこの子は島田の妹か？

「ああっ！　あの時のぬいぐるみの子か！」

今度は明久が突然思い出したかのように言ってきた。それと“ぬいぐるみの子”とは何の事だ？

「おい明久、この子と何かあったのか？」

「え……ああ。まあね……」

はぐらかす様に言ってくる明久。何があったかは知らんが、この子と面識があるんだったら会った時点で思い出せよ。

「ぬいぐるみの子じゃないです。葉月ですっ」

女の子（以降は葉月ちゃん）が可愛らしく頬を膨らませる。

「そっか、葉月ちゃんか。久しぶりだね。元気だった？」

「はいですっ！」

「うんうん。それは良かった。それにしても、よく僕の学校が分かったね」

「お兄ちゃん、この学校の制服着てましたから」

そう言いながら葉月ちゃんは明久の制服を引っ張る。

「あれ？　葉月とアキって知り合いなの？」

明久と葉月ちゃんのやり取りを見て島田が首を傾げながら俺と同じ質問をしてきた。

「うん。去年ちょっとね。美波こそ葉月ちゃんのこと知ってるの？」

「知ってるも何も、ウチの妹だもの」

「へ？」

何だ島田の妹か……ってちょっと待て！

「だったら何で葉月ちゃんが入ってきた事に気付かなかったんだよ！」

「うるさいわね！　とてもそんな状況じゃなかったのよ！」

「まあまあ、二人とも……」

俺の突っ込みに島田が言い返すと、和人が間に入って止めると……。

「吉井君はずるいです……。どうして美波ちゃんとは家族ぐるみの付き合いなんですか？　私はまだ両親にも会ってもらってないのに……。もしかして、実はもう『お義兄ちゃん』になってたり……」

「ね…ねえ、修哉。姫路さんって、あんなキャラだった？」

「もう知らん」

姫路がまた可笑しな発言をしていた事に和人が聞いてきたが一蹴し

た。どうやら姫路は末期状態になったな。Fクラスにいたせいで可笑しくなったのは仕方ないけど、早すぎだと思う。

「あ、あの時の綺麗なお姉ちゃん！　ぬいぐるみありがとうでしたっ！」

葉月ちゃんは姫路を見てぺこりとお辞儀をする。とても礼儀正しい子だ。……ん？　葉月ちゃんの台詞からして、姫路の事を知っているような気が……。

「こんにちは、葉月ちゃん。あの子、可愛がってくれてる？」

「はいですっ！　毎日一緒に寝てます！」

おい待て姫路！　お前この子の事を知ってたのか！？

「良かった～。気に入ってくれたんだ」

俺の内心の突っ込みを他所に姫路は葉月ちゃんに向かって嬉しそうに微笑んでいる。

「ちょっと姫路、確認を取らせてくれ。お前、葉月ちゃんとは面識があったんだよな？」

「え…ええ。以前ちょっと……」

「そうか……なら尚の事、お前も明久にお仕置きをする前に葉月ちゃんが入ってきた時点で気づけ！」

「はうっ！　ご…ゴメンなさい！」

「ちょっと天城！　瑞希に怒鳴るんじゃないわよ！」

「喧しい！　元はと言えば姫路と島田が下らん事をしたからだろうが！」

何でお前等は明久を当然のようにお仕置きをするのかが理解できん！

「ところで、この客の少なさはどう言う事だ？」

と、坂本が教室内を見渡しながら言った事に俺はハッと思い出した。

葉月ちゃんの登場と女子二人のバカな行動ですっかり忘れてた。

「そういえば葉月、ここに来る途中で色々な話しを聞いたよ？」

「ん？　どんな話だ？」

坂本が屈んで葉月ちゃんの目線に合わせる。小さい子供相手にはちゃんと気遣うんだな。

「えっとね、中華喫茶は汚いから行かない方がいい、って」

「何だと？」

葉月ちゃんの言葉に俺は顔を顰めながら言う。

室内やクロスについては俺の方で客に説明したから解決した筈なんだが。にも拘らず、葉月ちゃんが言った悪評が流れているとは……

あのチンピラ共の仕業か。

「ふむ……。天城の親父さんが言った連中が妨害しているんだろうが……天城、どう思う？」

「十中八九間違いないと思う」

口元に手を当て、確信しているかのように断言しながら問うと、俺はすぐに答える。

「シュウのお父さんが言ってた連中の妨害って、常夏コンビ？　まさか、そこまで暇じゃないでしょ。シュウの聞いた話じゃ、もうこの店に入れないほどの恥を掻いたんだから……」

常夏コンビって……常村と夏川の頭文字を繋げたのか？　分かりやすくて良いけど。

「あの常夏コンビの事だ。店の妨害だけじゃなく、俺に対する仕返しも含まれているんだろう。ああ言う低俗なバカは仕返しをしなきゃ気がすまないし」

「へぇ～。天城も中々言うじゃないか」

「シュウ……迷惑な客とは言え、一応は先輩だよ？」

「修哉、吉井の言う常夏コンビと何か遭ったのかい？」

俺の辛辣な言葉に坂本は妙に感心しており、明久と妨害に会った事を知らない和人が心配そうに聞いてくる。

「人の話しを聞こうともしない挙句、逆切れして水をぶっ掛けてきたからな。先輩だからと言って、とても敬う気にはなれない」

「ま…まあ、そうだね。けど……」

「修哉相手にそんな事するなんて……よく無事で済んだね、その二人」

明久は納得し、和人は揉め事も無く済んだことに疑問を抱いていた。

「あの時は立場を忘れて木刀使ってシバキ倒そうかと思ったが、父さんが割って入って穏便に済ませんたんだ」

「ああ。それで聖也さんの名前がさっきから出ていたんだね」

「佐伯、お前は天城の親父さんの事を知ってるのか？」

「勿論。修哉とは幼馴染だから、当然会ってるよ」

坂本の質問に当然のように答える和人。

「おい坂本、そんな事どうでもいいだろう？　今は常夏コンビが優先だ」

「おっと、そうだったな。つい話が脱線しちまった。一先ず様子を見に行く必要があるな」

「そうだね。少なくとも、噂が何処から流れて何処まで広がっているのかを確認しないと」

明久はそう言うが、恐らくかなり広まっていると思う。何しろ小さい葉月ちゃんでも聞いたくらいだからな。

と、そんな時……。

「お兄ちゃん、葉月と一緒に遊びにいこっ」

葉月ちゃんが明久の手をギュッと握ってそう言った。その事に明久は少し困った顔をしている。常夏コンビの妨害が無ければ、明久は葉月ちゃんと一緒に遊んでいるだろうが。

「ごめんね、葉月ちゃん。お兄ちゃんはどうしても喫茶店を成功させなきゃいけないから、あんまり一緒に遊べ無いんだ」

「む～。折角会いに来たのに～」

明久が葉月ちゃんの頭を撫でながら断ると、葉月ちゃんは不満気に頬を膨らませた。

姫路の転校を阻止する為には何としても喫茶店を成功させなければいけないが、態々学園に来てまで明久に会いに来た葉月ちゃんを放っておく訳にもいかないな。

「なら、葉月ちゃんも連れて行けば良いんじゃないか？　その子がいれば噂を流した奴の確認も取れるし」

「そうだな。それに飲食店をやってる他のクラスを偵察する必要もあるからな」

俺と坂本がフォローを入れると、渡りに船だと言わんばかりの顔をする明久。

「ん～、そっか。それじゃ、一緒にお昼ご飯でも食べに行く？」

「うんっ」

明久の問いに、先程までの膨れ顔から一転して満面の笑みになる葉月ちゃん。表情がとても豊かだな。この子には天真爛漫と言う言葉が相応しい。

「じゃあ葉月、お姉ちゃんも一緒に行くね」

島田は姉として同行するのだろう。妹に対しては優しい姉なのかもしれないな。

「ふむ。ならば修哉と姫路と雄二も一緒に行くと良いじゃろ。召喚大会もあるじゃろうし、早めに昼を済ませてくると良い」

「助かる、秀吉」

「そうか。悪いな、秀吉」

「いいんですか？　ありがとうございます。木下君」

明久と島田姉妹だけでなく、俺と坂本と姫路も加わる事になった。

それと……。

「和人、お前はどうする？」

「一緒に行くよ。それに俺は修哉のパートナーだから、一緒に昼を済ませたほうが良いからね」

「そうか」

和人も一緒に同行する事となった。

「それでチビッ子、さっきの話はどの辺で聞いたのかを教えてくれるか？」

俺と和人の会話を他所に、坂本は葉月ちゃんに噂が流れた場所を聞いている。

「えっとですね……短いスカートを穿いた綺麗なお姉さんが一杯いるお店――」

「なんだって!?　雄二、それはすぐに向かわないと！」

「そうだな明久！　我がクラスの成功の為に、（低いアングルから）綿密に調査しないとな！」

葉月ちゃんの話を聞いた瞬間に、明久と坂本は下心丸分かりな顔をして全力でダッシュして教室を出た。

「アキ、最低」

「吉井君、酷いです……」

「お兄ちゃんのバカ！」

二人の行動に女性陣は罵倒を飛ばしながら、明久達を追っていった。

「で、和人。どんな店なんだ？」

「どうして俺に聞くんだい？」

「お前なら、女の子関連の店は絶対に知ってるだろうと思って……」

「……多分、Ａクラスのメイド喫茶だと思う」

「ほほ～う。明久はともかく、坂本は自ら霧島のいる所へと向かったか。これは面白い展開になりそうだ」

俺はこれから起こるであろう坂本と霧島のやり取りを思い浮かべていると……。

「けど修哉の方も面白い展開になりそうじゃないかい？」

「何が？」

「木下さんだよ。メイド服を着た木下さんを修哉が見たら、面白い反応をするんじゃないかい？」

「そんな訳ないだろう。優子の事だから、普通に接すると思うぞ」

「だと良いけど」

何故か和人が意味深な笑みを浮かべているのであった。

「修哉よ、姉上の事を名前で呼んでおるのか？」

「ん？　ああ。名前で呼んでくれって優子に言われてな。向こうも

俺を名前で呼んでいるぞ」

「……」

「お互いに名前で呼んで以降は以前より親しくなって……って、どうした秀吉？　妙に不機嫌そうだが」

秀吉の問いに答えている最中に、秀吉が何故か面白く無さそうな顔をしていた事に疑問を持った。

「……何でもないのじゃ」

「？」

そう言って秀吉は控え室に入って行った。

「……なあ和人。秀吉の奴、何か妙に怒ってなかったか？」

「俺にもさっぱり。……もしや木下は修哉の事が……まさかな……」

「何か言ったか？」

「いいや。それより早く行こう。俺達がビリだぞ」

「そうだな」

と言って、俺と和人は教室を出てＡクラスのメイド喫茶へと向かったのであった。

「……修哉が姉上と親しくなった事に、何故か胸がムカムカしたのじゃ。この気分は一体何なのじゃ？」

第二十六問

明久達を追って目的地に着いた俺達であったが……。

「明久、ここは止めよう」

「ここまで来て何を言ってるのさ！　早く中に入るよ！」

「頼む！　ここだけは、Ａクラスだけは勘弁してくれ！」

坂本だけが逃げようとしてた。坂本も明久と同じく後先考えずに突っ走る傾向があるんだよな。

Ａクラスの出し物は和人の言ったとおりメイド喫茶であり、【メイド喫茶　『ご主人様とお呼び！』】と言う名前であった。

「やれやれ、こうも思った通りの展開になると面白くて笑ってしまうな」

「あんなに面白い坂本を見ることになるとは……これは本当に修哉の言ったとおり、面白そうな展開になりそうだね」

「！！　おい天城！　店がＡクラスだと知りながらも黙ってたな！」

俺と和人の会話に坂本がこっちを見て突っ込んできた。

「まさか。知ったのは明久と坂本が突っ走った後、和人に聞いたんだ」

「修哉の言ってる事は本当だぞ、坂本。俺に聞いた時の修哉は全く知らなかったから」

「くっ！」

「それにな、坂本。もし教えて此処に来なくても、向こうから坂本に会いに俺達の店へ来てたと思うぞ。そんな事になって霧島が坂本に結婚の話を持ち出されたら、Ｆクラスの男子共が店なんかどうでもよくなって坂本を殺そうと躍起になってたかもしれないんだぞ？」

「……」

「そうだね～。それは充分にあり得るね」

俺の説明に坂本は何も言い返さなくなり、明久はウンウンと頷いていた。

と、そんな時……。

「そっか。ここって坂本の大好きな霧島さんのいるクラスだもんね」

「坂本君、女の子から逃げ回るなんてダメですよ？」

無言になって抵抗を止めた坂本に女性陣が突っ込みを入れる。

「雄二、これは敵情視察なんだ。決して趣味じゃないんだから――」

「趣味で撮っている奴がそこにいるぞ」

「え？」

「……！！（パシャパシャパシャパシャ！）」

俺が見ている方向に明久も見ると、指が擦り切れんばかりにシャッターを切っている男が一人。

「……ムッツリーニ？」

「……人違い」

厨房責任者の土屋はカメラを片手に否定のポーズを取っている。そんな事したところで、もう土屋だって分かっているんだがな。

「どこからどう見ても土屋でしょうが。アンタ何してるの？」

「……敵情視察」

呆れながら質問する島田に言動が伴っていない事をする土屋。パシャパシャとシャッターを切って女子を撮っている。

「おい土屋、清涼祭中は勝手な写真撮影は禁止だと言ったろうが。さっさと止めろ」

普段は見逃すが、今回の清涼祭で一般客も来ているから撮影はするなと土屋に言ったんだがな。

「……これは敵情視察」

物は言いようだが、やってる事は盗撮に変わり無い。と言うかコイ

ツにこれ以上言った所で止める気配が無いから、さっさと釘を打つか。

「そうか。撮影を止めないなら後で西村先生に土屋を生活指導室へ連行するように頼んでおこう」

「……！！！」

「そのついでに、お前の持っているカメラも回収して中身を消すが……どうする？」

「……分かった。もうやらない」

流石に西村先生が嫌なのか、土屋は撮影を止めてカメラを懐にしまった。

「今回は見逃してやるが、次はないぞ」

「……肝に銘じる」

「ムッツリーニ、ダメじゃないか。盗撮とか、そんな事をしたら撮られている女の子が可哀想だと――」

明久は土屋に注意をしていたが……。

「……一枚百円」

「2ダースもら「土屋と明久、今から生活指導室へ連れてってやろうか？」……すいません。嘘です」

「……今のは無かった事に」

写真を買おうとしてたので、俺がすぐに注意するとすぐに止めた。

「全く。お前等ときたら……」

「吉井、言ってる事とやってる事が矛盾してるぞ。それと土屋、修哉に注意されているのにも拘らず、写真を売ろうとするなよ」

「うう……だって……」

「……そろそろ当番だから戻る」

和人の突っ込みに明久は写真が変えない事に残念がり、土屋は何も言い返さず教室へと去っていった。

「アキ、アンタね……」

「吉井君、もし写真を買ったらどうするつもりだったんですか？」

「え？　あ～…その……」

島田が呆れていると、姫路が質問をすると明久は答えづらそうに困惑する。

「え…えっとね。もちろん処分するに決まってるじゃないか。それよりそろそろお店に入ろう？　もう凄くお腹が減っちゃったよ」

明久、演技だって事はバレバレだっての。

「あ、そうですね。入りましょうか」

おいおい姫路、あんな下手な演技でも信じてしまうのかよ。お人好し過ぎるというか何と言うか。

「うんうん。早く敵情視察も済ませないとね……ムッツリーニの撮った写真見たかったのに……」

「やっぱり見るつもりだったじゃないですかっ！」

「ご、ごめんなひゃい！　くひをひっぱらないで！」

明久の小声が聞こえた姫路は頬を抓り、それと葉月ちゃんも不機嫌顔になりながら明久の腿を抓っていた。自業自得である。

「それじゃ、入るわよ。お邪魔しまーす」

島田が一番手でドアを開けて潜ると……。

「……お帰りなさいませ、お嬢様」

出迎えたのはメイド服を着たＡクラス代表の霧島翔子だった。

「わぁ、綺麗……」

「♪～。これは中々……」

姫路が感嘆の声を漏らし、和人は口笛を吹いて賞賛する。二人がそう言うのも無理もない。それだけ霧島が綺麗だったから。

長い黒髪に白のエプロンドレスがよく映え、黒のストッキングが霧島の脚線美を更に際立たせている。同姓の姫路でも羨む程の麗しさがあった。和人だけでなく、俺や明久も見惚れている。

と言うか坂本は何故こんなに綺麗な霧島から逃げたがるんだろうな。霧島は坂本にベタ惚れだから、アイツがその気になれば好き放題出来ると思うんだが……って下らん考えだったな。自重しなければ。

「それじゃ、僕らも」

「はい。失礼します」

「お姉さん、きれ～！」

「では俺も」

「入らせてもらうよ」

明久が姫路と葉月ちゃんを連れて中に入ろうとし、俺と和人も一緒に入る。すると、霧島が島田の時と同様に……。

「……おかえりなさいませ、ご主人様にお嬢様」

と、出迎えてくれた。

「……チッ」

坂本も渋々入店しすると、霧島は同様に……。

「……おかえりなさいませ。今夜は帰らせません、ダーリン」

ではなく、少しアレンジした出迎えだった。やはり坂本には大胆な事を平然と言うんだな。

「霧島さん、大胆です……！」

「ウチも見習わないとね……」

「あのお姉さん、寝ないで一緒に遊ぶのかな？」

三者三様のリアクションに俺は少し気になる所があった。それは島田だ。明久に対してやろうとでも考えているのか？

「……なあ修哉、島田さんは何で霧島さんを見習おうとしてるのかな？」

「俺が知るか」

和人の質問に分からない感じで言う俺。あんまり確証ないから、すぐには答えられないし。

「お席にご案内します」

霧島が歩き出すと、俺達はその後ろ姿に付いて行く。

「ね、お兄ちゃん。凄いお客さんの数だね～」

葉月ちゃんがくいくいっと明久の袖を引っ張っている。

「今の俺達の喫茶店とは正反対だな」

俺はそう言いながらAクラスの広い教室を見ていると、お客で一杯になっていた。メイド喫茶と言うから男性客が多いかと思いきや、意外と女性客がかなり多い。

「……では、メニューをどうぞ」

霧島がメニュー表を渡してくる……凄いな、このメニュー表。立派に装丁されてるし。と言うか父さんの喫茶店のメニュー表より立派なんじゃないだろうか。最優秀クラスは学園祭でも一切手は抜かないみたいだな。

「霧島、一つ聞いてもいいか？」

「……何でしょう？」

明久達がメニュー表を見ている最中に俺は霧島に質問をするとこっちを見てきた。

「木下の姿が見当たらないが……厨房をやってるのか？」

此処で下手に優子と言ったら、明久と坂本が何か言うかもしれないから敢えて苗字だ。

「……優子は今休憩中でいません。用がありましたら、すぐに連絡して呼び戻しますが」

「いや、別に良いよ。急ぎって訳でもないから。それに……霧島が席を外している間に、ダーリンが逃げ出しそうだからな」

「おい天城！　何で俺を見ながら言ってるんだ！？」

「……お気遣い感謝します」

坂本の突っ込みを無視する霧島と俺であった。

「ウチは『ふわふわシフォンケーキ』で」

「あ、私もそれがいいです」

「葉月も！！」

メニュー表を見た女性陣は揃ってシフォンケーキを頼む。

「僕は『水』で。付け合わせに塩があると嬉しい」

……明久、お前な。

「おい明久、俺が奢ってやる」

「え！？　ホントに！？」

「ああ。頼むから此処に来てまで惨めな注文はしないでくれ」

とても友人として見てられない。それと同時にコイツの食生活を本格的に改めさせなければ不味いと思った。

「えっとね……じゃあさっき注文した『水』は訂正して、『ケーキセット』でドリンクはカフェラテを」

「はあっ……俺は『チョコレートケーキ』を」

「俺も修哉と同じやつを一つ」

明久はケーキセット、俺と和人はチョコレートケーキを頼む。

「んじゃ、俺は――」

「……ご注文を繰り返します」

あれ？　霧島、坂本はまだ注文をしてないが。

「……『ふわふわシフォンケーキ』を三つ、『ケーキセット』を一つ、『チョコレートケーキ』を二つ、『メイドとの婚姻届』が一つ。以上でよろしいですか？」

「全然よろしくねぇぞっ！？」

「おやおや、坂本は大胆不敵だな。婚姻届を使ってメイドの霧島を我が物にしようとは」

「いいなぁ～。霧島さんを独り占めしようだなんて羨まし過ぎるにも程があるよ、坂本」

「天城と佐伯！　テメエら分かってて言ってるだろ！？」

動揺した叫び声をあげる坂本であったが、俺と和人の言葉に再び突っ込みながら叫ぶ。にしても坂本がここまで慌てふためくのは見てて面白いな。明久の方は我関さずと言った感じで楽しんで見ているし。

「別に俺達は……（ニヤニヤ）」

「ああ。単に俺達は坂本が注文した物に驚いて……（ニヤニヤ）」

「揃ってニヤけた顔をしてる時点で分かってるだろうが！！」

「……では食器をご用意致します」

俺達のやり取りを他所に、霧島は女性陣の所にフォーク、明久と俺と和人にもフォーク、坂本の前には実印と朱肉が用意された。

おいおい、霧島は本気でやるつもりなのか？　俺と和人は冗談だと思って坂本をからかったんだが。和人も予想外な出来事に目が点になってるし。

「しょ、翔子！　コレ本当にうちの実印だぞ！　どうやって手に入れたんだ！？」

「……では、メイドとの新婚生活を想像しながらお待ち下さい」

坂本の質問を無視した霧島は、優雅にお辞儀をしてキッチンと思しき方向へと歩いていった。俺としても実印をどうやって手に入れたかを知りたいがな。

「……な…なあ修哉。坂本が言った実印が本物なら、霧島さんは本気で婚姻届を持って来るつもりなのかな？」

「……俺はてっきり霧島は態と坂本をからかったんだと思っていたんだが……」

「これで分かったろ天城！　翔子が本気だって事が！？　戻ってきた時には本物の婚姻届を持ってくるぞ！」

「……念の為に聞くんだが、仮に坂本が婚姻届に印を押したら霧島は市役所に持っていくつもりのか？」

「断言する！　アイツはすぐに持っていく！」

「「おいおい……」」

ハッキリ言う坂本に俺と和人は揃って声を出す。

「……明久。俺はどうしても召喚大会に優勝しないといけないんだ……！」

「あ、うん。それはもちろん僕もそうだけど」

「……天城、佐伯、このまま順調に勝ち進んで準決勝で当たったとしても絶対に負けないからな……！」

「……同情はするが、そこまでして霧島と一緒は嫌なのか？」

「絶対に嫌だ！　何としても逃げ切って自由を手に入れる……！」

姫路の転校阻止する為に召喚大会で優勝する事が本来の目的なのだが、坂本にとっては霧島から開放される自由が一番の目的か。

「……俺から言わせれば、坂本に霧島さんは勿体無さ過ぎる気がするけど……」

和人は完全に呆れ顔になって坂本を見ていた。

「んで、葉月ちゃん。君の言っていた場所ってここで良かった？」

「うんっ。ここで嫌な感じのお兄さん二人がおっきな声でお話ししてたの！」

坂本の事をどうでもいいように思っていた明久は葉月ちゃんに質問をしていると、葉月ちゃんは元気よく頷いていた。

にしても、嫌な感じのお兄さん二人ね。

『おかえりなさいませ、ご主人様』

『おう。二人だ。中央付近の席は空いてるか？』

「ん？」

突然聞き覚えのある下品な声が聞こえたので、そこに目を向けると、営業妨害をしていたチンピラ二人…もとい常夏コンビがいた。

「なあ葉月ちゃん、君が言った嫌な感じのお兄さん二人とはアイツ等の事かい？」

俺が確認を取ると……

「はいですっ！　あの人たちですっ！　さっき大きな声で『中華喫茶は汚い』って言ってたの」

「成程ね」

葉月ちゃんはすぐに答えた。

「明久、坂本、アレが俺と父さんの言った連中だ」

「え？　……うわ、確かに修哉の言ったとおりチンピラみたいだね」

「本当に分かり易い特徴をしている二人だな」

「あんな連中が俺達の先輩だなんて嫌だなぁ～」

常夏コンビの姿を見た明久と坂本、そして一緒に見ている和人は思った事をそのまま言う。特に和人の台詞には物凄く同感であるが。

『それにしても、この喫茶店は綺麗でいいな！』

『そうだな。さっき行った２－Ｆの中華喫茶は酷かったからな！』

『テーブルが腐った箱だったし、虫も湧いていたもんな！』

『おまけに態度の悪いウェイターがいて最悪だったな！　それに何か言う度に水ぶっ掛けてくるし！』

『あんな客の事を全く考えない下品なウェイターがいるんじゃ誰も近寄りたくないもんな！』

人の多い喫茶店の中央で、態々大声を出して叫びあっている常夏コンビ。オマケに最悪で下品なウェイターとは俺の事を言ってるのだろう。と言うか貴様等みたいなチンピラにそんな事言われたくない

んだがな。

「！！　アイツ等……！」

と、そう思っている最中、明久が怒った顔をして殴りこもうとしていたが……。

「待て、明久」

「止めるんだ、吉井」

すぐに坂本と和人が止めた。

「雄二、佐伯君、どうして止めるのさ！　あの連中を早く止めないと！　シュウもあんな事言われて何とも思わないの！？」

「落ち着け。こんなところで殴り倒せば、悪評は更に広まるだけだ。」

「おまけに奴等は修哉に対して酷い罵倒をして貶めるだろうし」

「俺が何とも無い訳無いだろうが」

坂本は鋭く睨み付けており、和人は常夏コンビに侮蔑の視線を送っている。

「そうは言っても、僕はシュウを侮辱するアイツ等を許せないよ！」

「だから、やるなら頭を使えと言う事だ――おーい、翔子ぉー！」

「……なに？」

歯軋りする明久に坂本が宥めるように言ってすぐに霧島を呼んだ瞬間、近くにいたんじゃないかと思われるくらい早く来ていた。ってか凄いな霧島は。素早さは土屋以上かもしれないな。

「あの連中が此処に来たのは初めてか？」

坂本が顎で常夏コンビを示す。すると、霧島は小さく首を横に振る。

「……さっき出て行ってまた入って来た。話の内容も変わらない。ずっと同じような事を言ってる……それに優子も噂の真相を確かめる為に行ってる」

端正な顔を少し歪めている霧島。どうやら霧島達Ａクラスにとっても不愉快な客みたいだな……って待て。最後に言った事が気になるんだが。

「そうか……よし。取り敢えず、メイド服を貸してくれ」

「ちょっと待つんだ、坂本。お前は何を考えている？」

臆面も無く問題発言をする坂本に俺は突っ込みを入れる。コイツには躊躇いや恥じらいって物が無いのか？

「……分かった」

と、霧島は何の疑いも無く返事をする。坂本の考えている事が分かるってか。二人は意外とお似合いじゃないか――っておい！

「き、霧島さん！　こんなところで脱ぎ始めちゃダメですっ！」

「そうよ！　ここにはケダモノが沢山いるのよ！？」

「わぁ～。お姉さん、胸おっきいです～」

何を血迷ったのか、その場で着ているメイド服を脱ごうとした霧島を、姫路と島田が慌てて止めにかかる。こんな公衆の面前で脱ぐだなんて……おい明久と和人！　お前等は何で残念がっているんだよ！

「……雄二が欲しいって言ったから」

姫路と島田によって止められた霧島は不思議そうな顔をしている。これは霧島に対する認識を改めた方が良いかもしれない。何しろ坂本の頼みなら迷いなく実行するからな。危ういにも程がある。

「お、俺がいつお前の着ているメイド服が欲しいと言った！？　予備のヤツがあれば貸してくれって意味だ！」

だったら初めからそう言え！　お前が余計な問題発言をしなければ、こんな事にはならなかったんだぞ！

と言うか坂本の奴、怒鳴りながらそっぽを向いて顔を真っ赤にしているな。何だかんだ言って霧島に対して優しい所があるんじゃないか？

「……今、持って来る」

非常に残念そうな顔をしている霧島が服を着直して去って行くのを見ると少し不味い事になっていた。他の客が俺達のテーブルに注目

の的となっている。これでは常夏コンビに対して制裁を与えられない。

『あの店、出している食い物もヤバいんじゃないか？』

『言えてるな。食中毒でも起こさなければ良いけどな！』

『２－Ｆには気をつけろって事だよな！』

『あそこには酷いウェイターがいるしな！』

『だな。あんなクズウェイターがいちゃ、とてもいられねえしな！』

……クズである貴様等にそんな事言われる筋合いは無い。

「雄二！　なんでもいいから早く連中を！」

「流石に俺も少しばかり頭に来たな。修哉の幼馴染として、これ以上見過ごす訳にも行かなくなってきた」

「良いからもう少し待っていろ。姫路に島田、櫛を持っていないか？」

「？　持っていますけど……」

「ちょっと貸してくれ。他にも身だしなみ用の物があれば全部」

「はぁ……」

姫路が上着のポケットをゴソゴソとあさり小さなポーチを取り出し

た。年頃の女子には必須アイテムってところか。

「悪いな。後で必ず返す」

坂本は姫路のポーチを受け取ると……。

「……雄二、これ」

今度は霧島がメイド服を抱えて戻って来た。

「おう。すまないな」

「……貸し一つ」

「だ、そうだ。明久」

何で明久に振るんだ？

「わかったよ。お礼に今度雄二を一日自由にしていいよ」

「……ありがとう。吉井も天城と同じく良い人」

「ちょっと待て！　どうして俺が！」

坂本を一日自由か。確かに霧島にとっては最高のお礼だな。差し出された坂本の必死の抗議も虚しく、霧島は嬉しそうにその場を離れて行った。

「で、これをどうするの？」

こちらの手元にはポーチとメイド服。コレ等を考えると……もしかして坂本の奴。

「……着るんだ」

恨みがましく明久を見て言う坂本。やはりコイツは明久にメイド服を着せようって言う魂胆だな。

だが……。

「だってさ、姫路さん」

「え？　わ、私が着るんですか？」

明久は勘違いをしており、いきなりの事に目を丸くしている姫路。

「バカを言うな。姫路が着ても攻撃なんて出来ないだろうが」

「それじゃ、美波？　でも、胸が余っちゃうとぶべらぁっ！」

「ツギハ、ホンキデ、ウツ」

俺としては攻撃力の高い島田に着せて常夏コンビを差し向けた方が良いと思うがな。それと明久、いつも言ってるだろうが。余計な一言が多いって。

「島田でもない。それなら面が割れてしまうだろうが」

「……まさか」

明久は漸く気付いたみたいで……。

「着るのはお前だ、明久」

「いやあぁぁぁっ！」

叫び声をあげるのだった。

「僕がこんな物着て似合うわけないじゃないか！　それだったらシュウに……」

「言っておくが、俺の体格じゃそのサイズのメイド服は合わないし、着るつもりも無い。それにお前は以前に、中学の時での学園祭でメイド服を着て……」

「それは言わないで！　思い出したくない過去だから！」

「何だ？　明久は以前にメイド服を来た事があったのか。だったら尚更お前が着ろよ」

「嫌だよ！　あんな恥ずかしい目にはもう遭いたくないんだから！」

よく言うよ。あの時はクラスメイトにメイド服を着れば女子にモテるって唆されて自ら着たくせに。今でも覚えているぞ。

まあ、それはどうでも良いとして坂本の考えは読めた。恐らく明久に女装させて常夏コンビを差し向けて、何かしらの冤罪を被せようとしているんだろう。普段の俺だったら止めているが、あの連中相手にはそんな事をする気は毛頭無い。寧ろやってくれだ。

「やれやれ。我侭を言う奴だな。それなら、あっち向いてホイで決めないか？」

あ、坂本がこう言うって事は、また明久を騙すつもりだな。流石に明久もこの展開は読んでいるみたいで、裏を掻いてやろうと言うような顔をしている。

「よし、その提案受けるよ」

「それなら行くぞ、ジャンケン」

「ポンッ」

明久はパーで坂本はチョキだから、明久の負け。だがこれからが本番だ。

「あっち――」

坂本が勢いよく人差し指を出してきた。あっち向いてホイをやるにしては随分と勢いがあるな。まるで明久の目を刺すかのようだ。

「その手に乗るかっ！」

と言って明久は目を逸らさずに坂本の指をじっと見ていたが……。

「向いて――」

ブスッ

「ぎいやぁぁっ！　目が、目がぁっ！」

坂本は本気で明久の目を刺し、明久は目を抑えてのた打ち回っていた。本当にコイツは俺が何度も言ってるのにも拘らず、明久に外道な事をする奴だ。

「ホイ！　……ふっ。俺の勝ちだな」

「何がお前の勝ちだ！　明らかに明久の目を狙ってやっただろうが！」

「修哉の言うとおりだぞ、坂本。あれはお前の反則負けじゃないか？」

「今回は明久が自分から勝負を受けたんだ。それと勝負に策は付き物だからな」

「だからと言って人の目に当てるな！　もし失明したら、お前責任取れるのか！？」

「問題ない。どうせ明久だからな」

こ…コイツ……明久の不幸を面白そうに見ていやがる……！　和人も完全に呆れ顔になってる。今すぐにぶっ飛ばし……いや、止めておこう。今此処でコイツをぶっ飛ばしたら常夏コンビを制裁する事が出来ない。後で覚えてろよ、坂本。

「あの、吉井君。大丈夫ですか？」

「明久、目は大丈夫か？」

取り敢えず坂本には別の方法で制裁してやろうと決めた俺は姫路と一緒に、倒れている明久を介抱した。姫路は明久にハンカチを差し出している。

「ありがとう、二人とも。まったく、雄二の卑劣さには驚かされるよ」

毎回何度も坂本に騙されているお前も、いい加減簡単に坂本の計略に乗せられるなと言いたいがな。それと明久、ハンカチに目を当てているのは良いが、匂いを嗅いでいるのは俺の気のせいか？

「あ、あはは……。でも、きっと大丈夫ですよ」

「そうだよね。あんな卑怯な勝負は無効――」

「吉井君ならきっと可愛いと思いますっ」

おいおい姫路、そう言う問題じゃないんだが。

「はあっ。吉井、お前一人だけにやらせるのは酷だから、俺も一緒にやってやるよ」

「え？　佐伯君？」

「お…おい和人。いま何て言った？」

明久はキョトンとしており、和人の発言に俺は恐る恐る聞いてみたが……。

「だから、俺も一緒に女装してやるって言ってるんだ。それに俺も

あの連中に色々とやっておきたい事があるからな」

「ほう。佐伯が自分から女装をする事を買って出るとは。良かったな明久、仲間が増えて」

「な！？　ちょ…ちょっと待て和人！　お…お前が女装したら大変な事に……！」

「大丈夫だよ修哉。上手くやるから」

「俺が言ってるのはそう言う意味じゃない！　お前が…お前が女装なんてしたら……！」

この学園にいる女子全員が……！

第二十六問（後書き）

次回は明日か明後日までに更新できたら良いな。

第二十七問（前書き）

今回は長いです。
それではどうぞ！！

第二十七問

清涼祭アンケート

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力下さい。
『喫茶店を経営する場合、ウェイトレスのリーダーはどのように選ぶべきですか？』

【？可愛らしさ　？統率力　？行動力　？その他（　）】

また、その時のリーダー候補も挙げてください。

土屋康太の答え
『【？可愛らしさ】　候補……姫路瑞希＆島田美波』

教師のコメント
甲乙つけがたいといったところでしょうかね。

吉井明久の答え
『【？可愛らしさ】　候補……姫路瑞希　（訂正）　木下秀吉　（訂正）　島田美波』

教師のコメント
用紙についている血痕が気になるところです。

天城修哉の答え
『【?その他（常識人）】　候補……木下優子』

教師のコメント
Aクラスの木下さんを選ぶと言う事は、Fクラスの女子二名は常識人では無いと言う事でしょうか？

坂本雄二の答え
『【?その他（結婚相手）】　候補……霧島翔子』

教師のコメント
どうしてAクラスの霧島さんが、用紙を持ってきてくれたのでしょうか？

「こ、この上ない屈辱だ……！」

「明久、存外似合っておるぞ」

「以前はただメイド服を着ただけだが、今回はメイクしてるから凄く似合っているな」

坂本から連絡を受けて態々やって来た秀吉が、男子トイレで明久の着付けとメイクをたった数分でやってくれた。コレは凄いとしか言いようがない。明久にとっては全然ありがたくないけど。

あれ？　そう言えば和人がまだ来てないな。てっきり秀吉が明久と一緒にメイクをしたかと思ったが。

「秀吉、和人はどうした？」

「佐伯は自分でやると言っておったぞ」

「そうか……はあっ」

俺が溜息を付いたその時……。

「お待たせ、修哉♪」

「ん？　……これはまた」

「「……」」

和人が声を掛けたので俺が振り向くと、そこにはメイド服を着た美しいロングの金髪美人　（？）がいた。その女性　（？）を見た事に明久と秀吉は言葉を失っている。

「随分とまあ……よく似合ってる事で」

「ふふふ♪　そう言って貰えると嬉しいです、ご主人様♪」

「その口調と呼び方は気色悪いから止めろ。普通に話せ、和人」

「今の私を和子（かずこ）とお呼び下さい♪」

「……あっそ」

俺が嫌そうな顔をしていると、明久と秀吉は漸く正気に戻った。

「……ね…ねえシュウ。この人……ホントに佐伯君なの？」

「ど…どう見ても女性にしか見えぬのじゃが……」

女装した和人　（以降は和子）を見て信じられない顔をしている明久と秀吉。二人の気持ちは物凄く分かる。

「残念ながら、コイツは女装した佐伯和人だ。和人、二人にお前だと証明しろ」

「畏まりました。……ってな訳で吉井と木下。俺は正真正銘、佐伯和人だよ。分かってくれたかな？　因みにこの胸は偽物だから（ポン）」

「「……」」

元の口調に戻った和人が自身の膨らんでいる胸を軽く叩くと、再び信じられない顔になる明久と秀吉。

そして一緒に来ていた女性陣は……。

「わぁ～。かっこいいお兄ちゃんがすっごく綺麗なお姉ちゃんにな

ったですっ」

「……何なの、この気持ちは？　女装した佐伯を見た途端に敗北感が……」

「……何かが……女として何か負けた気が……」

葉月ちゃんは物凄く驚嘆しており、島田と姫路は女としてのプライドが粉々に打ち砕かれて消沈していた。やはりああなったか。予想してたとは言え気の毒に。そんな二人に慰めの言葉でも与えたい所だけど、申し訳ないが後回しにさせてもらう。

「さて、それじゃ早速行動に移るか。明久、いつまでも放心してないで早く中へ入って奴等を」

「……え？　あ……そうだね」

明久は正気に戻ってAクラスに入り……。

「じゃあ頼んだぞ和人……じゃなくて和子」

「畏まりましたわ♪」

和子は女の口調で言いながら明久に続いた。

「秀吉、協力感謝する」

「う…うむ。ではワシは喫茶店に戻るぞい。存分に悪党を伸してくるが良い」

「了解……と、その前に秀吉。ちょっと聞きたいんだが」

「何じゃ？」

「優子が俺達の喫茶店に行ったと霧島から聞いたんだが、来ていたか？」

「姉上じゃと？　ワシが知る限り来ていなかったぞ」

「そうか……引き止めて悪かったな。引き続き喫茶店の方を頼む」

「了解じゃ」

そう言って秀吉は喫茶店へと戻って行った。けど優子が来ていなかったとはな……中には入らず状況だけを見たって事か？

ってそれは後で考える事にしよう。今はあの連中の制裁が先決だからな。

「さて、俺も入るとするか」

俺はそう思いながら消沈している島田と姫路を放っておいて、再び２－Ａの教室に入って行った。

「坂本、明久と和人は？」

「え？　あ…ああ。アイツ等ならあそこだ」

２－Ａの教室に入り坂本に声を掛けると若干放心している様子だった。

「どうかしたのか？」

「あ、いや……明久は良いとして、もう一人の奴はホントに佐伯なのか？」

「勿論だ」

「……」

「何だ？　もしかして女装した和人に惚れたか？」

「なっ！？　バカ言うな！　そんな訳ある筈が……」

と、坂本が顔を赤らめて否定した時……。

「……雄二、浮気は許さない」

「って翔子！　お前いつの間に！？」

何やら若干黒いオーラを出している霧島が坂本に制裁をしようとし

ていた。

「霧島、夫婦喧嘩している暇は無いから今は落ち着いてくれ」

「……そんな、夫婦だなんて」

「おい天城！　テメエ何言ってやがる！？」

俺の一言に霧島は照れて、坂本が俺に怒鳴っていると……。

『くたばれぇぇっ！』

『ごばぁぁっ！』

「「！！」」

女装した明久が常夏コンビの坊主頭にバックドロップをかましていたので、俺と坂本はすぐに思考を切り替えた。

「よし。ナイスだ明久」

「だが少しばかり浅かったな」

「大丈夫だ、その後は和人が……」

『キャアァァ！！　こ…この人達！　私の胸を触ってきました！』

俺が言ってる最中に、和子が悲鳴をあげながらソフトモヒカンの方に指をさした。

『なっ！？　ちょ…ちょっと待て！　俺達は何も……！』

『だ…誰か！　この人達は私が抵抗できないのを良い事に、胸を触ってきたばかりか、スカートの中に手を突っ込んで……！』

『おいぃぃっ！！　って違う！　俺達は何もしてない！！　本当だ！』

和子の迫真の演技により此処にいる客達が、常夏コンビに対して軽蔑の眼差しを送っている。

『何て奴等だ！』

『あんな可憐なメイドに白昼堂々とセクハラをするなんて！』

『信じられない！』

『最っ低～』

『女の敵！！』

『アッチ行きなさい！！』

客達　（主に大半が女子）が一斉に常夏コンビを罵倒し始めたので……。

「よし！　坂本、これで奴等をぶちのめす口実が出来た！　行くぞ！」

「おう！」

俺と坂本はすぐに出て……。

「ま…待ってくれ！　バックドロップする為に当ててきたのはそっちだし、そこの金髪の女は急に俺に抱き付いて――ぐぶぁっ！　ごぶっ！」

「こんな公衆の面前で痴漢行為とは、このゲス野郎が！」

「そんな貴様等には俺達が成敗してやる！」

坊主に思いっきり顔面パンチを喰らわせてやった。

「何を見ていたんだ！？　明らかに被害者はこっちだろ！　ってかテメエ、Ｆクラスの天城じゃねぇか！　先輩に向かって何しやがる！？」

「黙れ変態！　アンタ達みたいな痴漢野郎が俺達の先輩だと思うと反吐が出る！」

「天城の言うとおりだ！　テメエ等はたった今、あのウェイトレス二人の胸を揉みしだいていただろうが！　俺達の目は節穴ではないぞ！」

正直節穴なんだが、和子のお陰で今は俺達の方がかなり優勢だ。

「ウェイトレス二人、そっちで倒れている奴は任せたぞ」

「え？　あ、はい。分かりました」

「わ…分かりました」

坂本が明久と和子に任せるように言うと、明久がブラを出して和子が瞬間接着剤を出した。あの二人が何をするのかが気になるが、取り敢えずは目の前のモヒカンの方に集中しないと。

「さて、痴漢行為の取調べの為、ちょっと来てもらおうか」

「坂本、ここは西村先生を呼んで取り調べさせた方が良いと思うぞ」

「それもそうだな。俺達より鉄人の方が効率よく出来るだろうし」

指を鳴らしながらモヒカンに近寄る坂本に俺が一言加えると名案だと言わんばかりに頷く。

「くっ！　行くぞ夏川！」

モヒカンは更に立場が悪くなると思って逃げ出そうとする。

「こ、これ、外れねぇじゃねぇか！　畜生！　覚えてろ変態めっ！」

坊主は明久と和子によって付けられたブラを付けたまま走り去って行った。

「逃がすかっ！　追うぞアキちゃん！」

「了解！　でもその呼び方は勘弁して！」

明久に言った坂本がすぐこっちを見て……。

「天城！　あの二人は俺と明久が追うから、お前は召喚大会を優先しろ！」

「分かった」

後の事を考えていたのか、大会に出るようにと言って明久と一緒に常夏コンビを追いかけて店を出て行った。

「さてと、此処の会計を払った後に大会の方へ行くとするか。それと和人、もう演技は良いから……」

「あ…あの、助けてくれてありがとうございます。よろしかったら、お礼をしたいのですが」

「は？」

和子が俺に向かって顔を赤らめながらお礼を言っていた。

それと同時に……。

（修哉、此処で俺だって事がバレたら不味い。今は俺に合わせて）

（……仕方ないな）

俺にしか聞こえないよう小声で言ってきたので渋々従う事にした。

「礼を言われる程じゃ無い」

「それでも私の気が済みません。ですからどうか……」

「……分かった。それじゃあ君の店に行かせてもらおうか」

「ありがとうございます」

と言って俺の手を握って嬉しそうな顔をする和子に、他の客が俺を羨ましそうに見ている。客達は和子は女装しているBクラスの佐伯和人だって知ったら、どうなるだろうか。男女揃ってショックを受ける事、間違いないと思うけど。

「それじゃ君の店に行く前に会計を済ませるから、入り口の方で待っててくれ」

「はい♪」

和子が頷くと店を出たのを確認した俺は金を払おうとしたが……。

「……お会計は、夏目漱石を一枚か、坂本雄二を一名のどちらかとなります」

「そうか。では坂本雄二を一名で」

「……ありがとうございます」

霧島が嬉しい事を言ってくれたので、俺は明久に目潰しをした坂本を売り飛ばす事にした。坂本を差し出す事で金を払わないで済むなら、こっちとしてはかなり得だからな。それと同時に明久に目潰しをした謝罪代わりにもなるし。

しかし坂本を売ったとは言え、アイツの価値が千円とは安過ぎる気がするけど……まあいいや。取り敢えず今は召喚大会のステージに

向かわないと。

☆

「確認に行ったのは良いけど、肝心の修哉がいなくて聞けなかったわね」

あの客が修哉のいるクラスを罵倒するかの様に言ってたから、休憩がてらに２－Ｆに行ったけど修哉はいなかった。もしかして休憩中なのかな？

「残念だったね優子。愛しの修哉君がいなくて」

「なっ！？　だ…誰が愛しの修哉よ！」

愛子も休憩だったからアタシと一緒に来たんだけど、何か言う度にアタシをからかってくる。アタシと修哉はそんな関係じゃないのに！

「あ…アタシはただ、元クラスメイトとして修哉の素行が本当に悪かったら注意しに行こうと……！」

「もう～素直じゃないんだから。そんなのは口実でホントは修哉君に会いたかったくせに♪」

「そ…そんな訳無いでしょ！」

「あ、そっか。先日、修哉君がどうして優子を抱き締めたのかを問い詰めるんだっけ？」

「～～～～～！」

愛子が先日の事を言うと、アタシは思い出して顔が真っ赤になった。

「愛子！　これ以上おちょくるならアタシにも考えが……！」

「ゴメンゴメン。優子があんまりにも可愛かったからつい……」

「ついじゃないでしょ！　アンタはアタシを何だと思ってるのよ！？」

「アハハハ……あ、修哉君だ」

「愛子、もうそんな手には……！」

「いや。ホントに修哉君いる……え？」

愛子が何か信じられない顔になっていたので、アタシも一緒に見ると……。

「……は？」

メイド服を着た金髪の女が修哉と一緒に歩いていた……それも凄く良い雰囲気で。

「うわぁ～～。修哉君の隣にいる人、すっごい美人～～。一体誰なんだろうね。優子、あの人誰なのか知ってる？」

「……フ…フ…フフフフフフ」

「？　どうしたの、優子。いきなり笑い出して……ヒィッ！！」

「ねえ愛子～。アタシ、今すぐ修哉に会わないといけないんだけど……」

「お…落ち着いて優子！！　もう店に戻らないといけない時間なんだから！　それにその後は代表と一緒に大会もあるし！」

「そんな事どうでもいいわよ……！　アタシはすぐに修哉に……！」

「だ…だからダメだってぇ～～～～！！！！！　誰か！　誰でも良いから暴走寸前の優子を止めて～～！！！」

☆

俺と和人は三回戦をする為に特設ステージに着いたんだが……。

「和人、その格好で出る事は無いと思うんだが」

「しょうがないだろう。着替える時間が無かったんだから」

和人は未だに和子のままであった。

「そうは言うけど、この場にいる全員が困惑してるだろうが」

目の前の対戦者や立会人の元Fクラスの担任である福原先生、そして観客達が和人を見ている。そう言えば三回戦は現代社会で、福原先生は社会担当の先生だったんだよな。

「天城君、パートナーの佐伯君はどうしたんですか？　それにそこの人は誰です？　関係者以外は立ち入り禁止なんですが」

「いや、コイツは……その……」

福原先生が咎める様に言ってくる事に俺は本当の事を言うべきか迷っている。

「ちょっと貴方！　佐伯君を何処に隠したのよ！？」

「そこの女は誰よ！？　アンタの彼女なの！？」

と、今度は対戦者である三年の女子二名が俺に問い詰めるように怒鳴ってきた。因みに和人にゾッコンの先輩二人だ。本当に和人の友好範囲って結構広いんだな。もしかしたら三年だけじゃなく、一年にも手を出しているのかもしれない。

「いや、和人を隠していないし、コイツは俺の彼女じゃありませんよ」

「じゃあ一体誰なの！？」

流石に和人がいない事に痺れを切らしているな。仕方ない。此処は決心してバラす事にしよう。

「このメイド服を着ている奴は女装した和人だ」

「今日は、三島（みしま）先輩、八重原（やえはら）先輩♪　修哉の言うとおり、私は佐伯和人です。ですが今は和子って呼んで下さい♪」

「「……は？」」

「……え？」

『……はい？』

俺が和人だと言い、和人が名乗りながら言うと先輩二人と福原先生、そして観客達の動きが止まった。

「はあっ……やっぱりこうなったか」

「先輩達や先生は意外と私だって事が分からなかったみたいですね♪」

「お前な。もう正体がバレたんだから、いい加減にその口調は止めたらどうだ？」

「この格好で元の口調で話したら凄く違和感があると思って♪」

「その口調と仕草だけでも十分に違和感があり過ぎるから」

口調や仕草が可憐な乙女だと思わせるようにしている和人に俺はすぐに突っ込みを入れると……。

「……うそ……あれが……佐伯君……？」

「……何で……どうして……信じられない……」

対戦者の先輩二人が意気消沈して両膝を床に付けていた。

「あ～。流石に先輩達もショックを受けちゃったかな？　俺が女装した事に」

「いや、あれは別の意味でショックを受けているぞ。それと他の面々も」

「え？」

俺の発言に和人が素っ頓狂な声を出していると……。

『……うそ、あんな綺麗な人が佐伯君……？』

『女装した佐伯君を見ると……何か……何かが負けた……』

『なにか……私達とは別次元に……』

『私……私……男の佐伯君に……負けた』

『何で……何で……あそこまで綺麗で……可憐なの？』

『あたし……女として生きていられなくなって来ちゃった……』

『何かもう……女のプライドが粉々になった気分……』

観客達　（全て女子）も完全に敗者の顔になっていた。

「……ねえ修哉。俺って何か悪い事をしたのかな？」

「別に何もしてはいない。敢えて言うなら、お前は女子のプライドを打ち砕いた。それも粉々にな」

「……どうして？」

「どうしてって……お前な」

訳の分からない顔になっている和人に俺は物凄く呆れた。

過去の話しになるが、コイツは以前に俺をパーティーに誘い、ちょっとした出し物をする為に女装して出た事があった。言うまでも無く出席していた女性全員のプライドを打ち砕いた事により、パーティーどころじゃ無くなり中断したと言う前代未聞な出来事がありましたとさ。

まあそんな事があったから、和人には極力女装をさせまいと思っていたんだが……今更ながら和人を女装させた事を見過ごした事に少しばかり後悔した。あそこで意気消沈している先輩二人の様子を見る限り、試合どころじゃないと思う。

「そこの先輩方、そろそろ試合を始めたいんですが」

一応、確認して聞いてきたが……。

「……福原先生、私……棄権します（泣）」

「とても試合出来る状態じゃありません（泣）」

と言って先輩二人は泣きながら退場して行った。

「……え～～三島・八重原ペアが棄権しましたので、勝者、天城・佐伯ペアです」

漸く正気に戻った福原先生は俺達に勝利宣言をした……俺としては棄権した二人には深く同情しているが。

「あ…あれ？　俺達の勝ちで良いの？」

「和人、取り敢えずお前はさっさと着替えろ」

「ちょ…ちょっと修哉。勝ったのは嬉しいけど、これじゃ不完全燃焼で……」

「良いから行くぞ」

戸惑う和人に俺は有無を言わさず、さっさとステージから退場して行った。

「やれやれ。勝ちはしたけど、あんまり嬉しくなかったな」

和人を元の姿に戻した俺は一人で教室へ戻っていた。何故和人がいないかと言うと、和人はそろそろ自分の教室に戻らないといけないと言って去ったのだ。ま、アイツもアイツで色々とあるんだろう。

「しかしあの先輩達は気の毒だったな。あの様子じゃ暫く立ち直れないかも……と、着いたか」

気の毒に思いながらも、取り敢えず教室に着いたので中に入った。

「秀吉、店の状況は？」

「んむ？　修哉か。相変わらずじゃ」

「みたいだな」

秀吉の回答に店の中を見ると、状況は変わらず客が全然いなかった。

「ま、奴等の噂がデマだって事が分かってくれると思うが……」

「だと良いのじゃが。それはそうと修哉よ、三回戦の方はどうだったのじゃ？」

「ああ。不戦勝で勝ったよ」

「不戦勝じゃと？　相手は棄権でもしたのか？」

流石に疑問に思ったのか秀吉は不可解な顔をしていた。

「和人の女装姿を見た女子の先輩二人が意気消沈してな。同時に女のプライドを粉々に打ち砕かれたし」

「……確かに佐伯の女装姿は凄かったのう。思わずワシも見惚れてしまったのじゃ」

「ま、そんな訳で不戦勝と言う訳だ。それとあの先輩二人は暫く立ち直れないと思う」

観客達にも言える事だがな。

「ま、そんな事より。今は店を何とか持ち直さないと……」

「そうじゃのう。こっちとしても、これ以上客が来なかったら色々と不味いのじゃ」

「何か良い手があれば……父さんがいたら何か良い方法を思いつくんだけど……」

俺と秀吉が考えていると……。

「ただいま～」

「戻ったぞ」

明久と坂本が戻って来た。

「お前達か。あの連中はどうした？」

「ゴメン、逃げられちゃった」

「同時に三回戦が始まりそうだったからな。そっちを優先して諦める事にした」

俺の問いに明久は申し訳無さそうに謝り、坂本は悔しそうにしながらも後々の事を考えていた。

「そうか、残念だ。アイツ等を捕まえて欲しかったが、大会の方が優先だから仕方ない。けど奴等はもう悪評を流す事は出来なくなっ

たから、取り敢えずは一安心だ」

「だな。大勢の客の前でセクハラをしたとなれば、常夏コンビの言葉なんてもう信じないだろう」

「でもさ、凄かったよね佐伯君。女装したら、あんな綺麗に変身するなんて」

俺の台詞に坂本が頷いていると、明久は女装した和人の事を思い出していた。

「俺も一瞬、アイツはホントに佐伯なのかって思ったぞ」

「まあ、今は和人の女装なんてどうでもいい。それとお前達の顔を見ると三回戦は勝ったように見えるが、どうなんだ？　俺は一応勝ったが」

「うん。僕達もシュウ達と同じく勝ったよ」

「不戦勝だったがな」

「何？　お前達も不戦勝か？」

坂本の台詞に俺は聞き返す。まさか明久と坂本も不戦勝をするとはな。

「お前達もって……天城の所も不戦勝なのか？」

「どうして不戦勝になったの？」

「……教えるから、お前達の方も教えてくれ」

そして互いに不戦勝の理由を話すと……。

「佐伯君の女装姿を見て意気消沈って……何か気の毒だね」

「まあ俺から見ても、確かにあいつの格好は……」

「俺としてはお前達の相手が、どうして食中毒になったのかを知りたいがな」

複雑な顔をする俺達であった。

「取り敢えず、この話題はもう止そう。お互いに突っ込み所が満載だから」

「ああ。今は店の事を考えないとな」

「うん。そうした方が良いよ。僕達にとっても、相手にとっても」

と、俺達は敢えて気にしない方向で進む事にする。

「ならば、済まぬがこっちの建て直しに協力してくれんか？」

秀吉が申し訳無さそうに表情を曇らせながら言ってきた。

「坂本、何か言い方法は無いか？　お前と明久が来るまで考えていたんだが、何も思いつかなくて」

「そうだな。一度失った客を取り戻す為にも、何かインパクトのあ

る事をやる必要がありそうだな」

確かに悪評の元を断ったとは言え、流れた噂はそう簡単には消えることは出来ない。坂本の言うとおり、インパクトのある事をしなければお客は来てくれないだろう。

「ふむ。それで何をするか、じゃが……」

秀吉が教室を見渡す。俺や明久も見渡しているが、こんな設備の教室では特に出来そうも無い。

「雄二、何かアイデアはある？」

「任せておけ。中華とコレでは安直過ぎる発想だが、効果は絶大な筈だ」

そう言って坂本が取り出したのは、刺繍も見事な水色と白のチャイナドレスだった。ってか坂本。以前から思っているんだが、お前は何処でそんな物を調達しているんだ？

「ほう。若干裾が短いような気もするが、これならば確かにインパクトはあるじゃろうな。コレを宣伝用に――」

まあ確かに秀吉の言うとおり、確かに宣伝にはなるな。坂本には突っ込みたいところだけど、コレは悪い作戦ではない。

と、思いきや……。

「ああ。コレを――明久が着る」

「ちょっ……！　お願い、許して！　メイド服の次にチャイナまで着たら、きっと僕はホンモノだって皆に認識されちゃう！」

また坂本が調子に乗った事をほざいていた。これは本当に霧島に折檻して貰った方が……いや、その必要は無いか。既に坂本を霧島に売ったからな。ここは敢えて黙っていよう。

「冗談だ。これは秀吉と姫路と島田に着てもらう」

「あ、なんだ。良かった～」

やはりな。明久がチャイナドレスなんか来て客が見たらドン引き間違いない。流石の坂本もこれ以上店の評判を落とす愚行はしないか。

だが……。

「ワシが着るのは冗談ではないのかのぅ……？」

いくら秀吉の見た目が女だからと言って、チャイナドレスを着せるのはどうかと思うんだが。

「おい坂本。秀吉は歴（れっき）とした男だぞ？　男にそんな物を着せるのは……」

「何言ってるんだよ、シュウ。秀吉がチャイナドレスを着るのは当然じゃないか。それに秀吉は秀吉だし」

「お前は何を訳の分からん事を言ってるんだ？　と言うか秀吉。チャイナドレスを着たくないんなら、此処はハッキリと断れ。お前は男なんだから」

「！！！　そ…そうじゃな！　ワシは男じゃから……！」

俺の言葉に秀吉は妙に感化して断ろうとしたが……。

「たっだいま～！　って、なんだ。アキってばメイド服脱いじゃったんだ」

「あ……残念です。可愛かったのに……」

「お兄ちゃん。葉月もう一回見たいな～」

と、女性陣が戻って来た。と言うかコイツ等、明久の気も知らずに随分と好き勝手な事を言ってるな。

「あはは。残念ながら、ただで人のコスプレを見られるほど世の中甘く無いよ？」

明久がにこやかに笑って断った。

「何だったら今すぐ和人を呼んで、またメイド服を着てもらうように頼んでやろうか？　アイツなら喜んで着て……」

「あ、あのお兄ちゃんのでしたら葉月は……」

「「遠慮するわ（します）！」」

俺の提案に葉月ちゃんは嬉しそうに見たいと言おうとするが、島田と姫路が即座に断った。

「何故だ？　お二人さんは女装した明久は良いのに、和人はダメなのか？」

「……アンタ、ウチ等の心をまたへし折るつもりなの！？」

「また佐伯君の女装姿を見たら……私……もう女として生きていけません」

「「「「……」」」」

涙目で訴える島田と、ノックダウン寸前の姫路に男性陣の俺達は何も言う事が出来なかった……余りにも気の毒過ぎて。

まあ確かに二人の言うとおり、和人の女装姿はそこら辺の女子より綺麗だから心が折れてしまうだろう。

「……と、取り敢えず佐伯の事は置いといてだ。姫路に島田、クラスの売り上げの為に協力してもらうぞ」

そう言った坂本と明久は逃さないかのように、チャイナを片手に退路を断った。そんな事をしなくても今の二人は逃げる気力が無いけど。

「……な、なんだか二人とも、目が怖いですよ……？」

「……凄く邪悪な気配を感じるんだけど……」

少し立ち直った姫路と島田は若干引き気味になる。

「やれ、明久！」

「オーケー！　へっへっへ、大人しくこのチャイナ服に着替え痛ぁっ！　マジすんませんした！　自分チョーシくれてましたっ！」

「弱いな、お前……」

「と言うか何でそんな悪役染みた行動をするのかが分からん」

調子が戻った島田は近づく明久を迎撃した事により、あっさりやられるのを見た坂本と俺は呆れた。にしても島田の攻撃力は本当にそこら辺の男より高いな。あれ程の威力なら世界を狙えるかもしれない。

「どうしてまた、急にそんな事を言いだすのよ？　前に須川はチャイナドレスを着たりする事は無い、って言ってたと思うけど」

明久を迎撃した島田は渋い顔をする。

「店の宣伝の為と、明久の趣味だ。明久はチャイナドレスが好きだからな」

おいおい坂本、宣伝は分かるが最後は何だ？　話題を変える為とは言え、明久が本気でチャイナドレスが好きなわけ……。

「大好――愛してる」

「……お前は本当に嘘を吐けないヤツだな」

前言撤回。明久はチャイナドレスが本当に好きみたいだ。

「し、仕方ないわね。店の売り上げの為に、仕方なく着てあげるわ」

「そ、そうですね！　お店の為ですしね！」

島田と姫路、渋々従おうとしているんだろうが、本当は明久の服の好みが分かったから着るつもりなんだろう？

「お兄ちゃん、葉月の分は？」

「え？　葉月ちゃんも手伝ってくれるの？」

「お手伝い……？　あ、うん！　手伝うから、あの服葉月にもちょうだい！」

あ、葉月ちゃんも明久の為にチャイナドレスを着ようと考えていたみたいだ。けどそれを抜きにするとしても、この子は本当に良い子だな。とても島田の妹とは思えない。

「葉月ちゃん。手伝ってくれるのは嬉しいけど、気持ちだけ受け取っておくよ。君はお客さんだし、それに服は……」

俺が葉月ちゃんにやんわりと断ろうとしていたが……。

「……！！（チクチクチクチク）」

「ム、ムッツリーニ！　どうしてそんな凄い勢いで裁縫を！？　って言うかさっきまでいなかったよね！？」

「……俺の嗅覚を舐めるな」

「……お前には呆れるよ、土屋」

急に現れた土屋が葉月ちゃん用のチャイナドレスを作っていた。それと土屋、格好良い台詞のつもりで言ってるつもりだろうが、本当は凄く格好悪いぞ。

「それじゃ、三回戦が終わったら着替えますね」

姫路がそう言いながら腕時計を確認している。姫路達はまだ試合をやっていなかったのか。

「いや、今着替えてもらいたい」

「「え？」」

坂本の言葉に二人の声がハモる。

「宣伝の為だ。そのまま召喚大会に出てくれ」

成程。召喚大会の三回戦からは一般公開が始まるんだったな。かなりの客が集まっているから宣伝には持って来いだ。……あ、やば。俺、父さんに三回戦終了するまでは観に行けないって間違えて言ってしまったな。けど案外良かったかもしれない。俺と和人の三回戦は不戦勝だったから。

「こ、これを着て出場しろって言うの……？」

「流石に恥ずかしいです……」

まあ二人がああ言うのも無理もない。何しろ一般客だけでなくメデ

ィアもいるから、チャイナドレスを着て動き回るのは流石に恥ずかしいだろう。けどそんな二人には悪いが、店の利益を上げて姫路の転校を阻止しなければいけないからな。

「二人とも、お願いだ」

と、明久はそう言って頭を下げる。何時に無く真剣な顔だな。本当にコイツは誰かの為には自分から頭を下げる、相手が姫路なら尚更。本人は自分の我侭だと思っているんだろうが。

「明久……。お前は本当に――チャイナが好きなんだな……」

坂本、そこは何も言わずに黙って見てろよ。折角の空気が台無しだろうが。

「もしかして吉井君、私の事情を知って――」

「仕方ないわね。クラスの設備の為だし、協力してあげるわ。ね、瑞希？」

姫路の言葉を遮った島田が色よい返事をして……。

「あ。は、はいっ！　これくらいお安い御用です！」

姫路も快諾した。

「明久、お前良からぬ事を考えていたろ？」

「……何の事かな？」

何やら明久が不穏な事を考えていそうな顔だったので俺の方で釘を刺しておいた。

「それならスグに着替えて会場に向かってくれ。大会では自分達の所属がＦクラスである事を強調するんだぞ」

そうすれば喫茶店の宣伝とＦクラスのレベルのＰＲになって一石二鳥って事か。流石は坂本。二つの目的を同時に果たそうとするとは。

「オッケー。任せておいて。行くわよ瑞希」

「はいっ」

チャイナドレスを抱えて教室を出て行く島田と姫路。

「……できた」

「わ、このお兄さん凄いです！」

隅っこでは土屋が物凄い速度で葉月ちゃん用のチャイナドレスを完成させた。

コイツは下心が絡むと行動が早いな。その行動力をもっと別の方向に活かして欲しいのだが。

「ふむ。それでは着替えるとするかの」

「ちょっと待て、秀吉。チャイナドレスを着るのを断る筈じゃなかったか？」

「そうは言っても、この状況でワシが着なければ周りが五月蝿いと思うからのう。じゃから仕方なく着替える事に決めたのじゃ。それに……」

「それに？」

「！！！　い、いや、何でもないのじゃ！」

「？」

秀吉が妙に顔を赤らめているな。熱でもあるのか？

と俺が思っていると秀吉は着替え始めようとするが……。

「ちょ、ちょっと秀吉！　ここで着替えるの！？　きちんと女子更衣室で着替えないとダメだよ！」

「……バカかお前は？　何で秀吉が女子更衣室で着替えなきゃいけないんだよ。普通に男子更衣室だろうが」

「余計ダメだよ！　可愛い秀吉にそんな所で着替えさせるなんて、狼の群れに飛び込ませるみたいなもんだよ！」

「……」

俺は時折、明久の思考が全然分からなくなる事がある。何で男の秀吉が他の男に襲われる事になるんだよ。

「……最近、明久がワシの事を女として見ておるような気がするんじゃが」

「気のせいだ。秀吉は秀吉だろう」

「うん。雄二の言うとおりだよ。秀吉は性別が『秀吉』で良いと思う。男とか女とかじゃないさ」

性別が『秀吉』って何だ？　全然訳が分からないぞ。明久、お前は一度、脳外科医と眼科に行った方が良いと思う。

「……俺が言ったのはそう言う意味じゃない」

どうやら坂本は正常で、明久がおかしいみたいだ。やはり明久には病院へ行かせ……。

「んしょ、んしょ……」

「……！！（ボタボタ）」

「！！！　は…葉月ちゃん！　君は何をやってるんだ！？」

「そうだよ葉月ちゃん！　君もこんな所で着替えちゃダメだよ！　ムッツリーニが出血多量で死んじゃうから！」

ってか土屋！　お前は小学生の着替えで鼻血を出すのか！？　女の子なら誰でも良いのかよ！？

おまけ

※今回のＮＧ

「ああ。コレを――明久が着る」

「ちょっ……！　お願い、許して！　メイド服の次にチャイナまで着たら、きっと僕はホンモノだって皆に認識されちゃう！」

また坂本が調子に乗った事をほざいていた。

「坂本、明久をこれ以上辱（はずかし）めるなら、メイド服を着た和人に欲情したって霧島に報告……いや、その必要は無いか」

「待て！　必要は無いってどう言う事だ!?　お前、翔子に何かチクッたのか!?」

「いいや。Ａクラスで会計を払う際に霧島が夏目漱石を一枚か、坂本雄二を一名のどちらかを出せば良いって言ったから、迷わず坂本を……」

「テメエッ！　俺を千円で売ったのか!?　俺は千円と同じ価値か!?　安過ぎるにも程があるぞ！」

坂本はアイデアをそっちのけに俺の胸倉を掴んで問い詰めていた。

「もしお前が俺の立場だったら、金を払うより誰かを差し出すだろうが。明久に目潰しをした謝罪代わりだと思え」

「そうだよ雄二。あの目潰し凄く痛かったんだからね。それとシュウ、ナイス判断だったよ」

「ふざけんな！　テメエは俺の人生を何だと思ってやがる!?」

「明久の不幸の源はお前だからな。坂本が霧島と結婚すれば、明久は幸福な人生を送れるだろうし、お前も幸せな人生を送れるから良いじゃないか。一石二鳥だろ」

「幸福じゃなくて不幸な人生になるんだよ！　チクショ～～～!!!　俺の人生が～～!!!」

第二十七問（後書き）

感想をお待ちしてま～す。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3704x/

バカとテストと召喚獣　～常識人はつらいよ～

2011年12月27日00時49分発行